

学位（博士）申請論文

研究題目

石造物から見る中世鎌倉の都市構造

古田土 俊一

# 【目次】

序論 研究史の整理と本論の目的	1
一・鎌倉における中世石造物の動向―研究史の整理―	2
1. 石造物の定着と背景	2
2. 在地産石材とやぐら	3
3. 都市における石造物の役割	4
二・本論の方法	4
補注	6
第一部 葬送・供養に関わる石造物の変遷と背景	7
第一章 中世鎌倉における五輪塔の様相	8
はじめに	8
一・五輪塔の基礎的情報	8
二・鎌倉における五輪塔の石材と型式分類	9
1. 安山岩製塔	10
2. 凝灰岩製五輪塔	15
三・やぐら内浮彫塔・線刻塔の位置付け	18
1. 百人やぐら内浮彫・線刻五輪塔	18
2. 瓜ヶ谷やぐら内浮彫五輪塔	20
四・鎌倉における石造物以外の五輪塔の性格	23
第二章 鎌倉最古の無縫塔・建長寺開山塔の造立背景	43
はじめに	43
一・建長寺開山塔の考古学的見地	43
1. 鎌倉の中世石造物のなかの建長寺開山塔	45
2. 鎌倉の中世無縫塔と反花座の検討	45
二・覚園寺に現存する類例	47
三・日本における禅僧の墓制と「地宮」	49
おわりに	51
補注	53
図版	55
1. 水晶製五輪塔	23
2. 銅製五輪塔	24
3. 土製五輪塔	25
4. 木製五輪塔	26
5. 木製板五輪塔	27
6. 瓦当文様	28
おわりに	29
補注	31
図版	35

第三章 中国仏塔の地下構造と日本の地下式坑・やぐら 100

はじめに 60

一. 中国仏塔の地下構造と舍利荘厳 61

1. 隋・唐代の地宮と舍利荘厳 62

2. 北宋代地宮の様相 64

二. 中世禅宗の墓葬事例と地下式坑墓壙起源説 68

1. 近世発見の禅僧墓と中国仏塔地下構造 68

2. 掩土之法と地下式坑墓壙起源説 71

三. やぐら発生に関わる中国の影響と石窟遺構 74

1. やぐらの基礎的情報 75

2. 覺園寺地下遺構とやぐら 76

3. 崖墓・崖葬墓 — 四川省の葬法 — 77

おわりに 81

補注 83

図版 87

第二部 都市とみちと石塔 101

第一章 中世鎌倉のみちと造塔 102

はじめに 102

一. やぐらから見る鎌倉の範囲 103

二. 鎌倉に残る仏像とみち 103

1. 相模国の平安仏とみち 103

2. 鎌倉における薬師如来・兜跋毘沙門天の存在 105

三. 石塔の造立と立地 107

1. 宝篋印塔 108

2. 宝塔 111

3. 層塔 113

四. 鎌倉の境界 114

五. 景勝地とヴィスタ 115

おわりに 116

補注 118

図版 121

第二章 景勝地「江の島」の中世石碑 131

はじめに 131

一. 石碑の形態と構造 132

二. 石材の産地 134

三. 本石碑における文様の検討 134

1. 螭龍の系譜 137

四. 本石碑の原建立地 138

1. 亀石の調査 140

おわりに 142

補注 143

図版 147

結論

153

一. 墓塔の導入と鎌倉での技術者の展開 154

二. 石造塔下遺構の起源と継承 155

三. 都市の中での機能 155

四. 都市鎌倉における文化発展の背景 156

五. 今後の課題 158

補注 159

序論

研究史の整理と本論の目的

# 序論 研究史の整理と本論の目的

鎌倉は十二世紀後半に源頼朝が大倉の地に御所を構えて以来、東

国政権の中心地として発展した都市である。源氏三代以降、北条氏を中心とする政権運営は新田義貞の率いる軍勢の攻撃によって終焉を迎えるが、鎌倉という土地は全国の武家を統括する鎌倉政権の基盤として、形成からおよそ一五〇年のあいだに中世前期を代表する都市として大きな発展を遂げた。その後の統治は室町政権下の足利氏にとって代わり、武家の統治も東国十か国に限定されるものの、東国最大の都市としての地位は揺るがず、当地は鎌倉公方の治府のもと都市としての機能を維持し続ける。これは足利成氏が古河に移る享徳四年（一四五五）の十五世紀中ごろまで続いたと見られている<sup>1</sup>。つまり中世の鎌倉には、都市としておよそ二五〇年の生命があった。

鎌倉が都市として繁栄するなかで流れ込んだ文化は多く、都市の発展に大きな影響を及ぼした。これらの文化のうち、特に「石造物」という視点から中世鎌倉という都市の構造を明らかにするのが本論の目的である。鎌倉の地に現在も多く残存する中世石造物がどのように鎌倉へと流入し、用いられ、発展していったのか。またそれが鎌倉にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしていきたい。

## 一．鎌倉における中世石造物の動向

### ―研究史の整理―

#### 1．石造物の定着と背景

現在認識されている鎌倉への石造物文化の流入開始時期は、およそ十三世紀後半ごろであり、定着するのは十四世紀初頭ごろと見られている<sup>2</sup>。現存する資料から判断すれば、最も早い段階に鎌倉で使われる石造物の種類は板碑であり、十三世紀後半の銘文を持つ作例が確認されている<sup>3</sup>。板碑は、埼玉県秩父地方を原産とする緑泥片岩を使用した薄手扁平な石造物として知られるが、鎌倉で確認できる資料は少なく、他の石材に先だって流入しつつも普及しなかった様相が垣間見える<sup>4</sup>。初期の板碑は大型で仕事の丁寧な優品が目立ち、時代を経るごとに小型化、簡略化した作例が用いられるのみとなっていた<sup>5</sup>。

一方で鎌倉において主流となった石造物が、五輪塔や宝篋印塔などに代表される立体的な石造物である。ほかに宝塔・層塔や石仏などの種類も存在し、伊豆箱根系の安山岩を材料とする点で共通している。鎌倉に比較的近い土地より産出される石材は、硬質で風化しにくい特徴があるものの、そのぶん加工が困難であるため、使用が開始されるには特別な技術の導入が必要であった<sup>6</sup>。その時期が十三世紀の末から十四世紀初頭であり、この時期を境に鎌倉の石造物文化は大きく花開くことになる。市内各所に残存する巨大な石造物が

その象徴である。

鎌倉内の所縁ある場所に立つ巨大な五輪塔や宝篋印塔は、それぞれ3mを超える規模を有し、考古学的な型式分類、銘文や史料の検討から極楽寺の忍性を中心とした南都律宗の影響が指摘されている<sup>7</sup>。この忍性が京都・奈良で活躍していた渡来系石工の子孫を引き連れ関東へ下向し、石材加工技術とともに鎌倉の石造物文化を発展させたという流れが一連のストーリーである<sup>8</sup>。

このように鎌倉の石造物は、畿内における十二世紀後半に端を發した技術導入の系譜上にあり、奈良西大寺の教線拡大の余波で拡散されたと理解されている。たしかに西大寺が技術集団を有していたことに疑いはなく、中心として活躍したことも事実であろう。ただ、当時の西大寺を中心とした律宗は他の宗派と同様に単独で活動していたわけではない。これは東国において顕著であり、畿内はもとより本山から遠く離れた場所でもそ多宗派間での交流は盛んであった。そこには同じ律宗である京都泉涌寺の北京律も大きく関与していたであろうことはすでに指摘があるが<sup>9</sup>、それ以外の宗派についての言及はない。

## 2. 在地産石材とやぐら

また、鎌倉における石造物に使用される石材は、前述のように同じ神奈川県内の箱根や小田原、静岡県の伊豆で産出される硬質石材の「伊豆箱根系安山岩」が使用されている<sup>10</sup>。畿内からの技術者が鎌倉から比較的近い地域で適当な石材を探し出したと考えられるが、

こうした流通石材に対し、鎌倉周辺域で産出される在地の石材が、通称「鎌倉石」と呼ばれる石材である。この石材は三浦半島を形成する凝灰岩で、鎌倉の基盤となる地層からも産出される<sup>11</sup>。軟質ながら耐火に優れるため、近代まで採石が続けられており、現代でもこの石材を用いた石塀を有する家屋は多い。鎌倉ではこの石材を使用した中世石造物も多く現存しており、鎌倉の中世石造物はおよそ安山岩製と凝灰岩製が半々といった様相が俯瞰できる。

この凝灰岩を使用した石造物には安山岩同様、五輪塔や宝篋印塔、宝塔、層塔の作例があるが、ほか岩壁に彫り込まれた磨崖仏や「やぐら」がある。これらの凝灰岩製石造物は一般に硬質石材が導入される以前より鎌倉に存在していたと認識されているが、物証があるわけではない<sup>12</sup>。鎌倉の谷戸の岩壁に掘り込まれた宗教施設「やぐら」は、発掘調査の成果より十三世紀後半ごろから発生した文化であると考えられているが<sup>13</sup>、このことは凝灰岩を産出する山稜部斜面を開削する技術がこの時期の鎌倉に存在していたことを示しており、安山岩製石造物に先立ち、この技術を用いて凝灰岩製石造物が製作されたとも見られている。

ただし、「やぐら」の発生と系譜はいまだ不明である。分布状況から鎌倉で発生した遺構との認識は揺るがないものの、何時、誰が、どのように導入したのかについてはいまだ定説を見ていない。

## 3. 都市における石造物の役割

鎌倉を取り巻く石造物研究は全国的にも早い時期から始まってお

り、鎌倉が有する優れた作例が研究の基礎となつて<sup>14</sup>。反面、その重要性ゆえ全国的な視野から研究に用いられることが多く、中世随一の都市である鎌倉という土地柄を考慮した追求や都市論を交えた視点での研究はまだまだ乏しいように感じられる。どうしても石造物は墓塔として認識され、葬送・供養に直結させた考察のみに執着してしまいがちだが、都市の中で石造物の役割は本当にそれだけだったのだろうか。

さらに近年では、輸入石材や宝篋印塔の起源など、東アジア視点での検討が注目されるが<sup>15</sup>、その多くが畿内や九州地方を対象としており、東国が上記の視点では未だ対象とされていない点は問題とするべきだろう。もちろん東国の石造物は畿内を経由しての導入と理解されているため、間接的な影響下におかれた地域と見る傾向が強い。しかし、鎌倉には全国を統治する政権のもと、大陸の知識や文化を直接導入できる力を持っていた。

これまで石造物の系譜は畿内から導入されたという一本の道筋しか示されておらず、近年でこそ北京律も注目されるものの、それまでの南都を中心とした律宗という道筋のみに注目する傾向はまだまだ根強い。ただ中世鎌倉は、広く東アジアまで交流圏を延ばした都市であることからすれば、そのルーツは多角的に検討されるべきである。多方面に広がる最新研究と全国的な資料の蓄積とともに、新しい視点から今一度鎌倉の石造物研究を進展させたいと考えている。

## 二．本論の方法

以上の研究史と問題点をふまえ、本論では中世鎌倉における石造物の使用、受容と展開を念頭に論を進める。

第一部は「葬送・供養に関わる石造物の変遷と背景」と題し、墓塔としての性格の色濃い五輪塔・無縫塔を対象に、墓塔としての石造物がいかように用いられたか実態と変遷を探る。また墓塔下に設置された埋葬遺構の変遷を辿り、鎌倉を発生源とする石窟遺構「やぐら」の起源と展開背景に迫る。

第一章の五輪塔は、大日如来の三昧耶形として中国經典類の図像をもとに日本で石造化された塔と理解される石造物である。本来舍利塔としての意味を持つことから、舍利にあやかろうとする意味合いが強く、墓塔として最も用いられた塔である。鎌倉の中世石造物の中でも残存数は突出しており、石材や形態も多様であることから鎌倉の石造物の実態や変遷を探る上でも好資料であると判断した。

これまでも多くの検討がなされてきた資料ではあるが、注目を浴びていない作例や考察の余地がある例も多く、新たに収集した資料を交え、都市存続期の鎌倉における変遷を辿る。また、鎌倉には水晶製塔、金銅製塔、木製塔のほか木製塔婆といった五輪塔の形態をとる資料も伝来・出土しており、はたしてこれらが一樣の性格を有していたのか、導入時期を交えて検討する。

また第二章では無縫塔を取り上げる。無縫塔は中国より墓塔として持ち込まれた塔であり、主に僧侶の墓塔として用いられてきた。



鎌倉の無縫塔は数が限られるものの、全国的にも古手で貴重な作例が多い。それにもかかわらず、いまだ研究の進んでいないのは、高僧の塔として寺院に強く守護されているためである。本章では研究進展の足掛かりとして、全国で二番目に古いとされ、東国では最古の無縫塔といわれる建長寺開山塔の調査を実施し、その形態や関連史料から塔の年代や造立背景を探る。他の石造物にも用いられる反花座の型式から塔造立年代を推定し、格狭間の形態的特徴から類例を比較しつつ、中世鎌倉の宗派を超えた交流と人物のつながりを読み解く。

第三章では墓塔下埋葬構造と「やぐら」「地下式坑」を対象とする。禅僧墓の塔下に形成される地下遺構は、中国の仏塔地下遺構を起源とする可能性が高く、いまだ日本の中世遺構との比較は行われていない現状がある。そこでまずは中国仏塔地下遺構の実態と変遷を明らかにし、その上で中世禅僧墓と構造の比較を行う。

また禅僧墓と関連性が指摘される遺構に地下式坑がある。地下式坑とは竖坑によって地上と連結させた地下遺構のことで、南関東を中心に分布することが知られている。墓壙説、貯蔵庫説などがあり、目的や用途は現在も結論は見えていない遺構だが、中国仏塔の事例との類似性を指摘し、出現年代や最古の事例から源流について検討を試みる。

さらに、鎌倉を中心に分布する葬送関連遺構やぐらは、地下式坑との類似性が指摘される遺構である。起源や展開背景についてまだ明らかでない遺構だが、崖面に横穴を穿つ構造から中国の葬送や

地下式坑との関係性を見るほか、中国石窟を概観しつつ蘭溪の故郷となる四川の崖面埋葬事例「崖墓」の概要と中国大陸での展開、やぐらとの類似性を見出し、ひいては都市に需要をもたらした文化発展の背景を探る。

第二部の「都市とみちと石塔」では中世都市鎌倉での石塔の活用法を見ていく。

第一章では、鎌倉の都市計画を特に交通路から検討していく。地域の境界を示す資料として仏像を足掛かりとし、宝篋印塔・宝塔・層塔といった石造物の性格から、塔が本来建っていた場所と交通路との関係を推定する。またその場所に立つ役割を景勝地に求め、建築史的な景観視点ビスタなどを用いながら、関連史料とともに鎌倉の境界について考察を加える。

第二章では、第一章で割り出した境界内に含まれる景勝地「江島」に所在する「宋国伝来の碑」を材料に、中国石材を用いた東国唯一の中世石碑について考察する。龍の文様と江島の縁起から原位置を割り出し、石碑の持つ意味を探る。

## 序論 補注

- 1 石井進 一九九四「文献から見た中世都市鎌倉」『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部ほか。
- 2 三浦勝男 一九七七「五輪塔について」『鎌倉の五輪塔』鎌倉国宝館
- 3 服部清道 一九六五『鎌倉の板碑 鎌倉国宝館論集 九』鎌倉国宝館
- 4 渡辺美彦 一九八三「神奈川県」『板碑の総合研究 2 地域編』柏書房
- 5 服部清道 一九三三『板碑概説』角川書店
- 6 藤澤典彦 一九九三『五輪塔の研究―平成四年度調査概要報告―』元興寺文化財研究所
- 7 日野一郎以下多数の研究がある。(日野一郎 一九五二「相模箱根の磨崖地蔵群と石塔類」『東京史談』第二〇巻第二号 東京史談会)
- 8 山川均 二〇〇六『石造物が語る中世職能集団』山川出版社
- 9 岡本智子 二〇〇六「初期宝篋印塔と律宗」『戒律文化』四 戒

### 律文化研究会

- 10 山下浩之 二〇〇九「岩石学的検討による石材給源の推定と箱根火山の安山岩を例に」『中世における石材加工技術と安山岩製石造物の加工と分布』国立歴史民俗博物館
  - 11 見上敬三・江藤哲人 一九八六「鎌倉市の地質」『鎌倉市文化財総合目録 地質・動物・植物篇』鎌倉市教委
  - 12 赤星直忠 一九七七「凝灰岩製五輪塔について」『鎌倉』第二九号 鎌倉文化研究会、藤澤氏前掲註6文献
  - 13 田代郁夫一九九〇「中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義」『昭和六三年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
  - 14 川勝政太郎 一九五七『日本石材工芸史』綜芸舎、石田茂作
  - 15 一九六九『日本仏塔』講談社ほか
- 15 中日石造物研究会 二〇一〇『石造物を通じて見た寧波と日本』など。

# 第一部

葬送・供養に関わる石造物の変遷と背景

## 第一章 中世鎌倉における五輪塔の様相

### はじめに

鎌倉は源頼朝の入部以来、東国政権の中心地として発展した都市であり、源氏三代以降、北条氏、足利氏といった統治を経ながら、およそ二世紀半のあいだ機能を維持し続けた都市である。

鎌倉の石造物はおよそ十三世紀後半に導入された文化であり、はじめ在地産石材の三浦層群凝灰岩を使用した造塔があり、十四世紀初頭に硬質石材である伊豆箱根系の安山岩を使用する技術の導入があったと理解されている。この技術の定着により、鎌倉の石造物文化は一気に発展することになるが、その背景には渡来系石工集団を組織する西大寺と中心とした南都律の教線拡大が大きく影響していた。

これら石造物の多くは葬送に関連した遺物と解釈されているが、その最たる例が五輪塔である。この五輪塔は、鎌倉の石造物のなかでも最も造立数が多く、石材も凝灰岩、安山岩の区別なく作成されている。また作例は初期から存在し、年代的特徴を示す優品が多いことなどの理由から、鎌倉の石造物全体の変遷を見通す上で、最適な資料であると判断した。

それらの塔が具体的にどのような変遷を辿り、鎌倉へ浸透していったのか、また、石造物以外に鎌倉に持ち込まれた五輪塔型資料の性格と機能を、特に鎌倉が都市として存続した中世前期に主眼を置

いて考えていきたい。初期研究において漏れた資料、新資料を交えつつ論考を進める。

なお、本章の図面は本間岳人氏の論考を参考とした<sup>1)</sup>。

### 一・五輪塔の基礎的情報

五輪塔とは地・水・火・風・空という万物を構成すると考えられた五大要素で構成される塔である。下から順番に地輪（四角）・水輪（円）・火輪（三角）・風輪（半月）・空輪（円、あるいは宝珠）として表現する。石造物としての五輪塔は国外に作例がないため、漢訳仏典をもとに日本で立体化・石造化された塔と考えられている<sup>2)</sup>。石造物としての出現時期は、残存最古期である岩手県釈尊院五輪塔（仁安四年（一一六九）銘）、大分県中尾五輪塔（嘉応二年（一一七〇）銘）などから平安中期頃と解釈されており、塔種別で見た中世石造物の残存数が国内で最も多い塔として認知されている。

そもそも塔はすべて舍利塔の意味を持ち、舍利を安置する装置という役割がある。飛鳥時代や奈良時代までは石製や金属製の箱形・合子形の舍利容器を、建築物としての塔の基礎に埋納する行為が一般的だったのに対し、平安時代以降は修法を執り行う大壇の上に安置できるよう、小型の舍利塔・舍利容器が作られるようになる。この形式には宝塔型・五輪塔型・宝篋印塔型・層塔型など塔をかたどったものがあり、ほか火焰宝珠型・瓶型・五輪塔レリーフ型・置燈籠型などの形があった。このうち五輪塔型は、宝珠型と並んでもっとも多

く用いられた舍利容器の形であり、その要因には真言宗の空海の舍利観が大きく反映されているのだという<sup>3)</sup>。

真言宗において五輪塔は大日如來の三昧耶形と称される。これはその仏を象徴する標識には決まった形があり、大日如來を表わす形が五輪塔だという意味である。周知のように大日如來は密教の中心であるが、空海は釈迦の遺骨である舍利を、この大日如來や五智如來とみなしたことにより、同様の意味を持つ宝珠とともに五輪塔は、舍利容器として特に用いられる形となったのである。

これら舍利容器として用いられていた塔が、平安中期に至って墓塔として用いられるようになる。釈迦の遺骨だけではなく、高僧の遺骨も舍利同様の扱いを受けるようになっていったことが、舍利塔を墓塔化させた要因の一つなのだとみられているが、僧侶だけでなく広く一般（といっても石塔を立てられるだけの財力を有した層に限られるが）にまで広がったのには、空海が読んだとされる古歌「阿字の子が 阿字のふるさと 立ちいでて また立ち帰る 阿字のふるさと」に込められた、生命は阿字（大日如來）から生まれ、阿字に帰るといった真言宗の生死観に集約されるのだろう。死を迎え遺骨となった者が帰る場所が、大日如來の三昧耶形である五輪塔という認識が浸透した結果だと言える。

のちに五輪塔は宗派を超えて広がりを見せるようになる。この背景には平安後期の真言僧覺鑊の著した『五輪九字明秘密釈』による大日如來と阿彌陀如來が同体であるとの解釈も影響するのだろうが、<sup>4)</sup>、東大寺大勸進の重源や南都律の西大寺中興開山である叡尊が、五

輪塔・宝珠を用いた舍利修法を展開していた醍醐寺の出身であることが最も大きな要因と言えるのだろう<sup>5)</sup>。

そうした経緯を経て広がった五輪塔は、十三世紀末から十四世紀初頭にかけての時期に至って、石造物として鎌倉に定着することになる。その契機となったのが、極楽寺を創建した西大寺律宗叡尊の高弟忍性であり、彼の墓塔である巨大な五輪塔であった。塔に用いられた石材は当時の鎌倉ではまだ珍しく、鎌倉にすでに居たであろう石工には加工困難なほどの堅牢性を有していた。また他の追隨を許さない墓塔の大きさも当時の人々を驚かせたことであろう。以後、鎌倉では同様の巨大石造物がいくつも造立され、鎌倉人の眼に留まり、おそらくは、これに倣うかたちで小型の石造物が富裕層を中心に受け入れられていったのである。

## 二．鎌倉における五輪塔の石材と型式分類

中世鎌倉において使用された石材は、板碑に使用される埼玉県秩父地方原産の緑泥片岩や茨城県筑波周辺で採取される雲母片岩を除けば、安山岩（伊豆・箱根系安山岩）と凝灰岩（三浦層群凝灰岩）の二種類に大別される。通説では、はじめ軟質石材である凝灰岩での造塔があり、のちに硬質加工技術が導入されたことにより、安山岩の加工が可能になったと考えられている。市内では多数の五輪塔が残存しているが、本稿では残存状態が良好で年代の指標となる塔を収集し、実測図で提示した（図1・2）。安山岩製塔、凝灰岩製塔の

項目でそれぞれを分類した上で、資料を概観しつつ、造立傾向を探ってみたい。なお、名称に付属した番号は図版番号と符合させている。そもそも鎌倉に所在する導入初期の塔や大型の塔は、ほとんどが特別注文であったと思われる<sup>17</sup>、これのみで型式的変遷を追うことは危険性をはらんでいるのかもしれない。ただ、量産され鎌倉に残存する資料の悉皆調査が行われていない現状では、必要な検討と認識している。

### 1. 安山岩製五輪塔(図1・図11)

鎌倉で使用される安山岩は、神奈川県西部に位置する箱根から静岡県伊豆地方に係る箱根火山に起因して形成された岩石で、伊豆・箱根系安山岩と呼称されている<sup>18</sup>。小田原市内遺跡より出土した石造物の数量や未成品の存在から、主に小田原周辺域、早川河口付近などで採取された石材が加工され、量産期となる中世後期に至っては、小田原北条氏統治のもと特産品として流通・発展した。その流通域は、残存する資料の分布から、相模から下総までといった南関東に広がり、西方に至っては遠江まで及んでいることが判明している<sup>19</sup>。

前述のように、中世鎌倉において安山岩を使用する契機となった事象が、忍性の関東下向であり、西大寺を中心とする南都律の鎌倉導入であることは、多くの先行研究が示す。石造物が研究対象として認知されはじめた研究黎明期より注目される資料に、箱根山石造物群がある。東国の境界地に立地するとともに関東最古の銘文を有する安山岩製石造物の一群については、巨大宝篋印塔に記された石

大工「大蔵安氏」と供養導師「良観上人(忍性)」の関連が早くから注目されていたが<sup>21</sup>、この宝篋印塔が関東で用いられている型式と、関西で用いられている型式を折衷した型式を示している点が指摘され、西国の宝篋印塔が関東へ伝播する過程で、関東にて独自の型式を展開する様相が明らかとなった<sup>22</sup>。それぞれが関東形式、関西形式の名称で分類されるとともに、関東の宝篋印塔が畿内よりもたらされ、箱根で転化し、鎌倉安養院塔にて完成をみるという変遷が認識されるようになる。

その後、同宝篋印塔の銘文にある石大工「大蔵安氏」と同名の大工が、横浜市金沢区の称名寺三重塔にかかる史料『堂建立書』にあることが指摘され、双方の供養導師が極楽寺の忍性であることから、西大寺の推進する教線拡大の一環である忍性の東南下向に、石工集団が同行していたことが推測された<sup>23</sup>。また『堂建立書』にある「大蔵康氏・藤原依光」の名が、箱根山宝篋印塔の「大蔵安氏」、小田原に近い曾我の餘見宝篋印塔の「藤原頼光」と同一との指摘もなされる。

次いで奈良額安寺宝篋印塔銘の「大蔵安清」と「大蔵安氏」の関連性や<sup>24</sup>、箱根宝篋印塔銘の「心阿」と鎌倉長谷寺宝篋印塔陽刻板碑銘の「信阿」、覚園寺宝篋印塔大工「信阿」が同一であること、覚園寺塔納入品に記された「信阿」の菩提を弔う「光広」が「信阿」と親子関係であることが明らかにされ、一連の石大工は大蔵派石工として認識されるようになった<sup>25</sup>。

これに先立って注目されたのが、奈良・京都を地盤とする渡来系

工人「伊派」石工であった。石造物の銘文や文献史料などによって関連を指摘され、早くから整理・紹介されている<sup>16)</sup>。のちにこの石工一派は、東大寺再建に際して中国から招聘された石工集団の系譜でつながるとの想定がなされ、西大寺流律宗(南都律)や、伊派・大蔵派石工の動向が一連のストーリーとして注目されることとなる<sup>17)</sup>。ありていに言えば、南都焼き討ちから東大寺再建の過程で大陸より石工が将来されたことから伊派石工が畿内で発生し、そこから派生した大蔵派石工は東国への展開を見せる。その痕跡を見出せる遺品が箱根、小田原と徐々に東へ移動するかたちで残され、最終的に鎌倉に定着するといった流れとなる。

これらの研究史は主に、畿内や東国の宝篋印塔を中心に進められてきた業績であるが、五輪塔も同様の過程のなかで造立された作品であり、特に西大寺律に所縁のある土地に存在する総高三mを超える巨大五輪塔は、宗派の規範に則り、中興開山叡尊の墓塔を頂点として師の墓塔の高さを越えないよう、意図的に造作されたことが解明されている<sup>18)</sup>。この一連の階層構造下にある五輪塔が、いわゆる西大寺様式五輪塔である。安山岩製塔を取り上げるうえで、まずはこの巨大塔から資料の提示をしていきたいが、「いわゆる」と付けたのは、この呼称には現在疑問がつけられているため、混乱を避けるため、本論では律宗系塔の名称を使用する。

#### ・律宗系塔

鎌倉には、西大寺律(以下、南都律とする)の系譜に直接つながる

塔が四基確認できる。極楽寺三丁目に所在する極楽寺に二基、近隣の西方寺跡に一基、扇ガ谷に所在する多宝寺跡に一基である。

極楽寺塔二基はそれぞれ開山忍性の墓塔(53)(嘉元元年「一一三〇三二」)、三代長老順忍の墓塔(53)(嘉暦元年「一一三二六」)であることが、解体修理の際発見された蔵骨器の銘文から判明している<sup>19)</sup>。それぞれ総高は三五七・二cm、三三五・一cmを測る。共に四石から成る五輪塔部のほか、反花座・格狭間を有する。

扇ガ谷に所在する多宝寺跡の塔は多宝寺長老覺賢の墓塔(50)(嘉元四年「一三〇六」)で、総高三二八・一cmを測る<sup>20)</sup>。四石から成る五輪塔部のほか、反花座・格狭間を有するが、格狭間は他の律宗系塔と違い、壇上積基壇状に表現されるなどの特徴がある。

極楽寺近隣所在の西方寺跡塔(54)は、当地に六基ならぶ大型五輪塔の中でもひととき大きく、総高二二・五cmを測る。塔下から出土したという蔵骨器には、極楽寺第七世長老明賢の名と共に貞治七年(一一六八)の銘がある<sup>21)</sup>。

以上の鎌倉四基のほか、神奈川県内には、先述した箱根石造物群がある。箱根石造物群中、最古銘を有する永仁三年(一一九五)銘の伝虎御前塔(55)および隣接する曾我兄弟塔二基(56)は関東でも最古期の型式を示す<sup>22)</sup>。

さらに横浜市金沢区に所在する称名寺も南都律の流れを汲む寺院で、多数の大型五輪塔を所蔵する。銘文こそないが、関東初現期の様相を示す塔(53・54)を含む、金沢北条氏墓、称名寺世代墓など(57・58・61・62)が、およそ十三世紀末から十五世紀前半までの型式を

示し残存している<sup>23</sup>。

#### ・逗子 東昌寺塔 (1)

逗子市の高野山真言宗寺院、東昌寺の所蔵する塔である。もと葉山町の慶蔵院に所在したという。空風輪、火輪、水輪、地輪の四部材で構成されるほか、台石を有し、総高一二・五cmを測る。水輪に「バン」の種子が刻まれるが、他の部材は無文である。「沙弥行心歸寂／乾元二年癸卯七月八日」の銘文があり、乾元二年（一三〇三）の造立であることがわかる<sup>24</sup>。

#### ・極楽寺延慶三年塔 (2)

極楽寺三丁目に所在する極楽寺の塔である。忍性塔の裏手に所在し、総高一二・五cmを測る。空風輪、地輪の四部材で構成され、各輪無文である。「閔弥人左衛門入道／沙弥行真／延慶三年八月五日」の銘文があり、延慶三年（一三二〇）の造立であることがわかる<sup>25</sup>。

#### ・神奈川県立博物館所蔵 亀ヶ淵やぐら出土塔 (3)

現在神奈川県立博物館に収蔵されている二基の塔である。鎌倉市二階堂永福寺の奥に当たる亀ヶ淵のやぐらで発見された塔といい、一基は総高九二・四cmを測り、空風輪、火輪、水輪、地輪の四部材で構成される。地輪に「元亨元年（一二三二）辛酉七月十九日／沙弥□仏□」と記される。もう一基は無銘であるが四部材のほか複弁の反花座を有し、総高一三・四cmを測る。昭和十年亀ヶ淵の山裾が崩落した際、発見されたやぐらおよび石造塔のことは赤星氏により報告されているが<sup>26</sup>、この時出土した塔は反花座を有するものが無く、また在銘塔も「永享の年号」と「清義禪定門」が記されていたという

から、どうやら赤星の報告したやぐらから出土した塔とは別物であるようだ。しかしながら、塔自体の残りは非常に良く、鎌倉時代後期の様相を伝える基準的な塔として貴重である。

#### ・銭洗弁財天やぐら出土塔 (4・13・14)

佐助に所在する銭洗弁財天が、昭和四十五年に実施した土砂崩れ防災工事中にやぐら十穴を発見した。これに伴い発掘調査が行われ、板碑九基、五輪塔八十五基、人骨、かわらけ二十片、常滑窯壺一基、瀬戸窯小皿一枚が発見されている<sup>27</sup>。板碑および五輪塔の一部は現在鎌倉国宝館に収蔵されており、安山岩製五輪塔一基に元徳二年（一三三〇）の墨書銘がある<sup>28</sup>。総高七八・四cmを測り、空風輪、火輪、水輪、地輪の四部材で構成される。墨書には「比丘尼淨意元徳二年四月□三日臨終／□二年四月廿三日智乗敬白」とある。なお、正和元年の板碑二基はやぐら奥壁に立てかけられていたという。詳細は不明であるが、調査時の写真がいくつか残されており、出土状況を知り手掛かりとなる。

#### ・浄光明寺出土塔 (5)

鎌倉市扇ガ谷に所在する真言宗泉涌寺派浄光明寺の境内から出土した塔である。総高一〇三・六cmを測り、空風輪から地輪の四部材で構成される。地輪に「七分全□（得力）造立／元徳二年／北海」と記され、元徳二年（一二三〇）の造立であることがわかる<sup>29</sup>。「七分全得」は逆修を意味し、北海が自らのために建てた塔と見ることができ、現在は銘文を読み取ることはできない。

#### ・常盤出土塔 (6・16)



鎌倉市常盤に所在する聖ミカエル幼稚園建設の際、出土したものである<sup>30</sup>。一基は総高一〇〇・八cmを測り「応安元年（一二六八）戊申八月時／蓮阿」と記される。もう一基は総高一六二・〇cmを測る大型の塔で、無銘であるが残りは非常に良い。出土時現場に居合わせた渋江二郎氏の報告によれば、大型・小型の五輪塔や宝篋印塔、層塔の部材が散乱し、付近一帯には火葬骨も確認できたようである<sup>31</sup>。掘りかけの崖にはやぐらの後壁が現れていたというから、これらはやぐらに関連した遺物とみられる。現在は幼稚園裏のマンション入口にあたる一角に納められておりすべてを確認することはできないが、五輪塔二基、宝篋印塔一基、層塔一基のみが屋外に建てられている。

#### ・円覚寺旧境内遺跡出土塔 (5)

鎌倉市山ノ内四八〇番一、四八八番、四九七番地点の発掘調査において出土した塔である<sup>32</sup>。総高七二・一cmを測り、各輪四面に「一切有爲法／如夢幻泡影／如露亦如電／應作如是觀」とあり、「金剛般若経」の一節が刻まれている。「金剛般若経」は臨済禅で特に重用された経典といい、この塔が円覚寺近隣から出土していることから臨済系の造塔資料とみられている<sup>33</sup>。ほか地輪に「文□／六月」とあることから文保年間（一二三二〜一二四九）造立の可能性が提示されている<sup>34</sup>。

#### ・寿福寺伝源実朝塔 (8)・伝北条政子塔 (9)

鎌倉市扇ガ谷に所在する臨済宗建長寺派寿福寺のやぐらに納められた塔である<sup>35</sup>。伝源実朝塔は総高一五二・四cmを測り、伝北条政

子塔は一二六・五cmを測る。それぞれ無銘であるが、鎌倉時代後期の様相を呈する。

#### ・浄光明寺開山塔 (10)

扇ガ谷に所在する浄光明寺のやぐらに納められた塔である。歴代住持の墓塔が並ぶ中央に最大規模の墓塔で、総高一五六・〇cmを測る。大三輪家所蔵の調査ノートによれば、水輪上部に穿たれた穴に曲物が収められており、曲物には「永仁四年九月廿四日／当寺開山真聖国師」の墨書が記され、内部には喉仏のような骨片が納められていたとある<sup>36</sup>。塔自体は鎌倉時代後期の様相を呈する。また、やぐら内には歴代住持と伝えられる塔が並び、一部は赤星氏によって年代指標として取り上げられているが<sup>37</sup>、積み替えの可能性を否定できないため、本章では割愛する。

#### ・来迎寺伝三浦義明塔 (17)・伝多々良重春塔 (18)

材木座二丁目に所在する時宗来迎寺の所蔵する二基の塔である<sup>38</sup>。それぞれ三浦義明、その孫である多々良重春の分骨を葬つてであると伝わり、損傷が著しいが現高一九一・〇cm、一九七・五cmと大型である。もと境内裏にあつたものというが、詳細は不明である。水輪の上下に段を装飾するなど、既存の石塔型式から離れた二基間のみ共通性がみられる。火輪の軒反や水輪の型式、反花座に時代的差異が認められることから、伝三浦義明塔を造立以後、少々時代をあけて伝多々良重春塔が建てられたとみるべきであろう。

#### ・長谷寺安山岩製板碑 (11・12)

これまで述べた五輪塔とは別種と判断すべきであろうが、安山岩

製板碑に五輪塔が線刻または浮彫された例が存在する。長谷に所在する浄土宗長谷寺の所蔵する二基である。長谷寺五輪塔線刻板碑は上下を破損し、空輪および地輪の一部は失われており、残存高四四・四×最大幅三二・七cmを測る。対する長谷寺五輪塔陽刻板碑はほぼ完存しており、縦六六・〇、最大幅三四・二cmを測る。中央部に五輪塔が浮彫され、水輪部に「キリーク」が薬研彫りで彫られるほかは無文である。いずれも矢穴痕が認められ、小田原市居神神社に所在する板碑と同類と言えるだろう。制作年代は鎌倉の他の塔より下るものと見たほうがよい。陽刻板碑は五輪塔周囲に枠取られた痕跡が確認でき、中央部を残して他面が調整されたのち、五輪塔が彫られたことがわかる。また地輪の下部に線刻がみられ、そこで地輪を区切ると地輪七cm、水輪六cm、火輪六cm、空風輪七cmとなる。これは大三輪龍哉氏の算出した比率平均値と割合が合致し<sup>33)</sup>、この浮彫の五輪塔が石造塔と同じバランスで彫られたことがわかる。

#### 小結 — 安山岩塔の変遷 —

以上、鎌倉所在の年代指標になり得る安山岩製塔を概観した。これらの資料からまず導き出されるのが型式学的な年代変遷である。鎌倉における五輪塔の型式変化は、律宗系巨大塔に顕著に現れる。畿内における律宗系巨大五輪塔は叡尊塔を頂点に近似したフォルムを踏襲して造塔が行われており、忍性塔にはそのフォルムが継承されている。しかし、以降に造立された関東の巨大五輪塔は独自の展開を見せる<sup>40)</sup>。特に顕著なのは水輪の表現で、畿内における律宗系巨大塔の水輪は球体に近い形状であるのに対し、鎌倉展開以後の巨

大塔は上下から押しつぶされたような形状となる<sup>41)</sup>。このような関東独自の型式は、忍性塔に次いで古く、三年後に造立された多宝寺覚賢塔ですで見られることから、意図的な変化があったことを想像させる。これ以後、鎌倉の律宗系巨大塔の水輪にはこの覚賢塔の型式が踏襲され、他の大型塔・小型塔においても影響を及ぼしていくように見受けられる。

鎌倉における小型塔は、律宗系巨大塔から水輪以外の特徴も模倣する傾向にあったようで、具体的に挙げるならば、火輪の軒を厚く持たせることや、軒端をおよそ垂直に立ち上がられること、水輪の中央部またはやや上部に最大径を持たせること、地輪側面は火輪同様垂直に立ち上がられることといった点がよく似る。およそ十四世紀前半期ごろまでは、この型式が大小問わず安山岩製五輪塔すべての目標だったようにも見受けられる。なお、あまり遵守されていないが、火輪横幅と地輪幅を繋いだラインより水輪の横幅がはみ出ないことが理想でもあったようだ。

さて、それぞれの特徴をもとに資料を年代順にならべたのが図1である。忍性塔と同時期の紀年銘を持つ(一) 逗子東昌寺塔(一三〇三)は、火輪の軒の厚さに(60) 覚賢塔以前、およそ(59) 忍性塔に類似した型式を見ることができ、この軒の厚さは(2) 極楽寺延慶三年塔(一一三〇)以降、(60) 覚賢塔の型式と似た薄さにまで落ち着いていくように見受けられる。水輪の特徴もそうだが、鎌倉の安山岩製五輪塔の型式は(60) 多宝寺覚賢塔で成立したのかもしれない。

その後は⑬ 神奈川県立博物館鎌倉亀ヶ淵出土塔(元亨元年(一二三二))、⑭ 錢洗弁財天やぐら出土塔(元徳二年(一二三三))といった塔が年代順に並べられるが、バランスから見てこれら二つの塔が、この年代の型式を最もよく表す基準塔となる。それをもとに紀年銘のない資料を充てると、寿福寺の⑯ 伝源実朝塔、⑰ 伝北条政子塔のほか(13)(14) 錢洗塔(二基)がこの年代に相当する型式を示す。他方、紀年銘のない(15) 亀ヶ淵出土塔は、型式から判断すれば⑱ 実朝・⑲ 政子塔の後の年代に位置付けられる。格狭間、反花座を有する点で、他の指標として貴重な例となるだろう。

その後は貞治七・応安元年(二二六八)という年代が一つの指標となる。律宗系巨大塔として現存最後期の例となる(64) 西方寺跡塔と、⑳ 常盤出土塔がこの年号を有する。西方寺塔の水輪はさらに押しつぶされるような表現になるものの、火輪と地輪を結んだラインからは飛び出していない。この点は律宗系巨大塔の系譜を継ぐ塔として、厳しい約束事があったように感じ取れる。その点同時代の小型塔は水輪のつぶれる表現が顕著になる中、このラインを易々と突き破っている。前述したように律宗系巨大塔以外は、その点の認識が希薄だったといえるだろう。

室町期は大型塔の衰退と共に、小田原での石造物量産化が進む年代である。全国編年として小型塔水輪の最大幅の表現がより強調されるようになる特徴や、火輪の軒先が外側へ広がる特徴が挙げられているが<sup>42</sup>、鎌倉には室町期の紀年銘をもつ基準的な塔が少ないため、現状でそこまで検討することは困難である。なお、室町期の代表

例として、明德五年(一二九四)の銘を有する光明寺裏山出土の五輪塔がある。水輪横幅の最大径が上部に移動するとともに極端に表現され、いわゆるソロバン玉状になる点で、室町初期の基準的な塔としてこれまで扱われてきたが、元来の組合せかどうか疑問が残る塔でもある。埋没時にはすでに現在見られる組合せだったのであろうが、本論では対象とはしなかった。

なお、寿福寺は栄西によって開創された禅宗寺院であり、南都律によって導入された安山岩製五輪塔の優品が所在することは、鎌倉における律と禅の宗派間交流をほめかす資料として注視される。

## 2. 凝灰岩製五輪塔(図2・図11)

凝灰岩は鎌倉および三浦半島ほか周辺地域で産出される石材である<sup>43</sup>。第三紀層三浦層群に属し、採石地の差により砂岩や凝灰質砂岩、砂質凝灰岩などの種類が産出されるが、本章では凝灰岩の俗称で統一する。凝灰岩製塔は五輪塔に限らず、宝篋印塔、宝塔、層塔、板碑などの作例もある。そのほか、材質の同じ岩盤から掘り出す宗教関連施設「やぐら」の壁面に刻まれた石造物も凝灰岩製塔に分類されそうだが、そもそも石塔と同じ系譜か検証する必要があるため次節に持ち越したい。

軟質ゆえに本来の姿を保っている塔は少なく、また経年劣化の影響からか年号を有する塔も一例だけである<sup>44</sup>。それゆえ研究史上においても安山岩製塔に比べて研究は微少で、赤星直忠氏の論考は、軟質な凝灰岩製塔が硬質な安山岩流入以前より鎌倉に存在したのだ

ろうという推測に留まる<sup>45</sup>。本稿では鎌倉に残存する大量の凝灰岩製塔の中から、風化や破損の少ない「出土塔」を中心に資料を抽出した。以下概観しつつ、造立傾向や年代的特徴を明らかにしていきたい。

・大町釈迦堂口遺跡地蔵やぐら塔 A・B・C塔 (19・20・21)

大町六丁目一四四二番四外の発掘調査地周辺に残存する塔である。地蔵菩薩を最奥部に肉彫するやぐら（地蔵やぐら）の前面に据えられた塔二基 A、B は、それぞれ総高一四一・〇 cm、一四七・六 cm を測る。周辺の塔に比べ大型で、大きさが似通っていることから二基間での積替えは想定できるものの、他の塔に比べ積替えの危険は少ないと判断した<sup>46</sup>。また調査地点内の別のやぐら前に立つ五輪塔 C は、空風輪こそ他部材であるがおよそ総高一五四 cm 前後になる塔と推測でき、なおかつ部材各所に律宗系塔の影響が看取できる塔として注目される。

・松葉ヶ谷奥やぐら出土塔 (22)

大町四丁目一九三三番三、五丁目一九三七番七のやぐら発掘調査において出土した塔である。全体としておよそ二〇〜三〇基の五輪塔が復元でき、中でも谷戸最奥のやぐらに位置し、最大の大きさを有する一号やぐら塔は、火輪が失われているものの復元総高一五〇〜一六〇 cm と想定されている。また一号やぐら出土遺物として文保二年（一三二八）銘を有する緑泥片岩製板碑が羨道部に張り付いた状態で出土している点も興味深い<sup>47</sup>。

・多宝寺一〇号やぐら塔 (23)

扇ガ谷に所在する多宝寺跡の第四次発掘調査において出土した塔である<sup>48</sup>。本塔は、凝灰岩製切石による基壇上に安山岩川原石を敷き詰めた一〇号やぐら玄室内中央に据え置かれていたようである。空風輪と地輪の四部材のほか台石を有し、総高一六〇・〇 cm を測る。出土時塔は倒壊した状態であったが、地輪は原位置を留めており、表面に漆喰状の白色物質が残存するという共通性から、組み合わせの問題はないと判断できる。なお、この白色物質は化学分析により漆喰と判明している<sup>49</sup>。また火輪にはベンガラが残存しており、種子の部分だけを装飾する塗料の下地であったと判断されている。

・番場ヶ谷やぐら群出土塔 (24・25)

十二所馬場二三六番二地点の発掘調査において出土した塔である<sup>50</sup>。二〇穴のやぐらと共に、多数の五輪塔部材が出土している。このうち残存状況が良好で、出土時から組合せに問題のないと判断された塔二基を抽出した。三号やぐら出土塔は総高七八・二 cm を測り、五号やぐら出土塔は七一・〇 cm を測る。

・銭洗弁財天やぐら出土塔 (26・27・28)

昭和四十五年に実施された、銭洗弁財天入口隧道上のやぐら群発掘調査において出土した、八〇基の五輪塔のうち鎌倉国宝館に収蔵されている三基を取り上げた。それぞれ (27) は総高八七・三 cm、(28) は現高六八・六を測る。(26) は総高三五・二 cm と鎌倉最小の塔で、地輪底部四面に面取りを施すなど非常に丁寧な造形が施される。

・上行寺東遺跡出土塔 (29)

横浜市金沢区六浦二丁目四一九五ほか地点の発掘調査<sup>51</sup>において

出土した、およそ二五〇基の部材の中から組合せに間違いのない一基を取り上げた。この遺跡は六浦湾を望む山稜部に位置し、岩盤を削平するなど大規模な土木工事の後、やぐら四四基、建物一〇棟、池、井戸などを構築した宗教施設群である。遺跡は上段、中段、下段に分けることができ、本塔が出土した二二号やぐらは上段に位置する。玄室奥壁に阿弥陀如来坐像を浮彫にし、両脇にそれぞれ五輪塔や浮彫五輪塔を配するなど、当遺跡の中でも最も重要視された遺構と考えられている。取り上げる塔はこのやぐらの副室内部にて出土したもので、総高は一四・一cmを測り、各輪に刻まれた種子が月輪に納められる特殊な塔である。遺構の年代は十四世紀第二四半期頃とみられている。

#### ・群馬県天神山系凝灰岩製塔

このほか鎌倉周辺に群馬県天神山系の凝灰岩を用いたといわれる塔がある<sup>52</sup>。横浜市御所山伝五所五郎丸墓、横浜市磯子区東漸寺五輪塔三基である。

**御所山御所五郎丸墓塔**(33)は横浜市西区御所山二四ノ二に所在する塔である。地輪、水輪、火輪が現存しており、現高一・二・五cmを測る。表面の剥離など損傷が激しいが、残存している部材の各輪四面には五大種子が配される<sup>53</sup>。

また**東漸寺塔**(30・31・32)は横浜市磯子区東漸寺に所在する三基の塔である。向かって左の塔(30)が一六二・〇cm、右の塔(32)が一三三・〇cm、中央の塔(31)が一九七・〇cmである。右の塔は空風輪を欠くが、昭和三七年に行われた調査時点では残存していたよ

うで、本来の総高は中央塔と左塔の中間に収まる<sup>54</sup>。

粒子の微細な凝灰岩は一見、三浦層のシルト質凝灰岩のようにも見受けられるが、型式としては古く、十三世紀後半代と見てよい。

#### 小結・凝灰岩製塔の変遷

以上、凝灰岩製塔を概観した。在銘塔を確認することができないため年代判定は困難であるが、型式的に判断するならば軒の反り具合が緩やかな、大町釈迦堂口遺跡A、Bに最も古手の様相が見られる。安山岩製塔と比較するならば、忍性塔導入以前の様相と言えるだろう。しかし、取り上げた資料を通観すると、どうやら凝灰岩製塔は、安山岩製塔とは違った独自の形式変遷をとるように見受けられる。

特徴を挙げるならば、最古期に相当する塔は、火輪の緩やかな反りと垂直に立ち上がる軒端の表現、垂直に落ちる地輪などに安山岩製塔と同じような型的特徴を見ることができのだが、型式変遷下に並べると、徐々に火輪の軒先がより広く外側に張り出し、地輪も下部に広がる特徴が、年代の変遷基準と判断できる。また水輪は、最古期から球形の上下を同寸で切断したような簡素な造形となっており、これが年代を経ると押しつぶした表現となるだけで、安山岩製塔のように最大径の上部への移動は見られない特徴が看取できる。おそらくは、火輪と地輪がそれぞれ上下で広がったことよって、中心となる水輪はどちらかに引っ張られることなくバランスが保たれたのだろう。逆に安山岩製塔の型式変遷では火輪の軒先だけが立ちあがり、地輪は変化しない。火輪だけに引っ張られた結果、水輪の

中心点が上方に移動したのだと推測される。凝灰岩製塔だけに見られる地輪の変化は、あるいは石材の脆さを回避する目的があったのかもしれないが、こうした石材によって型式変遷の過程が違うという結果からは、それぞれ異なった石工が存在したのではないかという結論が導き出される。

ただし、(2) 大町釈迦堂口遺跡C塔のように、律宗系塔に影響を受けたとみられる凝灰岩製塔が存在することも無視できない。この塔の火輪の軒の厚さや全体のバランスは、その系譜を想起させる型式を有しており、凝灰岩製塔を作成していた石工の中にも新しい塔の影響を受けた人々が存在したことを想起させる。

以上のように凝灰岩製塔は、年代の指標となる在銘塔がほぼ無いことから型式のみで判断するしかないが、最古期の塔の型式は安山岩製塔の十四世紀初頭以前の型式に近く、あるいは赤星氏の言うように、さらに以前から存在していたとしても問題はない。その後律宗系塔の台頭により影響を受けつつも独自の型式を保ち、両者は鎌倉において並存していったと見たい。

なお、鎌倉には土地の基盤層となる凝灰岩を直接掘り込んで形成した宗教関連施設「やぐら」がある。この遺構には石造物を設置する例が多いが、内壁を彫り込み石造物を造形する例が少なからず見られる。この石造物が凝灰岩製塔と同じ型式であったならば、凝灰岩製塔を造り続ける石工が「やぐら」を造立した工人と結びつく可能性はあるだろう。次節で検討したい。

### 三．やぐら内浮彫塔・線刻塔の位置付け

鎌倉における代表的な宗教関連遺構に「やぐら」がある。やぐらとは、鎌倉地方に分布する中世横穴式墳墓の様式で、岩壁にうがたれた横穴式の墳墓ないしは供養所と認識されており、鎌倉を取り巻く丘陵の裾や中腹に数多く分布している遺構である<sup>55</sup>。造立開始年代は、石造物の紀年銘や<sup>56</sup>出土陶磁器の年代<sup>57</sup>から十二世紀後半、遡っても中頃までと見られるが<sup>58</sup>、いまだ不明な点が多い遺構である。現在も開口する事例の多くは、大量の石造物の部材が納められているが、後世に持ち込まれるケースも多く、一括りの資料として検討するには注意が必要となる。

そんな中、これらの移動可能な石造物とは違い、「やぐら」内壁面へ浮彫・線刻といった形で直接彫り込まれた五輪塔がある。例としては、百八やぐら(二階堂、東泉水やぐら(十二所)、瓜ヶ谷やぐら(山ノ内)、上行寺東遺跡(横浜市金沢区)が知られるが、持ち込みの危険性がなく、遺構存続期間内に造立されたであろうことから、「やぐら」の存続年代を知る有効資料となる手がかりとなる可能性がある。ただし、問題は、これら浮彫・線刻塔が石造物と同一系譜上に置けるかである。百八やぐらの一部と瓜ヶ谷やぐらの資料を用いて検討を行いたい。

#### 1. 百八やぐら内浮彫・線刻五輪塔(図3・図4)

「百八やぐら」(覚園寺裏山やぐら群)は、二階堂字平子から字杉

ヶ谷にわたって分布する大規模やぐら群である。古くは明治二三年より調査が行われ、そのたびに確認されるやぐらの数は増加していたが、現在では覺園寺奥となる薬師堂ヶ谷側に八四基、杉ヶ谷側に一一六基の計二〇〇基と認識されている<sup>59</sup>。

このうち浮彫の石造物が刻まれる「やぐら」は割合としては少ないが、五輪塔のほか宝篋印塔、仏像、種子と種類は多様である。本論ではこのうち残りの良い三種の五輪塔を対象とした。なお「やぐら」の名称に用いた番号は、昭和一四年に赤星直忠が付したものを採用している<sup>60</sup>。

百八やぐら四一號宿浮彫五輪塔(35)は「やぐら」内壁正面に五基、向かって右壁に四基、向かって左壁に二基の五輪塔が浮彫されたやぐらである。風化の影響が顕著であるため、正面奥壁の五基(すべて五大種子あり)と向かって左壁の一基(題目)のみを対象とした。

これらの浮彫五輪塔は、地輪が「やぐら」床面に設置しない表現がなされるが、半肉彫りで表現された造形は一見して石造物に近いと判断される。それぞれの型式は石造物の型式変遷を充てることが可能で、古い塔からC↓D↓B↓E↓A↓Fの順で造立されたと見ることができ、中央から外側へ造立されていく様相が読み取れる。またこれらの塔の彫り込みには、ある程度の計画性があったようで、地輪が接地してない代わりに、横並びの基準線を火輪の下端部に統一している。実測しなかった左壁の五輪塔一基は造形途中のようだが、火輪のみが痕跡として残ることから見ても、造作手順はまず火輪からだったことがわかる。なお、接地しないながらも、地輪は下部

が広がる造形がなされる。この点は、凝灰岩製塔の型式と同じと見てよい。火輪の変遷の特徴も鑑みれば、凝灰岩製石工の手による造作と考えても違和感はないだろう。

百八やぐら三二號宿浮彫五輪塔は内壁に四基の浮彫五輪塔を有する例(37・38)である。浮彫をシルエットで造形している点で四一號宿浮彫塔とは異なった表現が見られる。石塔ではないが類似した表現を用いる例として、奈良西大寺所蔵の「五輪塔嵌装舍利厨子」(室町期)を挙げることができる。舍利容器に造形された五輪塔は、西大寺の石造の律宗系塔をモデルに造形されたと見られるが、百八やぐらの五輪塔も火輪軒の厚さを表現する部分が特に石造物を彷彿とさせ、一瞥して石塔がモデルであると看取できる。なお、年代を判定するには情報が少ない。

百八やぐら一九號宿浮彫五輪塔は線刻によって表現された塔である(39)。正面に五大種子が刻まれ全体のバランスは良いが、端々が極端に誇張された表現は、デフォルメされたときえ言える。地輪が地中に埋まっているため判断は難しいが、石塔をモデルにしたと言うなら近世なら在り得なくもない型式だろうか。やはり他の浮彫塔から少々時代を経て石造塔に影響を受けつつ刻まれた「凶像」モデルの浮彫塔と見るべきであろう。

以上、百八やぐら浮彫五輪塔の一部を概観したが、バリエーションに富んだ造作の中でも石造物の石工の手による造作と判断できる塔は見受けられる。ただし、一九號窟のように凶像と言った方がよい例もあり、一部で判断することは難しい。

## 2. 瓜ヶ谷やぐら内浮彫五輪塔 (図3・図4)

「瓜ヶ谷やぐら群」は、山ノ内瓜ヶ谷字西瓜ヶ谷及び字東瓜ヶ谷に所在するやぐら群である。大きく分けて西瓜ヶ谷やぐら群・東瓜ヶ谷やぐら群があり、やぐら内には多くの浮彫り彫刻が残存する。平成二十五年度に行われた瓜ヶ谷やぐら群の調査では、この谷戸に所在するすべての浮彫石造物が対象となった<sup>6</sup>。谷戸内すべての資料を対象にすることで、浮彫塔の変遷など明らかになる点も多いだろう。

### 東瓜ヶ谷やぐら群 (図3)

谷戸の最奥に位置する市指定史跡「東瓜ヶ谷やぐら群」には1号から5号までのやぐらが確認され、浮彫りされた石造塔は1号やぐら通称「地藏やぐら」に七基、2号やぐらに一基、3号やぐらに八基の五輪塔が確認できる。

このうち注目すべきは2号やぐらの石塔で、羨道部から見て中央奥壁に位置する浮彫五輪塔一基(H)である。地輪と水輪下部が欠損しているものの、残存部は十四世紀前半と言ってよい型式を見せる。メリハリのある各部位や薬研掘りの種子は、石塔を理解する者の手による造作と判断でき、軒の厚さや反りの形は律宗系塔を想起させる。鎌倉に安山岩の加工技術が導入され、凝灰岩の石塔型式にも影響を与えた最も良い時期の造立であったと考えられる。

ただし、他の塔の中には石塔の系譜から逸脱した様相の塔も多

く、特に1号やぐら最大の塔で北東角に彫り出された五輪塔Aは、火輪の軒に反りが見られないことなど、その傾向が強い。また同じくやぐら内北東に並んで彫られたC・D・Eは、Aに比べれば石塔の造形を理解していると見えるものの、三基の示す空風輪が龕の天井部で止まる造形は、一般的な石塔には見られない表現である。この三基は全体的に造作方法の簡略化が見られ、空風輪がいわゆる砲弾型とよばれる形へと移行し、空風輪の「空輪」と「風輪」の部分がそれぞれ独立して作成されるのではなく、一度火輪上部に最大径を置く三角形を彫り出したところから境目となる溝を入れるだけの型式となっている。年代は早くとも十五世紀後半でおそらくは十六世紀までを視野に入れて見る必要がある。ほか3号やぐらには中央奥壁に半肉彫りされる最大の塔Lでさえ造形はいびつで、火輪や地輪の奥壁に向かう面が正面に対し平面直角で表現されない点など、石塔の系譜とは言い難い。

またMは石塔の型式を完全に無視した形態で、三角と丸と四角であれば良いとさえ思える造形である。J・L・Nなど石塔型式に沿った造形である塔も見受けられるが、それでも一般的な鎌倉の中世石塔に比べ造形は拙く、苦しいながらも年代を見るならば、十五世紀後半ごろく十六世紀代と考えられ、本やぐらの浮彫五輪塔はすべてそれ以降の所産と判断される。近世初頭まで造塔行為が行われた可能性も否定できない。

### 西瓜ヶ谷やぐら群 (図4)

対して通称「西瓜ヶ谷やぐら群」には、1号から5号までのや



ぐらが確認されている。浮彫りされた石造物は最大となる1号やぐらに五輪塔が一四基、1号やぐら南壁の外側に宝篋印塔一基、2号やぐらに板碑一基、3号やぐらに五輪塔と板碑がそれぞれ一基、3号やぐらと4号やぐらの間となる壁に五輪塔二基、板碑一基が確認できる。

このうち最も残りがよいのは、1号やぐらの浮彫五輪塔一四基である。中央奥壁や南寄りに最大の塔Hがあり、型式から鎌倉末から南北朝時代となる十四世紀の年代が充てられる。半肉彫りの三面には種子が彫り込まれ、全体を漆喰で装飾していた様相が看取できるなど造りは丁寧である。全体のバランスも良く、風化によって火輪の軒を観察しづらいが、多少外側に開き気味に立ち上がる反りから年代は幅を持たせて判断した。中央塔の周囲に並ぶ五輪塔は両隣のGとIを最小に総高が徐々に高くなる様相を見せる。百八やぐら四一号窟もそうだが、石塔が並んで配置される場合、はじめ中央に塔が造られ、この両隣から外側へと順に作成されていくように見受けられる。その場合、西大寺の五輪塔に代表されるように始祖となる塔に配慮し、以後の塔はそれより若干小さく造っていくものだが、本やぐらに見られる様相はこれとは正反対である点は目新しいと言える。中央塔Hの周囲四基となるF・G・I・Jは中央塔に準ずる年代を示し、十四世紀代と十五世紀前半ごろの造立と見たいが、さらに周囲のA・B・C・D・K・L・M・Nの塔は空風輪の大きさや火輪の下端部が長いなどの表現が見られ、造形を崩している。早く見積もっても十五世紀

後半と十六世紀ごろの造立と見たい。

本やぐら内の極端な大きさ以外の塔は、およそ水輪上端部か地輪上端部を基準として隣の塔が作成されていたようで、基準を変えずに塔を高くする方法として、空風輪の大きくすることや火輪の下端部に厚みを持たせる表現が用いられたと推測される。本来こうした高さの差を出すには石塔全体のサイズを増減させるものだが、スペースの限られたやぐら内で数を増やすためには横幅を節約する必要があり、結果として空風輪や火輪といった部材のみの高さを変化させる方法が採られたのだろう。

以上のように、本やぐら内の石塔は(H↓G・I↓F・J)という流れが一区切りとなり、(E)が作成され、のちに(K↓L↓M)が作成される。これと同時期に(B↓C↓D↓A)の作成があり、Nを最後に本やぐらの造塔行為が行われなくなったと見るべきだろう。Nに至っては近世と見てもいいかもしれない。

なお、1号やぐらと2号やぐらの間となる壁面には宝篋印塔一基Oが浮彫されている。造形のほとんどが破損しており、反花座や隅飾り、相輪など年代判定の材料が乏しく深く検討することはできないが、基礎上部の段数は一段、笠下部の段数は二段であることが確認できる。鎌倉時代後期に畿内より流入した石造宝篋印塔は、鎌倉における初期(十四世紀初頭前後)の例として基礎上部を三段、笠下部を三段に造形している例が散見されるが、定着以後(十四世紀前半)の型式は基礎上部二段、笠下部二段であり、いずれも本作例の型式とは異なる。また残存部より復元した本塔

のシルエットは塔身の幅が広く、鎌倉に現存する中世石造宝篋印塔のシルエットとは合致しない。以上のことから判断すれば、本塔は石造宝篋印塔とは系譜を別にする、凶像などをもとに作成された浮彫彫刻と見るべきであろう。なお、鎌倉市内に現存する浮彫宝篋印塔は覚園寺裏山やぐらに一基と東泉水やぐらに一基が確認できるのみであり、それらはやぐら内に彫られる例であることを鑑みれば、本作例は鎌倉のやぐら外に現存する唯一の浮彫宝篋印塔として貴重である。

以上のように、瓜ヶ谷やぐらは「東瓜ヶ谷やぐら」地点では2号やぐら塔以降、石塔造立は行われず、十五世紀後半ごろから開発が活発化する様相が見られ、十六世紀あるいは近世まで継続した。また「西瓜ヶ谷やぐら」は1号やぐら中央塔造立後、間隔を置かずに造塔が行われ、十五世紀前半代まで周囲の四基が納められ、十五世紀後半以降に残りの九基が造塔されていく。開発や造塔行為は絶えることなく十六世紀代、もしくは近世まで継続していたものと考えられる。

### 小結

以上、浮彫・線刻五輪塔について概観した。百八やぐらの検討のように一部のみの判断が難しいが、瓜ヶ谷やぐら群の検討のように、すべての五輪塔を対象とすることで、見えてくることも多い。

瓜ヶ谷やぐら群に現存する浮彫石造物は、石造物の系譜と見てもよい塔が多く、十四世紀前半代に造立された形の良い塔も存在す

るなど、石造物の石工が関与している可能性は高いだろう。ただし、この行為は十四世紀代〜十五世紀前半ごろまでに造立された塔に言えることであって、それ以降に造られた塔は造形のルールを無視する傾向が強くなるよう感じられる。おそらくは十五世紀後半〜十六世紀ごろ造立された塔がそれで、やぐらの拡張が行われたのもこの時期である可能性がある。

この変化は、永享の乱後、足利成氏が鎌倉を離れる時期とも重なり、鎌倉という都市が衰退する余波が、同時期の葬送にもあらわれたものと解釈できる。十三世紀後半に増大する鎌倉の葬送遺構は、海浜地域や山稜部といった地域で盛んであったが、十五世紀以降になると、例えば海浜地域でそれまで埋葬遺構が集中していた地域を逸脱し、都市中心部での埋葬が行われたり、埋葬数が一気に減少したりといった現象が起きる。また山稜部におけるやぐらの埋葬が、火葬骨埋納ではなく土葬になることなど、おそらくは暗黙のうちに決まっていた都市の規律が乱れていく様相が示されている。その原因が都市の衰退であり、余波は石造物ややぐらの造形にも現れているのである。

以上の結果から、石造物の型式変遷に照らし合わせれば、やぐらへの造塔は少なくとも十四世紀前半には行われていたと考えるのが妥当なようである。それを証明する浮彫という行為は鎌倉全体には定着しなかったようだが、一部では継続され、あいだに空白期間を挟みつつ、十五世紀後半から近世期まで行われたと見られる。造作復活の背景には、都市の衰退後に失われた文化を模倣するかたちで

再興を試みた、鎌倉在住民の意思があつたものと見たい。

なお、やぐらは鎌倉内外<sup>3</sup>。または山頂や山腹、崖裾で機能や性格が異なると見られており<sup>4</sup>、すべての浮彫・線刻に適用できるわけではないことを付け加えておく。

#### 四．鎌倉における石造物以外の五輪塔の性格

以上のように石造物の五輪塔は、一部を除き型式変遷下に置けることが認められた。またそのほとんどが墓塔・供養塔として用いられたと見てよいだろう。しかしながら、鎌倉には石造物以外の五輪塔も少なからず存在する。種類としては、水晶製塔、銅製塔、泥塔、木製塔、木製塔婆、瓦当文様である。荘厳具や仏具、工芸品として作成されたこれらの五輪塔は、墓塔としての五輪塔と同じ用途、系譜と考えてよいのか。種類別で資料を追い、鎌倉における五輪塔の意味と導入時期を考えてみたい。

##### 1. 水晶製五輪塔(図5・6)

先述のように五輪塔は大日如来の三昧耶形であり、空海が舍利を大日如来と見做したことにより、舍利容器には五輪塔型が多く生まれた。その舍利塔としての意味合いが最も強いのが水晶五輪塔だろう。鎌倉では像・塔内納入品として二例、出土品が二例、ほか一例の計五例が確認できる。

像内納入品は浄光明寺阿弥陀如来像納入塔(58)がある。浄光明寺本尊である阿弥陀三尊像は、北条久時の発願により正安元年(一二九九)に作成されたことが胎内文書より判明している。水晶塔はこの胎内文書とともに発見されており、同じ時期に納入されたと考えられる。また、覚園寺大燈塔納入塔(59)は開山塔と共に正慶元年(一三三二)に造立された宝篋印塔下に納入された例である。空風輪と火輪が一石、水輪と地輪が一石で造られており、火輪から伸びるホゾによって二石が結合されている。

ほか出土例としては、鶴岡八幡宮境内遺跡出土の水晶製五輪塔(60)があり、空風輪部を欠損しているが、残存部高さ二・九cmと非常に小型である<sup>5</sup>。火輪から水輪にかけて舍利納入穴が穿たれており、内部に舍利として一mm大の水晶粒が三粒残されていた。出土面の年代は担当者により一六世紀中頃から後半代が充てられている。

また、円覚寺門前遺跡で出土した水晶五輪塔(61)は、平面六角形を呈するいわゆる水晶六角五輪塔で、空風輪は失われているが、総高四・五cmを測り、火輪から水輪にかけて舍利納入穴が穿たれている<sup>6</sup>。道路遺構の路盤調査の際に、安山岩礫の周囲から銭一三枚と共に検出されており、埋納されたものと見られる。出土した面は十三世紀末から十四世紀代とみられる。

以上のように、出土資料については一応それぞれの出土面の年代を示したが、元々水晶塔は伝世して然るべき資料であるため、埋納されたからといって出土面の年代をそのまま当てることはできない。浄光明寺塔、鶴岡八幡宮出土塔、円覚寺門前遺跡出土塔を見る限り、

火輪の軒は反りが無く、屋根としての表現は見受けられない。また大きさも統一感はなく、型式から石塔や何らかの系譜として関連付けることはできないだろう。舍利塔として画像をもとに一つ一つが特別注文で作成された仏具とみるべきである。

水晶はその高い透視性から、内部に納められた仏舎利の存在を明らかにできる特性がある。この点が仏舎利の直接容器として多く用いられた最大の理由であろう<sup>67</sup>。康和五年（一一〇三）の『東寺新造仏具等注進状』には「水精五輪塔」とあり、九条兼実の『仏舎利奉納願文』には寿永二年（一一八三）五月に再興された東大寺毘盧遮那仏に生身舍利一粒を納めた「水精小塔」が奉納されたことが記される。ただし、承知の通りこの石材は硬質で、加工は容易ではない。この点で注目されるのは水晶原石の出土例である。

極楽寺忍性塔を擁する塔頭、石塔院の前には稲村ガ崎小学校のグラウンドが広がるが、その前面に当たる地点で水晶片が四一点出土している<sup>68</sup>。出土面の年代は十四世紀前半から後半があてられ、ほとんどが原石であるが、工具痕が観察できるものもあるといい、鎌倉において水晶の加工が行なわれていたことを示す資料である。

再三述べているように、極楽寺開山忍性は硬質石材加工技術を鎌倉にもたらした。その師である叡尊も奈良において多くの造塔を行い、なかには浮島十三重石塔や般若寺十三重石塔のように舍利を納めた水晶五輪塔を納入する石塔も存在する。つまり叡尊の主導する西大寺律宗には水晶加工の技術があり、鎌倉においては同宗派の極楽寺が水晶の加工技術を持ち込んでいた可能性が高い。同時代の

水晶塔が報告される浄光明寺、覚園寺、円覚寺等の寺院とのつながりもまた注視すべきだろう。浄光明寺、覚園寺の北京律寺院と極楽寺の南都律に交流があることは石造物研究からもすでに指摘がある<sup>69</sup>。第二章以降述べるように、北京律と禅にも宗派間交流が確認できる。また極楽寺と浄光明寺の前身は浄土宗西山派・諸行本願義派でそれぞれ、密接な交流が指摘されている。これらの多重の宗派間交流が、鎌倉の文化発展の背景にあるものと考えたい。寿福寺の実朝・政子塔など石造五輪塔でも禅宗寺院に優品が存在する例も、それらのつながりを示す資料なのかもしれない。

なお、伝世資料として大巧寺におよそ三〇cmを超える水晶五輪塔が存在するが、今後検討すべき課題である<sup>70</sup>。

## 2. 銅製五輪塔

銅製塔は水晶塔と同じように舍利塔の意味が強い塔であろう。鎌倉においては四点確認できる。

**極楽寺順忍塔下出土金銅塔**（**10**）は一九cm。昭和三六年の崖崩れに伴う復旧工事の際、順忍塔地輪内から発見されたものである。「比丘尼禅忍／延慶四年／二月八日／子尅他界」の線刻があり、延慶四年（一一三一）の造立であることがわかる。火輪と水輪の間で二つに分かれる造りとなっている<sup>71</sup>。

**覚園寺開山塔下出土金銅塔**（**11**）は昭和四一年の開山塔解体修理の際、塔地下のカロートより出土したものである。完存しており高さ一〇cmを測る。火輪と水輪の間で二つに分かれるようになっており、

発見時には水輪及び地輪に火葬骨が納められていた。地輪の三面に渡って銘文が残されており、元亨二年（一二三三）に光広が父である信阿の菩提を弔うために造塔したことがわかる<sup>72</sup>。

**伝西方寺跡五輪塔下出土塔（72・73）**は西方寺跡出土と伝わる塔である。関東大震災の折、西方寺跡より出土したと伝わるが、出土経緯には不明な点が多い。火輪と水輪の間で二つに分かれる造りとなっており、総高二〇cmを測る<sup>73</sup>。

**伝藤内定員邸跡出土塔（74）**は小町一丁目三〇九番五地点の発掘調査により出土した塔である<sup>74</sup>。空風輪が失われており、現高五・一cmを測る。火輪から地輪まで接合部はなく、火輪上部にやや深い穴が造られていることから、キャップ代わりの空風輪を受けるホゾ穴であるととも、舍利納入穴であると判断したい。

以上四点中三点は、石造塔の塔中・塔下より出土しており、蔵骨器と判断され、納入された遺骨が僧侶や石工と判明している。いずれも小型であることから分骨塔と見られる。また火輪と水輪の間で分かれるつくりは、水輪に舍利を納める舍利塔の影響によるものと見べきだろう。銅製塔間での型式や造形に共通する部分が多く、同じの系譜の手による造作と判断でき、逆に出土資料となる伝藤内定員邸跡出土塔はこれらと造形が異なるが、素材の異なる円覚寺門前遺跡出土水晶塔と大きさやシルエットが似通っている点は注視される。

### 3. 土製五輪塔（図6）

土製五輪塔はいわゆる泥塔のことであり、南御門遺跡<sup>75</sup>と今小路西遺跡<sup>76</sup>で出土しているほか、鶴岡八幡宮境内からの報告例がある<sup>77</sup>。

**南御門遺跡出土塔（46）**は空風輪の一部を欠き、各面に五大種子が墨書される塔である。残存高六・四cmを測る。出土層位には鎌倉時代中期から南北朝期の年代が当てられている。

**今小路西遺跡出土塔（47）**は地輪部を欠いているが、残存高六・三cmを測り、出土層位から十三世紀中〜十四世紀前葉ごろとみられる。**八幡宮境内の例**は鎌倉国宝館裏の山裾の崩落土除去作業中に出土したものである。高さ五cmほどで底部に穴を有する。他の出土例と違い相輪を有する宝塔形と見受けられる。

泥塔とは『吾妻鏡』にもみられる八万四千塔供養で使用された塔のことである。西山美香氏によれば、頼朝の八万四千塔は五寸大の五輪塔形であるという<sup>78</sup>。塔中には宝篋印陀羅尼を納め、発願者が宝篋印陀羅尼経を書写した。頼朝が八万四千塔供養を行なったことを先例とし、頼朝以降の将軍家もこれを踏襲した様子が『吾妻鏡』には見られ、将軍が為政者として行う造寺・造塔行為と同じ意味があり、鎮護国家・慰霊鎮魂・怨霊調伏を行なう仏事だったと考えられている。つまり、阿育王（アショーカ王）の故事に倣った仏教による統治政策の意味があったのである。

鎌倉において出土した土製五輪塔は、欠損部を補ったとしても五寸には至らないサイズである。鎌倉将軍家の八万四千塔供養が記録上見られるのは文応元年（一二六〇）が最後となるが、以後の将軍が

同様の行事を踏襲していた可能性は高く、十三世紀後半以降十四世紀前葉期の面から出土したとしても不思議ではない。またそれだけ踏襲されていれば、例えば一つの型板で数個分を造れるなどといった具合に、簡略化の一環として小型化する形式変遷が見られる可能性もあるだろう。さらに行事内容には塔中に宝篋印陀羅尼を納めることとあるが、南御門、八幡宮出土例にある塔下部の穴は、陀羅尼を納めるための穴なのかもしれない。

なお、河野眞知郎氏が指摘しているように、八万四千基造られたのであれば、もっと多くの出土例があつて良いはずである<sup>7)</sup>。これが何を意味するのか、今後の出土例増加に期待したい。

#### 4. 木製五輪塔

木製五輪塔の報告例はきわめて少ない。鎌倉内では建長寺玉雲庵出土塔のみ報告があるが、詳細は不明である<sup>8)</sup>。そのほか図示しなかったが、空風輪と思われる高さ三・六cmの木製品が佐助ヶ谷遺跡から出土しているほか<sup>9)</sup>、千葉地東遺跡において木製宝塔が出土している<sup>10)</sup>。

さて、それら以外で注目すべき木製塔が、秦野市金剛寺の所蔵する**伝実朝首塚塔**(34)である<sup>11)</sup>。現在鎌倉国宝館に収蔵されている本塔は、総高一五八・〇cmを測る木製としては殊に大型の塔で、全国的に見ても最大級の塔といえる。カヤ材を使用し、水輪地輪が一木で造られ、火輪、空風輪の三材によって構成されている。火輪は縦に長く、傾斜は急角度である。軒は薄く、先端も急角度で反り上がる。

水輪は最大径を中央に配し、強調されることもない。地輪も縦長に表現されるなど、各所に古手の造形が確認できる。石造物の型式で判断するならば鎌倉導入期よりかなり古手の様相を呈し、貴重な例となる。ほか、地輪と水輪の間には五mmほどの切込みが一周しており、作成には轆轤を使用したことを窺わせる。また、水輪上端の火輪との接合部には長径一二・七cm、短径八・七cm深さ五・〇cmの納入穴が穿たれているなどの特徴がある。

寺伝によれば、金剛寺は建保六年(一一二八)退耕行勇を開山に創建された寺院で、実朝暗殺の後、三浦介武常晴が実朝の首を抱えて金剛寺に葬り、五輪の木塔婆を建てて供養したとする。のち実朝が薨じて三二年経過した建長二年(一一五〇)に波多野忠経(忠綱)が木塔婆を石造の五輪塔に建替えたという<sup>12)</sup>。『新編相模風土記稿』によれば、木塔婆はその後金剛寺境内阿弥陀堂に移されたこととある。現在、寺に程近い小高い丘上に安山岩製石造五輪塔が建てられており、実朝の首塚と伝えられている。

造塔年を実朝の没年(建保七年(一一二九))とするには難があるが、実朝が舍利信仰に篤かったことは、和歌や夢のお告げ、陳和卿との対面の記事などからも良く知られている<sup>13)</sup>。これに倣い、実朝の近習として重用された波多野氏が、菩提寺に供養の意味を含んだ舍利塔を造立したと考えるのも不自然ではない。また憶測の域を出ないが、開山が行勇ならば東大寺大勧進としての技術基盤がある。高野山金剛三昧院多宝塔を造立した建仁寺工匠は莊嚴具に強い内匠工であったといえる<sup>14)</sup>。本塔を造立することは可能であろう。

## 5. 木製板五輪塔 (図7)

木製板五輪塔は管見の限り八例が報告されている。鎌倉最古の例として、八幡宮境内出土の十二世紀中々後半の男女合葬土壙墓からは、五輪板塔婆が二基出土している(39・40)<sup>87</sup>。この板塔婆は全長一四一・〇cm、一〇八・六cmと非常に大型で、一枚の板から五輪塔各輪を削りだしている。その後の鎌倉における中世出土板塔婆に比べて地輪が短いことが特徴で、五輪塔の思想が鎌倉期以前にすでに到来していたことを示す資料として貴重である。

若宮大路西側側溝出土木製塔婆(5c)は、雪ノ下一丁目二七三番イ地点の若宮大路側溝から出土した遺物で、全長二三・二cmを測る<sup>88</sup>。その他に永福寺出土木製塔婆は二階堂の永福寺において出土した例で<sup>89</sup>、四基あり、全体を通して十三世紀から十四世紀前半頃に収まる(47・48・49・52)。地輪部が長く表現され、現代の卒塔婆と非常に良く似た形態である。

また鶴岡八幡宮出土例に共伴して二条線を持つ棒状木製品が出土しているが、これと似た由比ガ浜南遺跡出土の木製塔婆の造形は<sup>90</sup>、石川県珠洲市野々江本江寺遺跡出土の木製塔婆<sup>91</sup>に非常によく似た表現がなされる。これらが同類とされるならば、木製板碑の系譜とすることができ、ひいては現在の卒塔婆まで繋がっていく例とみたいが、即断は危険であろう。また、この造形は、大三輪氏より密教修法壇の四厥にもよく似ているとのご教示をいただいている。類例の増加を待ちたい。

なお、高野山奥之院には「流れ灌頂」という行事がある(図8)。これは卒塔婆の三分の一ほどのところに打ち付けた横木に、左右三本ずつの六地藏塔婆六本を打ち付け、それを水辺か川の中に立てて水をかける行事である<sup>92</sup>。この行事は「流水灌頂」とも呼ばれ、塔婆に水をかけることで、死者の生前の罪穢れを清める浄化の機能があるという。関西や北陸地方の民俗事例でも見られる行事である。

またこれに似た事例に「卒塔婆流し」がある。大阪四天王寺の彼岸会には、亀井の池に経木塔婆を流すことが知られ、禅宗ではお盆の水陸会に経木塔婆を流すといい、『平家物語』の「卒塔婆流しの事」もこれに当たるといわれる<sup>93</sup>。これを行うことで死者の罪穢れ(罪業)を浄化し、罪穢れのために地獄で苦しむ霊の苦しみを軽くし、即脱往生させる意味がある。この事例は京都でも行われたようだが、室町初期の『七十一番職人歌合』によると、これらの行事を行っていたのは「いたか」と呼ばれる勸進聖であったという(図9)。

「いたか」は頭巾で顔を隠し、笠をかぶり、笹塔婆を持っている。地面にも笹塔婆と笹の枝を置いて「ながれくわんじやう(流れ灌頂)／ながせたまへ／そとばと申は／大日如来の／三昧耶形」と歌う。これを見ると、流れ灌頂も卒塔婆流しも違いはないように感じられる。大日如来の三昧耶形つまり五輪塔をかたどった卒塔婆を水に流す行事が中世にも行われていたのである。

さて、そこで注目されるのは木製塔婆の出土位置である。鎌倉が都市として成立する以前に埋葬された鶴岡八幡宮出土例は除外されるものの、それ以外の木製塔婆はすべて水際で出土しているのであ

る。これまで、これらの出土品は現代の塔婆のような使われ方をしたのではと、漠然と認識されてきたが、あるいは出土する木製塔婆の多くが水場で使用された滅罪浄化の塔婆であったのではないだろうか。

対して鶴岡八幡宮出土木製塔婆は鎌倉幕府成立以前に、鎌倉という土地で五輪塔を墓標として用いる文化が存在したことを示している。また墓が海浜部でない場所に築かれたことも、頼朝入部以前の鎌倉の墓葬を探るうえで貴重な資料と言えるだろう。

## 6. 瓦当文様(図10)

鎌倉考古学の先駆者である赤星直忠氏の所蔵資料に、源頼朝法華堂跡で採取した五輪塔文軒丸瓦がある<sup>94</sup>。瓦当部分に五輪塔のような文様があり、空風輪(宝珠・請花)・火輪(笠)・水輪(塔身)の下に蓮華座が表現され、水輪には阿字(種子「ア」)が配される。

竹澤嘉範氏は、中央に梵字を配する剣頭文軒平瓦とのセット関係を指摘した上で、この瓦を、法華堂の本格造営が行われた建久六年(一一九五)に使用されたものと推測している<sup>95</sup>。また頼朝法華堂に葺かれた瓦は、良質な胎土から畿内で作成された可能性を指摘し、のちに同范の瓦として京都市太秦広隆寺の旧地域北東部と推定される常盤仲ノ町遺跡出土品を挙げた。

この常盤仲ノ町遺跡出土軒丸瓦は山崎信二氏によって同范でないことが証明されているが、同氏はこの瓦の類例を四つ挙げ、他の瓦の同范関係や類似性、変遷過程から、頼朝法華堂瓦を含めた五例が

京都産である可能性を指摘した<sup>96</sup>。さらに京都の法性寺殿で出土した軒平瓦との類似性も含め、山崎氏はこの瓦と源頼朝の関係を指摘する。すなわち法性寺殿は治承五年(一一八二)に焼失し、建久二年(一一九一)に頼朝が諸国に課して法性寺殿を再建していることから、その四年後となる建久六年(一一九五)に頼朝が持仏堂を造り替えているが、このとき法性寺殿所用瓦と同じ文様の瓦を指定して、京都から運ばせたと想定するのである。

この法華堂瓦の文様は、五輪塔文と表現されるが、空風輪・火輪・水輪以外に必要な地輪がなく、蓮華座が表現される点で五輪塔とは言えない。これは五輪塔と宝塔の違いが明確でないことから出た表現であり、造形物としての五輪塔初期の作例に多い事例である<sup>97</sup>。そもそも宝塔は金剛界大日如来の三昧耶形である。石造物では相輪・笠・塔身・基礎で構成される塔という認識が一般的であるが、原典の図像によると本来は基礎がなく、連座に直接乗せられる形を取るという<sup>98</sup>。対して胎藏界大日の三昧耶形が五輪塔であり、両者が大日象徴していることから、両者の塔名や造形に混同や未分化がみられたのである<sup>99</sup>。塔の種類がいずれにせよ、水輪(塔身)には阿字が記されることから、大日如来を奉る形であることは疑いない。瓦当文様の塔が宝塔だとすれば、上から宝珠・請花・笠・塔身・蓮華座となる。その塔を文様とする瓦を頼朝が用いたことは、泥塔同様、八万四千塔の意味があったのかもしれない。

## 小結



石塔以外の五輪塔例として水晶製塔、銅製塔、泥塔、木製塔、木製塔婆、瓦当文様を概観し、鎌倉における五輪塔の意味と導入時期を見てきた。鎌倉には頼朝入部以前から五輪塔を墓塔とする文化がすでに存在することが確認できるが、その後石造物が導入されるまでのおよそ一〇〇年間にも墓塔として用いられたのかは不明である。

これに対し、源頼朝は為政者として鎮護国家や慰霊鎮魂を象徴する造形物として五輪塔を用いた。その思想は実朝をはじめとした將軍に受け継がれ、それらは王権を象徴する行事となったが、実朝近習の波多野氏は実朝首塚の供養に五輪塔を用いた。木製塔であるものの石造五輪塔によく似た型式の塔は、鎌倉に石造物が導入される以前の墓塔を探る上で今後さらに検討すべきであろう。

他方、石造物と時期を同じくして水晶製塔、銅製塔が出現する。これには石造物と同様に南都律宗の影響が窺え、墓塔とともに舍利塔にも新しい流れが導入されたと解釈される。またそこには北京律や禪、浄土などの宗派間のつながりが見え隠れする。

なお、十三世紀後半ごろには使用されていた木製塔婆は、八幡宮出土木製塔婆のような墓塔ではなく、死者の罪穢れを洗い流す浄化の信仰に用いられた可能性があると説いた。滅罪もまた五輪塔がもつ特性であり、都市鎌倉には重用されていたのである。

## おわりに

ここまで鎌倉の五輪塔について既知の塔のほか新資料を多用しつ

つ、成立過程や変遷に検討を加えてきた。

十四世紀初頭に鎌倉に流入する安山岩製塔の型式は、極楽寺忍性塔によって定着し、多宝寺跡覚賢塔で関東の型式が成立する。その型式は小型塔などにも表れ、数量増加とともに変遷をたどる。凝灰岩製塔は安山岩製塔以前より鎌倉に存在していたようだが、影響を受けつつ独自の形態変遷をたどり、両者は別の石工のもと並存していったのである。

また、やぐらに施された浮彫塔には凶像と判断すべき塔もあるが、多くは石造物の系譜であり、一部の検討では判断は難しいものの、石造物の導入と同時期に浮彫塔も作成される。その後の変遷はスペースなどの問題で石造物の型式とは多少違った造形となるが、やぐらや都市の廃退と同様、十五世紀中ごろを境に石造五輪塔の変遷とは一線を画する浮彫塔が出現する。これが都市衰退の影響であると説いた。

鎌倉において五輪塔は頼朝入部以前より存在した文化であるが、源頼朝は為政者としての造寺・造塔行為と同じ意味で五輪塔を使用した。その文化が歴代將軍に受け継がれたことは、鎌倉時代後期に泥塔が出土することからもわかる。頼朝の王権行為は自身の持仏堂の瓦にも及んだが、あるいは五輪塔文様の瓦が葺かれた持仏堂が頼朝の死後法華堂となったことが、鎌倉の葬送に五輪塔が用いられることを許容し、促進させる一役を担っていたのかもしれない。

発展した都市内では罪を洗い流す五輪塔が各所で流されるなかで、石材を用いた墓塔の文化が鎌倉にもたらされる。その文化は定着し、

都市の拡大とともに造立数も増加の一途をたどる。同時に將軍家が信仰した舍利塔としての五輪塔はそのままに、墓塔・仏像納入の舍利塔文化として水晶や金属製品など新しい要素が加わる。それらの背景には南都律だけでなく、北京律や禪、浄土のつながりを感じ取れ、文化は鎌倉という都市を媒介として、関東各地へ広がっていくのである。

## 第一部第一章 補注

- 1 本間岳人 二〇〇八「五輪塔の地域的展開」『月間考古学ジャーナル』No.573 ニューサイエンス社、二〇〇九「関東地方における中世石造物（石材と石塔、関東型式について）」「中世における石材加工技術（安山岩製石造物の加工と分布）」国立歴史民俗博物館、二〇一〇「伊豆安山岩製五輪塔の研究」『石造文化財』3 石造文化財研究所
- 2 藪田 嘉一郎ほか 一九七五『五輪塔の起源』綜芸舎
- 3 内藤栄 二〇一〇『舍利荘嚴美術の研究』青史出版
- 4 和田謙寿 一九七七「五輪塔の成立発展を考える」『駒澤大学佛教学部論集』8 駒澤大学仏教学部
- 5 内藤前掲註3文献
- 6 赤星直忠 一九七七「凝灰岩製五輪塔について」『鎌倉』第二九号 鎌倉文化研究会、藤澤典彦 一九九三『五輪塔の研究―平成四年度調査概要報告―』元興寺文化財研究所
- 7 本間氏二〇一一前掲註1文献
- 8 山下浩之 二〇〇九「岩石学的検討による石材給源の推定（箱根火山の安山岩を例に）」『中世における石材加工技術（安山岩製石造物の加工と分布）』国立歴史民俗博物館
- 9 佐々木健策 二〇〇九「円礫加工にみる石材加工技術」『中世における石材加工技術（安山岩製石造物の加工と分布）』国立歴史民俗博物館
- 10 本間氏二〇一一前掲註1文献
- 11 日野一郎 一九五二「相模箱根の磨崖地蔵群と石塔類」『東京史談』第二〇巻第二号 東京史談会
- 12 川勝政太郎 一九六〇「関東形式宝篋印塔の成立」『鎌倉』第四号 鎌倉文化研究会
- 13 前田元重 一九七一「称名寺開山審海五輪塔について」『三浦古文化』第一〇号、一九七二「箱根宝篋印塔と大工前大和権守大蔵康氏」『金沢文庫研究紀要』九
- 14 川勝政太郎 一九七五「大蔵派石工と関連遺品」『史迹と美術』第四四九号
- 15 齊藤彦司 一九八二「石大工「心阿」と「信阿」について」『横須賀考古学会年報』第二四・二五号 横須賀考古学会
- 16 川勝政太郎 一九五七『日本石材工芸史』綜芸舎
- 17 桃崎祐輔 二〇〇〇「忍性の東国布教と叡尊諸大弟子の活動」『叡尊・忍性と律宗系集団』大和古中近研究会、山川均 二〇〇六『石造物が語る中世職能集団』山川出版社、二〇〇八『中世石造物の研究・石工・民衆・聖』日本史料研究会ほか。
- 18 桃崎祐輔 一九九七「往来する律僧―沿岸社会と勸進活動―」『中世の霞ヶ浦―沿岸社会の交流と展開』、桃崎氏前掲註16論文ほか。
- 19 極楽寺 一九七七『重要文化財 極楽寺忍性塔保存修理工事報告書』
- 20 浄光明寺 一九七六『重要文化財 浄光明寺五輪塔修理工事報告書』
- 21 鎌倉国宝館 一九七七『鎌倉の五輪塔』
- 22 村田浩ほか 一九九三『元箱根石仏・石塔群の調査』箱根町教育委員会
- 23 横浜市教育委員会 二〇〇二『称名寺の石塔』、本間氏二〇一一前掲註5論文

- 2 4 国宝館前掲註2 1 文献  
 2 5 国宝館前掲註2 1 文献  
 2 6 赤星直忠 一九七二「室町中期に於ける一葬法に就いて」『考古学雑誌』三三・四  
 2 7 鎌倉市教育委員会 一九七〇「文化財政のあゆみ」  
 2 8 国宝館前掲註2 1 文献  
 2 9 宮田 眞 二〇〇五「阿弥陀堂平場の発掘調査」『浄光明寺敷地絵図の研究』新人物往来社  
 3 0 鎌倉市教育研究所 一九七九『かまくら子ども風土記』  
 3 1 洪江二郎 一九六一「出土した常盤の石塔群」『金沢文庫研究』六九 神奈川県立金沢文庫  
 3 2 吉田智哉・宮坂淳一・井関文明 二〇〇八『円覚寺旧境内遺跡』かながわ考古学財団調査報告書 221  
 3 3 吉田智哉 二〇〇八「経文を刻む五輪塔」『神奈川考古』第四四号 神奈川考古同人会  
 3 4 本間氏二〇一一前掲註1 論文  
 3 5 国宝館前掲註2 1 文献  
 3 6 大三輪龍哉 二〇一〇「浄光明寺慈光院跡について」『考古学論究』第一三三号 立正大学考古学会  
 3 7 赤星直忠 一九五九「鎌倉の石造建造物」『鎌倉市史 考古篇』鎌倉市教委  
 3 8 鎌倉市教委 一九八七『鎌倉市文化財総合目録 建築物編』  
 3 9 大三輪龍哉 二〇〇六「中世東国における石製塔婆の研究」中世鎌倉の宝篋印塔と五輪塔を中心として」『考古学論究』第一一〇号 立正大学考古学会  
 4 0 古田土俊一 二〇〇六「数値的検討から見る鎌倉大型五輪塔」『文化財学雑誌』第二号 鶴見大学文化財学会  
 4 1 岩橋春樹氏の解説による。(前掲註2 1 文献)  
 4 2 川勝氏前掲註1 6 文献

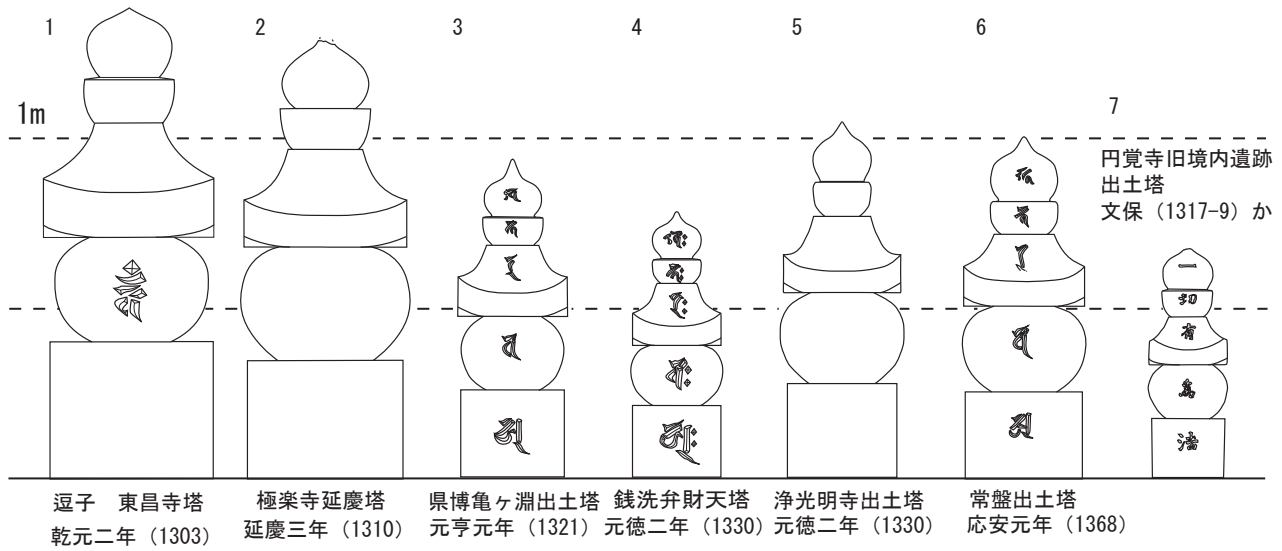
- 4 3 見上敬三・江藤哲人 一九八六「鎌倉市の地質」『鎌倉市文化財総合目録 地質・動物・植物篇』鎌倉市教委  
 4 4 山稜部の調査で極楽寺地区山上より元弘三年銘の地輪が出土している。(神奈川県教委・鎌倉市教委 二〇〇一『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査』)  
 4 5 赤星氏前掲註6 論文  
 4 6 古田土俊一 二〇〇九「石塔の調査」『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教委  
 4 7 松葉崇ほか 二〇一〇『松葉ヶ谷奥やぐら群』かながわ考古学財団調査報告 253  
 4 8 奥田直栄 一九六六『中世墳墓「やぐら」の調査』学習院大学輔仁会史学部  
 4 9 朽津信明 二〇〇三「鎌倉のやぐらで観察される装饰材料について」『保存科学』No. 22 東京文化財研究所  
 5 0 永井正憲・馬淵和雄・田代郁夫 一九八六『番場ヶ谷やぐら群発掘調査報告書』鎌倉市教委  
 5 1 小林義典 二〇〇二『上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書』上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団  
 5 2 国井洋子 一九九七「上野天神山石材の流通」『嵐山町博物誌』第五卷 嵐山町、同「中世東国における造塔・造仏用石材の産地とその供給圏」『歴史学研究』No. 702 青木書店、秋池武 二〇〇五『中世の石材流通』高志書院  
 5 3 本間氏二〇一一前掲註1 文献  
 5 4 関口欣也 一九八七「東漸寺五輪塔三基」『神奈川県文化財図鑑補遺編』神奈川県教委  
 5 5 大三輪龍彦 一九九二「やぐら」『鎌倉辞典』東京堂出版  
 5 6 田代郁夫 一九九〇「中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義」『昭和六三年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘

- 調査報告書』
- 57 松葉崇 二〇一〇「神奈川県内に於けるやぐらの出土遺物様相―陶磁器を中心として―」『神奈川考古』四四 神奈川考古同人会、二〇一二「神奈川県内に於けるやぐらの出土遺物様相(2)―陶磁器の年代と出土量―」『神奈川考古』四八 神奈川考古同人会
- 58 出土遺物の年代観の違いで提示される。(馬淵和雄 二〇〇八「上行寺東遺跡やぐら群の成立と展開」『神奈川地域史研究』二六号 神奈川地域史研究会)、ほか、少なからず例は報告される。(かながわ考古学財団中世研究プロジェクトチーム 二〇〇三「神奈川県内の「やぐら」集成」『かながわの考古学』八)
- 59 鎌倉市教育委員会 二〇〇七『史跡覚園寺境内保存管理計画書』
- 60 赤星直忠 一九三八「鎌倉「百人やぐら」」『神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第七集 神奈川県
- 61 鎌倉市教育委員会 二〇一五『西瓜ヶ谷やぐら群調査報告書』
- 62 富永樹之 二〇一三年「鎌倉市域における中世の火葬墓、土葬墓―やぐら、砂丘地埋葬以外の様相―」『青山考古』第二一九号
- 青山考古学会、松葉崇 二〇一六「中世鎌倉の葬送―海浜地域を中心として―」『考古学から見る中世都市鎌倉の海浜地域』公益財団法人かながわ考古学財団
- 63 松葉氏前掲註57文献
- 64 鈴木庸一郎 二〇〇九「「谷」のやぐら、「山」のやぐら」神奈川考古』第四五号 神奈川考古同人会
- 65 大三輪龍彦 一九八七『鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査報告書』  
鶴岡文庫建設に伴う鶴岡八幡宮二十五坊の調査』鎌倉市鶴岡八幡宮
- 66 宗臺秀明 二〇〇五「田覚寺門前遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21-2』鎌倉市教育委員会
- 67 河田貞 一九八九『日本の美術9 仏舍利と経の荘嚴』至文堂
- 68 汐見一夫 二〇〇七「極楽寺中心伽藍」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23-2』鎌倉市教育委員会
- 69 岡本智子 二〇〇六「初期宝篋印塔と律宗」『戒律文化』四 戒律文化研究会
- 70 本間岳人 二〇一二「鎌倉大巧寺の水晶五輪塔」『立正考古』五〇号
- 71 大三輪龍彦 一九七一「図版解説」『鎌倉の中世出土遺品 鎌倉国宝館図録第一八集』鎌倉国宝館
- 72 大三輪氏前掲註71文献、大三輪龍彦 一九七五「開山・大燈塔及びその納置品山内出土遺品」『覚園寺』覚園寺
- 73 大三輪氏前掲註71文献
- 74 齋木秀雄 一九八三「伝藤内定員邸跡出土の銅製小型五輪塔」『鎌倉考古』No.17 鎌倉考古学研究所
- 75 河野真知郎 一九八〇「雪ノ下南御門遺跡の第二期調査」『鎌倉考古No.2』鎌倉考古学研究所、一九八三「南御門遺跡出土の泥塔(土製五輪塔)」『鎌倉考古No.17』鎌倉考古学研究所
- 76 菊川政英 二〇〇八『今小路西遺跡(No.2011) 発掘調査報告書』株式会社齊藤建設
- 77 赤星直忠 一九八〇『中世考古学の研究』有隣堂
- 78 西山美香 二〇〇六「鎌倉將軍の八万四千塔供養と育王山信仰」『金沢文庫研究 316号』県立金沢文庫
- 79 河野氏一九八三前掲註75文献
- 80 国宝館前掲註21文献
- 81 齋木秀雄 一九九三『佐助ヶ谷遺跡』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
- 82 中田英ほか 一九八六『千葉地東遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター
- 83 鎌倉国宝館前掲註21文献
- 84 秦野市教育委員会 一九九〇『秦野市史 通史編1』
- 85 納富常天 一九九五「舍利相伝縁起・鎌倉を中心とした舍利信

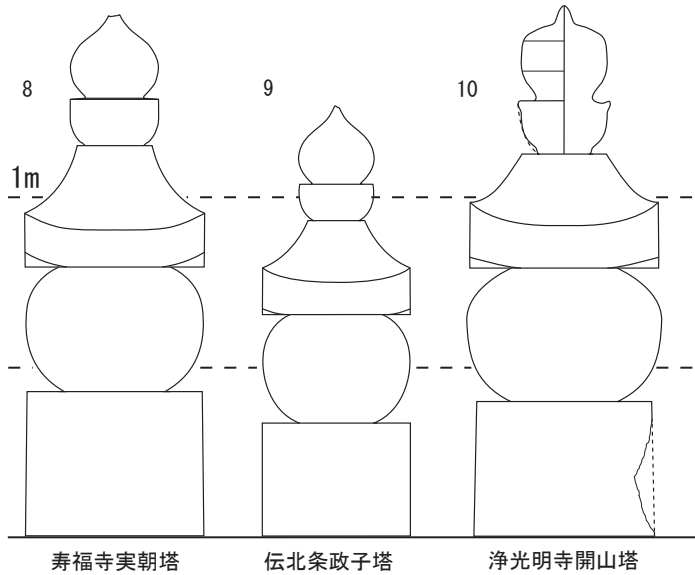
- 仰・」『金沢文庫資料の研究・稀覯資料編・』、渡部泰明 二〇〇五  
 「八大龍王雨やめたまへ・実朝の音」『文学』六巻四号 岩波書  
 店、西山氏前掲71文献
- <sup>86</sup> 山本栄吾 一九七〇「高野山鎌倉期建築遺構私論」『密教文  
 化』No.30 密教研究会
- <sup>87</sup> 吉田章一郎 一九八五『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書（鎌倉  
 国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査）』鶴岡八幡宮境内発掘調査団・  
 鎌倉市教委
- <sup>88</sup> 齋木秀雄 一九九九『北条時房・顕時邸跡』雪ノ下一丁目  
 273 番イ地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団
- <sup>89</sup> 福田誠・原廣志 二〇〇二『永福寺跡・遺物編・考察編・』鎌  
 倉市教委
- <sup>90</sup> 齋木秀雄 二〇〇一『由比ヶ浜南遺跡』由比ヶ浜南遺跡発掘調  
 査団

- <sup>91</sup> 立原秀明 二〇一〇「野々江本江寺遺跡出土の木製板碑・笠塔  
 婆」『月間考古学ジャーナル』No.602 ニューサイエンス社
- <sup>92</sup> 五来重 一九九二『葬と供養』東方出版
- <sup>93</sup> 五来氏前掲92文献
- <sup>94</sup> 赤星直忠 一九三三「鎌倉法華堂址に就いての疑」『歴史地理』  
 六一・一、「再び鎌倉法華堂址に就いての疑」『歴史地理』六一・一  
<sup>95</sup> 竹澤嘉範 一九九〇「神奈川の中世瓦」『神奈川の中世瓦集成図  
 録』横須賀考古学会
- <sup>96</sup> 山崎信二 二〇〇〇『中世瓦の研究』雄山閣
- <sup>97</sup> 佐々木利三 一九七五「五輪塔の成立」『五輪塔の起源』綜芸舎
- <sup>98</sup> 山川均 二〇一五『石塔造立』吉川弘文館
- <sup>99</sup> 佐々木氏前掲註90文献、小林義孝 二〇〇二「五輪石塔の造  
 立目的」『中近世石造物と社会』帝京大学山梨文化財研究所研究報  
 告一〇〇

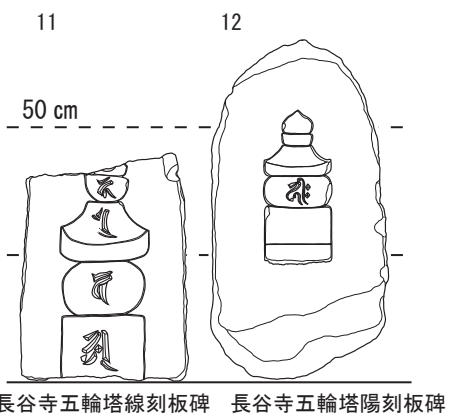
安山岩製塔 在銘



扇ガ谷地域安山岩製五輪塔 無銘



安山岩製 板碑



安山岩製塔 無銘

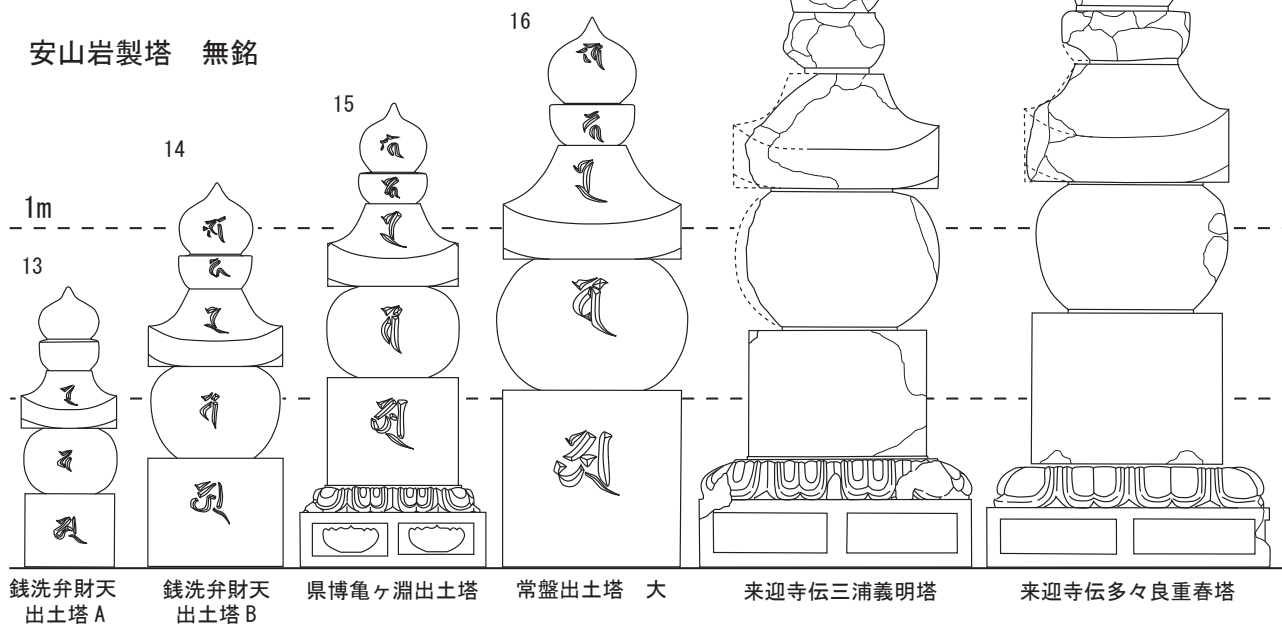


図1 鎌倉の安山岩製五輪塔

三浦層群凝灰岩使用例

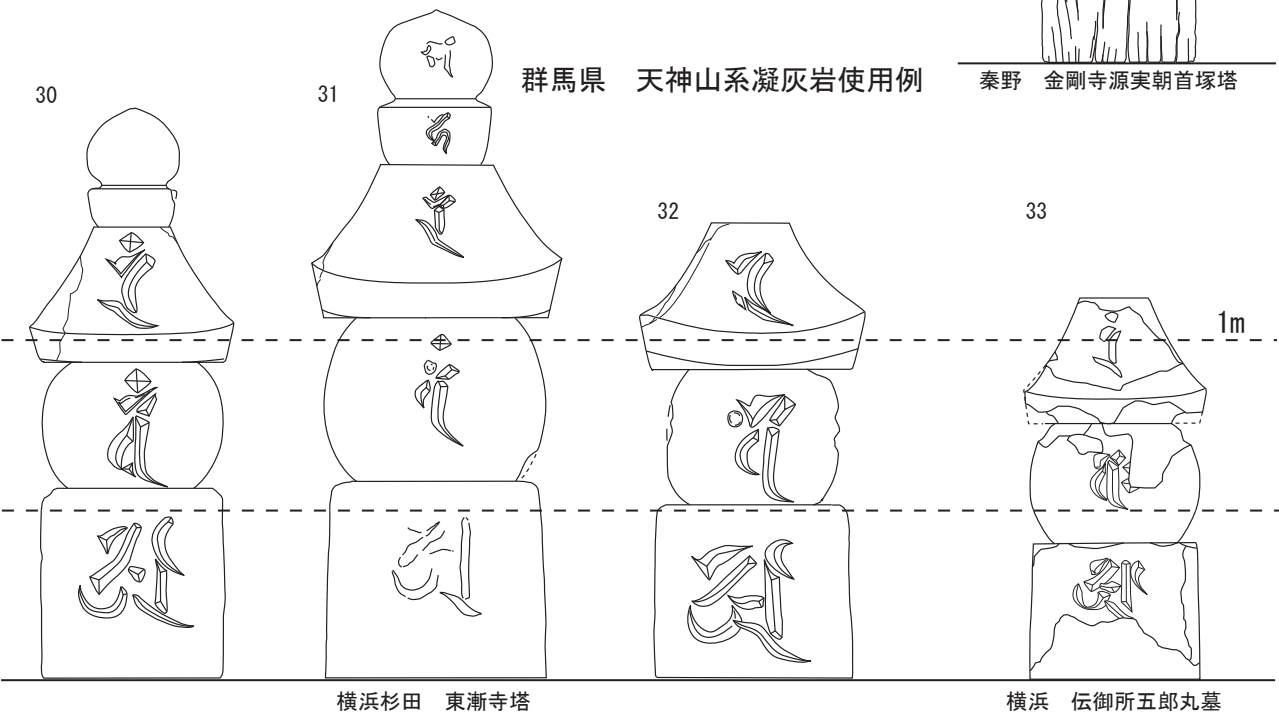
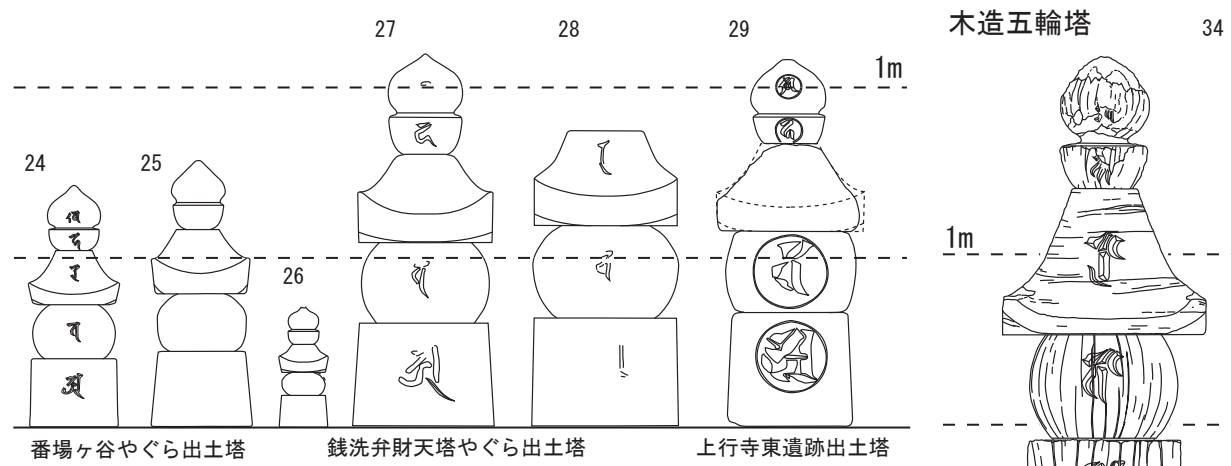
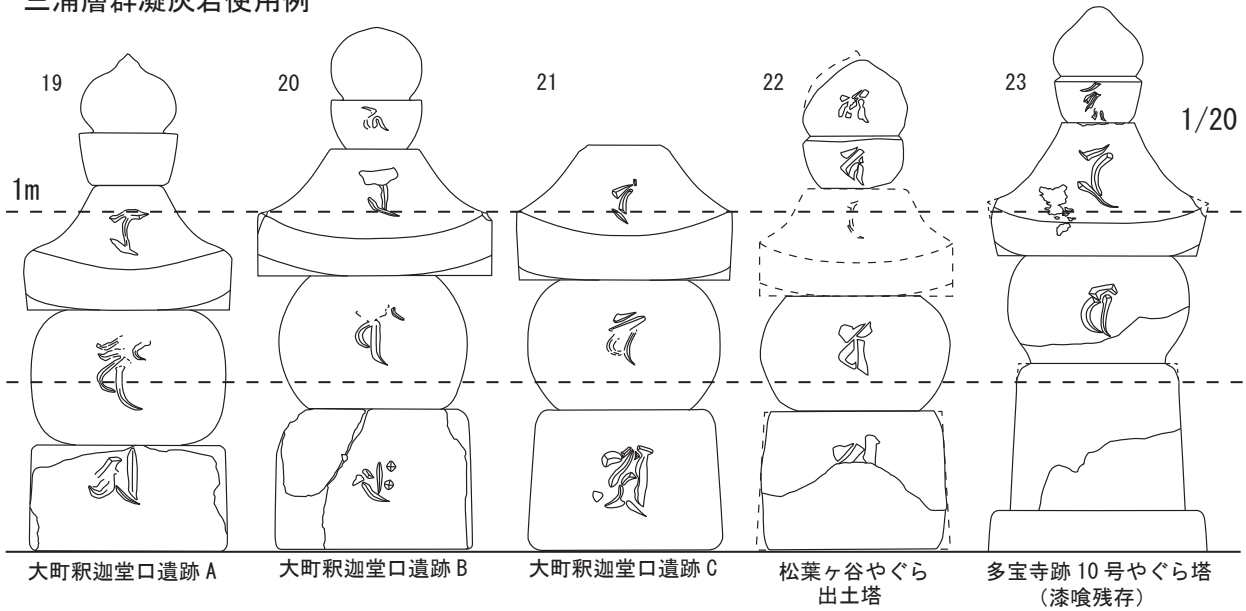


図2 鎌倉の凝灰岩製五輪塔



図3 やぐら壁面浮彫・線刻の五輪塔

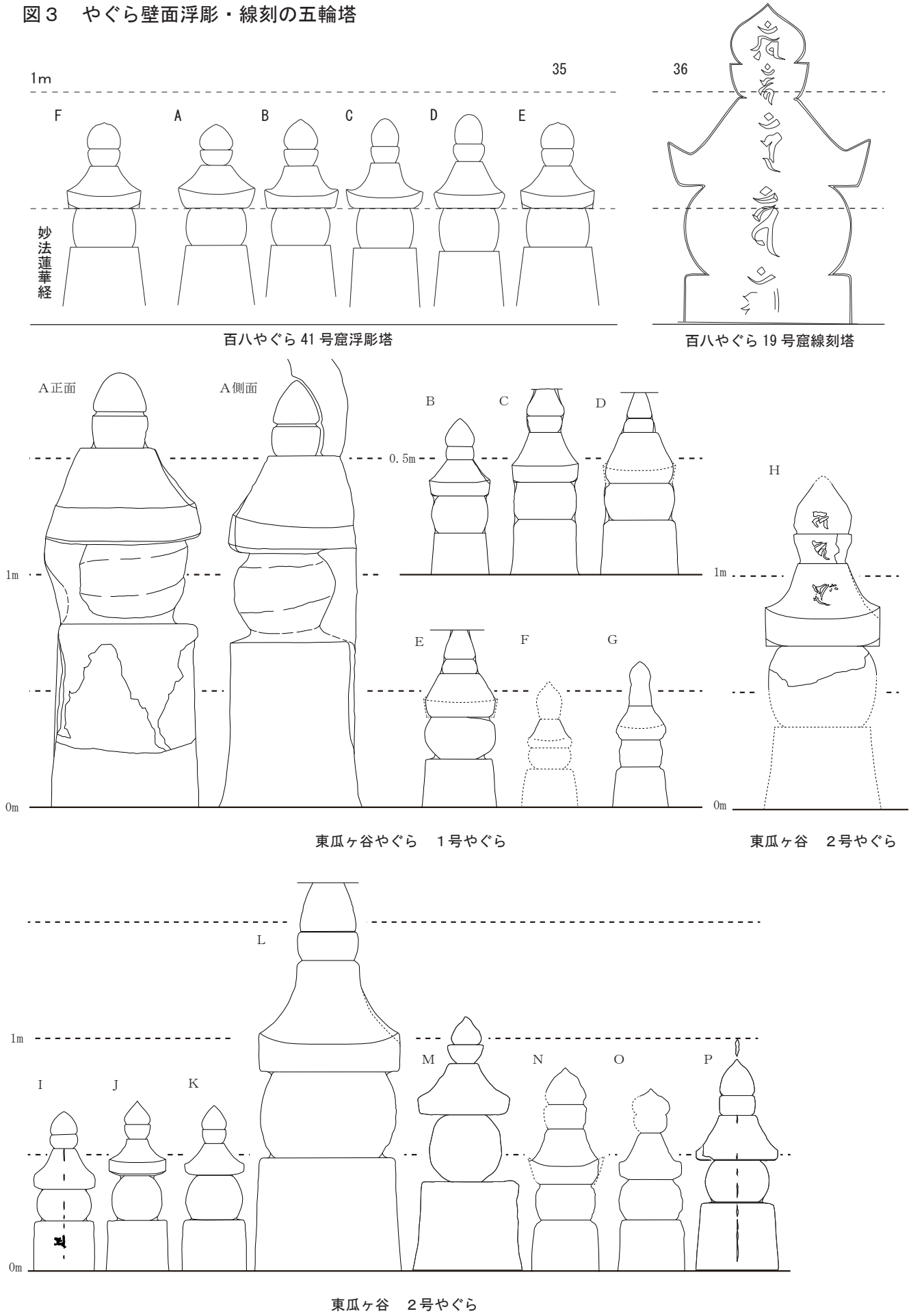


図4 やぐら壁面浮彫・線刻の五輪塔2

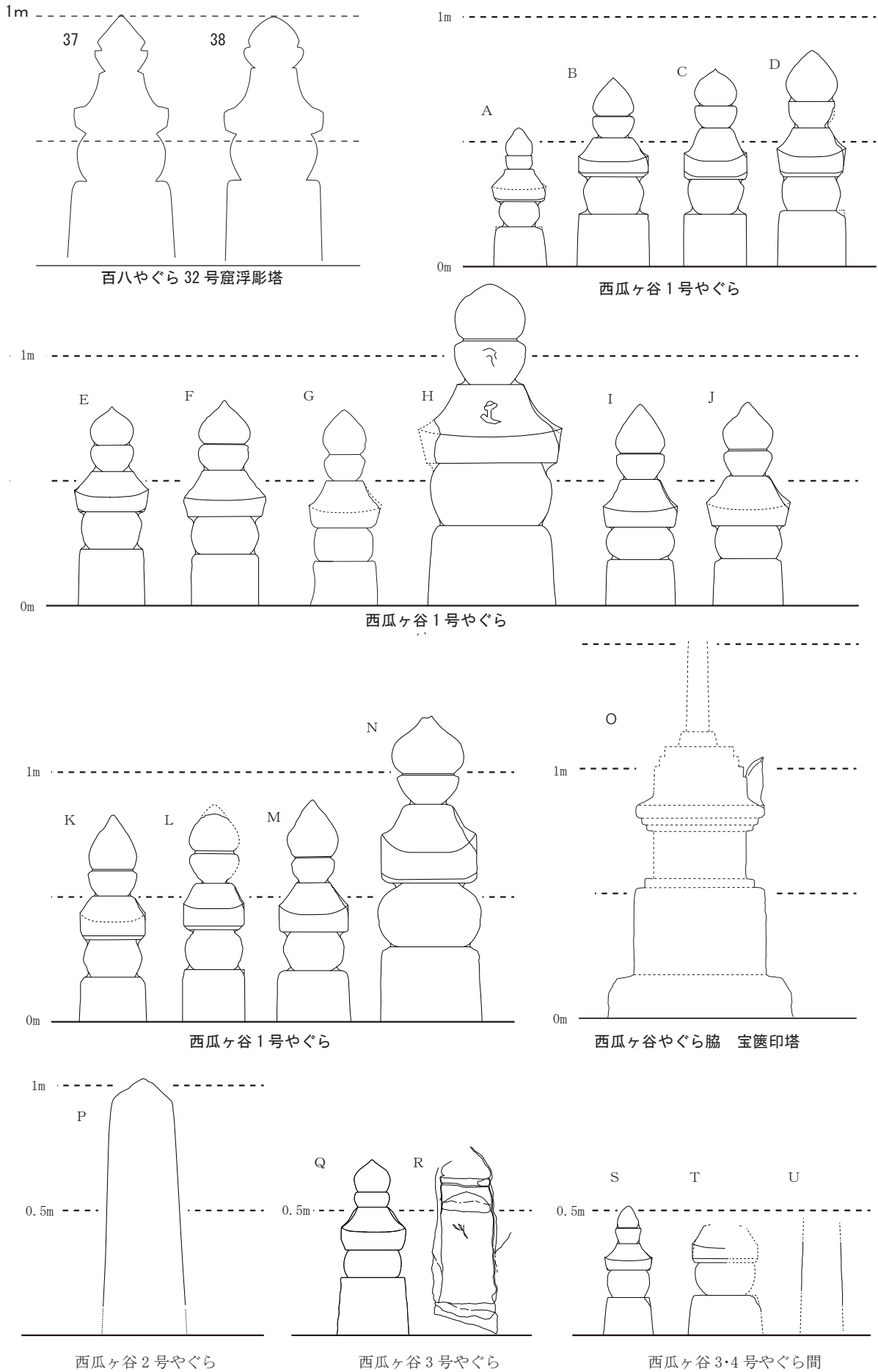




図5 鎌倉の水晶製・金銅製五輪塔

図6 鎌倉出土の水晶製塔・金銅製塔・土製塔

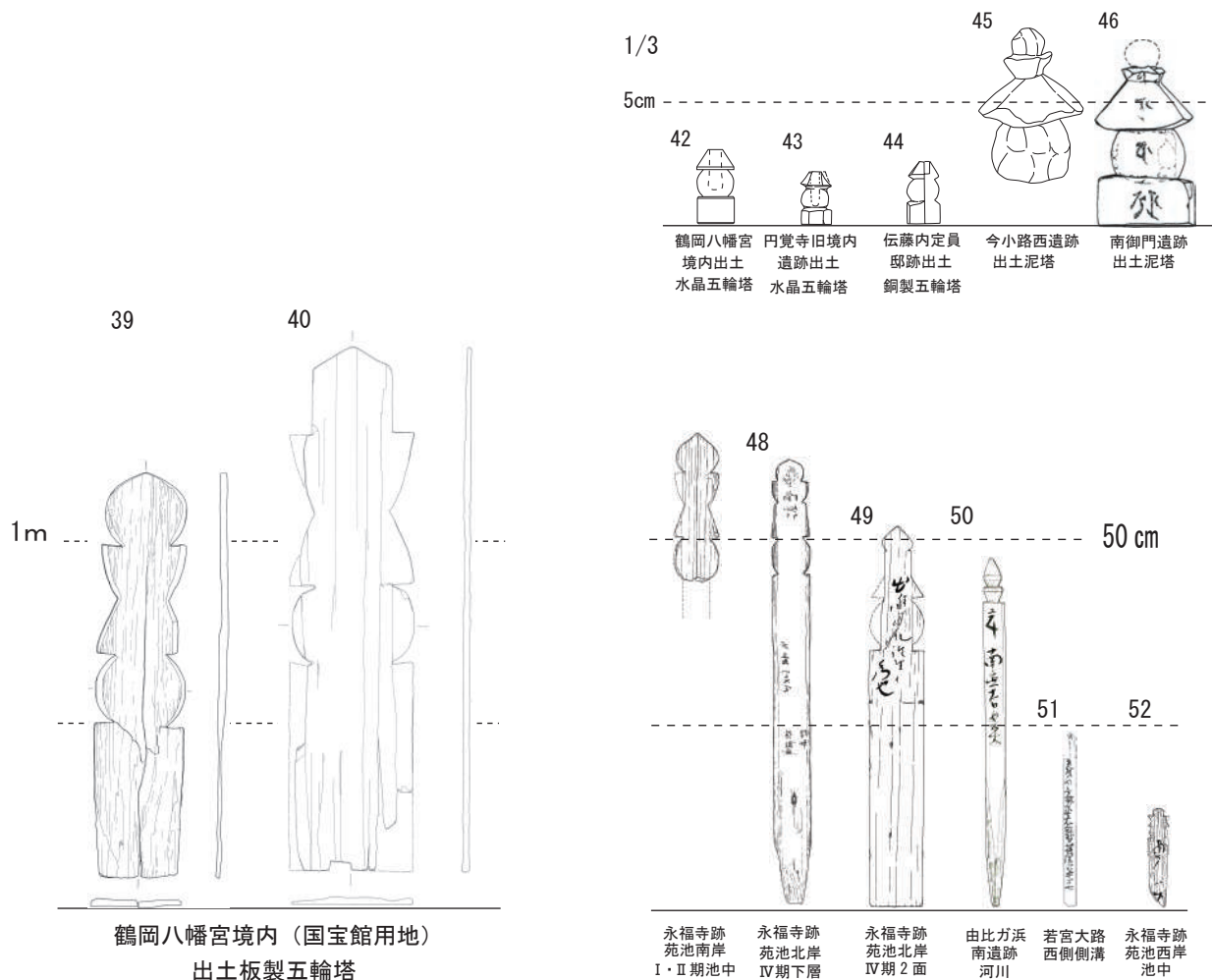


図7 鎌倉の出土木製塔婆



図8 高野山奥之院 流れ灌頂 (大三輪氏提供)



図9 「いたか」の流れ灌頂  
(『七十一番職人歌合』より)

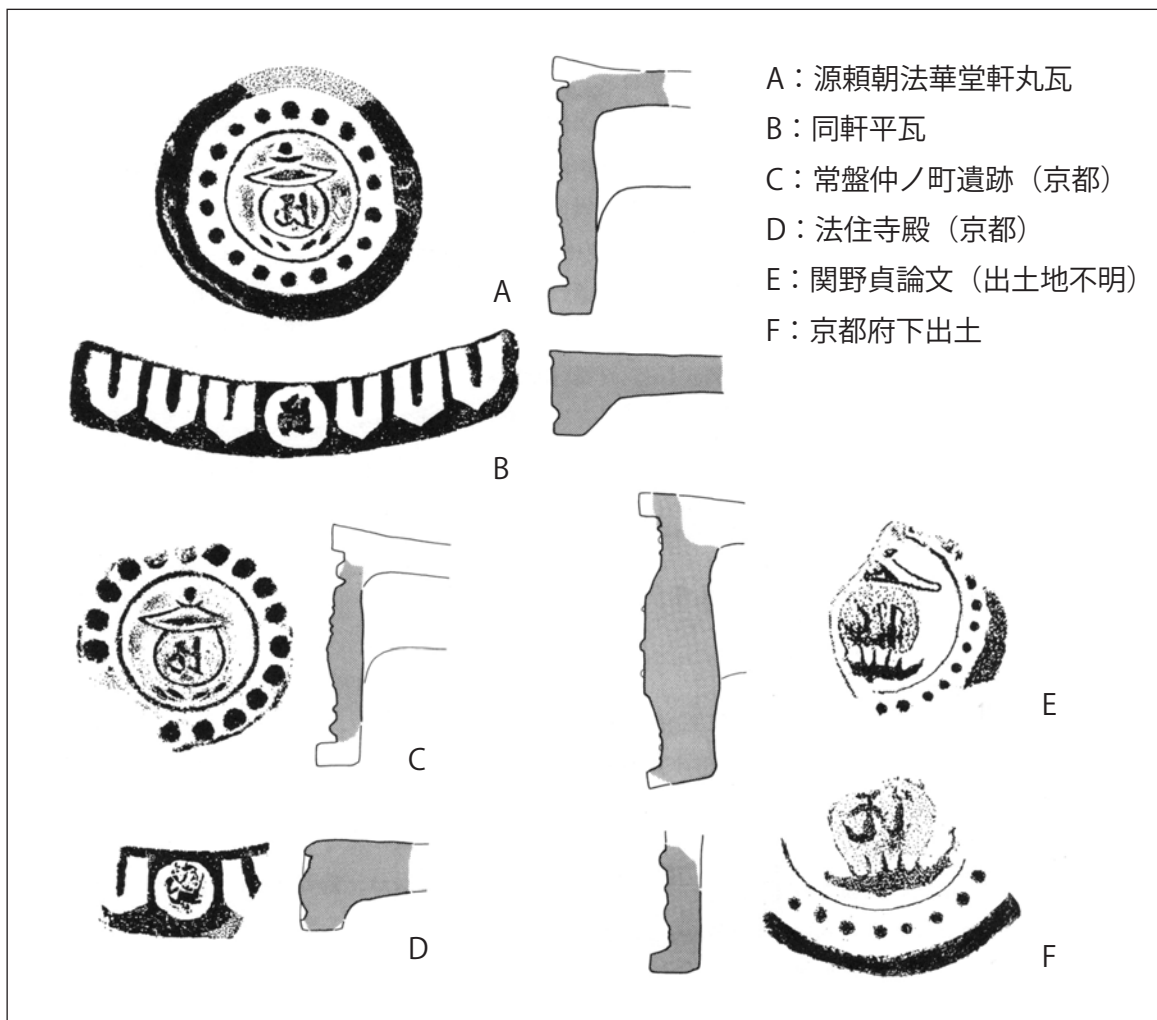


図10 鎌倉の瓦当文様と類例

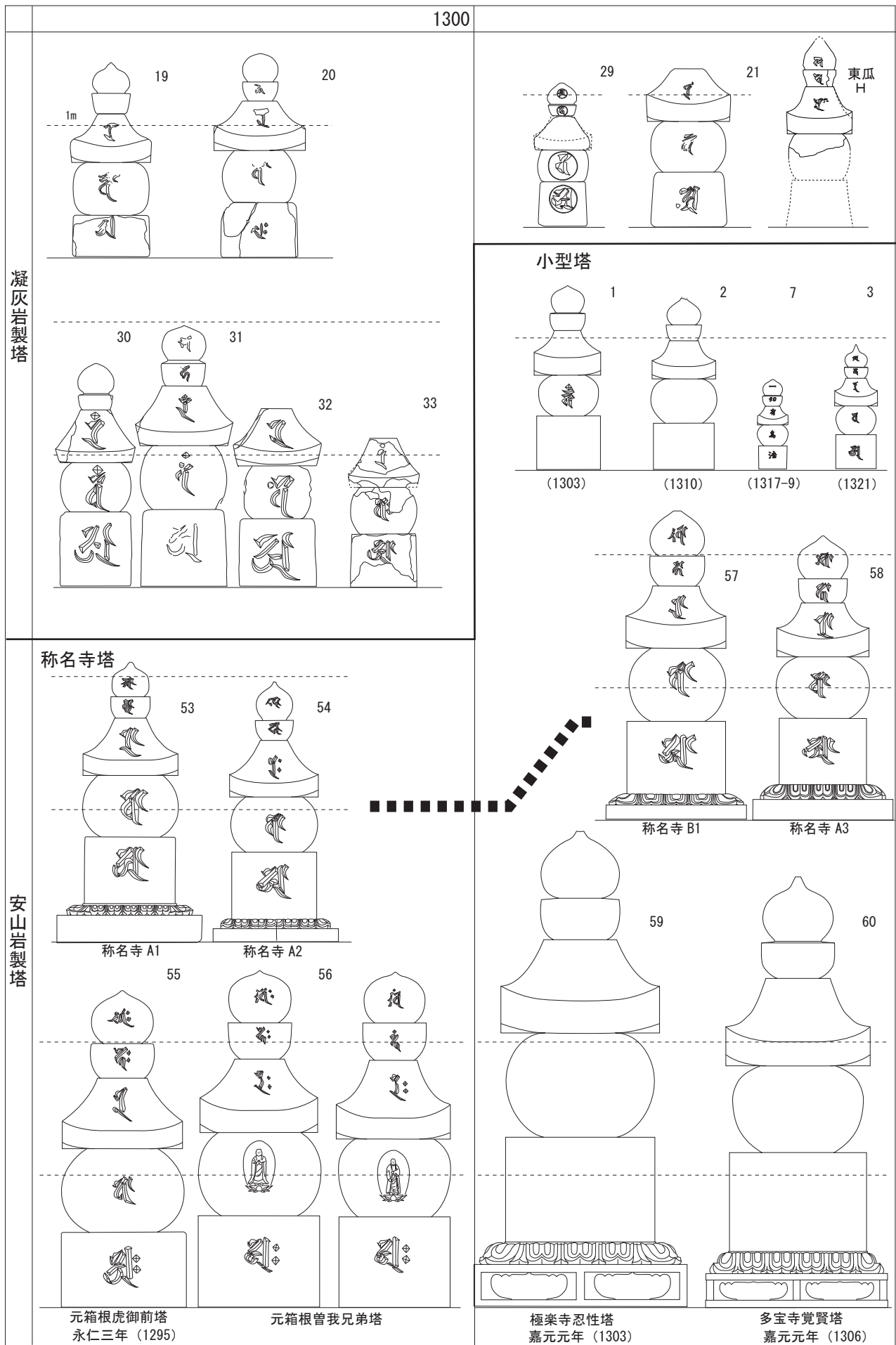


図 1 1-1 鎌倉の五輪塔の変遷

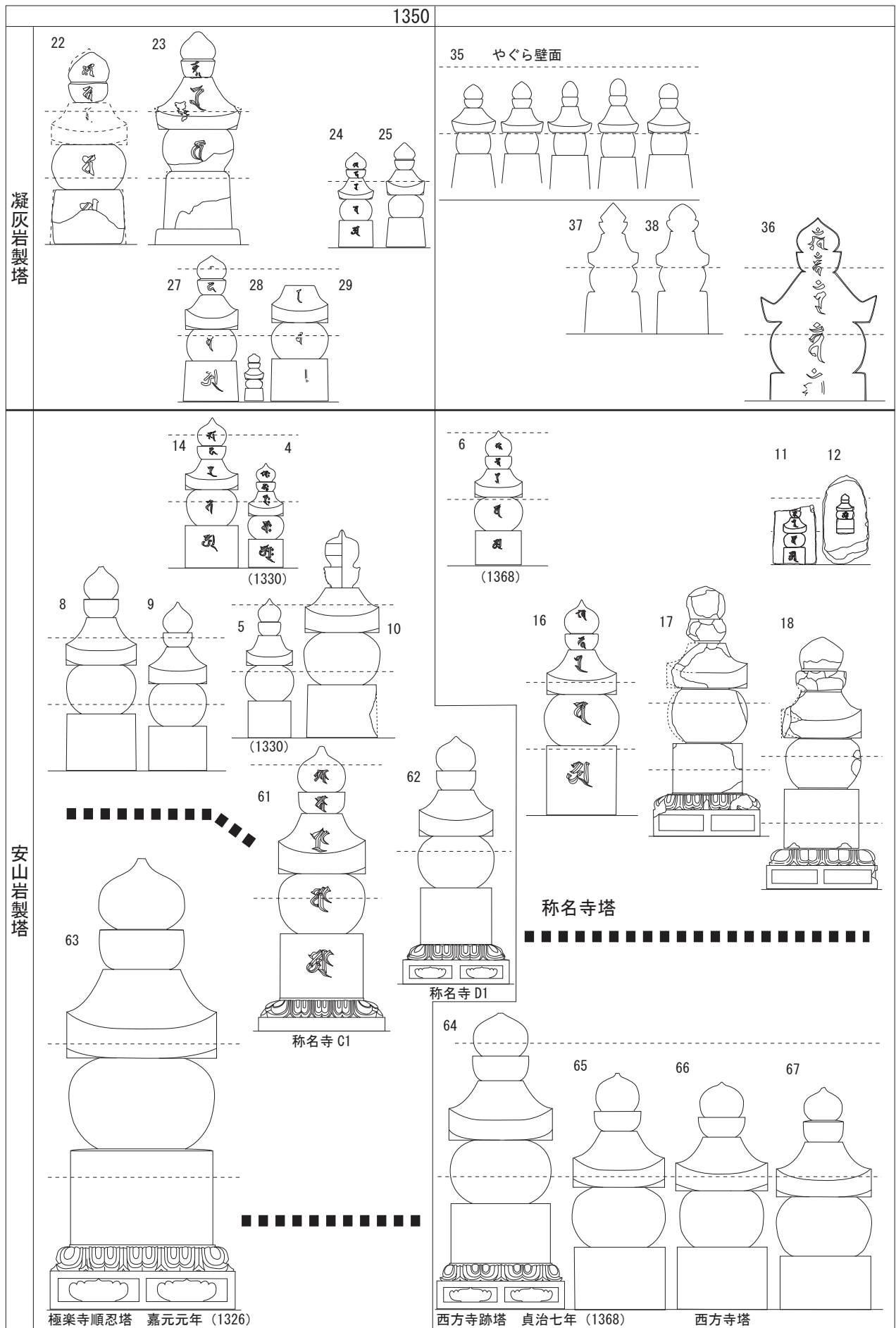


図 1 1-2 鎌倉の五輪塔の変遷

## 第二章 鎌倉最古の無縫塔

### 建長寺開山塔の造立背景

#### はじめに

葬送の意味を強く有する石造物のひとつに無縫塔がある。塔の頂部に置かれた塔身に縫い目が無いことからこの名があり、塔身が卵形であることから卵塔とも呼称される。基礎・竿・中台・請花・塔身という構成の重制と、基礎の上に直接塔身を据える単制に分類される。無縫塔の原型は不明な点が多いものの、中国の唐代ごろには成立していたようで、日本へは鎌倉時代に伝えられた。主として僧侶の墓塔として用いられる塔である。日本へ伝わった無縫塔の祖形と考えられている塔に、中国浙江省天童寺第十六代住持宏智正覚（一〇九一・一一五七）塔があり、日本における最古の作例、京都府泉涌寺開山俊仍（一一六六・一二二七）の墓塔にも中国の作風が大きく反映されていることなどから、日本で発生した石造物の五輪塔とは違い、既に中国で使用されていた石造物が日本にもたらされたとして理解されている<sup>1</sup>。

この無縫塔は、他の石造物にくらべあまり研究が進んでいるとは言えない。その理由には高僧の墓塔という性格から寺院による管理が厳重であったことと、幸運にも災害等による被害が少なかったことなどがある。それでも鎌倉の無縫塔は、研究黎明期からすでに注

目を集める存在であった<sup>2</sup>。

鎌倉における無縫塔は数が限られるものの、建長寺や覺園寺、雲頂庵などで中世の作例が確認されている<sup>3</sup>。なかでも建長寺の開山塔である蘭溪道隆の墓塔は、無銘ながら東日本では最も古い無縫塔との評価がなされ<sup>4</sup>、その後の東日本の無縫塔に大きな影響を与えたという<sup>5</sup>。しかし当時の美術的様式論から見れば蘭溪道隆の没年と符合せず、後世に作成されたという説さえあり、一定の見解が示されていない現状がある。

近年の石造物研究は、考古学的視点から全国的な資料集成や地方ごとの研究が進み、より緻密な年代推定が提示されるなど、多方面に渡って進展している。また最近では中国へ赴いての石造物調査が実施された影響から、起源を中国に求める日本の無縫塔研究も新たな展開を見せはじめた。本稿では、そうした近年の成果をもとに考古学的な石造物研究の見地からあらためて、鎌倉の無縫塔を検証してみた<sup>6</sup>と考える。とくに最古例として東日本の祖形となった建長寺開山塔に注目して論を進め、不明瞭な造立年代を再検討するとともに、仏教史の転換点ともなった中国僧蘭溪道隆の周辺と、墓塔造立の背景にまで迫る。中世の葬送の一端と宗派間の交流を明らかにしていきたい。

#### 一、建長寺開山塔の考古学的見地

建長寺開山蘭溪道隆の墓塔は、塔所である西来庵に所在する。専

門道場としても用いられる神聖な場であるため、普段より一般の拝観はできないが、蘭溪道隆の墓塔は開山堂の奥に位置する石段を上った先に鎮座する（以下、建長寺開山塔と称する）。

蘭溪道隆は、嘉定六年（一二二三）に南宋西蜀（四川省）に生まれた。成都の大慈寺で得度し、無準師範・癡絶道冲・北礪居簡に参じ、ついで無明慧性より法を嗣いだ人物である。寛元四年（一二四六）門弟と商船に乗じて博多に着岸し、入宋経験があり親交のあった京都泉涌寺の月翁智鏡を頼って上洛、泉涌寺来迎院に止宿した。のち鎌倉へと下向し北条時頼の招きで常楽寺に住したが、建長五年（一二五三）に日本初の中国風禅宗寺院となる建長寺が創建され、これに移る。住持すること十三年、一旦は建長寺を離れるが、再び建長寺、寿福寺に住持して弘安元年（一二七八）七月に示寂した。翌弘安二年（一二七九）の一周忌に舍利容器を納めた塔が安奉されたことが伝えられている<sup>7</sup>。

墓塔となる建長寺開山塔は、総高一・二、四cmの伊豆箱根系安山岩製で、下から基礎（基台、脚台、反花）、竿、中台、請花、塔身によって形成される重制無縫塔の形式をとる（図1右）。塔身以外を平面六角形で表現し、基礎下部や竿の側面に輪郭を刻出する点に、宝篋印塔という関東形式と同種の表現がみられる。基礎の上部には合計一二弁の複弁反花を配し、その下部側面に持ち送り式の脚部、さらに下部側面の輪郭内に蝙蝠文様のような一風変わった格狭間を配する点が特徴的である。中台は下端を線形とし、厚みのある二段の単弁をあしらった請花は外側に開き、その中には花托を表現した縦

の線刻が刻まれる。塔の主体部となる塔身は縦四十七・〇cm、横四十六・一cmで最大径は上部に置かれる。総合的に見て、非常に細やかで丁寧な造作が施された塔であるといえよう。

先述の通り、無縫塔は祖形を中国にまで求めることができる。古例として中国浙江省天童寺第十六代住持宏智正覚（一〇九一・一一五七）塔がわが国で唯一知られる中国無縫塔であったが、文化大革命のおり行方不明になってしまった（図15）。しかしながら、近年精力的に行われている中国石造物調査では、阿育王寺に宋代の無縫塔の一部残欠が残存しているなどの報告もあり、資料は今後も増加していくと見られる<sup>8</sup>。

一方、日本における最古の作例は京都府泉涌寺開山俊苧（一一六六・一二二七）の墓塔である。総高一五九・三cm。基礎（基台、脚台、反花）、竿、中台、請花、塔身によって構成される平面八角形の重制無縫塔である（図1左）。俊苧は建久一〇年（一一九九）に入宋し、在宋一三年の間に律・天台・禅のほか浄土を研鑽した人物で、帰国後、建仁寺や崇福寺と移り、北京律の拠点となる泉涌寺開山となった。この無縫塔は中国の影響を多大に受けており、雲文の基台や如意頭状の持ち送り式の脚台を有し、反花が素弁で表現される点などに顕著にあらわれる。なお石材は凝灰岩で俊苧の出生地となる肥後国の所産である可能性が高いという<sup>1</sup>。泉涌寺開山廟所には、開山塔を中心に歴代住持の無縫塔が並び、年代差を感じさせつつ、それぞれが開山塔に影響された特徴を示している。

この影響は京都に留まらず、大略的に言って西日本の無縫塔は、



反花座は複弁となるものの、平面八角形で竽に開蓮華を半肉彫りする点などに泉涌寺開山塔と共通する部分が散見される。これに対し、東日本の無縫塔は平面六角形で竽部や基礎に輪郭を配するなどの特徴を有し、これらに影響を与えたのが建長寺開山塔であったと見られている<sup>11</sup>。西と東の基準になる両塔はどちらも重制無縫塔という点では共通しているが、持ち送り式の脚台以外に細部を含めた共通性は見いだせず、造立年が後になるといっても建長寺塔が泉涌寺塔に影響を受けた可能性は低いといえよう。

なお、資料は少ないながらも示されている無縫塔年代変遷で、最も重要視されているのが塔身の形状である<sup>12</sup>。浙江省天童寺塔や泉涌寺開山塔のように最大径と下端部幅の差が少なく、半円様のものが古相とされ、差が大きくなるにつれ後世の作例と解釈される。建長寺開山塔の塔身は最大径に対し下端部が非常に窄まった形状であり、これが年代推定を下げざるを得ない要因となっている。

### 1. 鎌倉の中世石造物のなかの建長寺開山塔

鎌倉に石造物文化が流入し、定着するまでの経緯は第一章で述べたとおりである。およそ十三世紀後半ごろから流入されはじめ、十四世紀初頭をもって定着するといった考えが定説となっており、鎌倉周辺地域で最古の銘文を有する安山岩製石造物は逗子神武寺の石造弥勒菩薩像（正応三年、一二九〇）、鎌倉の中では、九品寺の所蔵する薬師如来像（永仁四年、一二九六）が最古となる<sup>13</sup>。

建長寺現存の無縫塔が蘭溪道隆の一周忌となる弘安二年（一二七

九）の造立だとするならば、本塔は他の例に先行する鎌倉周辺域最古期の安山岩製石造物ということになる。またそれならば鎌倉に石造物文化をもたらした宗教背景も考えを改めねばならない。定説では西大寺を中心とする南都律の東国への教線拡大に際して、渡来系技術集団が随行し、鎌倉へ定着すると説かれてきた<sup>14</sup>。近年ではここに京都泉涌寺を中心とする北京律も関係することが指摘されているが<sup>15</sup>、導入初期に造塔が行われていたとすれば、文化の流入に禅宗の関与も検討する必要がある。以下、造立年代の再検討を行いたい。

### 2. 鎌倉の中世無縫塔と反花座の検討

では、現存する建長寺開山塔の製作年代を検討する材料として、まずは鎌倉に現存する無縫塔との比較を試みる。古相を示す無縫塔として雲頂庵世代墓地塔と覚園寺歴代墓地塔が著名である。

雲頂庵は現在臨濟宗円覚寺の塔頭であるが、当初は十刹の一つ長勝寺の開山であり蘭溪道隆の直弟子でもある空山円印の塔所、開山塔として造営された。上杉重能の花押を持つ円覚寺境内絵図の左下方に「長勝寺」とあり、その上方に「塔」とあるのがこれを示す<sup>16</sup>。同寺の廃絶とともに衰退したのち長尾忠景が中興し、現在に至る。世代墓地内、中央の開山塔を挟む形で向かって右の三基、左の一基が古相を示している。

また覚園寺は鷲峰山真言院覚園寺と号する真言宗泉涌寺派の寺院である。北条義時の建立した大倉薬師堂を前身とすると伝えられ、

永仁四年（一二九六）智海心慧を開山に寺としてあらためたという<sup>17</sup>。境内奥に位置する歴代住職の墓地には開山塔および覚園寺二世である大燈源智の墓塔となる巨大な宝篋印塔が立ち、これを取り囲むように塔が並ぶ。取り囲む塔は全部で三九基を数え、塔種もさまざまだが、宝篋印塔の背面に並ぶ十四基の無縫塔の一群が古手の様相を示す。一部には銘文も記されており、明徳三年（一二九二）、応永三十四年（一四二七）文政二年（一八一九）の年号は読み取れるようである<sup>18</sup>。

雲頂庵歴代塔は鎌倉周辺地域でも特に古相を示す作例であるが、全体を建長寺開山塔と比較すると形骸化が進行するなどの様相が看取され、年代はある程度下つてからの造立と見ねばならない。また覚園寺塔はわずかながら建長寺開山塔に近い年代と見える部材も存在するが、永享元年（一四二九）以降に作成されたと考えられる「境内図」（原本は焼失）では、現在と別の場所に歴代墓が描かれているほか、大正一二年の関東大震災での倒壊の後、当時の住持によって積み直された経緯がある<sup>19</sup>。現在の状況を見ても、本来の組み合わせを見出すことは難しく、比較対象として使用するには危険が伴う。しかしながら、雲頂庵塔、覚園寺塔とともに塔身のみを比べれば、建長寺開山塔に比べ古手の様相を示す塔も散見される点は注目すべきである。これは地方色という見方もあろうが、建長寺開山塔の塔身が年代に対し特異な型式であることを再認識させる。

では、塔身以外の部材の年代はどうであろうか。塔種を問わず、造立年代の差が顕著に表れる部材に反花座がある。本間岳人氏によれば

鎌倉近隣の石造物の中で最も古い反花座は、横浜称名寺に所在する北条実時墓所の正面向かって左端の五輪塔二基であるという<sup>20</sup>。この二基の反花座の背は低く彫り出しの表現にメリハリはないが、彫りが浅いながらも造りは丁寧で、一面に五弁もの複弁を彫り出す（図2）。例えるなら繰形座を理想とするような、ゆつたりとした傾斜を生かした造形と言えらるだろう。二基の年代差は高さ掘りの深さに表れており、本間氏は古手の塔が実時の没年となる建治二年（一二七六）の造塔である可能性を提示している。

一方で鎌倉の石造物の基準とも言える極楽寺忍性塔（一二〇三年）（図3）や安養院宝篋印塔（一二〇八年）（図4）の反花座になると、メリハリのある彫りの深い造形となり、表現の豊かさに呼応してか塔に対する反花座の高さも高くなる。複弁として蓮弁内に表される子葉も膨らみを増し、傾斜がきついというよりは、縦に掘り込まれた子葉と横に伸びた蓮弁の反りによって構成されると言っても過言ではないだろう。中世鎌倉における造形としての反花座はこれらの塔をもって完成したと見える。これより後となる時代の反花座は形式化し、あるいは形が崩れ近世へとつながっていく。

それらをふまえ建長寺開山塔の反花座を見ると、平面六角形であるため他の作例との比較は難しいかもしれないが、彫りはそれなりに深く、メリハリもあるにも関わらず、斜めの傾斜を生かした造形が見て取れる。これは称名寺二基の反花座に比べて時代が下るものの表現の影響が未だ残ることを示している。また忍性塔、安養院塔などのようにエッジの効いた力強い表現が見られないことは、十四

世紀初頭に造立される塔に先行するとも言える。なお、前述した塔身以外の部材は反花座と同じ造作と見て違和感はない。以上のことから考えれば、建長寺開山塔の造立年代は蘭溪道隆の一周忌となる弘安二年（一二七九）に造立された塔であると見ても問題はないだろう。年代に疑問を抱かせる要因は塔身の一点にあるようである。大三輪龍哉氏も同様の見解を述べているが、この塔身が後補である可能性はないだろうか<sup>21</sup>。本塔は何らかの事情により損壊、または移設され、塔身のみが新たに設置されたとは考えれば、すべての辻褃が合うように感じられる。

この結論は今後も検討する必要があるが、造立が弘安二年ならば、さまざまな議論に一石を投じることになる。その一つが関東形式の出現時期である。関東形式とは、畿内より伝わった宝篋印塔の造形が、関東に定着するとともに関東独自の変化を見せ、反花座側面や基礎、塔身、笠の隅飾りに輪郭が施されるなどの変化を西の関西形式と区別した名称である<sup>22</sup>。正安二年（一三〇〇）の銘を持つ箱根の伝多田満仲宝篋印塔がこの関西形式と関東形式の折衷様で造作されていることから、これを関東形式の最初期と見てきたが、建長寺開山塔が反花座の下部側面に格狭間を配し、それらを輪郭で覆っていることは、宝篋印塔でないことを考慮しても、関東形式の出現時期をもう少し早い時期と見ることが可能である。建長寺に近在する明月院には無銘ながら安養院塔より古相を示す宝篋印塔が存在し、関東形式を示す。反花座が立ち上がり、側面を二区に分けていることから、時期は一四世紀に近くなるだろうが、古手の塔が近くに

存在することは無関係ではないようにも思われる。

なお、さきごろ仏教史の西山美香氏より大慧宗杲（一〇八九—一六三）の墓塔画像を提供いただいた（図16）。大慧宗杲は、写真のみながら現存最古の無縫塔として前述した宏智正覚と対立した宋代の禅僧で、曹洞禅の宏智正覚に対し、公案を重視した臨済禅楊岐派の人物である。弟子には北磻居簡などおり、蘭溪道隆の法流は大慧宗杲につながっている。画像は大慧宗杲の墓塔の塔身のみだが、最大径に対し下端部が非常に窄まった形状であり、建長寺開山塔の塔身によく似るのである。あるいは大慧の法流を汲むからこそ、この塔身の形状を採用していたのではないだろうか。今後検討すべき課題であろう。

## 二、覚園寺に現存する類例

さて、ここまで建長寺開山塔の年代についてあらためて検討を試みた。その中で覚園寺の歴代無縫塔群に触れ、移動や積替えがされていることを理由に検討できない旨を説明したが、宝篋印塔裏に並ぶ十四基のうち正面向かって右から一〇番目の無縫塔（以下覚園寺一〇号塔と称する）の基礎部分の文様および裝飾が、建長寺開山塔と非常に似通っている点は注目すべきである。

覚園寺一〇号塔の基礎は基台、脚台、反花が一石で成形された部材で、基台の側面は二重の輪郭で縁取られ、その中に格狭間が配される（図5）。この格狭間の文様が建長寺開山塔とまさに同形であり、

管見の限り他に例を見ない。また文様の源流自体も判断はつかず、似た文様として京都府京丹後市縁城寺宝篋印塔（一三三二年）、京都府宮津市稲垣家宝篋印塔、兵庫県城崎町桃島宝篋印塔（一三七二年）などの基礎に施された「中心飾付格狭間」が挙げられるが、中心飾と呼ばれる部分が文様の主体を成しているため本章では別種と判断したい。上部が波打ち、下部に向かって窄まる一般的な格狭間（図3・4）の造形とは異なり、上下がともに波打つ姿は、羽を広げた蝙蝠にも似る。古来中国において蝙蝠は発音が福と似ることから吉祥の動物とされ、衣服などの伝統文様にも用いられてきたが、管見の限り石造物に用いられた例は見当たらない。これを蝙蝠と判断するには検討が必要だが、同じ文様を持つ塔が覚園寺に存在することは重要である。

両者の法量には若干の差があり、建長寺開山塔に比べて覚園寺一〇号塔は基台と脚台の横幅が3cmほど小さく造られているほか、基台と脚台の高さが若干違うものの、二つを合わせた高さは建長寺開山塔と同じ値である。また反花座の幅と高さも同じである。格狭間を有する側面は輪郭を二重にする点で建長寺開山塔と違いを見せ、これが格狭間の横幅を小さくした要因と見られるが、格狭間の端を合わせると、この形はほぼ合致する。これは一方を写し取ったものとみてまず間違いないだろう。ほか持ち送り式の脚台や複弁の反花も同様に摸刻しており、両者は細部まで非常に似通っている。ただし、反花の表現に関して、蓮弁内の子葉がやや奥まった位置に置かれ立ち上がり強調される点、蓮弁の先端の立ち上がりが弱い点な

どに年代の差が表れており、おそらくは覚園寺一〇号塔の方が若干ながら後世に造られたと判断したい。ここまで摸刻した塔を造ることには特別な理由があると推測でき、横幅をおよそ一寸小さく造る点などは、覚園寺宝篋印塔や西大寺の五輪塔の例に見られる師の墓塔に対する配慮と同様の行為と考えられる。つまり、覚園寺一〇号塔の被葬者は蘭溪道隆と関わりの深い人物なのではないだろうか。

前述のように、蘭溪道隆は来朝後、泉涌寺の月翁智鏡を頼っている。月翁智鏡（？、一二四七）は俊苒に師事して天台教学と四分律を学んだ人物で<sup>23</sup>、俊苒示寂後は同門の定舜に教えを乞い、定舜が南都に招かれ叡尊らに律文を講じたことから、南都にも通じたという。曆仁年間（一二三八・三九）に入宋して律学を研鑽し、帰国後泉涌寺第四世を継いでいる。在宋中、蘭溪道隆と親交を結び、来日を勧めたことが、来日後の泉涌寺来訪につながった<sup>24</sup>。覚園寺長老になった者がその後泉涌寺長老になるという伝統は、覚園寺二世大燈源智（泉涌寺九世）より確立されており、建長寺、覚園寺、泉涌寺の三寺の間には浅からぬ縁がある。

しかしながら、中世において覚園寺と建長寺の直接的なつながりは見えず、覚園寺歴代住持の中に建長寺と関わりのある人物も見いだせない。検討したように建長寺開山塔造立が弘安二年（一二七九）であるならば、覚園寺一〇号塔もその後そう離れていない時期に作成されたとみたいが、覚園寺最古となる開山塔は、嘉元四年（一三〇六）に示寂した開山智海心慧の二十七回忌にあたる正慶元年（一三三二）に造立されたことが伝えられる。つまり、この塔は覚園寺開山

塔が造立される以前に造立されたということになる。

ではこの塔の被葬者は誰であろうか。候補として二人の人物が浮かび上がる。一人は願行房憲静、もう一人は樵谷惟僊である。願行房憲静(？〜一二九五)は月翁智鏡、覚盛に学んで南北二律に精通し、のちに泉涌寺第六世となった人物である<sup>25</sup>。関東に所縁が深く、鎌倉理智光寺の創建や大山寺の再興に携わったことでも知られる。智鏡を介し蘭溪道隆と親交があったと考えられ、大森順雄氏は受法の関係から月翁智鏡が蘭溪道隆を伴い鎌倉へ下向した時、憲静も随行したのではないかとしている<sup>26</sup>。憲静は永仁三年(一二九五)四月に西八条の遍照心院で示寂し、丹州浄土寺に葬られた。大塚紀弘氏によれば、「二階堂行藤書状」で憲静の百ヶ日仏事が行われた「二階堂寺」とは聖教奥書に多く名を残す二階堂の「真言院」であり、これが覚園寺の前身寺院であるという<sup>27</sup>。覚園寺開山心慧は憲静に付法を授けられた門弟であり、師の百ヶ日仏事を主催する人物としては適任である。また『舞楽曼荼羅供私記』正安二年(一二三〇)奥書には「真言院憲静上人」とあることから見て、覚園寺開山塔以前に何らかの供養塔が造立された可能性は高いと考えられる。

また、樵谷惟僊は、詳細は不明ながら月翁智鏡の兄弟弟子であった人物である<sup>28</sup>。智鏡入宋の折に同行し、蘭溪道隆に日本への渡航を勧める傍ら、先に帰朝した智鏡に代わり、日本までの道程の世話をした人物とも言われる。帰朝後も蘭溪道隆とは親交があり、その影響からか、その後禅僧となって信州塩田に安樂寺を創建した<sup>29</sup>。この間も蘭溪との友好関係は続いていたようである<sup>30</sup>。その樵谷惟

僊は晩年に鎌倉の万寿寺に迎えられている。この寺の土地はもと無量寿院という寺が建ち、泉涌寺の法流を汲む寺であった。これが弘安八年(一二八五)の霜月騒動を最後に衰退し、跡地に禅宗寺院として万寿寺が創建される。開山として無学祖元が迎えられたが、ほどなく寂し、次いで迎えられたのが樵谷惟僊とされる<sup>31</sup>。これ以後の住持が円覚寺系の僧侶で占められるため、樵谷惟僊はやや異質であるが、大森氏はこれを鎌倉における北京律の拠点であった無量寿院への配慮としている。樵谷惟僊はこの後二年で寂す。万寿寺との関係は不明瞭ながら、相模禅興寺の住持としての示寂だという<sup>32</sup>。樵谷惟僊没後について触れた史料が少ないため推測の域を出ないが、ここに樵谷惟僊の墓塔が建てられた場合、蘭溪道隆の墓塔に倣うことに違和感はない。出身は泉涌寺であっても禅僧との認識が強かった樵谷惟僊の墓塔が、覚園寺に建てられる、あるいは移されることには疑問が残るが、無量寿院に代わり覚園寺が鎌倉の北京律の拠点としての役割を担っていくこと、無量寿院から万寿寺へと改められる経緯が不鮮明なことを都合よく解釈すれば、あるいは可能性はあるかもしれない。ここでは願行房憲静と考えておく。

### 三、日本における禅僧の墓制と「地宮」

ここまで、建長寺開山塔について見てきた。これに関連し注目されるのは、西来庵開山像座下より発見された靈骨器とそれを納める遺構である。蘭溪道隆の塔所となる開山堂(祖堂)を再興した元禄二

年（一六八九）、「盤陀石」に覆われた「石卵」が掘りあてられ、中に納められた霊骨器が発見されたという<sup>33</sup>。この「石卵」が何を示すのかはわからないが、「塔身石卵、底有り蓋有り。底口径は二尺九寸五分（八九・四cm）で、高底蓋は三尺六寸（一〇九・一cm）」の伊豆石製であったという。

館隆志氏によれば、このような禅僧の霊骨器発見例は建長寺に多く残る<sup>34</sup>。享保十七年（一七三二）建長寺伝灯庵の西北の岩下より西澗子曇（一二四九・一三〇六）の霊骨器が発見されたといい、高さ二尺（六〇・六cm）、横三尺五寸（一〇六・一cm）の石櫃内に納められていたという<sup>35</sup>。また元文三年（一七三八）建長寺龍峰院北西を平地にする際に石槨とそこに納められた「石卵」が発見され、「石卵」中には「鐵甌」があったという<sup>36</sup>。

さらに宝暦五年（一七五五）、建長寺正統院において歛のあたった「大磬二片」を開くと、「坦平封地」があり、「磬一片」を開くと、石槨内に高峰頭日の霊骨器が納められていたとい<sup>37</sup>、縦横二尺五寸（七五・八cm）の石槨は方五尺（二五・五cm）の「地下窟」の中央にあったという。このほか、詳細は不明ながら円覚寺続灯庵の客殿の下から石櫃が出土した事例がある<sup>38</sup>。

これに関連し、著名な京都東福寺龍吟庵の発掘調査事例がある。龍吟庵開山の無関普門（一二二二・一二九二）の墓塔は、浙江省天童寺塔と同じように竿部に像容を刻出する無縫塔で、型式から嘉慶元年（一三八七）ごろの造塔とされている<sup>39</sup>。昭和三十六年に行われた調査により、本来無縫塔が建っていたとみられる庫裏背後から銅製

蔵骨器が円形の石櫃に納められた状態で検出されている。

なお、これらをまとめた館隆志氏は上記の事例に加え、円覚寺続灯庵の発掘調査事例と立地を参考に、建長寺開山堂の床下に地下式壙が存在する可能性を示している<sup>40</sup>。

川上貢氏は龍吟庵の調査事例をふまえ、無関普門の塔は本来「卵塔」と呼ばれる堂内にあり、無縫塔の地下に霊骨器を埋納し、「卵塔」の前に昭堂を設ける様相を想定している<sup>41</sup>。これを受け、岡本智子氏は建長寺開山堂についても「石卵」の上かその近くにあり、頂像や本尊とともに開山堂に祀られていたと推測する<sup>42</sup>。

たしかに禅院の開山堂や各塔頭の「卵塔」内に石塔を安置する事例は散見し、著名なものに岐阜県永保寺開山堂がある（図6）。永保寺は夢窓疎石（一二七五・一三五二）と元翁本元（一二八二・一三三二）が庵を営んだことにはじまり、開山堂は元翁の塔所である。祀堂と礼堂を合の間で連結した特異な形態ながら、現存する禅宗開山堂の中でも最古の例として知られ、堂内の最奥部に開山墓とされる南北朝の宝篋印塔が立ち、その前に本尊を安置する。また京都府鹿王院は釈迦十代弟子像の背後に開山春屋妙葩（一二三三・一三八八）の寿像があり、像下に宝篋印塔が納められているという。

義堂周信（一二三二・一三八八）は自らの葬法（掩土法）を「地を掘り窟を作り、石を切りて底裏に布き、且つ龕様に随ひその畔岸に側立す。塗るに泥粉を以てし、其の孔隙を塞ぐ。是れ俗の所謂窆窠なり。龕中に椅子を立て、身を結跏坐に安じ、椅前に机を置き、机上に筆硯、水瓶など平日の資具を陳説す。龕戸鎖封し、鑰は折りて之を棄

つ。龕を窟中に投じて覆うに石蓋を以てし、亦其の罅を粉し、土を掩うて深く埋め、石浮図を立てて表と為す」と指示していることから見れば<sup>43</sup>、埋葬施設として一人が入れるほどの石室を地下に造り、その上に石塔を立てる葬送法が、禅宗特有のものとして行われていたとの考えもある<sup>44</sup>。

なお、昭和四十四年（一九六九）、中国河北省定州市の電力会社構内において溝を掘る作業中、屋根状の石刻が発見された。開いてを確認したところ、夥しい文物が詰まっていたことから発掘調査が行われたという事例がある。この遺跡は太平興国二年（九七七）創建の静志寺塔と至道元年（九九五）創建の浄衆院塔で、地上の仏塔は現存しないものの、地下遺構の「地宮」は手つかずの状態に残されていた<sup>45</sup>。

「地宮」とは磚や石を積んで造られた石室あるいは磚室であり、基本的には塔基壇の中に設けられ、内部に舍利容器の入った石函などが安置される<sup>46</sup>。この遺構には仏塔が現存しないため、参考図として河南省鄭州市福勝寺塔（北宋・一〇三二年）を挙げるが（図7）、中国では仏教の東漸に伴って、インドの塔婆と中国の樓閣建築を組み合わせた中国風の仏舍利を祀る塔婆が成立した。こうした中国式仏塔は伽藍の主要施設となり日本に伝わりと考えられるが、中国では仏舍利を祀る塔に続き、仏教僧の中でも高僧が入滅したのち、この墓を仏舍利塔に準じた扱いをして塔や塔所と呼ぶようになったという<sup>47</sup>。これらが渡来僧や入宋僧によって日本に伝えられ、営まれた葬法が、建長寺などの禅僧墓に見られる地下遺構なのではないだ

ろうか。

河北省で発見された屋根状の石刻は静志寺塔の「地宮」蓋石で、それを取り除くと正方形の開口部が出現し、中には一辺二・二cmの空間が広がっていた（図8）。また参考図として挙げた福勝寺塔の断面図に示された地宮の羨道は、塔の地上前面に向かって延び、その姿は地下式坑<sup>48</sup>を彷彿とさせる。

なお、あまり知られていないが、覺園寺には石櫃が一点伝わっていることに注目したい。この石櫃は覺園寺絵図に記される平等寺の跡から出土したといい、石質は未確認ながら、縦横三二cm、高さ三四cmを測る（図9・10）。ホヅを有する身と上部を面取りした蓋に分かれる合わせ口造りの構造で、発見時は中に火葬骨が納められ、その上に五鈷杵が置かれていたという<sup>49</sup>。出土経緯の詳細は不明ながら、上に五鈷杵が置かれていたことは密教色が強いことを示しているが、覺園寺の前身となる真言院や覺園寺開山が多くの密教の法流を相承していることから見ても不自然ではないだろう<sup>50</sup>。

さらに注目したいのは覺園寺石櫃の形状である。この形は先に述べた中国仏塔地下遺構「地宮」より発見された石函や隋大業二年（六〇六）銘の銅製鍍金舍利函などの形に近似した形状である（図11・12）。この点も中国の葬法が伝えられ、実践されたことを示しているのではないだろうか。建長寺をはじめとした禅僧墓の解明に役立つ資料として注目される。

## おわりに

以上、鎌倉の無縫塔の代表として蘭溪道隆の墓塔を考古学的見地から検討し、年代の推定など再評価を試みた。結果として、建長寺開山塔は、蘭溪道隆示寂の一周忌となる弘長二年（一二七九）に造立された塔で年代的に違和感がないことが確認できた。しかしながら塔身の造形はその他の部材とは違う年代観を示し、その理由を大慧宗杲の墓塔に求めた。

また開山塔の特殊な造形とよく似た部材を覚園寺歴代墓の中から見出し、年代の差から覚園寺塔が建長寺塔の影響を受けて造作されたことを提示した。この塔の被葬者は蘭溪道隆と関係の深い人物が想定されるが、場所と年代から覚園寺に由縁のある願行房憲静であるととした。

さらに禅宗寺院で発見例が多く、蘭溪道隆の葬送にも採用された地下埋設遺構は、中国仏塔の地下遺構と似た構造、形状であることを紹介し、中国の葬法が伝来した一端を考察した。現在日本における地下式坑の最古例は建長寺玉雲庵と円覚寺続灯庵の事例との報告があり、義堂周信の葬法を関連させ出現時期を十四世紀代と見ている<sup>51</sup>。建長寺開山堂の床下に地下式坑が存在するならば、日本最古例となり、地下式坑ひいては「やぐら」の起源にもつながる可能性がある。

建長寺開山塔の検討は、建長寺と覚園寺の交流を明瞭に示す結果となった。蘭溪道隆の来朝から北京律との交流は以前から指摘があったが、石造物の類例はこれを如実に示す。建長寺開山塔の造形は鎌倉に残る作例の中でも特に緻密であり、そこには鎌倉で活躍する

南都律の技術が用いられていることは想像に難くない。これも北京律という媒介があつての造立であつたのだろう。つまり、鎌倉の石造物には、南都律だけでなく、北京律や禅が大きく関わっていたのであり、こうした多重の宗派間交流が、鎌倉の文化を促進させていったのだと考えられる。

最後になるが蘭溪道隆の来朝に際し案内人を務め、その後も友好な関係を持ち続けた樵谷惟僊は、信州塩田の安楽寺を創建した。この寺院には国宝である木造八角三重塔が建つ。こうした場所に唐様を駆使した中国式仏塔を思わせる塔が建つことは、当然ながら開山が入宋僧であること、渡来僧と交流があつたことが要因としてあるのだろう。しかし、本章の考察に則するならば、蘭溪道隆の塔所の起源となるかもしれない施設を、彼らが中国で見ていることを示す物証にもなり得るのではないか。そのような視点からこの塔を検討することも必要であろう。

なお、建長寺開山塔下には由来も用途も不明な石造物が置かれている（**図13**）。安楽寺の建つ信州別所温泉には別所三楽寺の一つ常楽寺があり、ここには弘長二年（一二六二）銘をもつ石造多宝塔が安置されている（**図14**）。直接関係があるかは不明だが、全国でも数少ない石造多宝塔の下縁の形状が、建長寺の開山堂床下の石造物とよく似ていることは注目すべきだろう。今後の課題とさせていた



## 第一部第二章 補注

- 1 岡本智子 二〇一二「無縫塔」日本石造物辞典編集委員会編『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 2 川勝政太郎 一九五七『日本石材工藝史』綜芸社
- 3 鎌倉国宝館 一九八〇『鎌倉の石仏・宝塔』鎌倉国宝館図録二十三集
- 4 神奈川県教育庁指導部 一九七二『神奈川県文化財図鑑 建造物篇』
- 5 岡本氏前掲註1文献
- 6 『元亨釈書』、『本朝高僧伝』
- 7 「開山大覚禪師石卵之中銀製靈骨器之写」
- 8 中日石造物研究会 二〇一〇『石造物を通じて見た寧波と日本』
- 9 『不可棄法師伝』
- 10 中日石造物研究会前掲註8文献
- 11 岡本氏前掲註1文献
- 12 石田茂作 一九六九『日本仏塔』講談社
- 13 鎌倉国宝館 一九八〇『鎌倉の石仏・宝塔』鎌倉国宝館図録二十三集
- 14 山川均 二〇〇六『石造物が語る中世職能集団』山川出版社
- 15 岡本智子 二〇〇六「初期宝篋印塔と律宗」『戒律文化』四 戒律文化研究会
- 16 鎌倉国宝館前掲註13文献
- 17 鎌倉市教育委員会 一九五九『鎌倉市史社寺編』
- 18 鎌倉国宝館前掲註13文献
- 19 鎌倉国宝館前掲註13文献
- 20 本間岳人 二〇一一「伊豆安山岩製五輪塔の研究」『石造文化財』
- 21 大三輪龍哉 二〇一二「建長寺開山塔」日本石造物辞典編集委員会編『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 22 川勝政太郎 一九六〇「関東形式宝篋印塔の成立」『鎌倉』第四号 鎌倉文化研究会
- 23 『本朝高僧伝』
- 24 『延宝伝灯録』
- 25 『泉涌寺諷誦類』、『律苑僧宝伝』
- 26 大森順雄 一九九一『覚園寺と鎌倉律宗の研究』有隣堂
- 27 大塚紀弘 二〇一四『奥書から見た中世鎌倉・中世鎌倉関係典籍奥書の集成と考察』NPO法人鎌倉考古学研究所
- 28 小松寿治 二〇〇二「樵谷惟僊の動向について」『駒沢史学』五八号
- 29 『延宝伝灯録』、『本朝高僧伝』、『空華集』
- 30 小松氏前掲註28文献
- 31 大森氏前掲註26文献
- 32 小松氏前掲註28文献
- 33 『大覚禪師拾遺録』
- 34 館隆志 二〇一一「蘭溪道隆の靈骨器と遺偈」『駒澤大學禪研究所年報』第二十三號
- 35 今泉濬 二〇〇二「建長寺百九十六世住持義天碩信について」『鎌倉』九五
- 36 「無相塔再建記」『鎌倉市文化財総合目録 建築物篇』
- 37 「常寂塔記」『訓註仏国録』
- 38 『新編相模風土記稿』
- 39 川勝政太郎 一九六二「東福寺竜吟庵開山塔の考察」『史迹と美術』三三〇号

- 40 舘氏前掲註34文献
- 41 川上貢 一九六八『禅院の建築』河原書店
- 42 岡本智子 二〇一一「無縫塔の受容と展開」藤澤典彦編『石造物の研究』高志書院
- 43 『空華日用工夫略集』
- 44 岡本氏前掲註42文献
- 45 出光美術館 一九九七『地下宮殿の遺宝』
- 46 山崎淑子 一九九七「定州静志寺・浄衆院舍利塔塔基地宮の壁画・地宮壁画としての意義と重要性」(『地下宮殿の遺宝』出光美術館)
- 47 川上氏前掲註41文献
- 48 舘氏は地下式「壙」の文字を使用しているため尊重したが、現在日本における地下式坑は「壙」の示す墓壙説以外に地下倉庫としての使用用途が示されている。よって本章では穴を意味する「坑」を用いた。
- 49 大三輪龍彦編 一九八三『中世鎌倉の発掘』有隣堂、神奈川県立博物館ほか 二〇一二『特別展 武家の古都鎌倉』特別展図録
- 50 大塚氏前掲註27文献
- 51 谷口榮 二〇〇九「地下式坑の研究史」東国中世考古学研究会編『中世の地下室』高志書院

Web掲載不可

写真1 建長寺開山塔

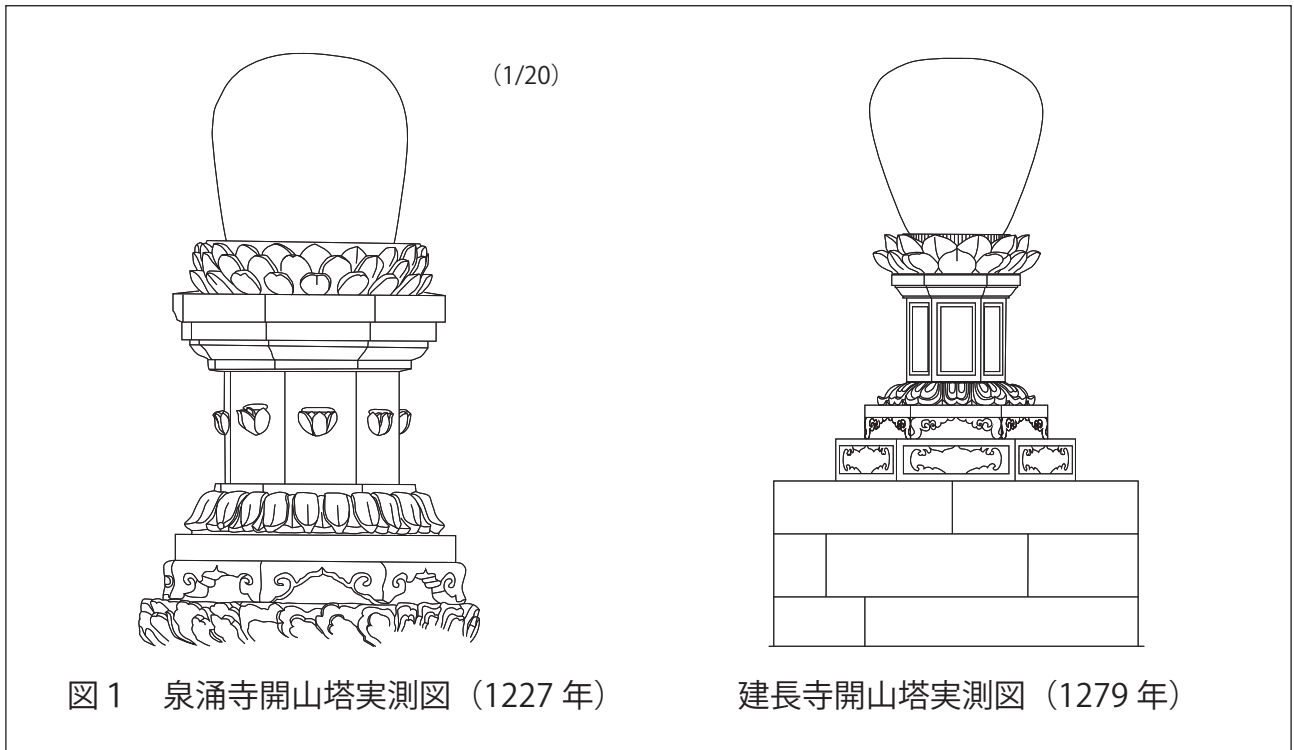




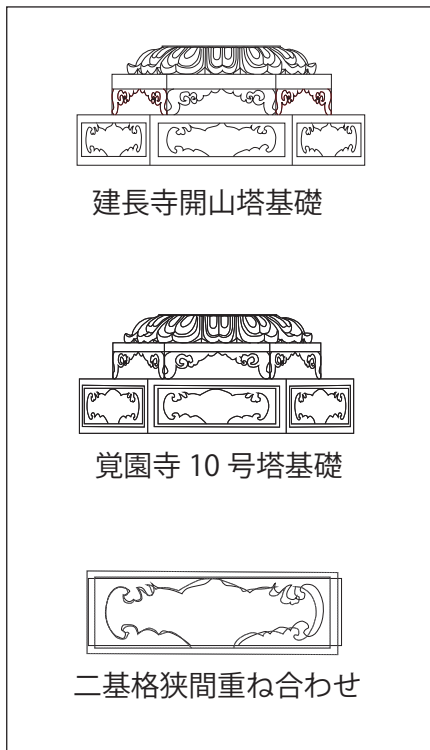
图 2  
称名寺実時墓所塔 1・2



图 3  
極樂寺忍性塔  
反花座



图 4  
安養院宝篋印塔  
反花座



建長寺開山塔基礎

覚園寺 10 号塔基礎

二基格狭間重ね合わせ

図 5 基礎実測図



建長寺開山塔基礎



覚園寺 10 号塔基礎

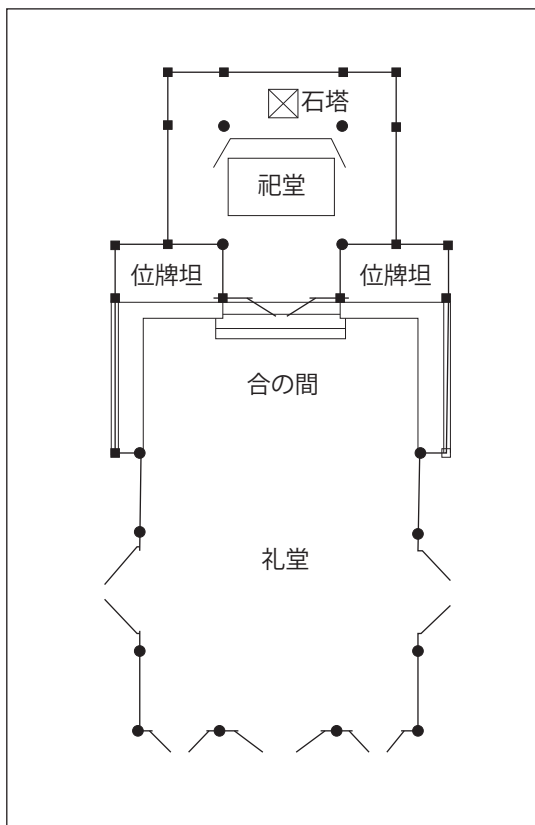


図 6 永保寺開山堂平面図 (川上 1968  
よりトレース)

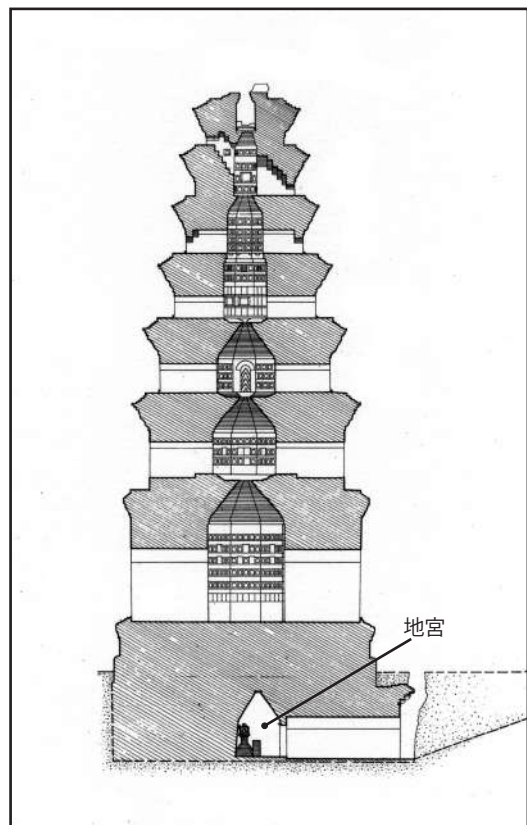


図 7 福勝寺仏塔断面図 (『文物』1991-6  
よりトレース)

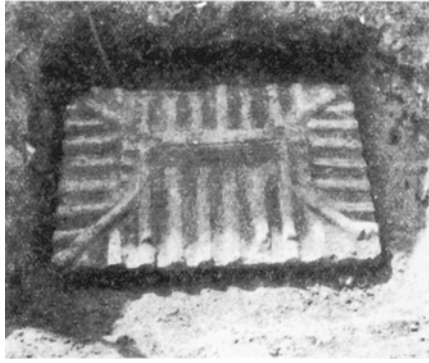


図8 静志寺跡出土蓋石と蓋開口時（出光美術館 1997 より転載）



図9 覚園寺石櫃



図11 隋大業二年銘銅製鍍金舍利函



図10 覚園寺石櫃（別角度から）



図12 浄衆院塔跡出土石櫃  
（出光美術館 1997 より転載）

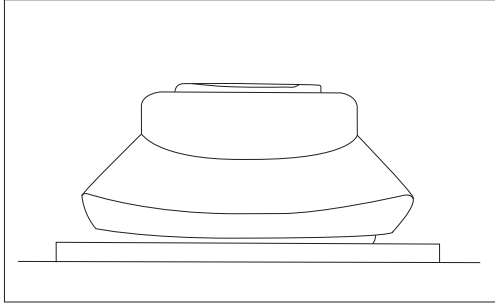


图 13 建長寺開山堂下安置石造物 (1/20)



图 14 常楽寺石造多宝塔 (大三輪氏提供)

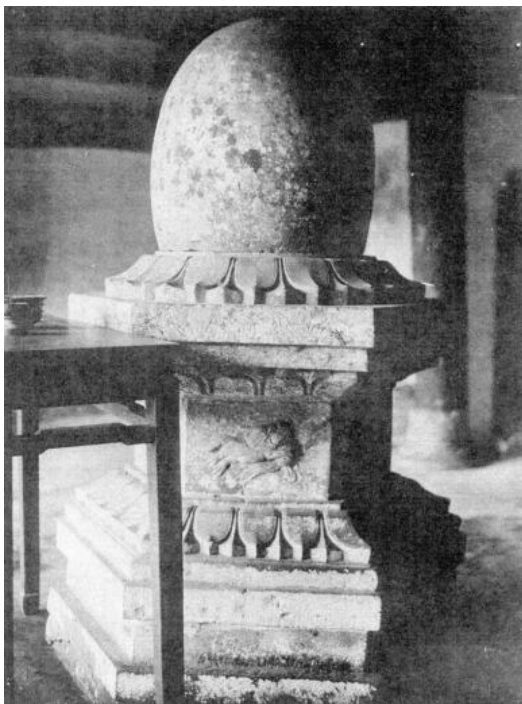


图 15 宏智正覚 (1091 - 1157) 塔

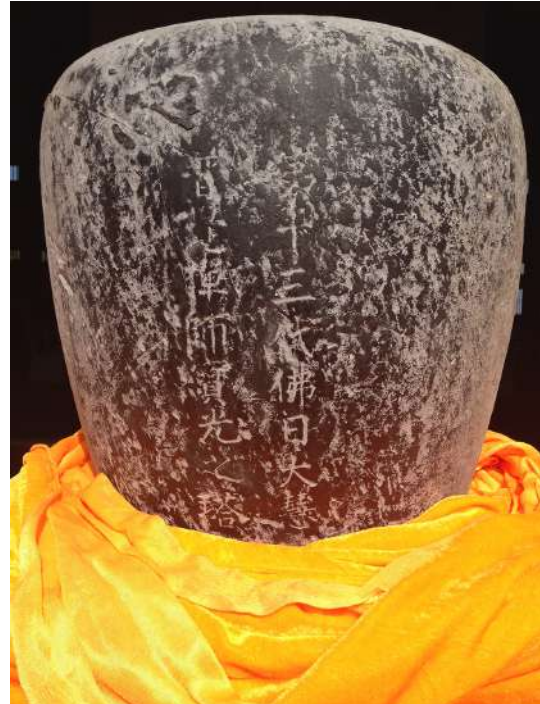


图 16 大慧宗杲 (1089 - 1163) 塔

## 第三章 中国仏塔の地下構造と

### 日本の地下式坑・やぐら

#### はじめに

第二章では、東日本で最も古い無縫塔として知られている建長寺開山塔を調査し、塔の造立年代を再検討するとともに、類例から宗派間交流、とくに禅宗と北京律のつながりに注目した。また近世における開山墓の発見事例や類例をふまえ、蘭溪道隆をはじめとした中世禅僧墓の地下遺構の存在を認識するとともに、その葬法と系譜について考察を加えた。この地下遺構の構造は、十四世紀に発生するとみられる地下式坑との類似性が指摘されており、研究史においては地下式坑の淵源は中国であり、禅宗を媒介として日本へ伝来した可能性が提示されている<sup>2)</sup>。

また筆者は第二章において、これら中世禅僧墓の地下遺構が中国仏塔の地下遺構と似た形状であること、また覚園寺所蔵石櫃が中国仏塔地下遺構から出土した石函と似た形状であることに注目し、中国の葬法が伝来した可能性を説いた。

そこで本章では、中国仏塔の地下遺構「地宮」の歴史と変遷を検証し、鎌倉禅律寺院に伝世する地下遺構や遺物との比較を試みる。また地下式坑研究史で引用される義堂周信の埋葬方法との比較を試み、葬法の検証を行う。さらには地下式坑と発生時期・発生場所が

似通うと言われる鎌倉独特の宗教遺構「やぐら」にも目を向け、いまだ明らかでないその発生や起源に一考を加える。

なお後述するが、中国仏塔地下遺構には中国伝統の埋葬施設構造が影響しており、現状中国の研究では埋葬施設の名称を用いることが多い。そこでまずは本章での中国仏塔地下遺構の用語の統一をしておく<sup>3)</sup>。

#### 遺構の構造名称

「**櫛**」主に磚や石材を用いて、石函を入れるため構成された空間。

密閉性を重視し、石函全体を覆う構築物であることを基本とする。石函以外を納入するスペースはほぼ無く、石函を櫛で覆い埋設する。周囲に粘土(膏泥)、木炭、石などを詰める場合も多い。

「**室**」主に磚や石材を用いて、石函や櫛を納めるため構成された空間。開通性を重視し、象徴的にせよ人の出入りが可能で、外界へと通じる通路が存在することを特徴とする。

#### 室構造に付属する遺構名称

「**羨道**」外界に繋がるスロープや階段と「**宮室**」とを繋ぐ通路を指す。切石や磚を積み上げた天井を持ち、排水施設を設ける場合も多い。埋葬施設では執行者らが玄室へ出入りする通路、殉葬者や副葬品の埋納場所などの役割を果たす。

「**甬道**」室内の各空間を繋ぐ連絡通路を指す。「**宮室**」のみを対象とした調査で出土した通路が、「**羨道**」であることを証明できない場合にこの名称を用いている。切石や磚を用いて積み上げ



た天井を持つ。

「石門」室に付設される門構えで、外界との連絡を象徴する構造物。

石造の観音開きの扉を持つ例も多い。門は磚、礫などで閉塞処置が行われ、施錠の器具を備えている場合もある。

「宮室」室構造特有の空間で、石門より奥の方へ入る地下施設全体を指す。埋葬施設における「玄室」を指す。大型の三室構造では、宮室中央部に配置される空間を主室、祭祀空間である前室、安置空間の後室に分割される。

## 一、中国仏塔の地下構造と舍利莊嚴

仏塔とはストウーパのことであり、仏陀の死後その遺骨（舍利）を祀るために建立された建造物である<sup>4</sup>。以下、煩雑にはなるが、その後の論旨の展開上必要となってくるため、仏塔の成り立ちに関する基礎的情報を確認しておく。

紀元前四八〇年ごろ、釈迦はクシナガラの地で入滅し、この地の統治部族であったマツラ族によって火葬された。『大般涅槃經』や『摩訶摩耶經』によれば、涅槃後の釈迦は金・銀・銅・鉄の四重の宝棺に納められたという<sup>5</sup>。当時、釈迦に帰依していたマガダ国王や釈迦族など八大国の王たちは、釈迦の遺骨（仏舍利）を得ようと遺骨の分与を願い出たが、マツラ族はこれを拒否し、仏舍利を巡る国家間の争いが勃発した。それを調停したのがドーナ・バラモン（Dona、香姓）で、仏舍利は八等分され、国々の故地に建てたストウーパに

奉納されたのである<sup>6</sup>。

この二〇〇年後、インドのマウリヤ朝第三代国王アショーカ（阿育王〔在位紀元前二六八年頃・紀元前三二二年頃〕）は、インド統一を果たした後、全国八ヶ所に奉納されていた仏舍利のうち七ヶ所を取り出し、細分化して世界各地に八万四千という膨大な数の仏塔を建立した。『アショーカ王伝』には「王は金・銀・瑠璃・玻璃で飾った小匣を八万四千個つくらせ、そのなかに舍利を納めた。さらに壺と飾り紐を八万四千つくらせ、そのなかに小匣を入れて（中略）人口一千万人を満たすところに一つの塔を建てさせようとした」とある<sup>7</sup>。これがいわゆる阿育王八万四千塔造立の故事で、のちに天皇や源頼朝までが倣う「八万四千塔供養」の原点である。このとき造られた仏塔はサーンチーなどに代表される覆鉢型で、礼拝対象として信徒の信仰を促進させることとなった（**図1・図2**）。

その後、仏教の東漸により中国に伝わった仏塔は、覆鉢形から中国の伝統様式となる多重樓閣式へと変化していった。この初見は、『三国志・呉書』の「浮屠祠」の記述で、後漢末期の徐州において黄金色の金銅製仏像を奉り、九重の銅槃を垂らした重層の樓閣を中心として、二層の回廊をめぐらし三〇〇〇人を収容できたという仏塔と伽藍の様相が伝えられている<sup>8</sup>。この「浮屠（浮図）」とは仏陀の転訛で、のちにストウーパの音訳である「卒塔婆」に変化する<sup>9</sup>。「塔」という言葉は、この卒塔婆の一字をとった訛略である。

この記事が伝えるように、初期の浮屠は仏殿と塔が一体化したものであったが、仏舍利信仰が高まるにつれて仏を奉る仏殿と仏舍利

を安置する塔とが機能的に分離され、中国独自の「塔」になったと見られている<sup>11</sup>。また中国の伝統的墓葬の影響を受けた中国仏塔では、舍利を舍利塔下に埋納するようになる<sup>12</sup>。この塔下埋納施設が時代を経るにつれ、皇帝や皇子、高官の用いた地下式墓の構造を模倣するなど規模の拡大を見せていくのである。

また高僧の遺骨は仏舍利に準ずるといふ理由で塔に埋葬するといふ事例が散見されるようになり、そのことから高僧の墓所は塔や塔所と呼ばれるようになる<sup>13</sup>。では、この中国仏塔と地下遺構の具体例を、先行研究に拠りつつ見ていきたい。

### 1. 隋・唐代の地宮と舍利莊嚴

中国の仏塔への舍利埋納には、上屋建物内の「天宮」に納める例と、塔基下に設けられた地下遺構の「地宮」に納める例とがある(図3)。このうち「天宮」が出現するのは唐代からであり、中国舍利埋納の開始時期より設置されていたのは「地宮」であった。その形状は、石や磚を積んで造られた槨・室構造であり、内部に舍利容器の入った石函などが安置されるものと理解されている<sup>14</sup>。

冉万里氏と楊泓氏によれば、中国の舍利埋納施設は北魏にはじまり、隋代に変化の兆しを見せ、唐代で完成を見るという<sup>15</sup>。北魏代の例では、仏塔基壇の版築土中より槨・室構造が無い状態で舍利石函が出土した例や、塔基壇に堅坑や磚函のみが設置された出土例があるものの、定型化された様相は見られない。これが隋代になると方形竪穴式磚槨が出現し、唐代には二つの系統に分類される。一つ

は隋代の形式を引き継いだもので、もう一つが同時代の墓室を模倣したものである。

隋代の形式を決定付けた事例が、文帝(在位五八一・六〇四)の詔による仏塔建立である。隋の文帝はアショーカ王の故事に倣い、仁寿元年(六〇一)、二年(六〇二)、四年(六〇四)の三回にわたって全国百余州に舍利塔を建立した。これらは「仁寿舍利塔」と呼ばれ、中央から送られた設計図をもとに全国同一時刻に同様式の塔が建造された<sup>16</sup>。「舍利感應記」には、舍利を金瑠璃瓶に納め、香泥でその蓋を封じ、各地に分配した後、銅函と石函に納め、塔下に埋納したとある<sup>17</sup>。つまり埋設された舍利容器は、石函+銅函+金銀瑠璃瓶の三重構造で塔下に埋納されたのである。これは『アショーカ王伝』に見られる「金・銀・瑠璃玻璃で飾った小匣を八万四千個つくらせ、そのなかに舍利を納めた。」の記事を忠実に再現したものである<sup>18</sup>。

仁寿舍利塔のうち考古学調査が行われたのは、陝西省耀県の**神徳寺塔基地宮**で、仁寿四年に建立されたことが石函に嵌め込まれた銘板から判明している。塔基内には舍利石函を囲む磚の壁があり、石函の四隅と蓋の上を長方形の護石が覆う槨構造であった<sup>19</sup>。ここで出土した石函は蓋の四面を隅切りした立方体で(図4)、中国では「蓋頂蓋方石函<sup>1</sup>。」と表現されるが、ほかに五例ほど発見されている隋代の舍利容器も類似した形状をしており<sup>20</sup>、隋文帝による舍利埋納の規矩に倣ったものと解釈されている(図5)<sup>21</sup>。また唐代の舍利容器にもこの形状が散見されるため、隋文帝の規範が後世において

定型化されていったと見られる。なお、この形状が鎌倉寛園寺所蔵の石櫃と酷似している点は後述する。

唐代では引き続き、隋代の地宮形式が採用される。塔基下に石や磚で方形堅穴式の槨を形成する構造で、なかには蓋の四方を隅切りした石函を納入する形式である。河北省正定県の開元寺塔地宮(図6)<sup>22</sup>や山西省長治市城内発見地宮(図7)<sup>23</sup>などが例として挙げられる。また高僧を塔に葬る例が見られるのもこの時代で、洛陽龍門神会和尚塔基は地宮と同じ方形堅穴槨構造に石函と類似する蓋が付く埋葬法が用いられている(図8)。上屋構造が塔であることから、高僧の遺骨が仏舍利と同様の扱いを受け始めたことがわかる<sup>24</sup>。なお、この墓の被葬者は唐代禅僧の荷沢神会で、禅宗七祖に数えられる人物である。

一方で、唐代の地宮には新たな様式が導入される。それを主導したのが、第三代皇帝高宗の皇后でのに中国史上唯一の女帝となった武則天であった。顯慶五年(六六〇)法門寺仏舍利を東都洛陽の宮中において供養した際に、容器に金棺や銀椁(槨)を用意し、幾重もの容器でこれを覆ったことが記録されている<sup>25</sup>。この金棺銀椁は中国の伝統的な墓葬の埋葬容器の形状を踏襲しており、金銀で成形されたミニチュアの棺槨が舍利容器として採用された。大周延載元年(六九四)に構築された甘肅省涇川県の大雲寺塔基地宮では、舍利容器は四重構造で、石函+銅函+銀槨+金棺の中に瑠璃瓶に入った舍利が納められる(図9)<sup>26</sup>。また陝西省臨潼県の慶山寺塔基壇地宮は、玄宗開元二十九年(七四一)の造宮だが、舍利宝帳のなかに金

棺・銀槨が安置される<sup>27</sup>。宝帳とは、垂れ幕を垂らして美しく飾りつけた調度、小部屋の種類を指すが、ここでは天蓋と台座を具備する宝帳の形を石で模し、舍利容器を保護し莊嚴する役割をもたせたものである<sup>28</sup>。金棺内の緑色瑠璃瓶には水晶製の舍利が納められていた(図10)。舍利容器に金棺銀槨や多重埋納の形態を採用したのには、涅槃後の釈迦が金・銀・銅・鉄の四重の宝棺に納められたという經典の記載が影響しているのかもしれない。それらは隋代からの伝統的の石函、あるいは莊嚴した小部屋をかたどった壺帳内に納められ、全国へと波及していったのである。

また地宮構造にも新たな形態が出現する。隋代からの堅穴式槨構造はこの時代にも引き継がれ、鎮江市甘露寺鉄塔地宮などの例が知られるが(図11)<sup>29</sup>、新たな構造は、当時の墓葬形態と非常によく似ており、地上へと繋がるスロープや階段、甬道、石門、宮室などで構成される。入口が塔の外に設けられ、宮室は塔基の直下に位置する地下式の横穴室構造である。宮室には比較的広い単室と大規模な多室とがあり、単室は先述の大雲寺塔基地宮や慶山寺塔基地宮(図12)が代表例となる。磚で構築された平面長方形(長2m×幅1.5mほど)の宮室には仏画が壁面に描かれている点も共通するほか、平面正方形の高岳寺塔基地宮(図13)<sup>30</sup>や甬道・宮室のみの永安寺舍利塔基地宮(七四七年・図14)<sup>31</sup>と様々な形式が見られる。

他方、多室構造の代表例は法門寺塔基地宮である(図15)。晩唐の唐懿宗(在位八五九・八七三)咸通十五年(八七四)の造宮で、

地宮は階段・平台・隧道と、前室・中室・後室の三室・秘龕（後室奥の地中の小区画）で構成される、総延長二・二mの大規模地下遺構である<sup>32</sup>。この構造は唐代皇帝陵墓の墓葬制度が採用されたものと見られている。

隋唐の墓室構造はスロープ式墓道、隧道式の甬道、穹窿式天井<sup>33</sup>の墓室で構成される地下式墓で、多くは内壁に漆喰を塗り、壁画を描く。参考までに武則天の孫にあたる**懿德太子墓**<sup>34</sup>と**永泰公主墓**<sup>35</sup>の図面を挙げるが（図16）、墓室は皇帝陵が三室、太子墓が二室、それ以下が単室という規定があり、発見例は単室墓が大半を占めるとい<sup>36</sup>。つまり舍利塔本来の目的である舍利埋納が、当時の中国における最高水準の葬法で釈迦の遺骨を莊嚴する行為へと変容したことを示し、ここにインド伝来の仏教が中国化していく過程を読み取ることができる。

なお、後室で発見された懿宗供奉の八重の宝函は、檀香木函＋銀函＋銀函＋銀函＋金函＋金函＋石函＋純金小塔という構成で、当時の礼典に見える天子の棺槨七重構造を凌駕することから、舍利信仰の高揚が指摘されている。また、それまでの瑠璃瓶に代わって小塔を舍利容器とする方式が採用される。これは晩唐期における武宗（在位八四〇・八四六）の廢仏（会昌の廢仏）以後に見える新たな変化で、のちの五代・北宋代の舍利埋納に大きな影響を与えることとなる。

## 2. 北宋代地宮の様相

ここまで中国仏塔の地下遺構「地宮」の発生する北魏から唐代までの変遷を見てきた。研究史によれば地宮は唐代で完成するというが、中世鎌倉に関連する地下式坑ややぐらの遺構と渡来僧が関係するのであれば、遺構発生時期となる十三世紀中から後半代の実態を知る必要がある。しかし南宋・元・明代の地宮発見事例はわずかで、先行研究はほとんどなく、いまだ十分な検証が行われていないと言<sup>37</sup>。そこで出土例の多い北宋期の事例を、管見の限り収集した。適合する時期に先行する例となってしまうが、この時代の地宮構造の傾向を読み取ってみたい。

### 定州静志寺塔・浄衆院塔地宮（図17）

河北省定州市の静志寺塔は、北宋の太平興国二年（九七七）に昭果大師によって定州城内の東に再建された塔である<sup>37</sup>。調査されたのは宮室で、内部は二・二mほどの平面方形で南壁にアーチ形の門がある構造の磚造である。持送式の天井までの高さは二・三四mで、壁面は一・一mの高さとなる。北壁中央に石函が安置され、金棺、天王像、銀塔、銀香炉などが納められていた。また改葬された北魏の興安二年（四五三）、隋の大業二年（六〇六）、唐の大中十二年（八五八）、龍紀元年（八八九）の石函や石碑、石棺や石碑、金棺銀槨、瑠璃瓶なども発見されており、何度か行われた改葬の最終期が北宋代だったと理解されている<sup>38</sup>。

浄衆院塔は定州城内の西に位置し、至道元年（九九五）に浄衆院住持の沙門演上人などの人々を葬るために建てられた舍利塔である。

調査された宮室は一辺二・七m前後の平面方形で、ドーム状の天井までの高さは三・〇七mの磚造構造である。南壁にアーチ形の門が設置され、壁面の高さは一・五四mとなる。北壁中央に長方形の石函が須弥座に安置され、内部より銀塔、銀棺、銀瓶、陶磁器などが発見された。

#### 漣水妙通塔地宮 (図18)

江蘇省漣水県の妙通塔は、北宋仁宗皇帝の天聖元年(一〇三三)に建造された塔である。地宮は塔基壇の中央に位置し、甬道、宮室、供台によって構成される磚造構造である<sup>39</sup>。甬道は階段になっており、全長四・四mの先で宮室の南壁に突き当たる。宮室は平面方形で、一辺が一・三mを測り、天井までの高さが二・〇五mとなる。供台に安置された石函内には金棺、銀椀、玻璃瓶、銅銭などが納められ、金棺内部からは銀盒とともに佛牙や舍利子が発見された。

#### 福勝寺塔地宮 (図19)

河南省鄧州市の福勝寺塔は、北宋天聖十年(一〇三二)に建造が開始された塔である。地宮は塔心室の真下四・五mに設置される。羨道、大門、甬道、宮室で構成され磚によって築かれている<sup>40</sup>。宮室は一辺一・九二mの内壁で組まれた平面六角形で、持送式の天井までの高さは三・四五mである。内部中央に方台、須弥座が設置され、その上に石函が載る。石函内には金棺、銀槨があり、中からは仏牙舍利や仏頂骨が発見されている。また鉄塔や舍利瓶、玻璃瓢箪なども報告される。

#### 当陽玉泉寺鉄塔地宮 (図20)

湖北省当陽県の玉泉寺鉄塔は、本来佛牙舍利宝塔と称する北宋嘉祐六年(一〇六一)に建造された平面八角形の鉄塔である。宋代塔基中央にある蓋石下に地宮があり、内部に石函が納められていた<sup>41</sup>。地宮は磚造で、幅一・二cm、深さ一・五八・五cmの平面六角形の竪穴に石函が須弥座に載せられた状態で発見され、内部には舍利、仏牙舍利、水晶念珠、銅銭などが納入されていた。

#### 兗州興隆塔地宮 (図21)

山東省兗州興隆塔は、隋代開皇年間(五八九・六〇〇)に創建されたが、北宋代や清代に改修されたよう<sup>42</sup>で、地宮は北宋嘉祐八年(一〇六三)に造営された<sup>43</sup>と見られる<sup>44</sup>。塔基壇中央に設置され、甬道と宮室で構成される。甬道は二本あり主室から南北に延びる。宮室は一辺が二・二五mの正方形で、ドーム状の屋根までの高さは三・二mである。内部には唐代墓誌や宋代石碑とともに石函が納められていた。舍利<sup>45</sup>の納入された石函は長方形で、蓮座台に載るかたちで安置される。内部が金棺と同じ中国伝統の形状である点に特徴がある。ほか金銀棺、金瓶、玻璃瓶、佛牙、佛像、瓷器、銅銭等が発見されている。

#### 臨猗双塔寺塔地宮 (図22)

山西省臨猗県双塔寺塔は東塔、西塔があり、地宮は西塔で発見された。西塔は北宋熙寧二年(一〇六九)に建てられた塔で、塔基壇直下一mほどに屋根型天井をもつ平面方形の宮室が設置されている<sup>46</sup>。宮室は一辺一・六八mほどで、天井までの高さは一・七三mあり、内部壁面には仏画とともに斗栱などの建築部材までが裝飾され

る点は、陵墓の影響を受けたものであろうと解釈されている。主室の中央には須弥座が設置され、その上に安置された石函内部には、銀棺、絹、銅鏡、銭とともに仏舍利が納められていた。

#### 上海興聖教寺塔地宮(図23)

上海市松江県の興聖教寺塔は、北宋熙寧元祐年間(一〇六八・九四)に建造されたと寺院は伝えるが、建築様式や塔壁内出土の銭貨から北宋代に建造された塔と見られている。地宮は塔基壇中央に位置し、宮室のみで構成される。磚造の宮室は東西六五cm、南北四八cm、深さ四五cmを測り、天井は屋根型を呈する<sup>44</sup>。内部には長方形の石函が安置され、内部には釈迦涅槃鑿像や大小の銀匣などが納められており、銀匣からは仏舍利や仏牙舍利が発見されている。

#### 寧波天封塔地宮(図24)

浙江省寧波の天封塔は武周武則天の時代、天冊万歳から万歳登封年間(六九五・六九六)に建造が開始されたとされるが、何度も焼失し、南宋建炎四年(一一三〇)、紹興十四年(一一四四)と再建され、元朝至順元年(二三三〇)、明朝永樂十年(一四二二)、嘉靖三十八年(一五五九)と改修されており、地宮はこのうち紹興十四年(一一四四)のものと考えられている<sup>45</sup>。地宮は塔基下の中心に位置し、平面方形を呈する。四辺を厚さ一一cmの石板で構築された内部には、石函が安置され、なかに銀製の宮殿模型が納入されていた。ほか銀塔や仏像、銀牌、銀香炉、瑠璃瓶などが発見されている。

以上、中国北宋代の仏塔地宮を概観した。結果として地宮の構造

は唐代で完成を見ているという冉・楊両氏の指摘が裏付けられたと言って良いだろう。隋代に発生した方形竪穴式の槨構造や、唐代に発生した墓室を模倣した単室、多室構造は宋代においても引き継がれており、舍利容器の石函も隋代の形状が継承されていることが確認された。

一方、石函内に納められる小型舍利容器は、唐代の金棺・銀槨や晩唐の塔形舍利容器も見られるが、周昉美氏の研究によれば、ほかに多角塔形、方形塔形、銭弘俶塔形、経幢形、覆鉢塔形などと多様化し、地域ごとの発展が見られるという<sup>46</sup>。これは隋唐代までの皇帝主導国家事業とは異なり、補修や供養が地域別の様々な階層の人々の手で行われるようになったために、五代十国の異なる仏教文化や地域ごとの伝統が反映されるようになった結果と考えられている。

このうち銭弘俶塔形は、小型塔形舍利容器の発展形のひとつであり、この時代の出土例がもつとも多い(図25)。銭弘俶とは五代十国の呉越国最後の王で、浙江省寧波阿育王寺の阿育王塔を模して八万四千塔を造り頒布したことが知られる。この塔形は北宋代でも中国南部地域に多く見られることから、宋への統合後も呉越国の文化が影響を及ぼし続けると指摘されており、のちに日本にも伝来する宝篋印塔の祖形としても注目されている<sup>47</sup>。

なお北宋代の地宮の特徴として、石函を安置するための竿部をもつ台座が見られる点に注目したい。形状はさまざまで、場所も宮室奥や方形竪穴式槨の内部などと規則性は見られないが、台座上に石

函を置き荘嚴する点は共通する。なお、石函を「舍利を入れる象徴的容器」と解釈した場合に想起されるのは、インドで発見例のあるストウーパ図である(図26・27)。光輪と言われる円形は舍利を象徴化した表現であり<sup>4</sup>、これを台座に載せて崇める図は、舍利を納入した石函が台座に載せられる様相と重なる。この形態の導入経路は不明だが、いずれにせよ石函が台座に載る姿は、この図案をもとにした文化が導入されたとみて相違あるまい。またこの図案の舍利を安置する姿は無縫塔に酷似する。現在確認されている無縫塔最古の作例が中国天童寺宏智正覚(一〇九一・一一五七)の墓塔であることから考えれば、宋代より出現する地宮安置の台座のほうが出る現は早い。台座上の石函が、本来の意味となる舍利象徴形の円形で表現されれば、その姿は無縫塔となりはしないだろうか。高僧の遺骨を舍利と同等に扱う文化が定着した宋代中国で、地宮内部の荘嚴変遷を経て、僧侶の墓塔の祖形が生み出された可能性を提示したい。

### 小結

ここまで検討したように、中国仏塔地下施設は北魏代から発生し、隋代の整備を経て唐代で中国独自の形式へと発展し完成をみる。その形状には堅穴柳構造や地下式の横穴室構造があり、横穴から単室や多室を形成する構造は唐代の墓葬制度を反映させたものであった。また安置される舍利容器は随代から踏襲される石函を外容器とし、内部に多重の容器を納入する。容器の多重構造は釈迦やアシヨーカー王の故事にならったもので、容器の形状は唐代の墓葬で使用される

棺や柳を模倣したものである。それらを金銀で裝飾する様相は釈迦の遺骨に対する中国伝統儀礼での最高級の厚礼と見ることができよう。

またこの遺構は、高僧の遺骨を舍利と同等に扱う理由から、唐代ごろを境に高僧の墓葬でも使用が見られるようになる。そのような文化の形成を経て、寛元四年(一二四六)中国僧蘭溪道隆が来朝した。鎌倉では日本初の中国風禅宗寺院となる建長寺が創建され、住持として迎えられた蘭溪は、示寂する弘安元年(一二七八)まで多くの年月をこの寺院で過ごす<sup>4</sup>。またこれ以後、鎌倉には多くの渡来僧が鎌倉の地を踏み、中国直輸入の文化が禅宗寺院にもたらされるのである。中世の禅宗は、宋代禅林の日常規範・寺院内組織の制法である「清規」を日本社会に持ち込んだことが知られる。北宋崇寧二年(一一〇三)編纂の『禅苑清規』の影響が大きいといわれ、これら渡来の清規をもとに、東福寺の「慧山古規」(文保二年(一一三二)や南禅寺の「大鑑(広)清規」(貞和五年(一一三九))、『諸回向清規』(永祿九年(一一五六))などが日本の五山禅林内で編纂されたという<sup>5</sup>。そのなかには当然葬法も含まれる。第二章で紹介した中世禅僧墓はこうした儀礼をもとに営まれたと考えられ、その淵源には上記の中世仏塔地下遺構の影響が垣間見える。次節では第二章で紹介した近世禅僧墓出土事例を補足する形で、この比較を行いたい。

## 二・ 中世禅宗の墓葬事例と地下式坑墓墳起源説

### 1. 近世発見の禅僧墓と中国仏塔地下構造

建長寺は、開山堂（祖堂）を再興した際に出土した蘭溪道隆の墓葬遺構の記録を伝えている。この記録は詳細で、ほかに西澗子曇、約翁徳俊、高峰顕日の墓葬遺構発見の記録が残る。史料自体は近世となるが、考古学調査例が非常に少ない中世禅僧墓の実態を知る手がかりとしては有益であろう。またこれら禅宗の営んだ葬法は地下式坑の初源であるとの指摘がある<sup>51</sup>。その点も考慮し、舘氏の研究を参考にしつつ、中国仏塔遺構の変遷から中世禅僧墓の実態を見ていきたい<sup>52</sup>。

なお、史料にある「石卵」「石槨」「地下窟」などの用語は、当時の記録者による定義の無い遺構名称であり、先に述べた中国仏塔地下遺構で使用した用語とは、関連が無いことを付け加えておく。

#### 建長寺西来庵の石卵と靈骨器

元禄二年（一六八九）に発見された蘭溪道隆の遺構は、「盤陀石」で蓋された「石卵」十白鐵製の八角藏骨器という構造である<sup>53</sup>。「大覚禅師塔」の原文は以下のようになる。

塔身石卵、有底有蓋。底口径二尺九寸五分。高底蓋三尺六寸、以伊豆石□焉、玲瓏可觀。石灰錮蓋縫、縫中有機、輪輪塞之。不輕易啓閉。白鐵餅奠其中。餅高八寸、衡七寸三分。其象八稜。五色骨灰盛中、滿八分、璨然粹然。詳如本伝載焉。（中略）本年二月初七日倣載、以今塔趾迫阨、拓地旁夷、畚鍤所至、偶掘擡

出石卵、觀其度置。則就開山道像座下瘞之、以盤陀石一枚覆焉。（以下略）

舘氏の訳によれば「塔身は石卵で、底有り蓋有り。底の口径は二尺九寸五分（八九・四cm）、高底の蓋は三尺六寸（一〇九・一cm）で伊豆石を使い、大変美しく造られている。また石灰にて蓋の縫目を一周する形で塞ぎ、容易には開かないようになっていた。白鐵（鉛と錫の合金）の餅がその中に奉られる。餅の高さは八寸（二四・二cm）、横幅は七寸三分（二二・一cm）であり、その造形は八稜（八角）である。中には五色の骨灰が盛られ、八分まで満たされて、光り輝き混じり気のない様だった」とある。

また、出土の経緯は「本年（元禄二年）二月七日、今の塔趾は崖が迫り場所が狭かったので、土地を拓いて平らに造成した際、モッコとすきが当たったところで、偶然石卵がもたげ出したので、そこにあることが確認された。すなわちこれは開山像の座下に埋葬されていたもので、盤陀石一枚をもって覆われていた」とある。

なお、記録によつて過程は異なるが、「石卵」はもとの場所から移動されており、それを理由に舘氏は開山像床下に「石卵」を納入する空間（石室もしくは地下式坑）の存在を想定している。

#### 建長寺伝灯庵の石櫃と靈骨器

享保十七年（一七三二）建長寺伝灯庵の西北の岩下より発見された西澗子曇（一二四九・一三〇六）の遺構は、蓋つき石櫃十金銅製藏骨器という構成で、足利市儒徳寺藏「義天碩信書状」に記される<sup>54</sup>。

右骨器銘曰、（石櫃、凡高二尺。横三尺五寸。函蓋相同。内有



金銅小骨器、高七寸、横五寸五分。(以下略)

石櫃は高さ二尺(六〇・六cm)、横三尺五寸(一〇六・一cm)で、同寸の蓋があり、中には高七寸(二一・二cm)、横五寸五分(一六・七cm)の金銅製靈骨器が納められていた。

西潤子曇は浙江省台州の生まれで、広度寺に出家し、蘇州承天寺の石楼明につき、ついで浄慈寺の石帆惟衍に参じ、石帆の天童寺転住に随侍すること六年、文永八年(一二七一)北条時宗の招きにより来朝した人物である。一度帰国したが正安元年(一二九九)の貞時の招きに応じ一山一寧の来朝に従い再度来日。弟子の礼をとった北条貞時は師を円覚寺に請じた。続いて建長寺に移り徳治元年(一一三〇八)正観寺に退去、同年に示寂している。

### 建長寺龍峰庵(現、龍峰院)の石槨と石卵

元文三年(一七三八)、建長寺龍峰院の北西から発見された約翁徳俊(一二四五・一三二〇)の遺構は石槨十石卵十鐵甌(蔵骨器)で龍峰院蔵「無相塔再建記」に記される<sup>55)</sup>。

元文戊午夏、偶当菴乾位移土平地序、深鑿得石槨。槨中有石卵、

卵中安鐵甌。甌周尺五、深七寸、内填骨身、外記歲月。緇素駢

集焼香拝瞻、嘆未曾有。雖然、不遑立廟宇庇島、唯記之封之露

安後巖石窟中、而已。

建長寺龍峰院の北西を平地にする際に「石槨」とその中に納められた「石卵」が発見され、「石卵」の中には「歲月」を記した「鐵甌」があった。周五尺(直径四八・二cm)、深七寸(二一・二cm)の「甌」には骨が充填しており、発見者はこれを手厚く奉ったが、廟所を作

るには時間がないため、まずは後ろの巖石窟の中に安置したとある<sup>56)</sup>。

約翁徳俊は、十三歳の時に建長寺の蘭溪道隆の室に入つて得度し、十六歳で落飾した人物である。文永年間(一二六四・一二七四)に入宋し、寂窓有照、石帆惟行、東叟仲穎、虚舟普度、蔵叟善珍等の諸師に歴参した。帰国後は蘭溪道隆に随侍していたが、葦航道然の下で首座となり、長勝寺開創の際に開山となり、以後、東勝寺、禅興寺、浄妙寺など鎌倉諸寺の住持を勤め、徳治元年に建仁寺の十世となる。延慶三年には建長寺十四世となるが、在任中の火災の責任を負つて退く。のち南禅寺の住持となり、元応二年(一二三〇)に示寂している。

### 建長寺正統院の石槨と靈骨器

宝暦五年(一七五五)建長寺正統院で発見された高峰頭日の遺構は、蓋つき地下窟十石槨十唐銅製蔵骨器で構成される<sup>57)</sup>。「常寂塔記」によると、五月十五日のこと、鍬の当たつた「大磬二片」を開くと、「坦平の封地」があり、「磬一片」を開くと、「石槨」内に銘の字が分明に記された高峰頭日の靈骨器が納められていた<sup>58)</sup>。

右、正和中、所奉骨器銘也。其器唐銅、其形似卵。横匣一尺五寸、堅匣一尺七寸、中正合函蓋、釘之三处。其中又有盛靈骨器、

形類香炉、青磁模牡丹者也。石槨縦横二尺五寸、中正設径尺之円空、而奉其器焉。地下窟中方五尺、中央安其槨、而以磬之方二尺五寸、厚一尺四寸蓋之。又以磬之横二尺厚一尺三寸、長五尺者二片、坦平蓋之也。宝暦乙亥五月十五日得之、為伝永世

記焉。

その器は唐銅で造られ、その形は卵に似ていたという。横の周は一尺五寸（直径一四・五cm）で、豎の周囲は一尺七寸（五一・五cm）とあるため、横の周から求めた直径は一四・五cmほどとなる。函蓋は真中に合わせて三本釘が打たれており、その中に香炉の形をした牡丹模様の霊骨器が有った。石槨は縦横二尺五寸（七五・八cm）で、中央に一尺の円空を設け、その器を奉り、地下窟は方五尺（一五一・五cm）で中央に石槨を安置する。方二尺五寸（七五・八cm）、厚さ一尺四寸（四二・四cm）の平らな石をもってこれを蓋とする。また横二尺（六〇・六cm）厚さ一尺三寸（三九・四cm）、長さ五尺（一五一・五cm）の二つの平らな石が、坦平なこの蓋である。

高峰顕日は後嵯峨天皇の皇子といわれる人物である。東福寺円爾に入門して出家したが、文応元年（一二六〇）元庵普寧が来朝して建長寺に住すると、参随してその侍者を勤めたのち、下野那須に雲巖寺を開いて開山となった。弘安二年（一二七九）無学祖元が来朝するとこれに師事し、その法を嗣ぐ。のちに一山一寧の来朝にも参じ、大宰府横岳の南浦紹明とともに天下の二甘露門と称された。その後、鎌倉浄妙寺、万寿寺、浄智寺、建長寺などに住し、正和五年（一三二六）寂。塔所は雲巖寺正宗庵と浄智寺正統庵という。

### 小結

以上のように中世禅僧墓の近世出土事例は、中世禅僧の遺骨を霊骨器（蔵骨器）に納め、蓋つきの石櫃や石槨、石卵といった外容器・

外容施設で覆う点で共通する。多重容器で遺骨を荘嚴する方式は、中国での仏舍利埋納法から派生した中国僧墓形式の影響と見たい。また規模や用語など不明な点が多い状況での判断は難しいが、高峰顕日の例は地下窟がさらにそれらを覆っており、室構造を展開している。また蘭溪道隆の例も規模などは不明だが、空間を有する室構造であったと見てよいだろう。それに対して、西潤子曇や約翁徳儉の例は槨構造であったと判断される。

参考までに構造の復元を試みたが（図28）、西潤子曇の例などはイメージとして京都東福寺龍吟庵で発見された無関普門の銅製蔵骨器を納める石櫃安置の様相に近いのだろう（図29）<sup>59</sup>。この形式は、中国仏塔地下構造のなかでも隋代に見られた豎穴式槨構造と解釈される。

先にも述べたように、中国における仏塔地下遺構の僧墓への派生は、唐代になってからと考えられており、河南省洛陽市龍門神会和尚墓（図9）が早い例として知られる。神会（六八四・七五八）は禅宗七祖で、六祖慧能の法燈を嗣ぐ人物とされ、洛陽に住して宝応寺に葬られたという。昭和五九年、龍門の唐代宝応寺遺跡で発見された神会墓には、青銅製の塔形合子・浄瓶・柄香炉および漆塗り陶鉢などが納入されており、隋代からの方式である方形豎穴槨構造に、直接石函と同じような蓋が付く埋葬法が用いられている。あるいはこの方式が、代々禅僧間で墓葬の形態として認識され、日本に持ち込まれるルートがあったのかもしれない。

また、建長寺僧の墓葬発見史料に見られる「石櫃」は形状が不明

であるが、中国地下遺構で用いられる「石函」と同じ用途で使用されることを考えて相違あるまい。先述した覺園寺所藏石櫃は、蓋の上方を隅切りする方形の容器であり、第二章では引用した静志寺塔・淨衆院塔出土容器と形状が酷似する点を指摘したが、この形状は隋代文帝の発布した制度で定型化された石函と同形である。中国において連綿と受け継がれた形状が鎌倉に存在することは、当地の葬法が鎌倉に持ち込まれたことの証左となり、鎌倉の寺院で営まれた墓葬の淵源が中国にあることを証明する重要な遺物となるだろう。石櫃はこのほか円覺寺統灯庵でも出土したことが伝えられているが、その形状は不明である<sup>60</sup>。

## 2. 掩土之法と地下式坑の墓壙起源説

蘭溪道隆や高峰顕日の遺構は室構造と判断された。これが中国仏塔地下遺構と同様の横穴式なのかは不明だが、いずれも茶毘に付されていることがわかる。一方、火葬せず室構造に埋葬される禅僧墓も史料には残る。著名な義堂周信の葬法「掩土之法」である。

義堂周信（一三二五・一三八八）は土佐高岡の生まれで、はじめ比叡山に入り受戒、二年後臨川寺の夢窓疎石に受衣し、その法を嗣いだ禅僧である。法兄の方外宏遠から直接の指導を受け、夢窓の寂後は建仁寺の龍山徳見に七年師事している。延文四年（一三五九）に足利基氏の招きで鎌倉に入り、留まること二十二年、石室善玖・中巖円月・不聞契聞らと交流し、常陸勝樂寺・瑞泉寺・円覺寺黄梅院に住したほか報国寺開山となり、鎌倉公方や関東管領上杉氏の指

導に当たった。のち足利義満の招きにより上洛し、建仁寺・等持寺・南禅寺などに入寺したのち南禅寺内に慈氏院を創建、退休し、嘉慶二年（一三八八）二月二十七日に寂している。この時営まれた葬法が、『空華老師日用工夫略集』同日条に記載される「掩土之法」で、以下のよう<sup>61</sup>に記される<sup>62</sup>。

廿七日、梵意將歸京、余自修書寄季、大概説掩土之儀日、凡掩土之法、掘地作窖、切石布底裏、且隨龕樣側立其畔岸、塗以泥粉、塞其孔隙、是俗之所謂窰窰也、龕中立椅子、安身跏趺坐、椅前置机、々上陳説筆硯水瓶平日資具、龕戸鎖封、鑰子折而棄之、投龕於窖中、覆以石蓋、亦粉其罅、掩土而深埋、立石浮圖而爲表云云、

掩土とは「土で覆い隠すこと」であり、傍線部以下を意識すれば「地を掘って穴倉を作り、石を切って床に敷き、また龕の形に畦に立てる。泥粉を塗ってその隙間を塞ぐ。これいわゆる墓穴（窰窰・ちゅんせき）なり。龕の中に椅子を立てて、結跏趺坐にして座らせ、椅子の前に机を置き、机の上に筆と硯、水瓶など日常の道具を並べ置く。龕の戸を鎖で封じ、鑰（カギ）は折ってこれを捨てる。龕を穴倉に納めて覆うのには石蓋を使って行ない、またその罅（ヒビ・隙間）を粉で埋め、土で覆って深く埋め、石浮図（石塔）を立てて標識とする。」といった内容で解釈されている<sup>63</sup>。埋葬施設として人が一人入れるほどの石室を地下に造る葬法が掩土之法なのであろう。なおこの前日となる嘉慶二年二月二十六日条には、「余不欲閤維、但作掩土之備、汝到京、宣與季藏主等和會之、速命工造木龕」とあ

り、義堂周信自身が火葬（闇維）を欲しないこと、掩土に備えて急ぎ木龕を作成することを告げており、この方式が土葬であることがわかる。なお、この葬法を起源として南関東を中心に発生するという見解が示されている遺構が「地下式坑」である<sup>63</sup>。

またこれに関連するのは、円覚寺続灯庵で出土した二基の地下式坑で（図30）<sup>64</sup>、田代郁夫氏はこれらの遺構が、円覚寺境内奥地に立地すること、地下式坑の最古例となる十三世紀後半の年代が充てられること、建長寺玉雲庵の発掘調査で、谷戸奥の崖面上段平場の中央から地下式坑が検出されたことを理由に、この遺構が禅宗を経由して中国より伝わった可能性を提示している<sup>65</sup>。

そもそも地下式坑とは、堅坑によって地上と連結させた素掘りの地下室のことである<sup>66</sup>。中田英氏によれば、甲信を含めた南関東、琵琶湖周辺、九州北部の三つの地域に遺跡の集中が見られ、このうち南関東が最も広範囲で数量が多いとい<sup>67</sup>、一〇五〇地点五四九六例が収集される現在でもこの認識は変わっていない<sup>68</sup>。最も出土例の多い千葉県を主体に導き出された変遷は、十四世紀に出現した可能性が示唆されながらも十五世紀からの発生とされ、十六世紀中葉まで隆盛しつつ、十七世紀まで存続したとする<sup>69</sup>。また機能については「墓」に関連する施設と「倉」とする説が二極化しているが、炭化した穀物の出土事例や床面に使用痕跡が存在する点など、墓としてよりも貯蔵庫としての機能を満たす所見が多く、人骨の出土例はほとんどが覆土中からの出土で、五四九六基分の九六例と非常に少ない点から見ても、貯蔵庫説が優勢となっている。ただし、出土

遺物から導き出される機能はさまざまで、一つに限定した機能をすべての例に適用することは不可能であり、谷口榮氏は「機能は一元的なものではなく、多様な使われ方をしたのではないか」と指摘する。

なお、起源に関しては、およそ十四世紀までに突如として発生した遺構という点では研究者間の認識は共通している。このことは、地下式坑は他の遺構から系譜を辿って発展的に形成されたのではなく、何らかの「突発的な外的要因」によって成立したことを示唆する。この要因について貯蔵庫説は確たる説明を省くが、墓説は上記の説明を述べる点で優勢と見るべきであろう。

では義堂周信の葬儀は如何なるものであるのか。この点を江崎氏は、禅林の日常規範となる『諸回向清規』など葬儀次第を参考にする必要があると説く（図31）。『諸回向清規』（永禄九年〔一五六六〕）の葬礼方法は、籠前堂で掛真・鎖龕・起龕の念誦がなされ、火屋茶毘所では奠湯・奠茶・下火（あこ）・山頭念誦があり、行導（道）・収骨といった順になり、原田正俊氏による解説では、それぞれ以下の内容が執り行われる<sup>70</sup>。

**掛真**…肖像画をかけたの仏事。

**鎖龕**…遺体を入れた龕を閉ざし法語を唱える仏事。

**起龕**…龕を茶毘所に運ぶため移動の前の法語を唱える仏事。

**奠湯・奠茶**…湯・茶を供える仏事。

**下火・山頭念誦**…遺体に着火するにあたって法語を述べ死者を讃

える仏事。

このうち、どの仏事をどれくらいの間で行うのかは不明だが、鎖龕は義堂周信の掩土之法にも見られる行為で、この後火屋に移動するのであれば、それまでの一定期間安置する場所として地下遺構が存在したと考えても不自然ではあるまい。江崎武氏はその可能性も含め、使用済みとなった地下遺構の転用を想定する。ただ、『諸回向清規』には「掩土」を土葬と表現し、茶毘<sup>71</sup>火葬に対応する位置に置く記述もあり<sup>71</sup>、そもそも義堂周信が火葬（闇維）を欲しない<sup>71</sup>と述べていることから、以降、遺構を回収しない完全な土葬であった可能性はあろう。

この禅僧の土葬という観点は、原田氏や田代氏も指摘するように、宋代禅林の葬礼には儒教的要素が多く含み込まれるという点を注視すべきである<sup>72</sup>。日本において儒教に依拠した葬法が確認できるのは近世以降に限られるというが、実際には儒教自体の受容は三〜四世紀まで遡るといい、宋代の経書とともに中世でも浸透していたものと見られている<sup>73</sup>。純粋な儒教の葬法「儒葬」は、近期刊行の林鶯峰による実母の儒葬記録『泣血余滴』（明暦二年（二六五六））が詳しく、徳川光圀もこれを参考としたことが知られる<sup>74</sup>。棺の内面に灰漆（漆喰）を塗り、底に石灰を敷きつめることや、板の間に隙間のないよう瀝青（松脂）を塗る作法が記されており、義堂周信墓の龕内に施された荘厳と似た様相が指摘できる（図32）。

中国の思想は現実的・即物的と言われ、死を特に恐れ、死後現世へ帰還することを願う。その不安を解消する儒教は、「生」を魂（精神）と魄（肉体）が一致している状態と説明し、子孫の祭祀による

招魂再生を説いた<sup>75</sup>。道教が流行するのも同様の理由で、不老からの昇仙を説く。つまり帰還するための肉体が重要であり、中国では仏教による火葬はあまり浸透せず、棺・槨を用いる土葬葬礼が伝統的に行われてきたのである。こうした儒教の思想が仏教の中国展開のなかで取り込まれ、僧侶の葬法にまで影響を及ぼしたことは想像できるが、義堂周信の掩土之法のように仏教の根源である釈迦の葬法を模倣しないという行為は、特殊な事例と見たほうがよいであろう。

また中国古代の儀礼を記す『儀礼』には、埋葬するまでのあいだ殯を行なうため、棺のまわりに木を積み上げ泥で塗り固めるという行為が見られるよう<sup>76</sup>。今後、古代中国の「儒葬」の詳細な検討とともに、中世禅僧における儒教の影響の実態を知る必要があるだろう。

なお、先の儒葬で用いられた石灰や隙間のない構造は、蘭溪道隆墓の石卵内の様相とも共通する。これは、蘭溪の墓葬が中国仏塔地下遺構を起源とする僧墓を継承しているためで、模倣した中国伝統墓葬である儒葬の影響が出ているものと解釈される。この蘭溪墓は火葬骨が埋葬されており、なおかつ室構造を有しているのであれば、地下式坑の起源は、蘭溪以下の火葬を用いる禅僧墓の地下遺構にあると見るべきである。

## 小結

ここまで見てきたように、近世に発見された中世禅僧墓は石櫃や

靈骨器を納める槨・室構造が用いられており、覺園寺所蔵石櫃の形状から中国仏塔地下遺構や中国禅僧墓の方式が、確実に日本に伝えられていることを指摘した。また土葬と見られる義堂周信の葬法は、儒教の影響が強い特別な例であり、中世禅僧墓を地下式坑と関連づけるのであれば、蘭溪道隆墓の室構造を主軸に考えるべきと説いた。地下式坑の構造は、中国仏塔地下遺構の横穴式室構造に酷似するが、その発生には漢代に成立する中国古代王侯墓の模倣があり、中国古代王侯墓の成立には儒教の影響があった<sup>77</sup>。つまりこの構造の根源には儒葬がある。

義堂周信の葬法はおそらく直系の儒葬を意識しているが、当時の需要が高かったとは思えない。これに対し、事例が多かったのは、僧侶の用いる中国仏塔地下遺構を経由する室構造である。現在のところ、僧侶の墓葬にこの形式を採用した実例は見当たらないが、中世の日本において地下式坑の普及に関与したのは、僧侶の墓葬であったと考えたい。

なお、十四世紀に出現したとされながらも、十五世紀からの発生とされ、十六世紀中葉まで隆盛したとする地下式坑の変遷は、鎌倉時代後半より増大する日中間の僧侶の交流の盛衰とも重なるように感じられる。地下式坑の出現に関する「突発的な外的要因」とは渡来僧の来朝であり、初期の単発的な中国伝来の僧墓の造作があり、その後の入元・入明僧の増加と、日本国内での僧墓の継承と事例増加が重なった時、地下遺構の隆盛が起きたのではないだろうか。

### 三、やぐら発生に関わる中国の影響と石窟遺構

中国に淵源を求める遺構のひとつにやぐらがある。やぐらとは鎌倉を中心とした地域に分布する、横穴式の中世墳墓および供養施設と考えられる遺構である。崖面に穿たれた「窟」形態を最大の特徴とし、およそ十三世紀後半から十五世紀後半まで存続した遺構と認識されている。現代まで開口している例が多く、その数は二〇〇〇例にまで達すると推定されており、いまだ全容は把握されていない。また後世に改変されたものも多ことから、研究は困難をきわめている。

そうしたやぐらの代表例のひとつに、浄光明寺の綱引地蔵やぐらがある。浄光明寺は建長三年（一二五一）創建の泉涌寺末寺院であるが、背後の山稜頂上付近の平場に正和二年（一一三三）銘の石造地蔵菩薩を安置する大型のやぐらが存在する。またこのやぐらの上は山稜の頂部となり、鎌倉末から南北朝期の様相を呈する宝篋印塔が立っている。

このやぐらと山稜を断面図で示したのが図33である。羨道・玄室で構成され、直立する壁によって方形に形成されている玄室内部の中央に地蔵菩薩が安置され、その直上に宝篋印塔が位置するが、この姿は中国仏塔と地下遺構の構造に近似してはいないだろうか。当然ながら仏塔地下遺構は地下に建造されスロープや階段で地上と繋がる構造であるが、塔の直下に舍利を埋納するのが舍利塔本来の構造なのであれば、綱引地蔵やぐらも構造上の問題はない。第二節

で検討した地下式坑と同様、やぐらも仏塔地下構造と類似した構造であるならば、その淵源は同じと言えるのではないだろうか。この疑問をもとにやぐらの起源について検討を行いたい。

## 1. やぐらの基礎的情報

やぐらの研究史は田代郁夫氏、狭川真一氏などによってまとめられているが、基礎的情報については河野真知郎氏が詳しい<sup>7)</sup>。

名称の初出は『鎌倉攪勝考』で、地元民の呼称とする。武器を収めた倉としての「矢倉」は当て字で、「いわくら」の訛ともいわれるが語源は未詳である。中世史料での「窟」がこれに当たる可能性もあるが、確証はない。

分布はおよそ南関東に限られ、鎌倉を中心に六浦や逗子地域、横須賀および三崎といった三浦半島と、館山市や千倉町(南房総市)といった房総半島南部に集中する様相が認識されている。安生素明氏の集成では南関東で三〇三遺跡一四九三例が提示されているが<sup>7)</sup>、分布数の中心は鎌倉であり、鎌倉をとりまく山稜部には群をなす造営が見られる。参考までに記すが、大三輪龍彦氏が踏査したやぐらは鎌倉だけで一一九一例が確認されており、埋没した事例を含めれば二〇〇〇例にまで達すると推定されている<sup>8)</sup>。

なお鎌倉市域外でも北方と西方の分布は少ない。西方では境川を越えた藤沢市にわずかに見られるのみで、西限は二宮町<sup>1)</sup>、北方では横浜市本牧<sup>2)</sup>の例があり、川崎市麻生区<sup>3)</sup>の例が北限となる<sup>4)</sup>。

このほか全国には「やぐら」の可能性のある遺構が知られ、宮城

県、福島県、山梨県、富山県、石川県、大分県などで事例が報告されているが、単体である例が多く全国総数の一割にも満たない。性格なども含め、同一であったか検討を要する事例ともいえよう<sup>5)</sup>。

やぐらは山稜部に立地し、山腹を崖状に整形し造営される。三浦半島では第三紀層凝灰岩を基層とするため、掘削可能な崖面すべてに存在するわけではなく、鎌倉中でも分布の片寄りがあり、「百八やぐら」など二〇〇基以上が群集する地域もあれば、谷戸奥に単立で残存する例もある。

形態は玄室と羨道部で構成され、前庭部を持つ例もある。玄室の形状は方形ないし長方形を基本とするようで、壁面は直立し、平天井や舟底形天井が見られる。前面に扉を付設したり、玄室内部に漆喰を施したりといった痕跡が見られるほか、「朱垂木やぐら」では、天井に赤色顔料で垂木を表現しており、墓堂や仏堂という印象を与える。内部には納骨の墓塔として石塔を安置する例が多いが、壁面に線刻や浮彫にする例も見られ、同様に仏像や種字を刻む例もある。

田代郁夫氏は、やぐら内の在銘石塔類から発生を十三世紀後葉と見ており、十三世紀末から十四世紀前葉を最盛期とし、応永年間を第二のピークとする<sup>6)</sup>。出土陶磁器の年代からも十三世紀後半を主体とするが<sup>7)</sup>、遡って中葉頃という資料も若干ながら見出される<sup>8)</sup>。墳墓使用の陶磁器は威信財としての古器を用いる傾向も見られることから、狭川真一氏の言うように、広い意味で十三世紀後半とするのが妥当であろう<sup>9)</sup>。一方、やぐらの衰退は十五世紀後半ごろとな

る。これは都市の解体とも時期が重なることから、造営の主体が都市の支配者層であった可能性を裏付ける証左ともなるだろう。

やぐらの発生に関連しては、大三輪龍彦氏による仁治の禁令の指摘がある。考古資料の時期差も指摘しながらも、仁治三年（一二四二）に発布された大友氏府中の墓所禁令が幕府法によって鎌倉にも適用されたことを契機として、平地墓が山稜部の窟に移されたとの見解が示された。なお造営の背景には「土木技術を取り入れた律宗文化及び土木技術を内包した律宗集団」の関与を指摘している。

これに対して田代郁夫氏は、出土遺物からやぐらの発生を十三世紀後半とした上で、仁治禁令と四〇年の隔たりがあることを指摘し、禁令の精神的な意味合いが頼朝の都市構想にすでにあったものといっている。また造営の背景には律宗だけでなく禅宗も関与していたとし、総じてやぐらの発生の背景には宋風文化の影響があったと説明する<sup>1)</sup>。この田代氏の考えの根底には「四分律宗（主として泉涌寺を中心とした北京律）、南宋臨濟禪、曹洞禪」などは中国の宋において宗派に差はなく、導入文化に共通性があるのは当然で、これは伽藍建築などに限らず言えることと説く大森順雄氏の指摘がある<sup>2)</sup>。同様に大森氏の影響を受けた安田三郎氏は、やぐら発生の契機を中国石窟文化に求める見解を示しており、のちに大三輪、田代両氏も同種の意見を述べている<sup>3)</sup>。この宋風文化の影響が強くなる背景として田代氏は、鎌倉には渡来僧を開祖とする寺院が多いこと、多量の中国陶磁器の輸入・往来と、それに関わる商船に便乗した人々などの影響があったことなどを理由に挙げている。

## 2. 覚園寺地下遺構とやぐら

以上、やぐらの基礎的情報を確認した。ここでやぐらの初源を考えるために注目したいのが、覚園寺に所在する「棟立井」である。

『新編鎌倉志』（貞享二年（一六八五））には「棟立井 山上にあり。相伝ふ弘法此井を穿て、閼伽水を汲と云ふ。鎌倉十井の一なり」とあるように、近世において鎌倉の代表的な井戸「鎌倉十井」のひとつに紹介された井戸であるが、初見となる『鎌倉日記』（延宝二年（一六七四））には「山根ニハフムネノ井アリ」とある通り、石造の切妻屋根に覆われ、破風が手前を向いている横井戸風の特徴的な井戸である（図34）。一見、近世以降の所産と思われるが、近世前期の時点で伝承とともに認知されていることから、近世以前から存在した可能性は高いものと判断される。ではなぜこの場所に屋根が掛けられた井戸が存在するのか。この井戸が存在する場所は、覚園寺本尊を奉る薬師堂の裏手西の崖際で、歴代墓所の手前という点も不自然である。子院に付属する井戸の可能性もあろうが、石造の屋根を掛ける造形の井戸は他に例を見ず、理由も判然としない。

ここで想起されるのは、第二章で検討した覚園寺歴代墓一〇号塔の存在である。この塔は建長寺開山塔の特徴的な格狭間を模倣する唯一の無縫塔であることから、建長寺開山である蘭溪道隆に近い僧侶の墓塔であることを指摘した。また塔の型式から建長寺開山塔からそれほど時をあけず造立されたことを指摘し、覚園寺開山入寺以前の前身寺院に造立されたことを想定した。



第二章でも述べたように、建長寺開山塔は本来昭堂内に安置されていた可能性があり、昭堂の地下には近世期に発見された「石卵」を納める地下遺構が存在することは前節でも述べた。同じ型式の墓塔が二基存在し、一方の塔に地下遺構が付属するのであれば、同様の遺構がもう一方にも存在すると見るべきであろう。つまり、覚園寺境内には覚園寺歴代一〇号塔に対応する地下遺構が存在し、それが「棟立井」であった可能性がある。

そうであるならば切妻屋根にも説明が付く。中国仏塔地下構造には中国伝統墓葬から影響を受けた、屋根型の天井をもつ室構造が散見されるのである。蘭溪が中国伝来の地下遺構を採用していた場合、塔形を模倣するのと同じように地下遺構も模倣したことだろう。ちなみに蘭溪道隆墓の蓋は「盤陀石」であり、平らでない石という意味がある。

また「覚園寺絵図」には覚園寺歴代墓が描かれているが、現在の歴代墓は絵図とは全く異なる位置に存在している。このことから元来棟立井の上に塔が立てられていたが、のちに移動されたのだと考えても不自然ではあるまい。塔の移動が行われ、地下遺構の存在が忘れられた時代に、何かの拍子に発見された遺構が空間を有し、湧水で満たされていた場合、それは井戸として見なされるのではないだろうか。

なお、建長寺開山塔および昭堂は境内の高地に所在する。これに対し覚園寺の墓所と「棟立井」は谷戸の奥の山裾に所在する。どちらも高僧を葬る場所としては最適であるが、「棟立井」の立地は鎌倉

という土地柄から湧水の影響を受けやすい。あるいはこれが、地下遺構が高所へ移動した原因なのかもしれない。つまり、鎌倉の谷戸内奥で地下遺構を造作しようとする、湧水により本来の機能を果たせなくなることから、谷戸内奥の高所へ造作場所を移動した結果が、「やぐら」発生の一因となるのではないだろうか。

なお、山腹に室構造を成形するに当たって、本来の目的が変わってしまう心配はない。舍利塔であれ、墓塔であれ、本来の目的は塔の直下への埋納施設設営である。そのためスロープや階段を排除した横穴式の岩窟でも意味は変わらない。また綱引地蔵やぐらのように、その上部となる山稜頂部に塔を造立すれば、山裾すべてが塔の軒下となり、群としての追加造営が可能となるのではないだろうか。山稜上に塔を建てる様相は第二章で述べるが、やぐらを有する山の上に塔が建てられる事例は全国のやぐらでもいくつか報告されており、石川県滝ヶ原やぐらや千葉県千手院やぐらなどはその確実な例と言えるだろう。こうした山上の塔とやぐらをセットとした構造は、中国仏塔構造に酷似する。憶測的な部分も多いが、やぐらの発生の起源として提示したい。

### 3. 崖墓・崖葬墓 — 四川省の葬法 —

さて、ここまで鎌倉の特徴的葬法やぐらに注目し、その起源について考察を重ねた。やぐらの構造は中国仏塔地下遺構に類似し、系譜上に置くことができるものと考ええる。

他方、やぐらの系譜には中国石窟文化の影響が示唆されているこ

とは無視できない。たしかに敦煌や龍門などの石窟寺院には、やぐらに非常に似た構造の岩窟が数多く開削されている。しかし、これらは岩壁に形成された寺院であり、そのほとんどは墓葬的性格を有するものではない点は注意すべきである。ただ、なかには「瘞窟（えいくつ）」や「瘞埋窟」と呼ばれる僧侶の埋葬岩窟も存在するため、今後注目していくべきなのはそういった部分であろう。

しかし、中世にこの土地に赴いた僧侶がどれだけいたであろうか。行ったこと、あるいは行かなかったことを証明する史料はほぼ無い。ならば、僧侶の見た可能性の高い岩窟があれば検討の対象になるのではないだろうか。それが四川の崖墓である（図35）。参考までに概要を報告したい。

### 崖墓

崖墓とは、岩山の山腹や崖面を掘削して構築された中国の横穴式墳墓である<sup>94</sup>。古くは前漢代に中国の山東地域を中心に構築された大型の崖墓が存在し、墓道・羨道・前室・後室・回廊など数十室を有する全長三〇m〜二一〇mの大規模構造となる。これらは被葬者から魯国・梁国・楚国・中山国などの王侯墓であることが判明しており、劉氏漢室と血縁関係にある諸侯国で確認できることから、漢室の独占的な墓制として開始され、諸侯国を中心に特別に発展した墳墓と考えられている<sup>95</sup>。

これに対し、五m〜一六mほどの規模を通過とするのが四川省を中心とする巴蜀地方の崖墓である。南接する雲南・貴州の北部に及ぶ分布が確認されており、その数は二万基におよぶと言われる。

横穴墓との関係性から中国崖墓研究をまとめた池上悟氏によれば<sup>96</sup>、崖墓の規模は全長五m以下の小型墓、全長一五m以下の中型墓、全長一六m以上の大型墓に分類されるといい、最大で全長三四・七mを測る。構造は以下の六類に区分されており、後漢代晩期の二世紀中・後半代を盛行期として五〇〇年以上にわたって構築された遺構と認識されているが、四川省の一部では宋・明代まで造営される例もあるという<sup>97</sup>。紀年銘資料からは後漢永平八年（六五）から南宋元嘉一九年（四四二）までの例が確認できる。

- ① 小型墓を中心として玄室のみを構築した単室墓
- ② 中型墓を主体として主軸に沿って二室を構築した双室墓
- ③ 中型・大型墓に認められる主軸に沿って三室を構築した三室墓
- ④ 主軸にそって三室以上を配置した多室墓
- ⑤ 主軸に沿って配置された複室と側室・耳室で構成される墓
- ⑥ 大型墓で並列して構築された複室配置の墓の前に祭祀空間としての前堂を有する構造の前堂后穴墓

初期の崖墓は、成都周辺に見られる少数規模の小型単室墓であったが、後漢中期には構築数・分布範囲とも拡大し、大型崖墓も出現する発展期を迎える。後漢晩期には分布・構築数・種類ともに最大となり巴蜀地方の全域から雲南・貴州北部にまで及ぶ。最大規模の崖墓が出現するのもこの時期である。蜀漢期ごろより規模は小型化する傾向となっていく、三世紀後半から五世紀前半代にかけて狭まった分布は、最終的に成都を含む四川盆地の西北一体へと収束されるといった変遷をたどる。

なお、これら崖墓には同時代の磚室墓、石室墓と構造・副葬品の面で共通するところが多いことが指摘されている<sup>99</sup>。四川盆地内は平地と標高四〇〇mから八〇〇mといった中国他所に比べて低い丘陵で成り立っている。丘陵のうちいくつかは平野の中に細長く連続的に伸びており、この地形に従うかたちで地下に構築する磚室墓・石室墓に代わって、横に掘削する崖墓が構築されたものと考えられている<sup>100</sup>。

### 崖墓

また崖墓のほかに、中国南部に展開した特殊な葬法として崖墓がある。この葬法は、江西省・浙江省・福建省境の山間部、湖北省・四川省境の山地、広西壮族自治区で確認できるといい、崖面に形成された天然洞窟や割れ目を利用して木棺を納める葬法を言う<sup>101</sup>。類型として崖面に形成された天然の段上に木棺を安置する例、崖面に木棺規模の洞穴を人工的に掘削して安置する例などがあり、四川省成都平原南部に位置する樂山地区では、崖面に杭を打ってその上に木棺を安置する崖穴懸棺葬と呼ばれる葬法も確認されている<sup>102</sup>。

これらは副葬品から、商・周代から明・清代に至るおよそ三〇〇〇年に及ぶ年代幅が提示されており、近代における残存例も確認されている。天然の洞穴に船形木棺を安置する例がもっとも古く、秦も含む漢代〜隋唐代で人工的な墓室の形成と懸棺葬が出現し、木棺も船形木棺と並行して箱形木棺の使用が見られ、追送も確認されるようになる。宋・明代では、人工墓室と懸棺葬に箱形木棺を用いる形態が主流となり、以降、清代ごろには家族の合葬などの変遷を経

て、近代まで受け継がれて行く。なお、四川盆地樂山地区では、自然の崖穴を利用する例や自然の崖壁ないしは平坦面を利用する例、既存の崖墓を利用する例などがあり、多様な変化を見せるといえる。

以上のように、中国南部でも特に四川省を中心として、崖面に横穴式の墳墓を形成する文化が存在する。池上悟氏によれば、崖墓は構造・立地の類似から日本における横穴墓の源流として、明治・大正という早い時期には日本の学界で注目を集めていた遺構であるようだが、構造的差異から現在では問題にされることがないという<sup>103</sup>。たしかに類型の多様さから見れば構造的差異は多く存在するが、そもそも崖面に形成された横穴式の墳墓という性格や規模の面などは、やぐらと共通性があり、単室墓形式のみを見れば構造も類似すると言える。

また崖墓と重複する地域で見られる崖墓の中には、洞窟を開削して木棺を安置する事例があるが、崖一面に掘削された穴は、鎌倉で見られる内部壁一面に小部屋を設置する通称アパートやぐらを彷彿とさせる。

こうした事例が残る四川省は中国南部の奥地に位置するため、中世鎌倉とは無関係のように感じられるが、菅原昭英氏によれば、入宋僧が出会い親しく接触した中国人は、四川省出身者が多いという<sup>104</sup>。初期においては覚阿や榮西、能忍が四川省の僧侶と関わる記録を残し、俊芴（一一六六・一一三七）は四川僧から舍利を得ている。また道元（一二〇〇・一二五一）は修行中多くの四川僧から教

えを得たと伝えるなど、早い時期からの交流が知られる。

日本から中国へ入った僧侶が活動したのは、多くは明州（慶元府、寧波）や杭州（臨安府）などを中心とした江南の地であり、この地は四川僧の活躍する場でもあった。その最盛期が宝慶二年（一二二七）から宝祐二年（一二五四）ごろにかけての期間で、南宋禅宗界を統べる四川僧・無準師範（一一七七・一二四九）が阿育王山の住持になったのを契機とする。このうち一二四一年から一二四五年までの数年間はその最盛期であり、無準師範が径山、石田法薰（一一七一・一二四五）が靈隠寺、癡絶道冲（一一六九・一二五〇）が天童山・阿育王山、北礪居簡（一一六四・一二四六）が浄慈寺と、南宋五山の住持がすべて四川省出身という時期も存在した。この時期は円爾（一一〇二・一二八〇）の入宋期間にも当たり、円爾は径山の無準師範の許で、無準より大きな期待を寄せられる僧となる。のちに帰国した円爾は京都東福寺の開山に請せられ、以後入宋しようとする多くの日本僧を支援し、無準師範の許へ送り込んだことが知られる。

ただ、ここに四川省の崖墓を持ち込む系譜は無い。第一に四川僧が崖墓の文化を伝えていたのなら、明州・杭州に崖墓の系譜につながる遺構があるはずである。第二に南宋禅僧界を統べる四川僧・無準師範の信を得るほどであった円爾ならば、師の持つ文化を京都東福寺に持ち帰っているはずである。しかし、このどちらにおいても関連される遺構は存在しない。杭州には岩壁を掘削した名勝地「飛來峰」が著名であるが、墳墓という観点から除外される。また京都

にもやぐら様の遺構類例は報告されていない。そもそも、この四川僧全盛期の時代に四川崖墓文化はほぼ衰退している。類例が存在しないのは崖墓が失われつつあった文化だったためであろう。

その点で他とは来歴の異なる僧侶が、四川僧・蘭溪道隆である。

蘭溪道隆（一二一三・一二七八）は、四川省に生まれ、成都の大慈寺において出家し、江南地方に出る十三歳までを四川で過ごしている。江南各地では無準師範・癡絶道冲・北礪居簡・無明慧性（一一六二・一二三七）ら参じた僧侶はいずれも四川僧で、その後日本へと渡ったことが知られる。故郷で崖墓を目にする機会は多かつたことだろう。その後の鎌倉への渡来僧には無学祖元や兀庵普寧など四川僧に学んだ僧侶が多いが、四川出身僧は見当たらない。崖墓を何らかの理由で鎌倉に造作するなら、蘭溪道隆において他にはいないと考える。

ただし、鎌倉への崖墓導入が蘭溪とするならば、生前に事例を残していたと考えねばなるまい。墓葬は仏塔地下遺構を起源とする葬法を用いていたであろうから、蘭溪が見送った人物の葬法にやぐらを使用したとは思えない。四川での崖墓の転用例を知りたいところだが、仏堂や座禅窟などの用法で生前の造営があったものと考えたい。

### 小結

以上、やぐらの研究史をふまえ、建長寺開山塔の型式と地下構造から、覺園寺棟立井が中国仏塔地下遺構の系譜を引く地下遺構であ

る可能性を示した。また棟立井の立地と湧水の危険性から高地である崖面に移動した結果がやぐら発生の要因であることを述べ、浄光明寺綱引地蔵やぐらに見られる山上の塔とのセット構造が、中国仏塔構造と似る点を指摘した。また類似する遺構として、四川省の横穴式墳墓である崖墓について考察し、中世の日本と四川僧の交流から、崖墓の伝播経路を検証した。

やぐらと地下式坑は、発生を同じ時期、地域に求められている遺構である。その起源は中国仏塔地下遺構にあり、僧侶の日中間交流によってもたらされたものと考ええる。この構造が鎌倉という湧水の多い土地に適合した結果が、崖墓などをモデルとしたやぐらであり、関東ローム層という強い地盤と台地の土地で継承された結果が地下式坑と考えたい。(図36)。

ちなみに「崖」は中国語で「ya」と発音する。やぐらの語源は江戸期の時点ですでに不明であり、「矢倉」は当て字である。また「いわくら」が訛ったとの説もあるが、例えばこの語源が中国語であった可能性はないだろうか。「gura」に当たる漢字は見出せないが、渡来僧が文化を提供した場合、その名称は中国語であったことだろう。その言葉が鎌倉に普及し、後世の人々が、語源を聞かれた際に苦心して「矢倉」や「いわくら」などの字を当てたという想像もできよう。

## おわりに

ここまで見てきたように、第二章で検討した建長寺開山塔を発端に、墓塔地下遺構の存在と中国仏塔地下遺構との関連性から、仏塔地下遺構の変遷と系譜を追い、建長寺で近世に発見された記録の残る中世禅僧墓の系譜を中国仏塔に求めた。また義堂周信の「掩土之法」から、従来指摘のある地下式坑起源説の再検討を行い、仏塔地下遺構と儒葬といった中国禅宗への伝統文化の浸透を関連付け、指摘を行なった。さらに地下式坑と同様に鎌倉に起源を求める葬送関連遺構「やぐら」に目を向け、浄光明寺綱引地蔵やぐらや、覚園寺棟立井といった現存遺構から、中国仏塔を起源とする地下遺構の影響と発生背景を考察した。最後にやぐらの起源の一端になり得る遺構として、中国四川省の葬法を紹介し、鎌倉と四川を繋ぐ要因の考察を行った。

第一章で述べたように、鎌倉の石造物導入には西大寺を中心とする南都律宗の影響が強く残ることは、石造物の現存地域や銘文・文献史料から見ても明らかである。ただ、ここには泉涌寺を中心とする北京律寺院の影響も無視できず、二者は東国の地に進出した律宗として協力し合う関係であったと考えられる。

また第二章で述べたように、禅宗寺院建長寺の開山塔は鎌倉に残る石造物の中でも最古期に位置し、南都律の石造物に勝るとも劣らない技術を用いていることが確認できた。この塔に造形の酷似した

唯一の塔が北京律寺院である覺園寺に所在することは、建長寺開山である蘭溪道隆が来日する過程で発生した泉涌寺僧との交流が影響しているものと考えられ、以前より指摘のある北京律と禅との宗派間交流が、石造物においても見られることを明らかにした。当然、それらの石造物の造立には、南都律の石材加工技術が関与していると見るべきだろう。

さらにやぐらの起源にも南都律の技術のほかに、禅と北京律の交流が背景にあることは以前から指摘があったが、中国仏塔から始まる地下遺構は中世禅僧墓の遺構にも受け継がれ、そこから派生するかたちで地下式坑ややぐらといった遺構が発生する可能性を、具体的な遺構を用いて指摘することができた。鎌倉の石造物文化はそうした幾重にも重なる宗派間交流によって展開し、また鎌倉において融合した文化は、やぐらや地下式坑といった新たな文化を発生させるのである。

## 第一部第三章 補注

- 1 館隆志 二〇一「蘭溪道隆の霊骨器と遺偈」(『駒澤大學禪研究所年報』第二十三號)
- 2 江崎武 一九八五「中世地下式壙の研究」『古代探叢』、田代郁夫 二〇〇〇「下鶴間公所横穴群について―葬送儀礼における位置づけ―」『大和史研究』二六
- 3 以下の文献の埋葬施設構造を参考とした。(黄曉芬 二〇〇〇『中国古代葬制の伝統と変革』勉誠出版)
- 4 中村元ほか編 二〇〇二『岩波仏教辞典』第二版 岩波書店
- 5 加島勝 二〇〇四「中国・シルクロードにおける舍利容器の形式変遷について」『中国・シルクロードにおける舍利莊嚴の形式変遷に関する調査研究』シルクロード学研究センター研究紀要 Vol.2 1
- 6 中村元 一九七四『原始仏典』筑摩書房
- 7 定方晟 一九八二『アショーク王伝』法蔵館
- 8 杉本卓洲 一九九三『インド仏塔の研究』平樂寺書店。
- 9 「丹陽人笮融起浮屠祠」「以銅為人、黄金塗身、衣以錦彩、垂銅槃九重、下为重楼閣道、可容三千余人」(『三国志・呉書・劉繇伝』)。
- また『後漢書』にも記載がある。「大起浮屠寺、上累金槃、下为重楼、又堂閣周回、可容三千許人、作黄金塗像、衣以錦彩」(『後漢書』陶謙伝)
- 10 語意に配慮し「浮図」とも記される。(『仏教語大辞典』)
- 11 村田次郎 一九八八『中国建築史叢考 仏寺仏塔編』中央公論美術出版
- 12 小杉一雄 一九八〇『中国仏教美術史の研究』新樹社
- 13 川上貢 一九六八『禅院の建築』河原書房
- 14 山崎淑子一九九七『定州静志寺・浄衆院舍利塔塔基地宮の壁画・地宮壁画としての意義と重要性』(『地下宮殿の遺宝』出光美術館)

- 15 冉万里 二〇〇四『中国・シルクロードにおける舍利莊嚴の形式変遷に関する調査研究』シルクロード学研究センター研究紀要 Vol.2 1、楊泓 二〇〇六「中国北朝・隋・唐時代の舍利塔地宮と舍利容器」『東北学院大学論集 歴史と文化』第40号。以下断らない限り地宮の基礎的理解は両氏の研究に依拠する。
- 16 「隋国立舍利塔詔」『慶弘明集』卷十七
- 17 皇帝於親以七寶箱、奉三十舍利、自内而出置於御座之案。(中略)乃取金瓶瑠璃各三十、以瑠璃盛金瓶、置舍利其内。薰陸香為泥、塗其蓋而印之。三十州同刻、十月十五日正午、入於銅函石函、一時起塔。
- 18 朱捷元・秦波 一九七四「陝西長安和耀県発見的波斯薩珊朝銀幣」『考古』一九七四年第2期
- 19 「盞頂」とは折上天井のように断面が台形状になる形の中国での名称。礼器の「盞(ろく)」のかたちに似ていることからこのように呼ばれる。
- 20 河北省正定自庖村の大業元年(605)銘石函、河北省定県の宋静志寺の塔基壇地宮埋納石函と大業二年(606)銘の銅函、北京市房山区雲居寺雷音洞の大業十二年(616)銘石函、山東省平陰県洪範池の舍利塔基壇の石函など。
- 21 小杉一雄 一九八〇『中国仏教美術史の研究』新樹社、長岡龍作 二〇〇四「隋唐期の舍利容器―かたちの変容と意味をめぐって―」『中国・シルクロードにおける舍利莊嚴の形式変遷に関する調査研究』シルクロード学研究センター研究紀要 Vol.2 1
- 22 刘友恆・聂连顺 一九九五「河北正定开元寺发现初唐地宮」『文物』一九九五年六期
- 23 山西省文物管理委员会・山西省考古研究所 一九六一「山西长治

- 唐代舍利棺的发现」『考古』一九六一年五期
- <sup>24</sup> 洛陽市文物工作隊 一九九二「洛陽唐神会和尚塔塔基清理」『文物』一九九二年三期
- <sup>25</sup> 「皇后舍所寢衣帳直絹一千匹、為舍利造金棺銀椁、數有九重、雕鏤窮奇」(釈道宣『集神州塔寺三宝感通録』卷上)
- <sup>26</sup> 甘肅文物工作隊 一九六六「甘肅省涇川縣出土的唐代舍利石函」『文物』一九六六年第三期、
- <sup>27</sup> 臨潼縣博物館 一九八五「臨潼唐慶山寺舍利塔基精室清理記」『文博』一九八五年第五期、
- <sup>28</sup> 東京国立博物館 一九九八『唐の女帝・則天武后とその時代展―宮廷の栄華』
- <sup>29</sup> 郑金星ほか 一九六一「江苏鎮江甘露寺铁塔塔基發掘記」『考古』一九六一年六期
- <sup>30</sup> 郭天鎖・王国奇 一九九二「登封嵩岳寺塔地宮清理簡報」『文物』一九九二年一期
- <sup>31</sup> 沙柳「甘肅天水市发现唐代永安寺舍利塔地宮」『考古与文物』一九九二年三期
- <sup>32</sup> 陝西省法門寺考古隊 一九八八「扶風法門寺塔唐代地宮發掘簡報」『文物』一九八八年一〇期、黄石林・朱乃誠 二〇〇三『中国考古の重要発見』日本エディタースクール出版部
- <sup>33</sup> 壁から延びる天井が中央部で最も高くなる構造。四面結頂式天井とも呼ばれる。磚で構築される場合が多いが、地域によっては切石の長材を持送式に積み上げることもある。
- <sup>34</sup> 陝西省博物館 一九七二「唐章怀太子墓發掘簡報」『文物』一九七二年七期
- <sup>35</sup> 陝西省文物管理委員会 一九六四「唐永泰公主墓發掘簡報」『文物』一九六四年一期
- <sup>36</sup> 来村多加史 二〇一三「隋唐の墓」土生田純之編『墓の考古学』吉川弘文館
- <sup>37</sup> 宿白 一九九七「定州工艺与静志、净众两塔地宮文物」『文物』一九九七年一〇期
- <sup>38</sup> 金沢陽 一九九七「定州の仏塔と塔基地宮發掘の成果」『地下宮殿の遺宝』出光美術館
- <sup>39</sup> 淮安市博物館 二〇〇八「江苏涟水妙通塔宋代地宮」『文物』二〇〇八年八期
- <sup>40</sup> 河南省古代建築保護研究所ほか 一九九一「河南邓州市福胜寺塔地宮」『文物』一九九一年六期
- <sup>41</sup> 湖北省玉泉铁塔考古隊 一九九六「湖北当阳玉泉铁塔塔基及地宮清理發掘簡報」『文物』一九九六年一〇期
- <sup>42</sup> 山東省博物館ほか 二〇〇九「兗州兴隆塔北宋地宮發掘簡報」『文物』二〇〇九年一二期
- <sup>43</sup> 乔正安 一九九七「山西临猗双塔寺北宋塔基地宮清理簡報」『文物』一九九七年第三期
- <sup>44</sup> 上海博物館 一九八三「上海市松江县兴圣教寺塔地宮發掘簡報」『考古』一九八三年一二期
- <sup>45</sup> 林士民 一九九一「浙江宁波天封塔地宮發掘報告」『文物』一九九一年六期
- <sup>46</sup> 周昃美 二〇一〇「北宋代塔形舍利莊嚴具の形式と特徴」『奈良美術研究』第9号 早稲田大学奈良美術研究所
- <sup>47</sup> 山川均 二〇〇八『中世石造物の研究―石工・民衆・聖』日本史史料研究会ほか
- <sup>48</sup> 朝日新聞社文化企画局大阪企画部編 一九九九「西遊記のシルクロード三蔵法師の道」朝日新聞社
- <sup>49</sup> 『元亨釈書』、『本朝高僧伝』
- <sup>50</sup> 原田正俊 二〇〇三「中世の禅宗と葬送儀礼」『前近代日本の史料遺産プロジェクト研究集会報告集 2001-2002』、東大史料編纂所
- <sup>51</sup> 江崎氏前掲註2文獻



- 52 舘氏前掲註1文獻
- 53 『大覚禪師拾遺録』『大覚禪師塔』。ほか、開山靈骨器発見の経緯が記された史料として建長寺西来庵に掛かる木版「開山大覚禪師石卵之中銀製靈骨器之写」と「靈骨器重製銅器收藏銘写」がある。
- 54 今泉濬 二〇〇〇「建長寺百九十六世住持義天碩信について」『鎌倉』九十五
- 55 「大日本特賜仏国師約翁和尚無相之塔銘」にある龍峰庵への徳儉分骨記事とも符合するという(『仏国師語録』)。
- 56 鎌倉市教育委員会 『鎌倉市文化財総合目録 建築物篇』
- 57 建長寺塔頭正統院 一九七五「常寂塔記」『訓註仏国録』仏国師語録刊行会
- 58 「即形地之序、鍬子下偶啓大磐二片、坦平封地、復啓磐一片、則一器儼然。斜存在于其石榔中、而銘字分明、国師靈骨器也」
- 59 影山春樹 一九六二「東福寺竜吟庵発見無閑禪師骨蔵器」『仏教芸術』四八号
- 60 『新編相模風土記稿』『仏日庵』の項。
- 61 嘉慶二年(一三八八)二月二十七日条
- 62 江崎前掲註2文獻
- 63 江崎前掲註2文獻
- 64 続灯庵境内遺跡発掘調査団 一九九〇『円覚寺続灯庵』
- 65 田代氏前掲註2文獻
- 66 谷口榮 二〇〇九「地下式坑の研究史」『中世の地下室』高志書院
- 67 中田英 一九七七「地下式壙の現状について」『神奈川考古』二
- 68 築瀬裕一 二〇〇九「本書刊行の経緯」『中世の地下室』高志書院
- 69 築瀬裕一 二〇〇六「地下式坑の分類と編年試論—中馬場遺跡他の千葉県事例をもとに—」『千葉史学』三七ほか

- 70 原田前掲註50文獻
- 71 「諸回向清規」巻五『大正新脩大藏經』八一巻
- 72 原田氏前掲註50文獻、田代氏前掲註2文獻
- 73 松原典明 二〇一三「儒葬」土生田純之『墓の考古学』吉川弘文館
- 74 吾妻重二 二〇一〇「日本における『家礼』の受容—林鷲峰『泣血余滴』、『祭奠私儀』を中心に—」『東アジア文化交渉研究』3
- 75 加地伸行 一九九〇『儒教とは何か』中公新書
- 76 吾妻氏前掲註74文獻
- 77 黄曉芬 二〇〇〇『中国古代葬制の伝統と変革』勉誠出版
- 78 河野眞知郎 二〇一三「中世都市鎌倉と「やぐら」」土生田純之『墓の考古学』吉川弘文館
- 79 安生素明 二〇〇三「中世鎌倉地域の葬送—やぐらを中心として—」『駒沢考古』二九 駒沢大学考古学研究室。
- 80 大三輪龍彦 一九七七『鎌倉のやぐら』かまくら春秋社
- 81 鎌倉考古学研究所 一九八一「中郡二ノ宮町長峰所在「やぐら」調査概報」『鎌倉考古』No.7
- 82 神奈川県教育委員会 一九八三「横浜市中区本牧荒井地区発見の中世墓地調査報告」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』25
- 83 かながわ考古学財団 二〇〇一「王禅寺通やぐら遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』125
- 84 かながわ考古学財団中世研究プロジェクトチーム 二〇〇三「神奈川県内の「やぐら」集成」『かながわの考古学』八
- 85 ①宮城県松島瑞巖寺・雄島周辺、②宮城県岩切東光寺、③福島県伊達市梁川、④山梨県山梨市隼山大黒窟・靈岩寺窟、⑤富山県氷見市菰田薬師、⑥石川県羽咋市志賀町、⑦石川県小松市滝ヶ原、⑧大分県豊後大野市緒方町の例が知られている。(西下正純 二〇一六「鎌倉の遠隔地の「やぐら」比較—形状と形態を中心に—」『文化財学雑誌』第12号)

86 田代郁夫 一九九〇「中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義」『昭和六三年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』

87 松葉崇 二〇一〇「神奈川県内に於けるやぐらの出土遺物様相―陶磁器を中心として―」『神奈川県考古』四四 神奈川県考古人会、二〇一二「神奈川県内に於けるやぐらの出土遺物様相(2)―陶磁器の年代と出土量―」『神奈川県考古』四八 神奈川県考古同人会

88 かながわ考古学財団中世研究プロジェクトチーム前掲註84文献

89 狭川真一 二〇一〇「中世墓からみた「やぐら」」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

90 大三輪龍彦一九六八「鎌倉地方のやぐら発生に関する諸問題」『物質文化11』物質文化研究会

91 田代氏前掲註86文献、一九九三「鎌倉の「やぐら」」『中世社会と墳墓』名著出版、一九九八「中世石窟「やぐら」の盛期と質的転換」『考古論叢神奈河』第七集 神奈川県考古学会

92 大森順雄一九九一『覚園寺と鎌倉律宗の研究』(有隣堂)

93 大三輪龍彦編 一九八三『中世鎌倉の発掘』有隣堂、田代前掲註

94 一九九三文献

95 池上悟 二〇〇四「日本横穴墓の形成と展開」雄山閣

96 町田章 一九七七「華北地方における漢墓の構造」『東方学報』

第四九冊 京都大学人文科学研究所

97 池上氏前掲註94文献

98 范小平 二〇〇六『四川崖墓芸術』巴蜀書社

99 羅二虎 一九八八「四川崖墓的初步研究」『考古学報』一九八八年第二期

100 池上氏前掲註94文献

101 吳春明 一九九九「中国南方崖葬的类型学考察」『考古学報』一九九九年第三期

101 池上悟氏は、「直接的な関連は想起することができない」としながらも、「四川および日本における丘陵ないしは崖面に掘削して構築された埋葬施設が、ともに横穴系の室墓を起源とした変容形として起源する点に、類似した様相を確認できる。」とする。

102 菅原昭英 一九九八・二〇〇〇「江南における四川省と日本僧の出会い」『宗学研究』四〇・四二、二〇一一「日本の禅宗にとっての中国四川省」『古代中世日本の内なる「禅」』勉誠出版

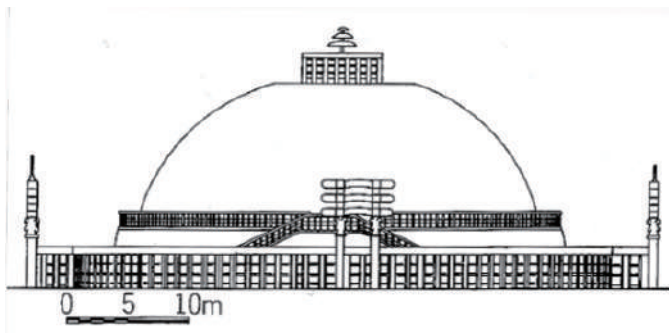


図1 サーチー大塔  
紀元前2～1世紀 インド  
ヴィディシャー



図2 塔形舍利荘嚴具 片岩・金箔  
2～3世紀 パキスタン・タキシラ  
カラワーンA-I号塔出土

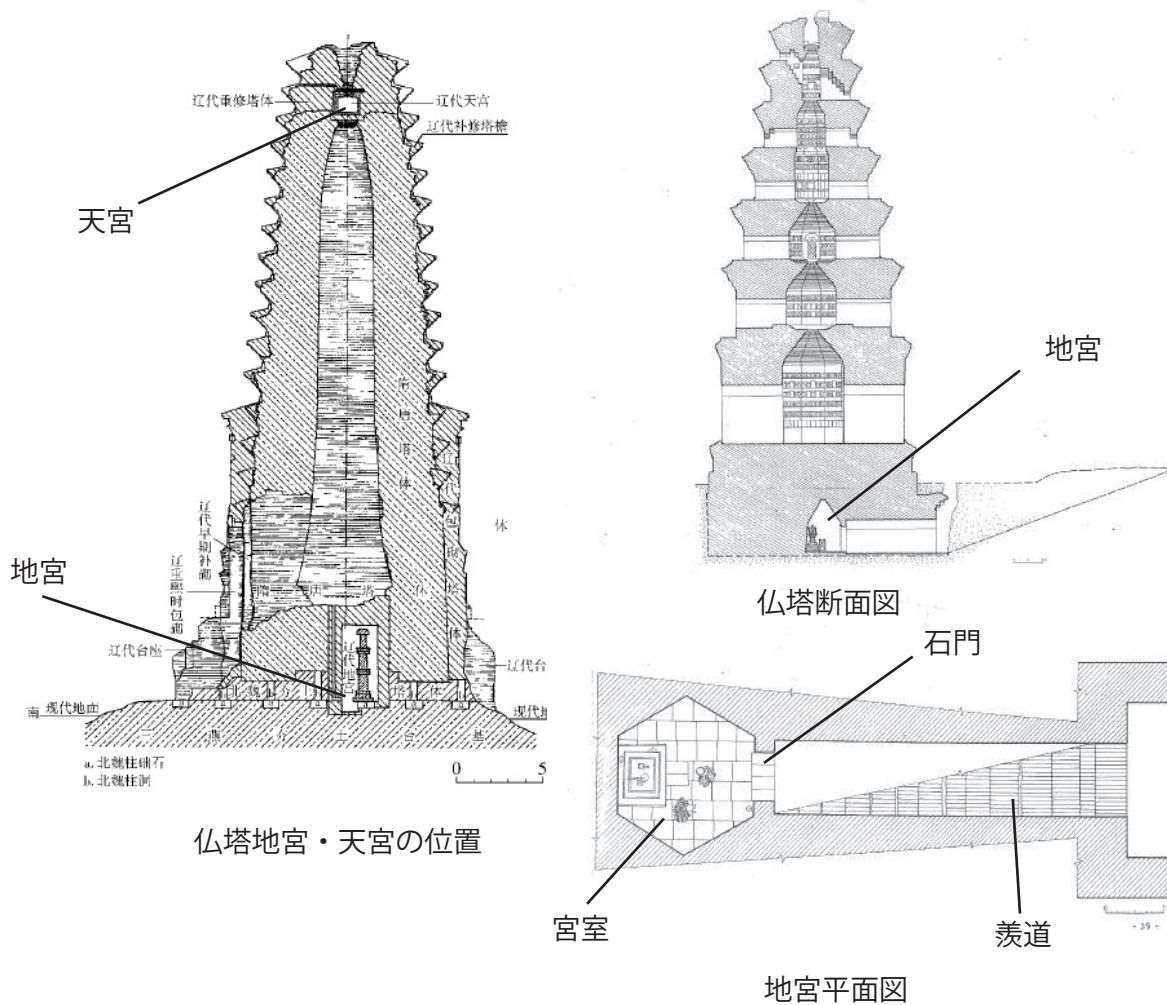


図3 仏塔地下遺構「地宮」の構造概念図

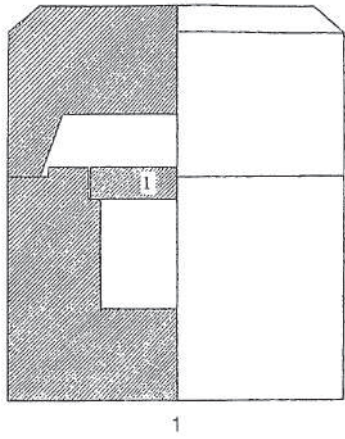


図4 神徳寺塔基地宮出土の石函（隋代）

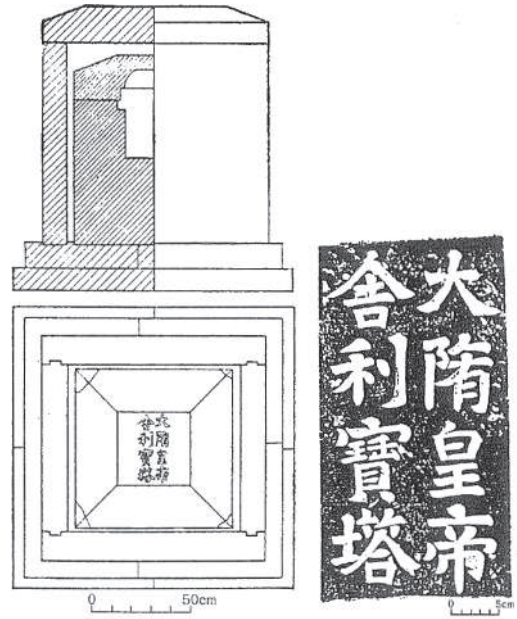


図5 山東省平陰県洪範池塔の石函（隋代）

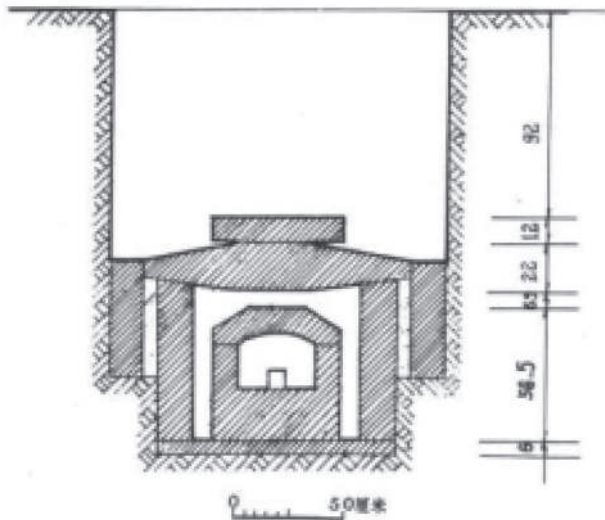
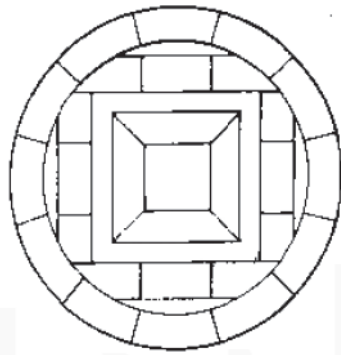


図6 開元寺塔地宮の槨構造と石函（唐代）

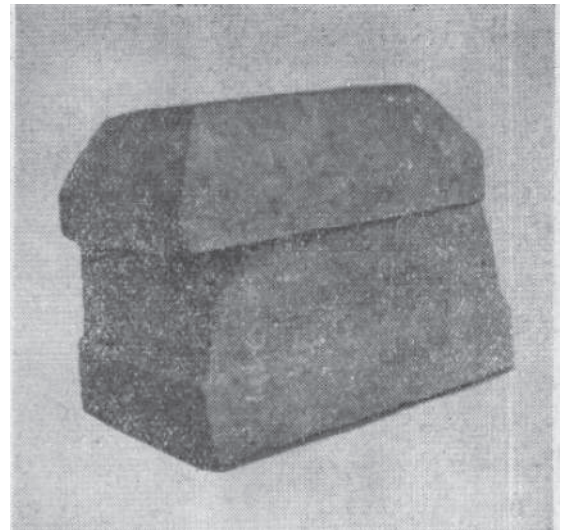


図7 山西省長治市城内発見  
地宮出土の石函（唐代）

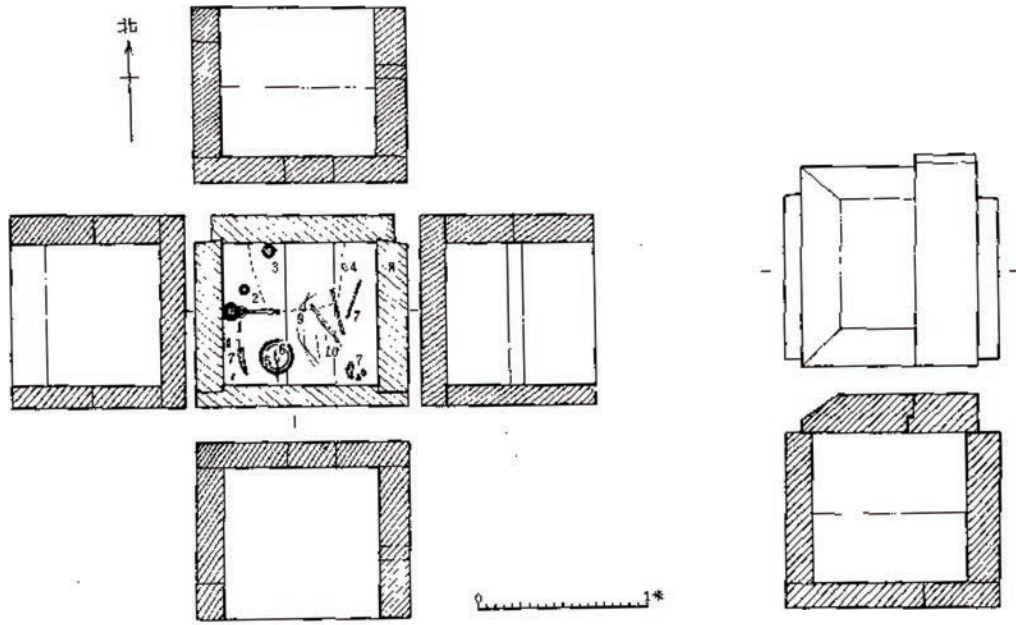


图8 洛陽龍門神会和尚塔基



图10 慶山寺塔基壇地宮出土遺物（宝帳·金棺·銀槨·琉璃瓶）縮尺不明

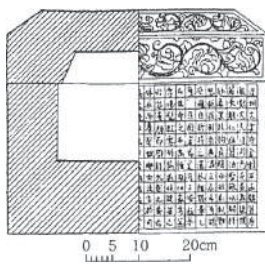


图9  
大雲寺塔基地宮

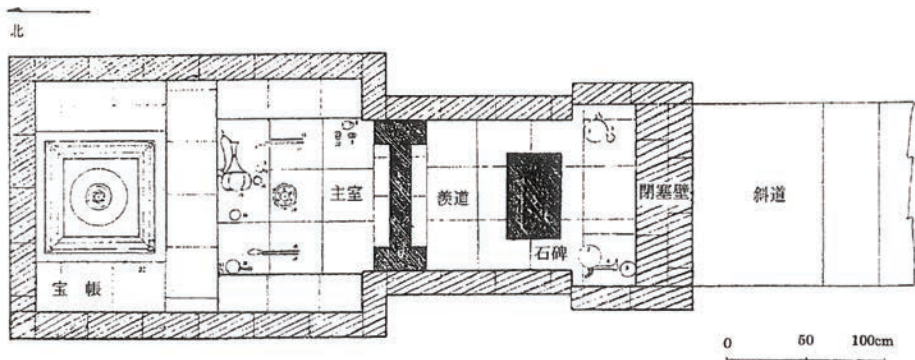
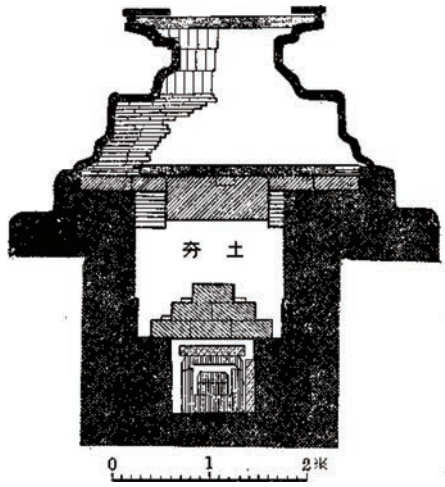
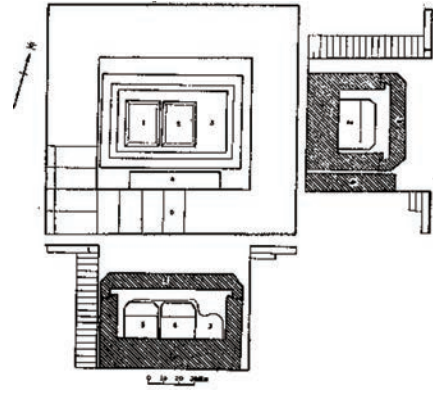


图12 慶山寺塔基壇地宮

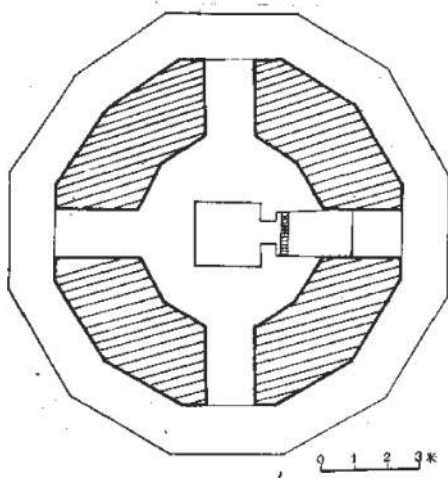


側面圖



地宮內平面圖

圖 1 1 鎮江市甘露寺鐵塔地宮



平面圖

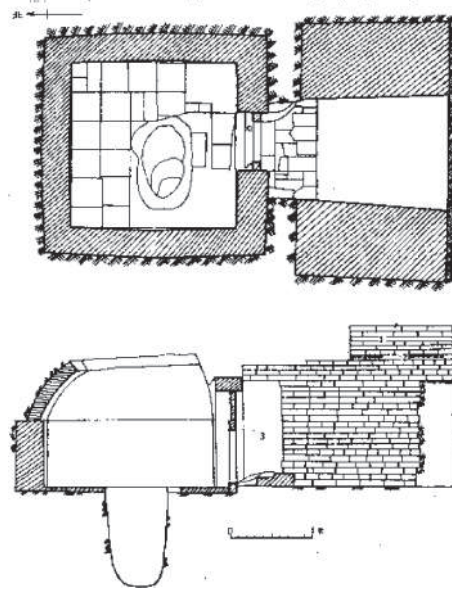


圖 1 3 嵩岳寺塔基地宮

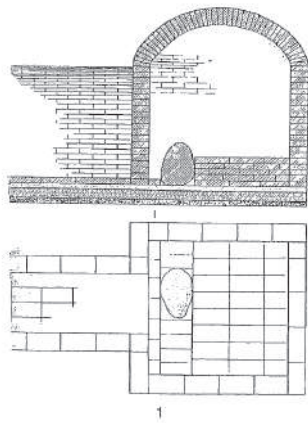


圖 1 4 永安寺舍利塔基地宮

图15 法門寺塔基地宮

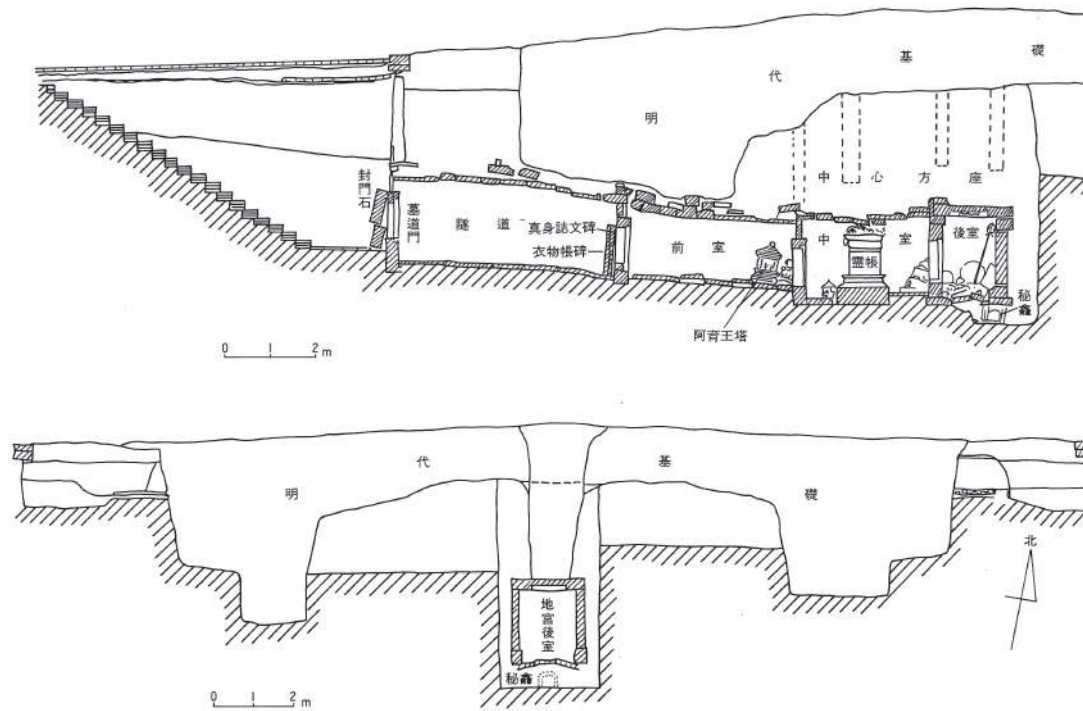
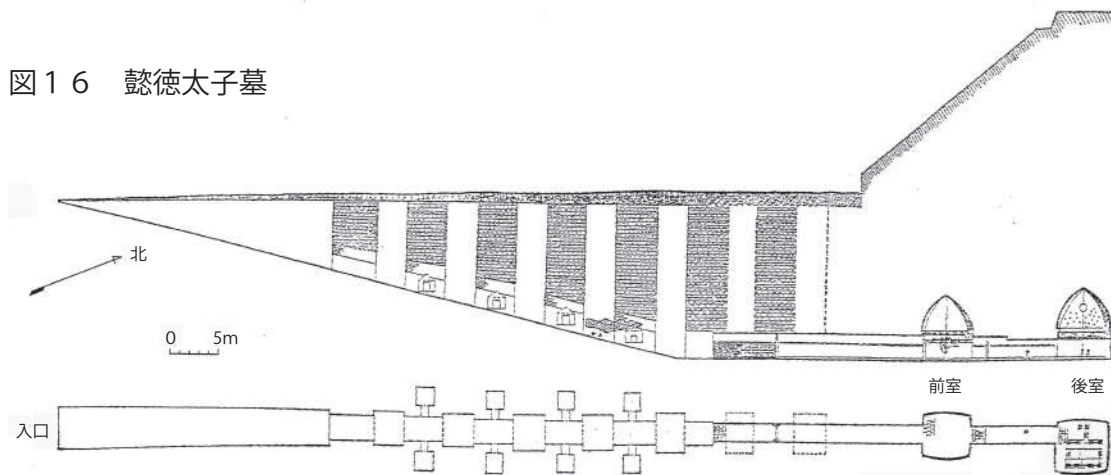
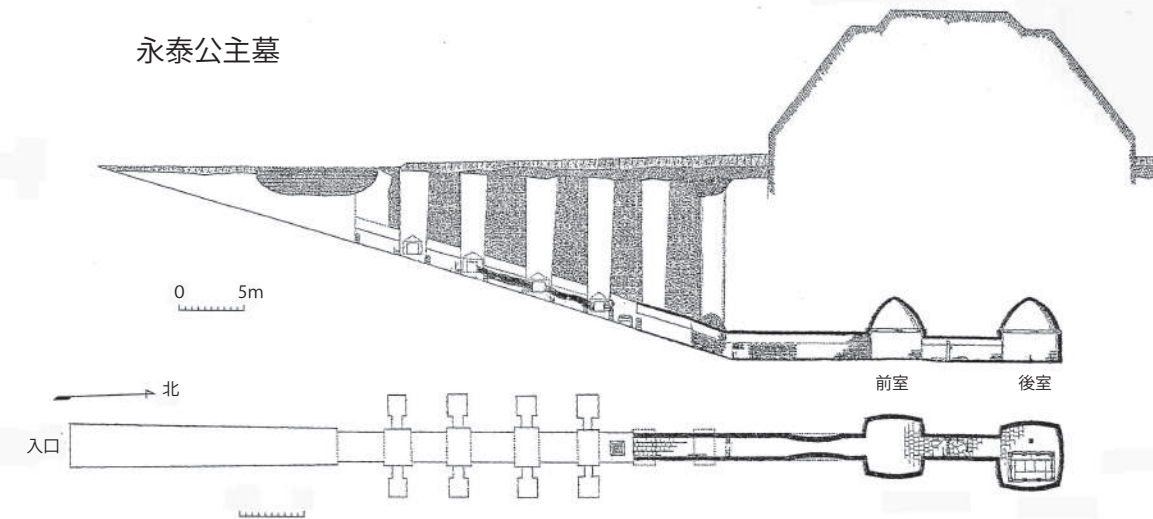
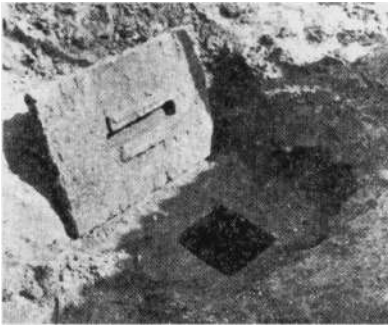
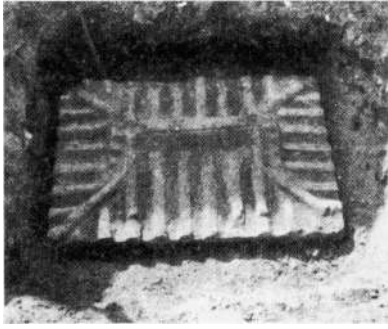


图16 懿德太子墓

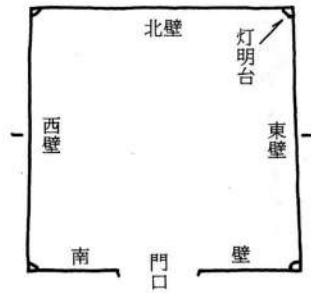
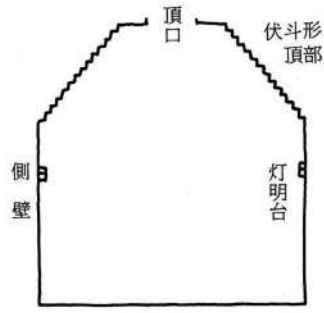


永泰公主墓

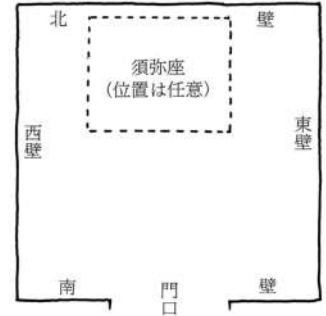
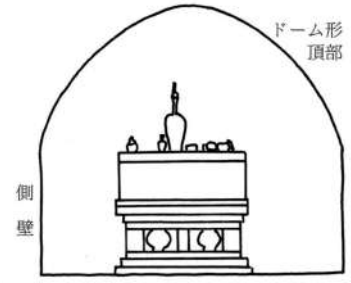




静志寺塔地宮 蓋出土状況



静志寺塔地宮見取り図



浄衆院塔地宮見取り図

図17 定州静志寺塔・浄衆院塔地宮

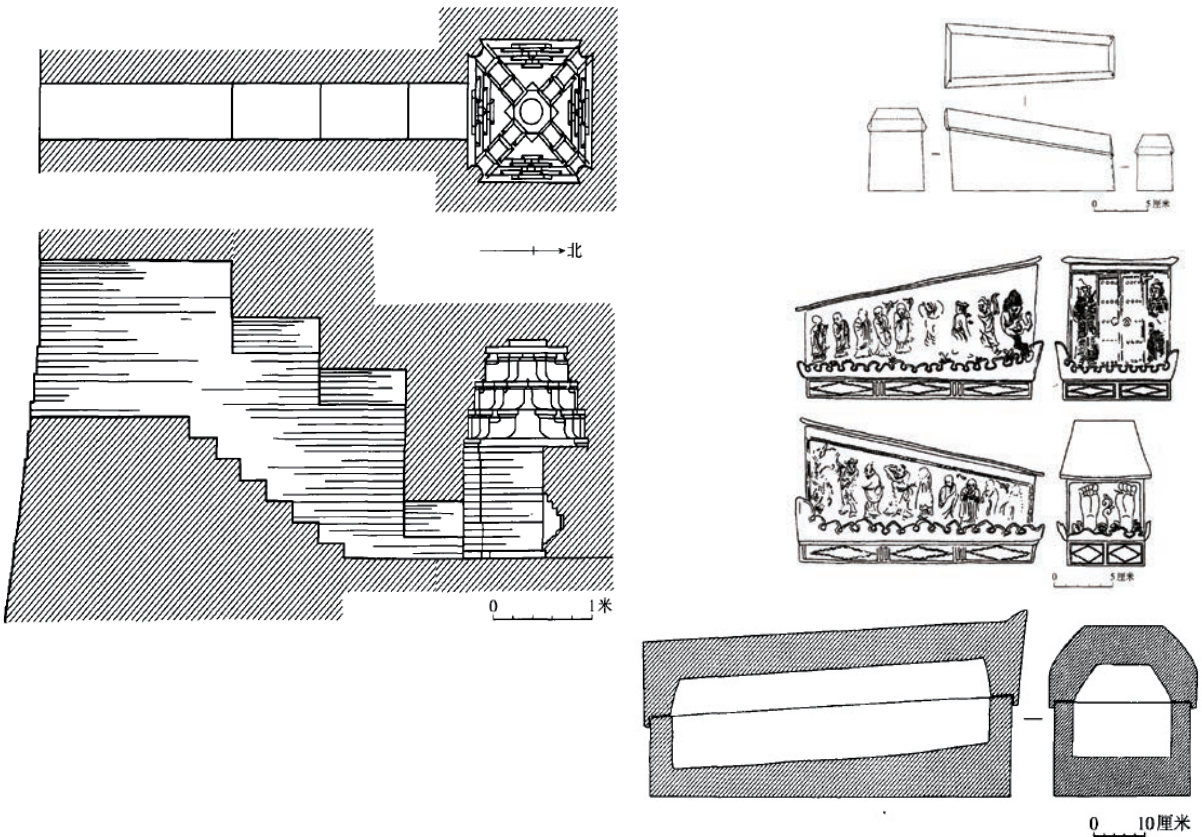
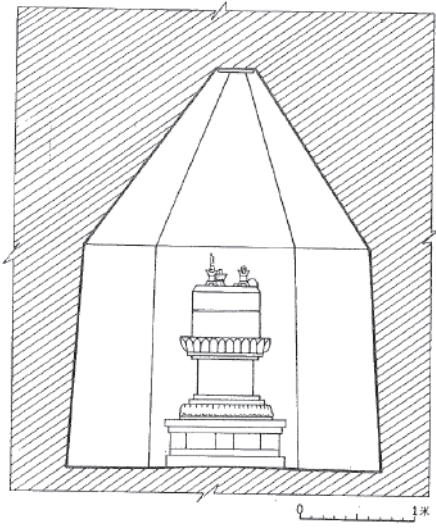


図18 漣水妙通塔地宮





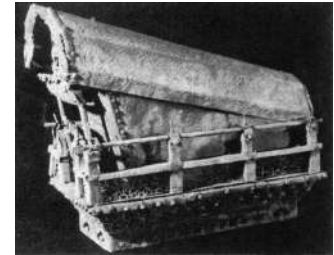
宮室内側面図



石函安置状況

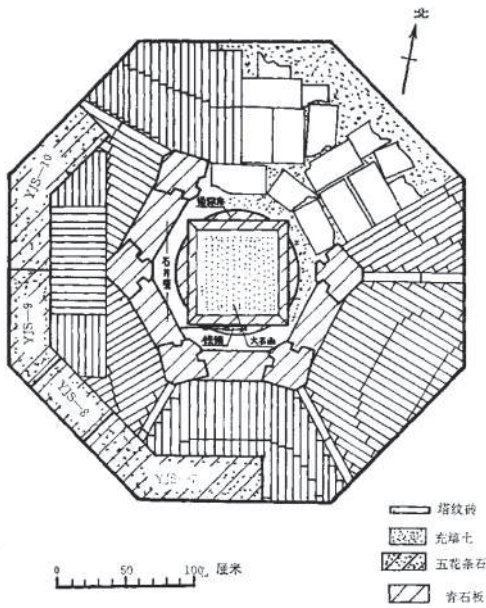


金棺



銀槨

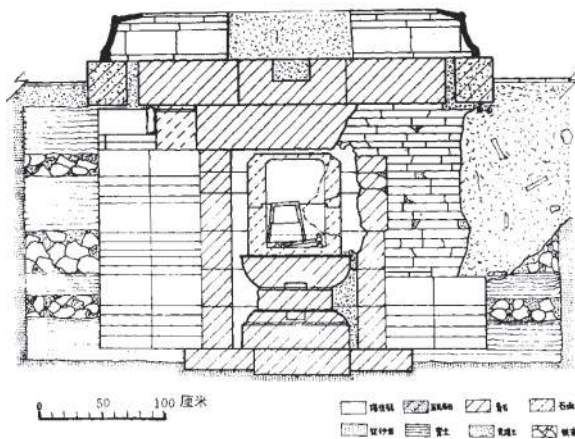
図19 福勝寺塔地宮（仏塔・地宮は図3で使用）



平面図

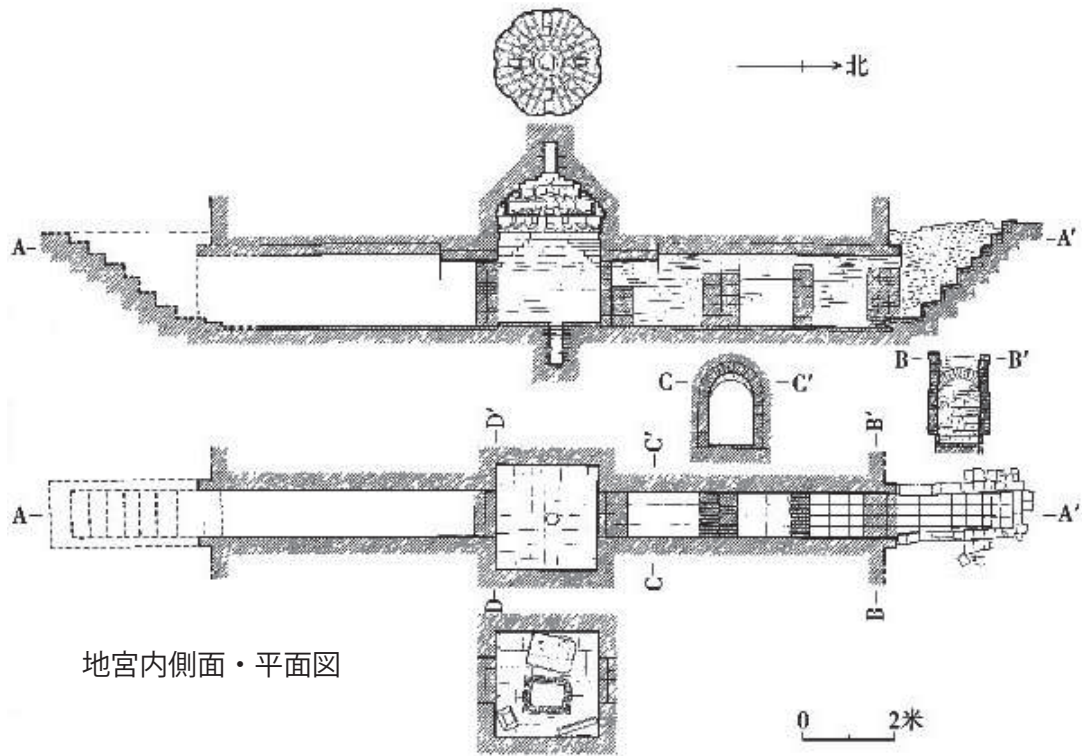


石函安置状況

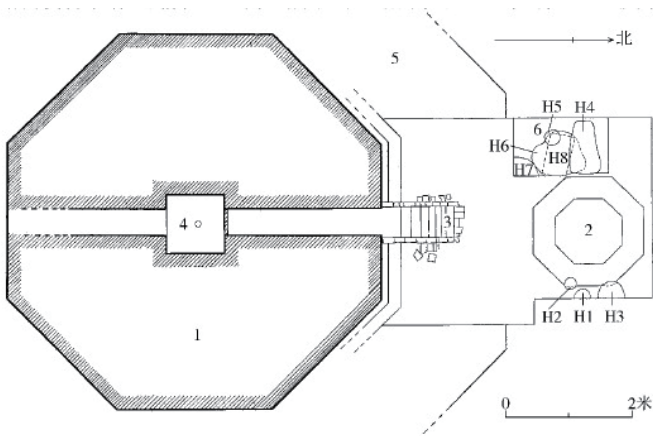


側面図

図20 当陽玉泉寺鉄塔地宮



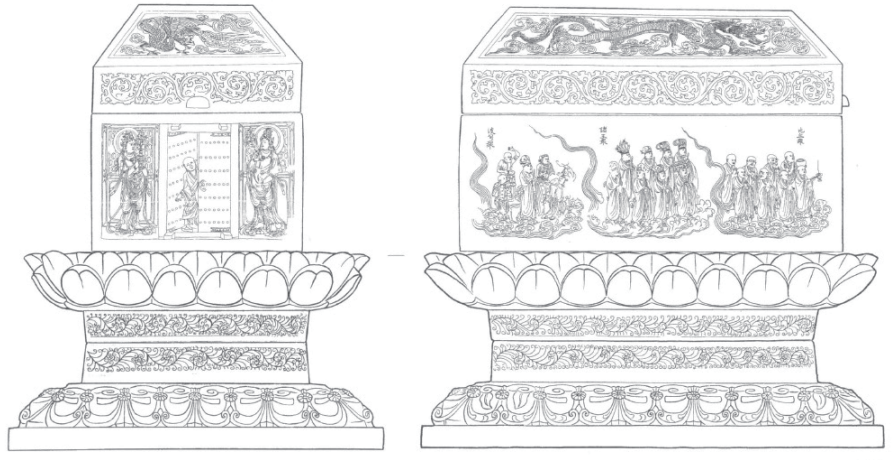
地宮内側面・平面図



塔および地宮概念図



地宮入口



出土石函

图 2 1 興隆塔地宮

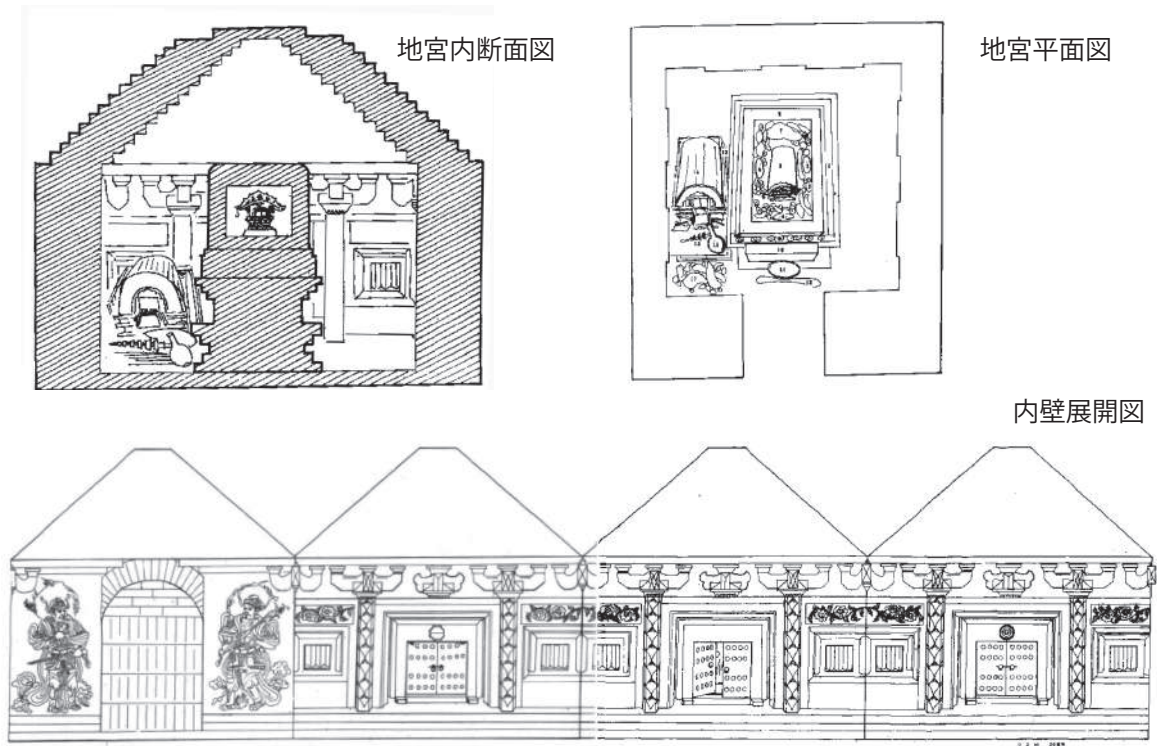


图 2 2 臨猗双塔寺塔地宮

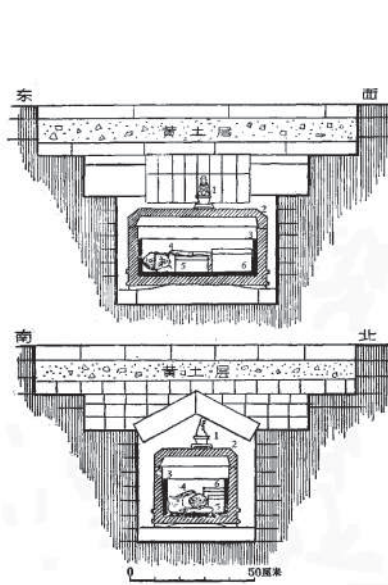


图 2 3 上海興聖教寺塔地宮

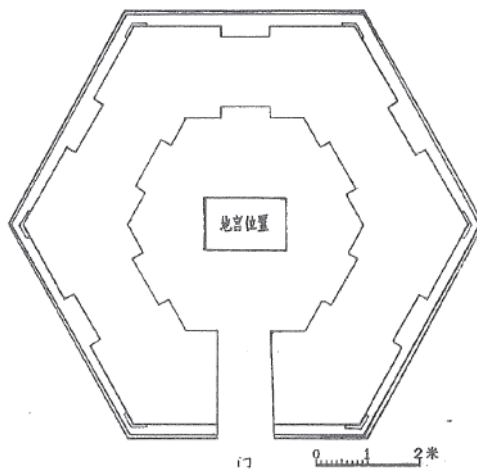
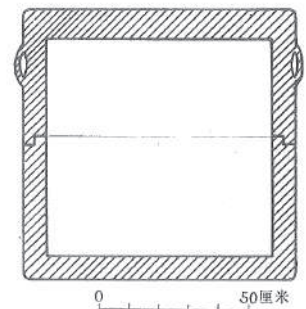
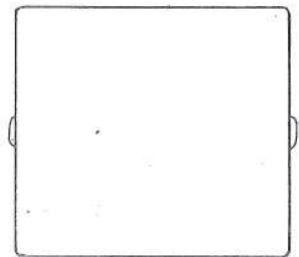


图 2 4 寧波天封塔地宮

←地宮位置图



↑出土石函

←石函内安置銀製宮殿模型

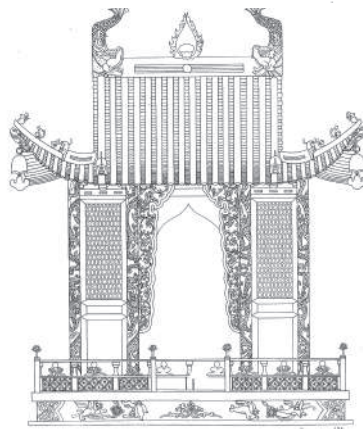




図 25 静志寺塔出土銭弘俶塔  
五代 乾徳3年(965) 銘

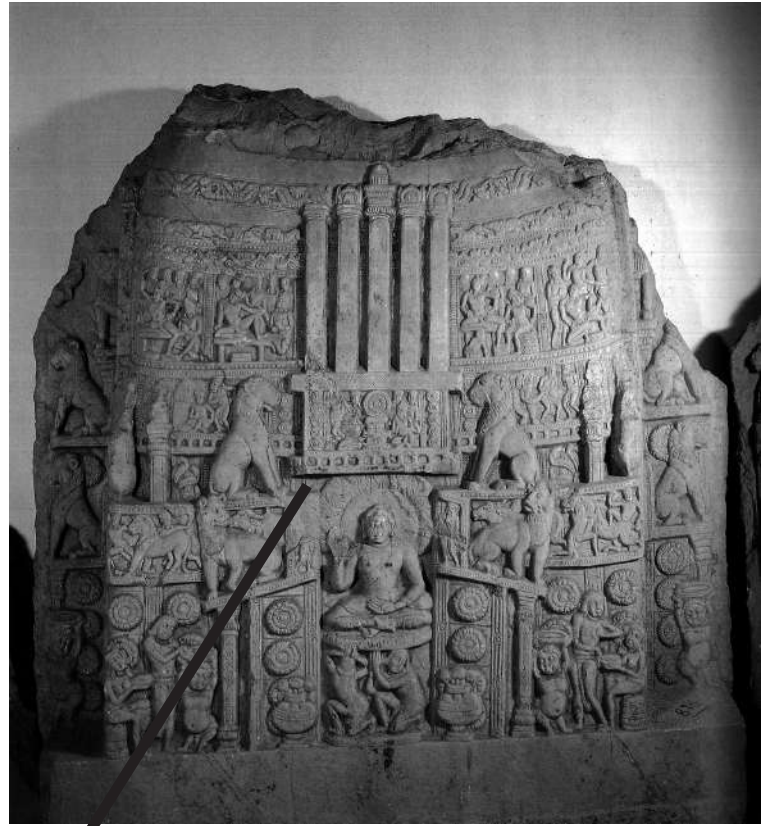


図 26 ストゥーパ図浮彫断片  
3世紀 アマラーヴァティー博物館



図 27 円輪光の礼拝  
1世紀 マトゥラー博物館

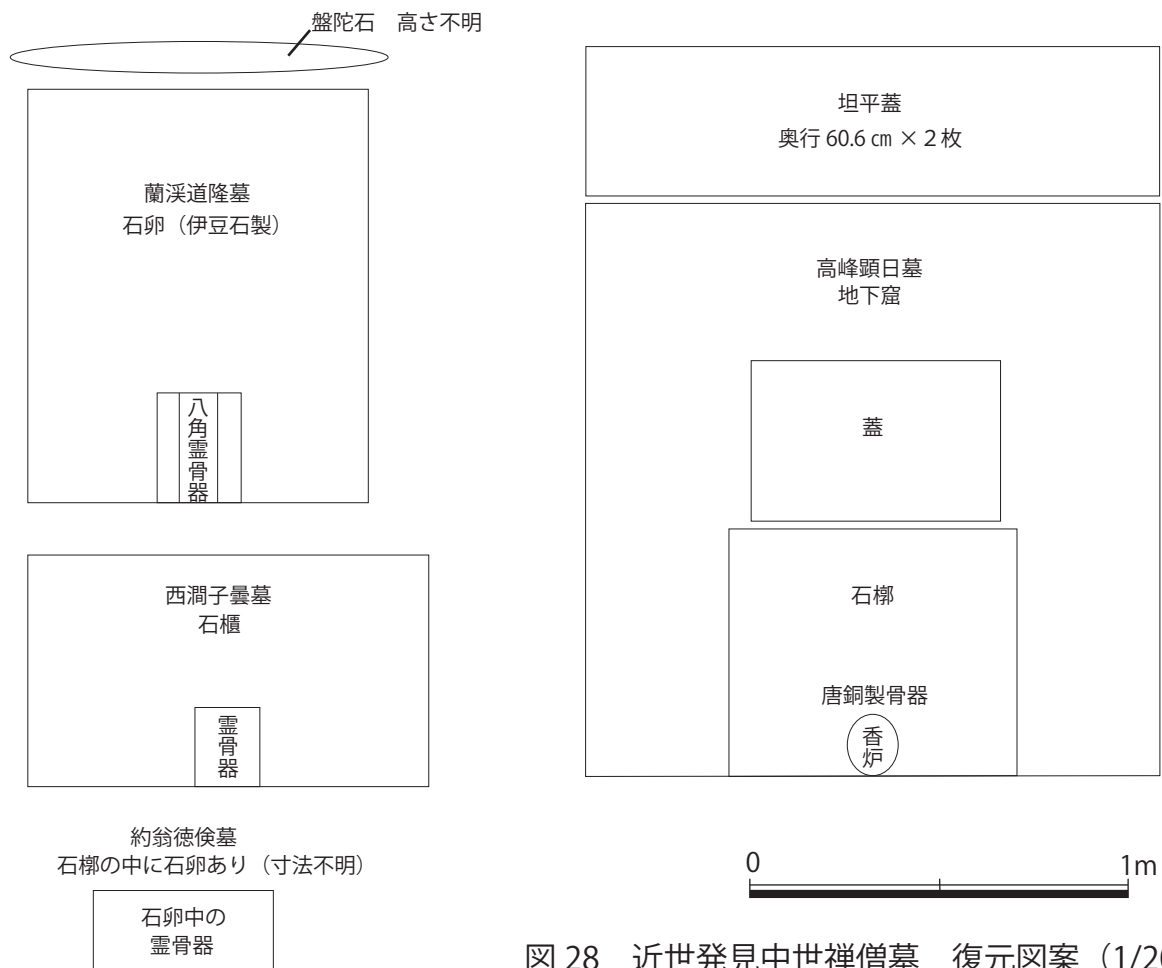
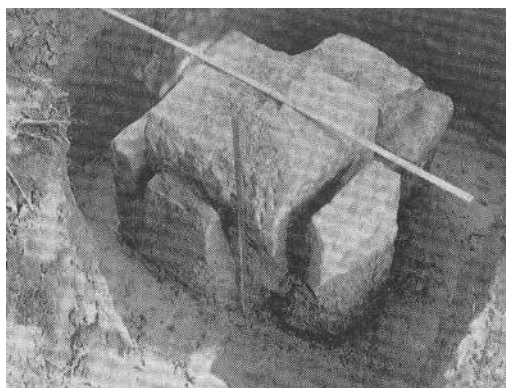
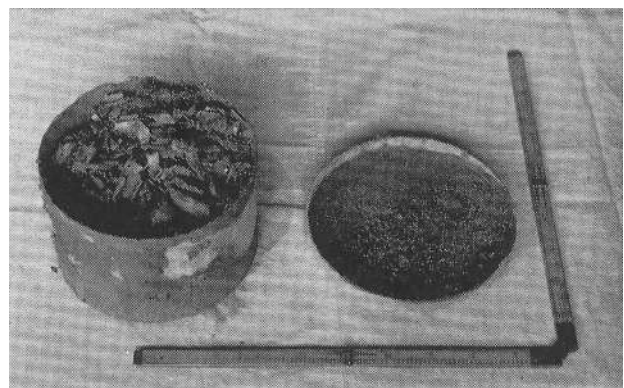


図 28 近世発見中世禅僧墓 復元図案 (1/20)



石櫃出土状況



藏骨器内部



石櫃内部藏骨器検出状況

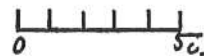
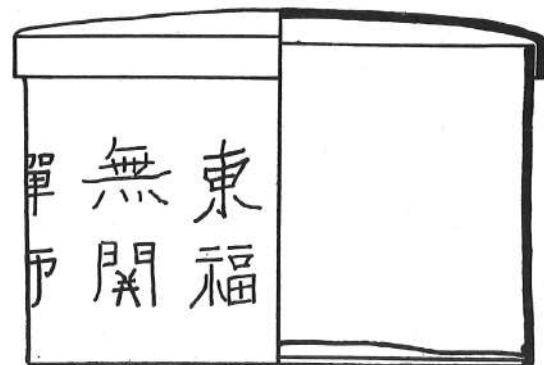


図 29 東福寺龍吟庵発掘調査

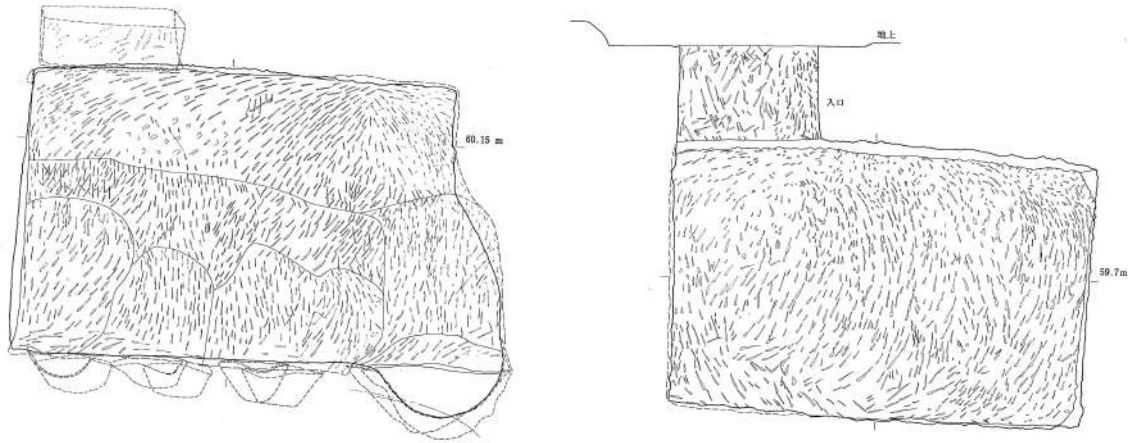


图30 続灯庵出土 地下式坑1・2

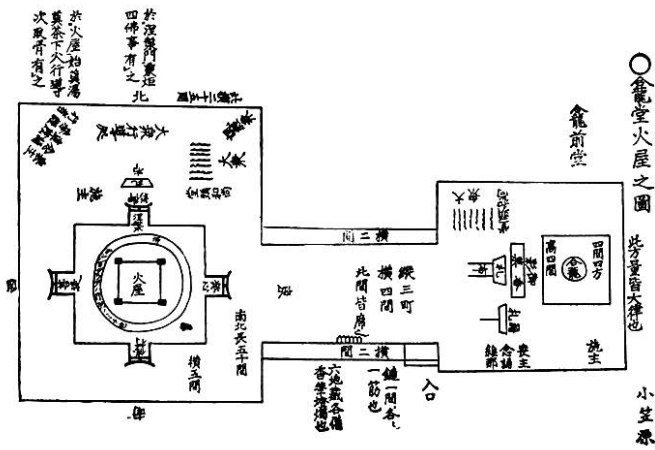


图31 諸回向清規式 龕堂火屋之図



图32 『涙血余滴』 埋葬方法

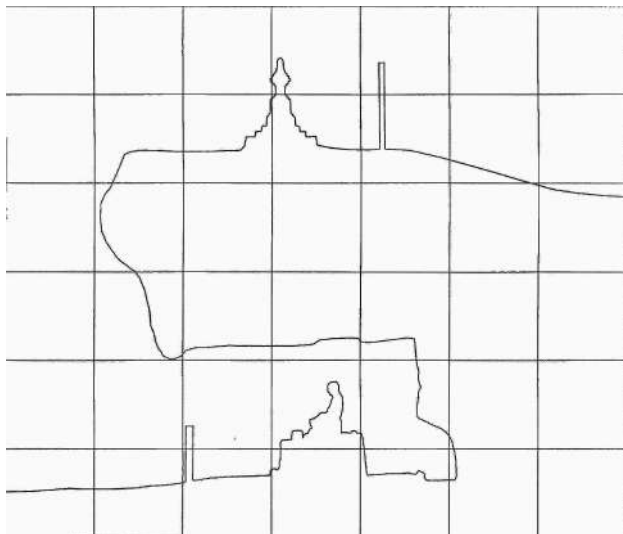
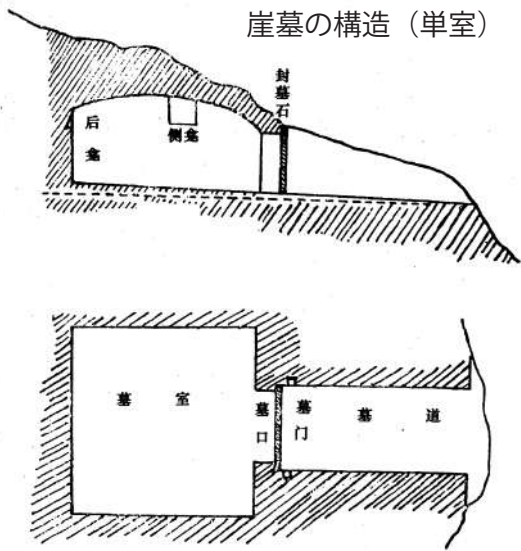


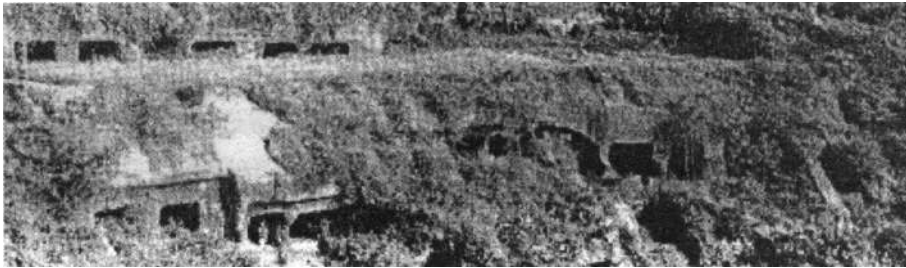
图33 浄光明寺 網引地藏やぐら



图34 覚園寺 棟立井



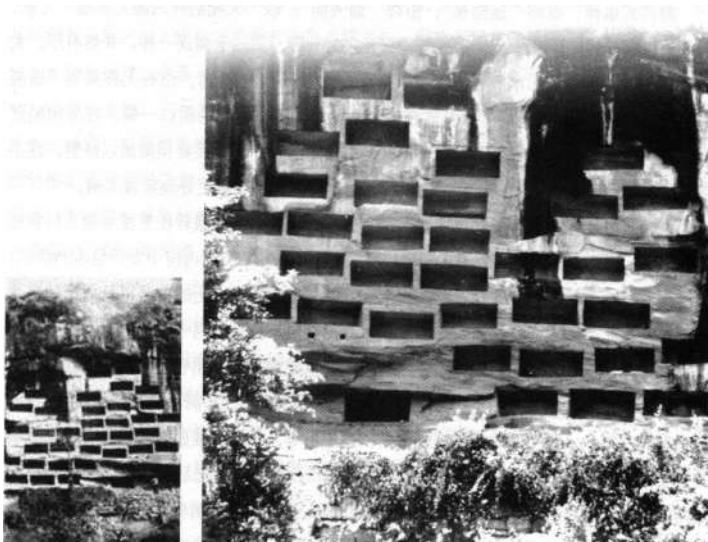
崖墓の近景



崖墓群



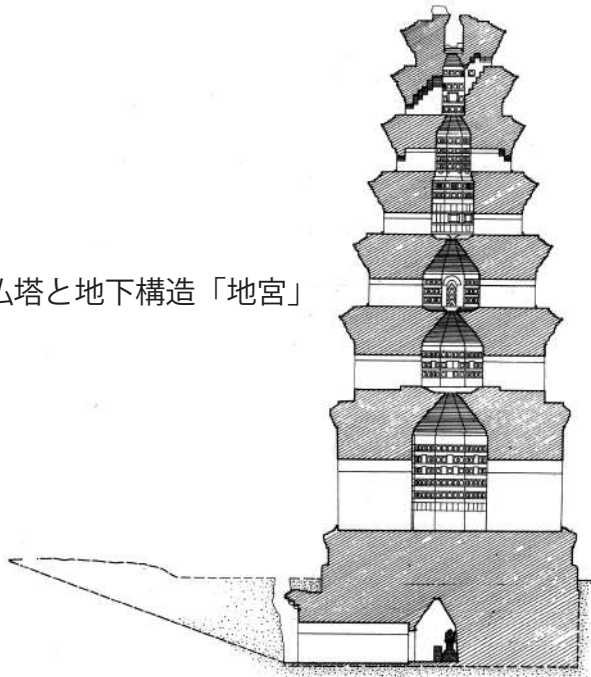
崖葬墓 1



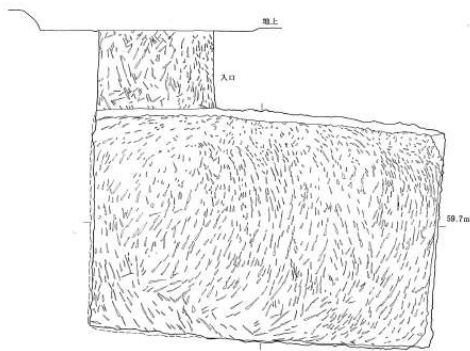
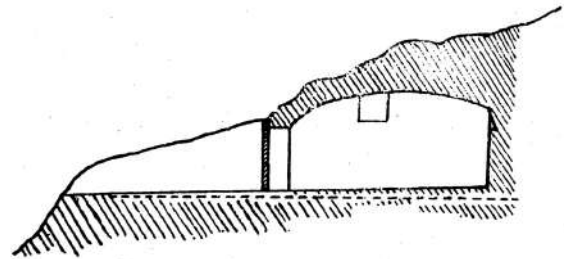
崖葬墓 2

図 35 四川の崖墓と崖葬墓

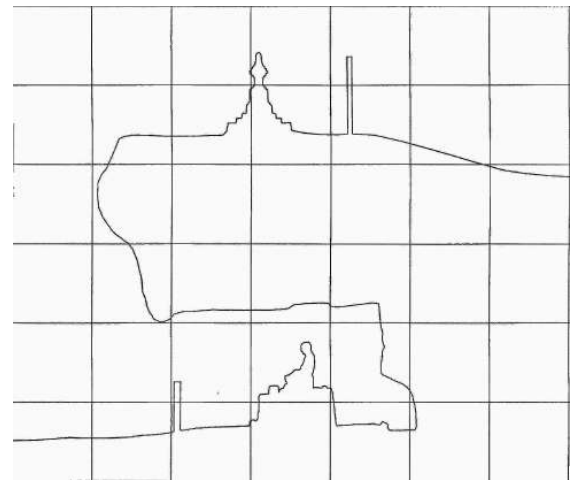
仏塔と地下構造「地宮」



崖墓



地下式坑



やぐら

図36 横穴式室構造遺構の比較



第二部 都市とみちと石塔

## 第一章 中世鎌倉のみちと造塔

### はじめに

本章の目的は、石造物の視点から鎌倉の都市的特性を明らかにすることにある。埋蔵文化財という概念が一般的になる以前、赤星直忠氏をはじめとした先駆者が研究対象としたのは「やぐら」や石造物であった。現代において知られる資料の大半はその時点で収集され、歴史的背景などの基礎的情報が蓄積されたのである<sup>1)</sup>。全国的にも早い時期から行われたこれらの実績は、その後の石造物研究の足掛かりとなり、研究は進展していった。それらは現在、西大寺を中心とした南都律の活躍や、石材の流通経路の解明などといった成果へと結びついている。

一方鎌倉では、高度経済成長期に伴う市内遺跡調査の増加とともに、鎌倉の考古学が確立されて行く。蓄積された資料は武家屋敷や町屋、大路、海浜部の様相を明らかにし、議論は都市の成り立ちと発展といった関心へと集約されていったのである。日々蓄積される市内遺跡の調査成果は、鎌倉という都市の構造を理解する上で膨大な情報を与えたが、対照的に、鎌倉考古学の嚆矢であった石造物への関心は薄れていき、進展する都市論と結びつけられることはなかった。

そこで本章では鎌倉に残存する中世石造物に今一度注目し、この

視点から都市の形成を検討したいと考える。焦点を当てるのは中世鎌倉の範囲や境界である。現在、中世鎌倉の境界として知られているのは、四角四境祭で言う「東六浦・南小壺・西稲村・北山内」や「北小袋・南小壺・東六浦・西瀬河」の範囲であるが、近年の動向はそれに捉われ過ぎてはいなかっただろうか<sup>2)</sup>。石造物の検討からは、これ以外の範囲があった可能性が示唆され、この点を深めてみる価値は充分にあると言える。

また、鎌倉の都市性を検証する上では建築物と交通路が特に重要と考える。もちろん地域社会史で言われるように、人や物の往来、交流に目を据えて都市というものを考えなければならぬが<sup>3)</sup>、交流から生み出された情報が目に見えるかたちでまず現れるものが、土地と土地とを結ぶ交通路と、建築物であると認識する。秋山哲雄氏が言うように、そもそも道がなければ人が集まることはなく、住み着くこともないわけで、地域間交流の要として交通路は存在する。また人の往来はのちに土地への定住を促す。その指標が住居や寺社であった<sup>4)</sup>。

鎌倉には中世より続く社寺が多く現存するが、当時の建築物はほとんど残っていない。ただし、平安期や鎌倉期の仏像があれば、その時代の堂宇があったことを想定でき、たとえ移設されていたとしても、それを補う史料などがあれば、存在した建築物の場所を示す程度の指標になるのではないかと考えた。

また「やぐら」は鎌倉に残る数少ない中世建造物のひとつである。南関東に広く分布するなかで、もっとも多く残るのが鎌倉である。

したがってその分布状況は鎌倉の境界を特定する上で有効な検討材料となり得るのではないかと考えた。

以上の資料を検討した結果、中世鎌倉における地形を利用した都市の形成や、街道や街路のインフラ整備の一端に新たな知見があることができたと考える。以下詳細を述べていきたい。

なお、本章で用いた「みち」は、陸上交通、水上交通、全ての交通を指す言葉として使用した<sup>5</sup>。また、検討では鎌倉の地形や高低差が重要となるため、国土地理院地図を下地に作成した地形図を用いている<sup>6</sup>。

## 一．やぐらから見る鎌倉の範囲

やぐらとは、鎌倉を中心とした地域に分布する横穴式の中世墳墓、および供養施設と考えられる遺構である<sup>7</sup>。南関東では三浦半島、東京湾を隔てた千葉県までの分布が見られるが、特に鎌倉一帯に集中する様相が知られている。この集中する範囲を広域な視点から見たとき、分布傾向から鎌倉の境界をほのめかす何らかの痕跡を読み取れるのではないかと考えた。そこで現状で可能な限りのやぐらを落とし込んだのが図1である<sup>8</sup>。

南関東におけるやぐらを分布図で示した場合(図1・1)、千葉県の上総から安房に掛けての内房と安房の外房、三浦半島のほか横浜や小田原近辺にまで分布することがわかるが、鎌倉の数量は群を抜いていることがあらためて確認できる。この集中域は、やはり鎌倉

の範囲や境界を示していると見たい。

そこで鎌倉をクローズアップした分布図を作成した(図1・2)。たしかに鎌倉の中心部を取り囲むよう、山稜部にやぐらが点在しており、そのやぐらは鎌倉の山稜を超えると減少傾向になることが看取できる。それでも金沢や逗子付近までは他の地域に比べて分布量が多く、さらに広域になると、図1・1で示されたように、横浜・小田原方面は数点しか確認できないほどの差が表れている。また三浦半島の横須賀や三崎方面にはまとまった数が見られるが、鎌倉・逗子との間には空閑地があるようにも見受けられるなど、やぐらの分布が何かしらの範囲を示している可能性はある。しかし、境界線が引けるほど明らかな差異ではないため、当然のことながら、これだけで範囲や境界を論じることはいできない。

## 二．鎌倉に残る仏像とみち

### 1．相模国の平安仏とみち

次に注目したのが仏像である。仏像の所在地から、地域勢力と交通路の関係を見出す手法に、武井律子氏の研究がある<sup>9</sup>。武井氏は相模国に点在する平安仏を収集することで、古代文化、地方豪族などとの関連性を考察し、特に古代交通路や拠点の動向を読み取っている。

仏像が造立されるとき、出資者(願主)の多くは土地の為政者であることが多く、単純な信仰心だけではなく、そこには為政者の権威

付けという意味も内在していただろう。また造立された仏像は願主の持仏でありながら、領地を鎮護する役割も担う<sup>10</sup>。そのため仏像は、広域で見れば地方豪族などの占有した領地を示し、集中する地域に近づいて見れば、その占有範囲を示す材料となり得るのではないかと考えた。武井氏の検討は、相模国という広い視点で行われているが、本論ではこれに加え、鎌倉時代の仏像も使用し、時代ごとの比較、鎌倉という狭域な検討も試みる。なお、武井氏は独自の調査により県内の平安仏を七十数件、九〇体を収集しているが、本稿では鎌倉仏と対比する関係上、使用する仏像を『神奈川県文化財図鑑彫刻篇』および『同補遺篇』掲載のものに限定した<sup>11</sup>。また地図は一部武蔵国を含む相模国を範囲とし、これに古代道の想定ルートを加えたものを用いている(図2)<sup>12</sup>。

図2・1に相模国の古代道と平安仏を示した。平安仏は、武井氏が示すようにおおよそが古代道に沿う形で配置され、特に国府や駅があったと推定される場所に点在することがわかる。駅路に点在する地方豪族の統治が、如実に表れていると言つてよいだろう。また、そのなかでも目を引くのが鎌倉と足柄坂で、仏像が特に集中する地域として示される。

足柄坂は上野の碓氷坂とともに古代における坂東の入口として知られているが、このほか相模には箱根坂という入口も存在した<sup>13</sup>。足柄坂は富士山の延暦噴火(八〇〇〜八〇二)の際に通行不能となり、その間に箱根坂が整備されたとみられ、復旧後は、二つの入口が併存することとなる。仏像の造立数は、古代において存在した二つ

の入口のうち、足柄坂に比重が置かれていたことを示している。

一方、図2・2に示した鎌倉時代の図によると、仏像の位置に変化が表れる。平塚から茅ヶ崎の海岸付近に東西に並ぶ事例や、六浦から北に延びる形で点在する事例のように、古代道に沿わない仏像が散見されるのである。これは鎌倉時代になって整備・拡張された道路が図に示されたものと考えられる。平塚・茅ヶ崎の例は、河口付近の相模川を跨ぐ形で点在することから見れば、その間に架けられた相模川橋脚が新造されたことによる影響と見たい。相模川橋脚は建久九年(一一九八)に稲毛重成が架橋し、橋の供養には源頼朝も参加している<sup>14</sup>。

また六浦も称名寺を中心に中世に大きく発展し交通量が増加したことが予想される街道であり、古代において弘明寺だけが際立っていた様相に、杉田東漸寺など横浜方面への寺院増加が知られる<sup>15</sup>。また古代において造立数の多かった足柄坂には特筆すべき鎌倉仏の造像が見られず、逆に箱根坂の造像数が多い。坂東への主たる入口が箱根へと移行したことを示すものと思われる。

さて、ここで古代における足柄坂に注目したい。仏像の種類として聖観音と十一面観音、薬師如来、兜跋毘沙門の造像が確認できるが、このうち二種の観音は他の地域でも多く見られ、特に神奈川県においては古い仏像に多い像種である<sup>16</sup>。ここでは残り二種の仏像に注目したい。一つ、薬師如来は治病や施薬の面で信仰を集め、平安期の造立数が多く、旅路の安全祈願の意味を込めて、陸路の関、海上交通の要所となる地にも造立される像として知られる。薬師如来を

奉る場合、医者のを示す「医王」や東方瑠璃光浄土(東方薬師浄土)を示す「東光」の名を冠した山号、寺院名となる例が散見されるが<sup>17</sup>、その東光寺はしばしば白山神社とセットとなり、道路や境界に關わる場所に所在することが指摘されている<sup>18</sup>。

一方もう一つの仏像、兜跋毘沙門天は、四天王のうち北方の守護仏である毘沙門天の中でも、地天女の手を両足を支えられた姿で表現された特殊な像を言う<sup>19</sup>。そもそも兜跋毘沙門天信仰は、最も著名な東寺像が平安京羅城門の楼上に安置されていた「伝説」から発した信仰で、外敵の侵入を防ぐ都市の守護仏であった中国の毘沙門天信仰が、日本において変質したものであると解釈されている<sup>20</sup>。東日本の兜跋毘沙門天を収集したむしやのこうじみの氏によれば、これらは境界の鎮護として設置されたといい、神奈川県に限って見れば、武蔵との境として川崎の東光院像や、足柄の朝日観音堂像が坂東との境であったとの見解を示している<sup>21</sup>。つまり境界認識の指標には、東光寺と神社のセットのほか、薬師如来や兜跋毘沙門の安置が参考となるだろう。

なお、むしやのこうじ氏の論は広域な視点から国境を見出したものであるためか、神奈川県内に存在するもう一つ兜跋毘沙門天については触れていない。この作例が鎌倉に所在している。

## 2. 鎌倉における薬師如来・兜跋毘沙門天の存在

鎌倉中心部に平安仏を落とし込んだ地図を作製した(図3)。これらは『鎌倉市文化財総合目録』彫刻編を参考にしている<sup>22</sup>。鎌倉最

古期のとして知られる十一面観音は杉本寺に所在するが、ほかに普陀落寺や、当地図には掲載できなかった、龍ノ口の宝善院にも平安中期の十一面観音が存在する<sup>23</sup>。十一面観音はあらゆる方角(十方)に顔を向ける救済者として特に現世利益を祈願することからか<sup>24</sup>、市中・道を見渡す高台に造立される例が多い。

一方、平安時代後期の作となる辻薬師は現在鎌倉国宝館に收藏されるが、近年までは大町の辻薬師堂に安置されていた。それ以前は、現在の鎌倉宮の位置に存在したと言われる東光寺の本尊であったことが納入銘札より知られる<sup>25</sup>。そのため東光寺の創建年代は不明であるものの、仮として地図上の位置に落とした。ただ『吾妻鏡』には大倉薬師堂の名が初期から登場するため、早い時期から大倉に薬師如来が奉られていたことは確かである<sup>26</sup>。また明王院の薬師如来像は由来不明な点が多いものの、平安期の可能性が指摘される像である<sup>27</sup>。

先述のように、東光寺は薬師如来を奉る寺院である。鎌倉周辺域ではほかに深沢の東光寺、先述の白山の名を有する六浦の白山東光禅寺がある。また龍ノ口に所在する前述の宝善院は、鎌倉では珍しい白山信仰の祖である泰澄が創建したとする寺院で、泰澄山瑠璃光寺とも号する<sup>28</sup>。本尊に鎌倉時代の薬師如来を奉るほか、付近には白山橋の地名もある点は興味深い。

これらのように、鎌倉においても東光寺と白山神社、そして薬師如来の関係性をほのめかす例は散見される。またこれらの所在地が鎌倉の境界と認識される土地であることには注意する必要がある。

先に上げた寺院所在地のなかで、もつとも著名なのは六浦で、元仁元年（一一二四）、嘉禎元年（一一三五）に行われた四角四境祭には、東の境として六浦の地名が挙がっている<sup>22</sup>。また龍ノ口は日蓮法難や元の使者杜世忠、北条時行らの刑場として著名だが、古くは近隣の腰越が首実検の場所として用いられている<sup>30</sup>。この地は「腰越状」にあるように、源義経が鎌倉入りする際に留め置かれた土地で、鎌倉の境界を示す例として知られる。また養和元年（一一八一）、主人である藤原俊綱の首を持参した桐生六郎は、武蔵大路より鎌倉へ入ろうとしたが叶わなかったため、深沢を経て腰越へ向かったとある<sup>31</sup>。下野国足利庄より参じた桐生六郎は、おそらく現在の北鎌倉方面から鎌倉に入ろうとしたと考えられるが、鎌倉の外から他の境界地である腰越へ向かうことから、境界地沿いを移動したと考えられる。したがって經由した深沢も境界地のひとつと見るべきだろう。おそらくは江の島道を通ったことが想定される。

なお、現在の鎌倉宮に位置した東光寺だけが鎌倉中心部に所在し、上記の事例から外れてしまうように見受けられるが、この点はすでに藤原良章氏による指摘がある。藤原氏は、永福寺の奥州鎮魂の意味と史料上に見える大手の表現から、永福寺の奥から北へ抜け、奥州まで続く道が存在することを説いた<sup>32</sup>。その際に通る道は、鎌倉宮の東光寺から横浜方面の白山神社へ抜ける道が想定されており、鎌倉の境界を越える道にはやはり、上記のセットが存在するのである。

さて、ここで提示したいのが、先述した鎌倉の兜跋毘沙門天像で

ある。この像は、永福寺の北山を越えた今泉の白山神社に安置されており、平安時代後期の造立と推定されている<sup>33</sup>。この神社へは現在でも永福寺の奥から道が通じており、東光寺の薬師如来と同時期の兜跋毘沙門が白山神社に所在するのであれば、境界を示す道として、これ以上の例は無いのではないだろうか。鎌倉宮の東光寺から北へ伸びる道は、今泉へと抜ける経路が本線であったと考えたい。

今泉白山神社からのルートは、西の岩瀬を通ることである。港南台方面・あるいは戸塚方面へ向かう鎌倉街道へと突き当たる。そこから港南台方面へ向かう道の起点には、源頼朝が佐奈田与一の菩提を弔うため建立した證菩提寺があり、鎌倉前期の阿弥陀三尊像を安置する<sup>34</sup>。またその付近には県内でも珍しい古代の製鉄遺跡が報告されるなど、古くから交通路が存在した可能性は高い<sup>35</sup>。つまり源頼朝入部以前から、鎌倉には薬師如来と兜跋毘沙門天の守護する北の玄関口が存在したのである。

ただし、二階堂・岩瀬間のルートに限定して見れば、この道が中世鎌倉の最盛期まで存続していたかどうかは疑わしい。北方面へは、より通行しやすい巨福呂坂、亀ヶ谷坂ルートが開削されていることから見れば、主要ルートをこれらの道路に譲り、およそ徐々に衰退したと見たい<sup>36</sup>。

### 小結

以上、仏像から鎌倉における交通路の変遷について見てきた。先述したように、仏像は為政者によって祈願、造立され、権威を示す意

味も有していた。彼らが居住する土地は街道の要所にあつて、水はけの良い高地の平場や見通しの良い場所が優先的に選ばれた。これは鎌倉における大倉幕府やその後の幕府が、鎌倉では高所に当たる一〇mラインを超えた平地に設置されていることから窺える<sup>37)</sup>。しかし、仏像を有する寺院のほか神社は、さらに高所に置かれたようだ。

先ほどの鎌倉の平安仏を落とし込んだ図に、山村亜希氏が想定した頼朝鎌倉入府以前に鎌倉に所在した社寺を追加した<sup>38)</sup> (図3)。地形を優先して見るとわかるが、ほぼすべての社寺が丘陵上、またはその先端に位置していることが読み取れる。鎌倉の寺院の多くは谷戸の中に建立されており、これらは北条氏など有力御家人の別邸に所在した持仏堂が寺院化した結果と考えられている<sup>39)</sup>。現在の宝戒寺付近に構えられた北条氏の邸宅「宝戒寺小町亭」や「若宮大路小町亭」は、重時が六波羅探題から戻って以降、幕府の公的機関としての役割を吸収するようになる。これを契機として日常生活の場として別邸が郊外の谷戸に建てられ、その主が亡くなると子孫による寺院建立が起きるといのが、鎌倉の郊外における寺院建立の構図であるが、その構造が成立する以前の寺院が、山稜上、丘陵上に建造されたと考える。

高い丘の上に造られた堂宇は、市中を走る街道から見て目立つ存在である。例として杉本寺を眺めた時、「六浦へ行きたいのならば、まずは堂の見えるあの高い丘を目指せばよい」などといったように、丘陵上の建築物が、在住者はもとより道路を使用する商人などの

案内や目印に使用された可能性は高い。

この点は海からの目線で指摘がある。坂の下の御霊神社や材木座の三島神社(現・五所神社)は、一段高い土地に設置されており、海上交通の「アテ山」として利用された可能性があると<sup>40)</sup>。また六浦の御伊勢山・権現山も同様で、六浦湊の湊山として機能していた可能性が指摘されている<sup>41)</sup>。計器などがない時代の海上交通は、自己の位置を知るために「山アテ」が行われた。これは地上の山の形などから航路などを決めていくもので、なかでも重要なのが、悪天候を回避し、風を待つことができる寄港地とそれを教えてくれる湊山だったという。こうした場所には多くの信仰が集まり、建立された社殿や堂宇は海上から灯台の機能を有する、いわば周囲のランドマークであった<sup>42)</sup>。つまり、「アテ山」として信仰されていたからこそ、社寺が建立され、さらに目立つ存在となったのである。これが陸地で行われた結果が鎌倉初期から存在する社寺であったと考える。ただ、これらの堂宇が目印として使用されていたとして、鎌倉の初期、またはそれ以前に造営された建物のみで、都市の拡充とともに増加する鎌倉の交通に対応しきれたとは思えない。また、これらの信仰は絶えず続いたことだろう。都市の発展する鎌倉後期においてこの一役を担ったのが、石造物だと考える。

### 三・石塔の造立と立地

第一部で述べたように、鎌倉の石造物は十三世紀後半から十四世

紀初頭にかけて導入された文化である。このうち五輪塔・宝篋印塔・宝塔・層塔・無縫塔など舍利容器としての「塔」の系譜につながるものを石塔と総称している<sup>43</sup>。現在、鎌倉に存在する中世石塔のほとんどは墓塔と認識されている。たしかにその性格が強い五輪塔や無縫塔はもちろんのこと、中世後期に増加する小型の塔も墓塔と認識することに疑いはない。ただし、鎌倉に点在する大型の塔はこの限りではないと考える。その石造物が宝篋印塔、宝塔、または層塔である。本来の意味と地形を考慮し検討を試みた。なお地図にはすべてをまとめて掲載している(図6・7)。

### 1. 宝篋印塔

取り上げた宝篋印塔は十二基である(図4)。宝篋印塔は本来、『宝篋印陀羅尼經』を納入する塔であるが、経の納入如何に関わらず、この型式を有する塔を総じて宝篋印塔と呼んでいる<sup>44</sup>。鎌倉の内に残る大小織り交ぜた宝篋印塔の総数はおそらく五輪塔に次ぐ多さとなるが、本論では二m前後の大型で、単立する中世の塔のみを抽出した。なお番号は無銘の塔も含め年代順に付している。また大型塔であっても発掘調査が実施され、墓塔と確認されている塔は除外している(覚園寺開山塔・大燈塔)<sup>45</sup>。

### 1. 六国見山塔

円覚寺の裏山にあたる六国見山の山頂付近に所在する塔である。塔身及び相輪が失われているため現高は一一四cmだが、本来は二mほどの高さがあったと予想される。東国における型式が定まる以前の様相を呈し、鎌倉後期の型式の中でも古手の塔である。山は六国

(相模、武蔵、伊豆、安房、上総、下総)を見渡せると言われ、眼下には鎌倉街道が走る。

### 2. 極楽寺塔

極楽寺奥の院に所在する北条重時塔と伝わる塔である。欠失した部分が多いが現高は一九三cmを測る。東国における型式が定まる以前の様相を呈し、鎌倉後期の年代が充てられる。極楽寺の前は西から鎌倉に入る街道の要所となっており、奥の院は高台に位置する。境内絵図には周囲の山々までが境内として描かれており、あるいは街道から眺めの良い丘陵に建っていたことも想像できよう。

### 3. 浄妙寺塔残欠

浄妙寺の裏山に所在する塔の残欠である。10の浄妙寺塔よりも古手の型式を示す。山門前には凝灰岩製の宝篋印塔の笠も存在することから、当地には代々宝篋印塔が建てられてきた可能性もある。門前には六浦道が通る。

### 4. 明月院塔

明月院の本堂西側のやぐらに所在する塔である。相輪の上部を欠損しているが、現高一八七cmを測る。明月院開基上杉憲方の墓塔と伝えられるが、宝篋印塔の型式は憲方の没年より古く、型式の定まらない時期の作例と考えられる。塔の所在するやぐら奥壁には如来像は釈迦如来と多宝如来と考えられる磨崖仏が彫られていることから、法華経信仰と関連性が窺えるが、宝塔でない点が疑問である。明月院絵図によれば寺院の敷地は鎌倉街道沿いにまで広がっていた時期もあり、街道の見下ろせる高台も存在することは注視すべきだろ



う。

## 5. 英勝寺塔残欠

英勝寺の境内奥で手水鉢に転用される塔の残欠である。反花座と塔身のみが現存し、二材を合わせた現高は一〇九cmを測る。種子が月輪内の蓮座に乗る点が安養院宝篋印塔や覺園寺宝篋印塔に共通し、規模もそれらに匹敵する。反花が二重車弁である点に特徴がある<sup>4</sup>。英勝寺の裏山は源氏山で、梶原、佐助、瓜谷など各方面へ抜ける際の要所となる山稜である。また亀ヶ谷から正面に見える山でもあり、交通の当て山としても機能したことが推察される。英勝寺は江戸期開創の寺院であるが、境内絵図には山稜頂部までが境内地として書き込まれる。

## 6. 安養院塔

安養院の本堂裏手に所在する塔で、徳治三年（二三〇八）の造立。後補の相輪を除いての現高は二四六cmを測る。基礎輪郭上に銘文があり、「□慶□□塔婆／．．．観上人之／．．．結縁衆之／名字所奉造立如件／徳治三季七月日／大工沙弥心阿／大檀那観泉」と読まれている<sup>4</sup>。関東形式宝篋印塔の特徴を備える型式の基準となる塔で、背後には丘陵崖面がそびえる。

## 7. 浄光明寺塔

浄光明寺の裏山、山頂付近に所在する塔である。後補の相輪を除いた現高は一三一cmで、鎌倉時代後期～南北朝時代前期の様相を呈する。冷泉為相の墓塔と伝えられ、屋敷があったと伝えられる藤ヶ谷と亀ヶ谷から窟堂方面へと抜ける道を眼下に見下ろす。

## 8. 上行寺塔

上行寺の境内に所在する。総高は二九七cmを測り、造立は文和元年（二三五二）と考えられている。基礎輪郭内に「右志趣者為四／季経別書写／読誦一結衆等別／牛馬六畜乃至法界平等利益也／□□大才壬辰／十二月日」とあり、牛馬六畜を供養する願意が記される。交通と密接な関係を有する願文として注目される。

寺院裏山は上行寺東遺跡が発見された山稜であり、鎌倉の外港六浦を見渡せる湊山である。また眼下を通る六浦道はこの山稜を経由し、朝夷奈切通へと続いている交通の要所である。

## 9. 泣き塔

鎌倉市寺分の洲崎合戦場跡近くの陣出という土地に残る、塚状の丘の上に立つ塔である。総高は二〇三cmで、文和五年（二三五六）の銘文を有する。基礎の輪郭内に「願主行浄／預造立／石塔婆／各々檀那／現世安穩／後生善処／文和五年丙申／二月廿日／供養了」と記す。新田義貞の一隊が鎌倉に攻め入る際、通過した場所と考えられる。

## 10. 浄妙寺塔

浄妙寺の裏山に所在する塔である。総高は一六五cmで明徳三年（一三九二）の作。基礎輪郭内に「奉造立／宝篋印／塔一基／右志趣者／預□当／来苦報／逆修滅／後善根／後願一既／靈地□／現無辺／罪滅悉／陰□□／□□□／種智都／也／明徳三／□□申／二月廿四／預修一□／結諦□」<sup>4</sup>とある。裏山は墓地として開削されており、塔はその中腹に安置される。もとはさらに高い場所にあった可能性もある。

る。門前には六浦道が通る。

### 1.1. 伝島山重保塔

若宮大路の一の鳥居脇に所在する塔である。総高は三四六cmで、明徳四年（一三九三）の造立と知られている。基礎輪郭内に「明徳第四／癸酉霜月三／日大願主／比丘道友」とある。

由比ガ浜の砂丘が形成する高台の先端に位置している。

### 1.2. 北野神社塔

山崎の天神山山頂に所在する塔である。総高は一五七cmを測り、応永十二年（一四〇五）の造立。基礎二面にわたって「本州山崎□主／教音□久起造／大□□□□□／祖者□□勝□□／天神霊（神）／此時□進石浮／図□□□□書／写□□□□妙典／夫作善（趣）旨者／天長地久国治／民安□□□□世／界無主□魂俱／沐余□同起□海／□応永十二稔乙酉八月二十五日／信士教音敬白」と記される。

山崎天神山は古代の瓦塔が出土するなど、古くから信仰される山で、おそらくは古代には道のアテ山として利用されてきた。

以上、十二基の塔をあらためて見直すと、現状でも山頂部に位置する例はあるが、多くが周囲から突出した丘陵の麓に立地していることに気付く。地形図に宝篋印塔を配置した図から見てもこの点は明らかで、本来これらの塔はすべて、山稜の頂上または丘陵先端の頂部に位置していた可能性は高い（図6）。

現状で丘陵上や山頂に立地する塔は、1. 六国見山塔、7. 浄光明寺塔（冷泉為相塔）、9. 泣き塔、1.2. 北野神社塔があり、これら

の立地は街道を見下ろす場所でもあるが、そのほかの塔も境内図などを参考にみると、街道から眺めの良い丘陵までが境内地である例も多い。5. 英勝寺塔（残欠）は、江戸時代の境内図が示すように、英勝寺が源氏山の山頂までを境内地として所有しているおり、同様に2. 極楽寺塔、4. 明月院塔も寺院蔵の境内絵図の範囲に丘陵が含まれる例である。

また、これらの塔が丘陵上に立地していたとして、麓に移設された要因の一つに地震などの災害が想定できる。後世、地震によって相輪や笠など塔の一部が崖下へ崩落した場合、安全を考慮して塔を麓へ降ろす作業が行われたことは想像に難くない。6. 安養院塔など背面に丘陵の崖面を有していて、相輪以外の部材も破損している塔がそれを物語っていると考えられる。

なお、一番納得し難い塔が、現在一の鳥居付近に所在する1.1. 伝島山重保塔であろう。しかし、浜地であるこの場所には鎌倉の海進・海退によって形成された「砂丘の高まり」がある。この高まりは弥生時代頃には集落が形成されるほど安定した高台となっていたよう<sup>4</sup>で、この上を古代の東海道が走っていたとも言われている<sup>4</sup>。塔は現在、砂丘の先端頂部に位置する。この砂丘は中世では現在よりもやや南に位置していたようなので<sup>5</sup>、砂丘のトップがずれるたびに塔の移動が行われたことが想像される<sup>1</sup>。この位置は鎌倉の海浜部でありながら標高一〇mを超える高台で、標高だけで見れば鶴岡八幡宮や大倉幕府跡地といった一等地にも引けをとらない土地である。南の海浜部が一望でき、北側を走る旧東海道からも望む場所だった

ことが予想される。

なお、滑川を挟んで対面する東側の高まりの先端には、源頼義が勧請した元八幡(由比若宮)が所在する。勧請は康平六年(一〇六三)と伝えられ、鶴岡八幡宮の前身として知られるように、その場所には古代から由緒ある神社が建っていた(図3)。旧東海道が走り、高台であることを理由にこの地が重要視されていたのであれば、伝島山重保塔の建つ以前から、なにか由緒ある建物が建っていたことが考えられる<sup>52</sup>。

宝篋印塔の功德は本来納入される「宝篋印陀羅尼」によるものである。『宝篋印経』の中心教説は、陀羅尼を「仏塔に安置すれば、一切の如来の金剛を蔵したストウーパとなり、仏像に安置すれば七宝と成る」ものと説いており、「それらを礼拝供養する者は罪業を消滅して無上の悟りを得られる」とされる<sup>53</sup>。これが呉越王錢弘俶(在位九四八・九七八)の時代、アショーカ王の八万四千塔供養や小塔供養と融合したことによって、石造宝篋印塔の祖形が完成したとい、のちに日本へと伝来する<sup>54</sup>。中国には天中萬寿塔(別称「望海塔」)のように海を見渡せる山頂に建てられた塔や、港近くの見晴らしの良い山に建てられた宝篋印塔が存在し、港や陸路のランドマークとしての機能も指摘される<sup>55</sup>。上記の鎌倉の宝篋印塔が高所に立地していたならば、塔形だけでなく、立地条件についても中国の造塔に準じた造立がなされたと言えるだろう。

なお、宝篋印塔であるかは確認できないが、夢窓疎石が横須賀の泊船庵に立てた塔(海印塔)は、遠くから目にするだけで良い縁を結

ぶことができ、塔の影が海に映れば、海の中を泳いでいる魚も、塔の影に触れるだけで仏法と縁を結ぶことができたという<sup>56</sup>。市中や交通路、湊などの高台に設けられた石塔にも同じような意味があったのではないだろうか。取り上げた宝篋印塔の銘文は周囲へ向けた供養と願いだけで、墓塔と明記された例がひとつもない点がそれを示しているように感じられる。

## 2. 宝塔

宝塔は五基存在する(図4・2)。鎌倉の四基のほか、六浦の上行寺に所在する一基も含め、近隣で存在の知られた塔すべてを採取した。番号は年代順に付している<sup>57</sup>。

### 1. 成就院塔

成就院裏山の一段高い平場に立つ塔である。相輪が無く、笠部までの高さで一五八・〇cmを測り、鎌倉時代後期の様相を呈する。かつて現在塔の立つ平場背後の斜面から転落してきたといい、背後の霊鷲山に建っていたことが知られる<sup>58</sup>。

### 2. 別願寺塔

別願寺の境内に所在する塔である。候補の相輪を除いた現高は二四三・二cm。鎌倉時代後期の様相を呈する。別願寺は安養院の西隣りに位置し、背後の山は同じである。寺院前面には名越へと抜ける旧東海道が走る。

### 3・4. 大慶寺塔A・B

深沢大慶寺の境内裏庭に所在する二基の塔である。二基ともに相

輪の上半分を欠損し、現高は右塔が二三一cm、左塔が一〇七cm。ともに鎌倉後期く南北朝前期の様相を呈する。境内のやぐら内から発見されたものというが、それ以前の様相は不明である。背後には梶原の御霊神社や等覚寺、東光寺が同じく遥拝する山がある。

### 5. 上行寺塔

六浦上行寺の境内に所在する。後補の相輪、台座を除いた現高は一二五・五cmを測る。基礎右側面の左区に「文和癸巳四月廿四日敬白」とあり文和二年（一二三三）の造立とわかる。上行寺宝篋印塔と同様裏山には上行寺東遺跡が発見された山稜がそびえ、鎌倉の外港六浦を見渡せる湊山である。また眼下を通る六浦道はこの山稜を経由し、朝夷奈切通へと続いている交通の要所である。

本来、宝塔は『法華経』「見宝塔品」第十一に由来する多宝・釈迦二仏並座の塔を意味するが、『法華経』は釈迦が靈鷲山上で悟った経であるため、靈鷲山の名で知られる極楽寺前面の山上に立地していたという1. 成就院宝塔は、由緒になぞらえた造塔と言える。また3. 大慶寺塔の二基は、江ノ島道と藤沢からの街道の交差点に位置する小高い山の麓に所在する。この山は立地や、中腹に建つ梶原御霊神社が頼朝入府以前の創建であることから見て、交通の「アテ山」とされていた可能性が高い。この山には大慶寺以外にも複数の寺院が山を取り囲むように所在し、そのうち等覚寺が弥勒院を号していることもふまえれば、山には弥勒信仰による経塚が埋納されている可能性もある。

経塚とは、經典を地中に埋納する仏教的作善行為の一種である。

実例として発見される經典や願意はさまざまだが、末法思想にもとづく弥勒信仰の意味合いで行われることが多く、埋納される經典は「法華経」が最も多い<sup>5)</sup>。確実な最古の遺物、長徳四年（九九八）の藤原道長埋納の例も法華経である。これらの行為は街道から見晴らしの良い丘陵上に置かれる例も多く、経塚行為が行われている場所に、後世、法華経に由来する宝塔が建てられたとしても不思議ではあるまい。大慶寺の二基の宝塔が経塚に関連するならば、本来は山上に位置していたことが推察される。

他の中世都市に比べ、鎌倉には経塚が少なくと常々指摘されるが、経塚の可能性を示す場所が現在も神聖な場所として守護されていることこそが、発見に至らない理由なのではないだろうか。

このほか2. 別願寺塔は鎌倉最大の規模と卓越した技巧が指摘される塔であるが、当寺院は安養院と同じ丘陵を背にしており、山上に造立される経塚の意味を有していたのであれば、この塔も本来は安養院宝篋印塔と共に丘陵上に並び立っていたことが想像される。なおこの丘陵は、鎌倉市内の中央に最も突き出している高台であり、大町四ツ角や名越切通しの入口に当たる場所である。

なお、鎌倉を海から見た場合、先述の五所神社（三島神社）は灯台の役割を果たしていたと言われるように、海から目立つ丘陵であるが、安養院や別願寺の所在する丘陵も海から目立つ丘陵である点は注視すべきである（図8）。この上に石塔が建っていれば、功德も併せ持つランドマークとして十分な機能を果たしたことだろう。なお、

名越から鎌倉に入った際に最初に目に留まる「アテ山」もこの丘陵である(図9)。鎌倉期でも特に造形の整った宝篋印塔・宝塔が立つのは、こうした理由があるためである。

### 3. 層塔

鎌倉に存在する層塔(石造)は、管見の限りだが十二基確認している(図5)。層塔は、寺院伽藍の木造五重塔のように、舍利を納める塔の本来の意味をもっとも受け継いだ塔である。また仏教を信仰した天皇の墓塔として用いられた歴史がある。これは天皇の遺骨が仏舎利と同等の扱いを受けたことを表わしており、白河上皇の近臣僧で東寺長者でもあった真言宗小野流の範俊(一〇三八・一一一二)が、王権護持の観点から大日如来と天照大神と当代天皇が同体であると説いたことによる<sup>6)</sup>。国主(天皇)の心には、すべての根源たる阿字が備わっているとの観念から、仏陀と同じ扱いで埋葬されることとなり、天承元年(一一三二)に白河上皇の遺骨は、鳥羽にある三重塔に埋葬された。

ただ、層塔が市中に造立される様相はここからは想像できない。日本における石造物の中で層塔は最も古い種類でもある。最古例には奈良竜福寺層塔(勝宝三年「七五一」)や滋賀石塔寺(白鳳時代)があり、これらの塔は阿育王塔とも呼ばれている。マウリヤ朝アシールカ王が滅罪のため八万四千の塔を国中に立てた故事に由来する名称で、中世では頼朝も做った追善仏事だが、これが鎌倉の層塔に適用されたようには見えない。

一方、奈良般若寺層塔(建長五年「一二五三」ごろ)や京都浮島層塔(弘安九年「一二八六」ごろ)のように、鎌倉後期には懺悔し善根を積むよう促すことを目的とし、供養、救済の石造層塔が建てられるようになる<sup>7)</sup>。これらは架橋など事業に関わって建てられたが、造塔の場所が交通の要所となる場所である点は、鎌倉の例に共通すると言えよう。辻などに設置された層塔の造立目的は、これらの塔から直接派生したとは言えないものの、流行し、影響を受けたものが導入されたものと考えられる。

鎌倉の層塔は一部を除き、辻となる場所に残存している。極楽寺地区所在の著名な上杉憲方塔やいわゆる五山塔などがあるが、由緒の不明な塔が多いため個別の説明は省く。

図6の地図上、層塔の12。天台山山頂塔は、平成十二年に行われた山稜部の調査で未成品がこの付近より出土した事例である。また、4・明王院塔は大江広元塔と伝わり、明王院裏山に位置する。これら二基は山頂および丘陵の先端に位置する塔であり、目的が異なるのかもしれないが、それ以外の塔は道の辻に置かれていたものと判断する。例えば、極楽寺、常盤の塔は街道の辻に位置する場所に残り、別願寺に残る塔の残欠は大町四ツ角に近い。また五山塔は、それぞれ鎌倉五山の門前に立つ塔で、おそらく近世に造立された例も含まれるが、五山の門前には街道が通り、辻が近在することには注意したい。

さらに、鎌倉十井のひとつ「鉄井」近隣の民家には、五山塔同様、凝灰岩製の層塔が存在し、型式から見れば、五山塔に比べ古手の様

相を呈する。この場所は鶴岡八幡宮の三方堀の一角となる場所で、古道となる窟堂前を通る道に続く辻となる。宝篋印塔や宝塔と違い、見通せる場所ではないが、大小道が入り乱れる都市の街路では、近い目線の目印も重要となるのだろう。

#### 小結

以上、鎌倉の石塔を見てきた。これら造塔行為が用いられた理由として考えられるのは、十三世紀後半から十四世紀初頭にかけての石造技術の導入とそれに伴う一種の流行が起きたこと、石材という恒久性の高い建造物であったことなどが挙げられる。

これら造塔行為は鎮護国家・慰霊鎮魂・怨霊調伏といった意味があり、都市や街道に恩恵をもたらす存在であるとともに、造立者の善根の功德を有していた<sup>62</sup>。また目立つ場所に建てられる特徴は、本来の宗教的な役割を超越し、街道や市中的のランドマークとしてさらなる役割を得ることとなる。これは都市という様々な人種の集う場所だからこそその特性と言えるだろう。なお、広域な石塔配置図を見ても、鎌倉を中心とした範囲にしか大型塔が存在しない点には注目したい(図7)。

ちなみに六浦に建つ二基の石塔は、現在上行寺に所在しているが、先述の結果に則るなら、本来は隣接する丘陵上にあつたはずである。この上行寺の東斜面の丘陵頂部は、いわゆる上行寺東遺跡に当たる。この遺跡を包括する御伊勢山・権現山が六浦湊の湊山として機能していたことは先に述べたが、遺跡の存在したマンション建設地から

は六浦湾を一望できることが知られており<sup>63</sup>、海からの「アテ山」であるとともに、港の管制塔「日和山」の役割も備えていたことだろう<sup>64</sup>。また遺跡出土地は御伊勢山・権現山が南にもっとも突き出した丘陵に当たる。中世六浦の海は現在より内陸まで押し寄せていたことが知られ、汀線は丘陵の眼下にまで迫っていた<sup>65</sup>。六浦道はこの丘陵と汀線と隙間を縫うかたちで走っており、海の干満次第では難所となっていた可能性もある。

先述の中国宝篋印塔の事例のように、港の見える山に安置された塔は、海上交通のほか物資を鎌倉まで運ぶ陸上交通の安全祈願の意味があつたことは、上行寺宝篋印塔に記された牛馬供養の銘文からも察することができる。京都の東の出入り口、逢坂の関にかつて存在した関寺の跡には、「牛塔」と呼ばれる宝塔があり、十代弟子の迦葉仏を名乗る関寺の霊牛を供養するため建てられた平安後期の塔として知られるが<sup>66</sup>、京と鎌倉それぞれの東の出入り口に「牛馬」と「牛」の供養塔があることは偶然ではないように思われる。

#### 四．鎌倉の境界

では、これらの石塔が所在する範囲は何を示すのだろうか。

『吾妻鏡』には、鎌倉において「七瀬祓」という祓いの儀式が行われている。この儀式は京で行われていた王権の行事を真似たもので、範囲の異なるいくつかの種類とともに、行為自体が重層的な境界認識の存在を示唆する<sup>67</sup>。なかでも最大の範囲で行われる種類が「霊

所七瀬祓」で、幕府主導の儀礼の中で、これ以上の範囲を示す史料は存在しない。つまり、この儀礼が行われた結界の内部が、当時の幕府の認識する鎌倉の最大範囲と考えることが出来るだろう。

『吾妻鏡』には、この儀礼の選定地を記す記事が二度登場する。すなわち、一度目は貞応三年(一二二四)、「由比浜・金洗澤池・固瀬河・六連・イタチ(けものへんに由)川・社戸・江嶋龍穴」で行われ、二度目は寛喜二年(一二三〇)、「由比浜・金洗沢・多古恵河・固瀬河・社戸・イタチ(けものへんに由)川・六浦・堅瀬河」で行われている。この範囲がこの時代の鎌倉幕府の認識する鎌倉の限界、いわば「鎌倉世界」の限界である。

図7の地図に霊所七瀬が行なわれた場所を御幣で表現したが、石塔はその範囲の中にすっぽりと納まることが見て取れる。つまり、地図に示した鎌倉と周辺域の中で、大型石塔、特に大型宝篋印塔の造立は、幕府の認識する鎌倉の中でしか行われておらず、中と外を明確に区分していることが理解できる。

これまで共通性を見いだせなかった塔も含め、近隣すべての大型宝篋印塔は鎌倉の内側に造立されたと見てよいだろう。このことは丘陵上という目立つ場所に所在する大型の石塔が見えた時、「あれが見えたら鎌倉」という意識を当時の人々に植え付けたことを想像させる。

なお、当然ながら本稿で取り上げた大型の宝篋印塔の願主となり得る人物は、相当な身分を有した者に限られるだろう。しかし、これらの行為に縁を求めることは民衆であっても可能であり、そうした

行動が銘文に見られる「結衆」といった文言に表れている。これらの作善行為は、市中や街道から望める立地により常に民衆への功德として還元される。こうした塔が鎌倉時代を含め、南北朝期・室町期にかけて造立されていったことは、鎌倉の為政者が代わりつつも、都市の機能が断続的ながら維持されていたことを示唆しているのではないだろうか。

また、やぐらを用いた検討では鎌倉の境界や範囲を示す結果は表れないとしたが、霊所七瀬祓の示す境界認識を念頭に図を見直すと、過密な鎌倉中心部の山稜地域、それよりも数は減るがまだ密度の高い六浦方面と逗子方面があり、さらに外側は一気に数を減らすといった様相が現れていることに気付く。あるいはこれが「鎌倉世界」の内と外の差異で、鎌倉中心部の過密地域は、四角四境祭などの示すもう一つの境界なのであれば、やぐらからも都市鎌倉を取り巻く重層的な境界の存在を認識できると言えるだろう。

## 五. 景勝地とヴィスタ

なお、注目したい視点にヴィスタ(ヴィスタ・アイストップ)という手法がある。展望や眺望を意味し、都市における街路空間の軸線上にアイストップとなる存在を置くことで景観を形成する計画・設計手法で、おもに建築学で用いられる用語である<sup>66)</sup>。この手法は都市を景観的に意味づけるために用いられるとし、西欧の都市では操作可能な人工構造物を焦点にする特徴がある。一方、日本でもこの

技法に似た街路景観計画があり、街路の軸線上に山岳が来るように街路を定め、象徴的な街路空間とする設計手法が存在する。いわゆる「山アテ」である。江戸における柴の愛宕山や筑波山、そして富士見町などの地名に見られる富士山が著名であるが、日本古来の技法と伝えられる<sup>6)</sup>。

鎌倉の都市形成が地形を利用したものであったことは、地質学や歴史地理学からの研究で明らかである。また近年では、鎌倉は古代の郡衙が存在する交通の要所であったと認識されており、諸説あるが、源頼朝が入部するとき鎌倉にすでに存在していた交通路として、海側と山側の二つの東西道と、それを繋ぐ南北道が存在したことが知られる<sup>7)</sup>。

このうちまず、存在が確実視されている南北道が現在の今小路であるが、この道路を歩くと先に丘陵の先端が見えることに気付く(図10)。これを、地形を立体的に表現した3Dカシミール地図から見ると、今小路の直線道路の先にある丘陵の先端が、窟堂であることがわかる(図11①)。窟屋道は『吾妻鏡』にも早い時代から記載が見られる施設であり<sup>8)</sup>、古代の今小路を設定する上でヴィスタを通す「アテ山」だったと考えられる。同様に、六浦道「岐れ道交差点」付近から先を見通すと、正面に見える丘陵の先端が窟堂であることも興味深い(図11②)。

また馬淵和雄氏と山村亜希氏が存在を想定する小町大路を、秋山哲雄氏は六浦道との交差点付近に限定して存在していたと述べるが、小町大路の六浦道寄りの道路は直線的である。現在は建物が遮蔽物

となつて見通すことはできないが、地図上の直線の先には、源頼朝の墓を有する西御門の丘陵の先端が現れる(図11③)。

さらに先述の安養院裏山の丘陵は、名越切通から鎌倉に入った際に真っ先に見える山であるが、道の正面に頂部が見える点はヴィスタが通っていると言える(図9・11④)。すべてを検討することはできないが、鎌倉における古代道が「アテ山」として地形を利用していた証拠は現代にも目に見えるかたちで残されている。今後も検討を重ねていきたい重要な視点である。

## おわりに

以上、やぐらと石塔、仏像という信仰対象物の観点から、都市鎌倉を見つめ直し、より広域な視点から範囲の認識、「みち」と境界について考察した。鎌倉が都市として発展する以前、海上や陸地の街道から目立つ山稜や丘陵などの景勝地は、アテ山として信仰の対象となり、そこに社寺が建立される。のちに鎌倉では北条氏などの邸宅が発達したタイプの寺院が主体となり、建立地は谷戸に移るが、ランドマークとなる景勝地は信仰地としてあり続け、そこに石塔が建てられる様相を推察した。

石塔については鎌倉周辺域に限って事例を見てきたが、神奈川県内の大型宝篋印塔の造立例は少なくない。図12に示した石造物は『日本石造物辞典』『神奈川県』所収の著名な例に限っているが、箱根塔や曾我祐信塔小田原などは山上に位置し、厚木円光寺塔の例も



含め街道に接して造立されている。また相模原当麻寺塔は相模川、三崎城ヶ島塔は海上交通の要所であるなど、立地には鎌倉の例と共通した意味を推察することができる。

また本章では取り上げなかったが、一部の五輪塔の位置も無視できない。五輪塔は墓塔という認識が強いことは第一部でも述べたが、茅ヶ崎龍前院塔や磯子東漸寺塔などは、それぞれ複数基が水辺に造立されていることが注目される。龍前院は相模川橋脚出土地点に隣接する街道沿いの寺院であるが、境内には鎌倉から南北朝期の様相を呈する十〇基の五輪塔が並んでいる。また磯子東漸寺は元来海岸沿い位置しており、現在境内に安置される鎌倉時代後期の五輪塔三基はかつて海沿いに立っていたと伝えられる。第一部第一章でも述べたが、五輪塔の使用法の一つに木製板塔婆を水辺へさらす儀礼がある。「流れ灌頂」呼ばれるこの行事は、亡くなった者への「滅罪」の意味があり、水場へさらすことで罪を洗い流すことができるという<sup>72</sup>。これは水難事故死者に対しても行われることも鑑みれば、墓塔としての意味合いが強い五輪塔にあっても、海難を供養し安全を祈願する、立地を優先した塔が存在するのである。

今後調査が進展することにより、事象がさらに明瞭になることを期待したい。

## 第二部第一章 補注

- 1 赤星直忠 一九五九「鎌倉の石造建造物」『鎌倉市史 考古篇』鎌倉市教委、同 一九八〇『中世考古学の研究』有隣堂ほか。
- 2 馬淵和雄 一九九四「武士の都―その成立と構想をめぐって―」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む2』新人物往来社、石塚勝二〇一〇「一遍の鎌倉入り―『一遍聖絵』の検討を中心に―」『神奈川県史研究』二七号など。
- 3 戸田芳実 一九九四「わたしの古道遍歴」『中世の神仏と古道』吉川弘文館、藤本頼人 二〇一一『中世の河海と地域社会』高志書院 ほか。
- 4 秋山哲雄 二〇一一「成立期鎌倉のかたち」『都市のかたち』山川出版社
- 5 岩井沙織 二〇一五『中世東国の「みち」の在り方とその復元』青山学院大学博士学位申請論文
- 6 国土地理院地図を下地に、等高線に色分けを施した。鎌倉の山は最高峰でも一五〇m前後で、一〇〇m以上となる範囲も少ないことから、区分した等高線は二〇m、五〇m、七〇m、九〇mのみとした。また、六浦近辺は現在工業地帯として開発が進み、中世当時の様相が現存しないことから、開発以前の地図である明治一三年（一九九年）に陸軍が作成した『迅速測図』をもとに海岸線を復元した。なお『迅速測図』に記される明治時代当時の道についても、大型の道路を優先しつつ可能な限り落とし込んである。
- 7 大三輪龍彦 一九九二「やぐら」『鎌倉辞典』東京堂出版
- 8 安生素明 二〇〇三「中世鎌倉地域の葬送―やぐらを中心として―」『駒沢考古』二九 駒沢大学考古学研究室、かながわ考古学財団中世研究プロジェクトチーム 二〇〇三「神奈川県内の「やぐら」集成」『かながわの考古学』八、千葉県史料研究財団 一九九六『千葉県やぐら分布調査報告書』横須賀考古学会二〇一〇『三浦半島考古学事典』より作成。
- 9 武井律子 一九七九「神奈川県の平安仏―相模国を中心に―」『鎌倉』三二号
- 10 西山美香 二〇〇六「鎌倉將軍の八万四千塔供養と育王山信仰」『金沢文庫研究』315号 県立金沢文庫
- 11 神奈川県教育庁社会教育部一九七五・八七『神奈川県文化財図鑑彫刻篇』・『同補遺篇』神奈川県教育委員会
- 12 藤沢市教育委員会博物館設立準備担当 一九九七『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会
- 13 神奈川県民部県史編纂室編一九八〇『神奈川県史』通史編、南足柄市編一九九八、九九『南足柄市史』通史編、神崎彰利・福島金治編二〇〇二『鎌倉・横浜と東海道』街道の日本史二一吉川弘文館
- 14 『吾妻鏡』建暦二年二月廿八日条
- 15 鈴木沙織 二〇一五『鎌倉と武蔵国東漸寺』NPO鎌倉考古学研究所
- 16 清水真澄一九八六『かながわの平安仏』神奈川合同出版
- 17 『岩波仏教辞典』「薬師如来」、「薬師経」、「医王」、「浄瑠璃世界」の項より。（中村元ほか編二〇〇二『岩波仏教辞典』第二版、岩波書店）
- 18 熊原政男 一九六二「称名寺々領としての釜利谷郷（上）・（下）」『金沢文庫研究』八五・八六、藤原良章 二〇〇四「中世

のみち探訪』『中世のみちを語る』高志書院

<sup>1</sup> 岡田健一九九八・九九「東寺毘沙門天像―羅城門安置説と造立年代に関する考察―(上)・(下)」『美術研究』三七〇・三七一ほか。

<sup>2</sup> 0 金文京二〇一二「毘沙門信仰による都市伝説と預言書」小峰和明編『東アジアの今昔物語集』勉誠出版

<sup>2</sup> 1 むしやのこうじみのる一九八〇「東日本の兜跋毘沙門天」『地方仏』法政大学出版局

<sup>2</sup> 2 鎌倉市教育委員会編一九八六『鎌倉市文化財総合目録』書跡・絵画・彫刻・工芸編

<sup>2</sup> 3 頭部のみ平安中期で鉢部は室町時代という。(本間紀男 二〇一三) 『木彫仏の実像と変遷』大河書店

<sup>2</sup> 4 『岩波仏教辞典』「十二面観音」の項より。(中村元ほか前掲註17文献)

<sup>2</sup> 5 鎌倉国宝館二〇一〇『薬師如来と十二神将くいやしのみほとけたち』特別展図録

<sup>2</sup> 6 『吾妻鏡』建保六年(一二二八)十二月二日条

<sup>2</sup> 7 内藤浩之氏のご教示による。

<sup>2</sup> 8 二つの山号寺号をもち、加持山靈山寺とも号する。(鎌倉市教育委員会 一九五九『鎌倉市史社寺編』)

<sup>2</sup> 9 『吾妻鏡』元仁元年(一二二四)十二月二六日条に「東六浦・南小壺・西稲村・北山内」、同嘉禎元年(一二三五)十二月二十日条に「北小袋・南小壺・東六浦・西固瀬河」とある。

<sup>3</sup> 0 初見は『吾妻鏡』養和元年(一一八一)閏二月二十七日条。また義経の首実検も「腰越ノ浦」である(『吾妻鏡』文治五年六月十二日条)。

<sup>3</sup> 1 『吾妻鏡』養和元年(一一八一)九月十六日条

<sup>3</sup> 2 藤原良章前掲

<sup>3</sup> 3 清水氏前掲註16文献、鎌倉市教育委員会 一九七一『としよりのはなし』鎌倉市文化財資料第七集

<sup>3</sup> 4 北条泰時が関わり、一三世紀第二四半期の造立が想定されている(塩澤寛樹 二〇〇九『鎌倉時代造像論』吉川弘文館)

<sup>3</sup> 5 江藤昭編 一九八三『上郷猿田遺跡』横浜市上郷猿田遺跡調査団

<sup>3</sup> 6 図1・2にあるように、白山神社周辺にやぐらが分布しているため、鎌倉時代後期頃でも鎌倉からの道は存在したと見られる。

<sup>3</sup> 7 河野真知郎 二〇〇七「中世都市鎌倉の環境」『年報 人類文化研究のための非文字文化資料の体系化』第四号 神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、鈴木弘太 二〇一一「中世

鎌倉の初期地形と都市領域」(のち二〇一五『鎌倉考古学の基礎的研究』高志書院)『鶴見考古』第一〇号鶴見大学文学部文化財

学科(のち二〇一三『中世鎌倉の都市構造と堅六建物』同成社)

<sup>3</sup> 8 山村亜希 二〇〇九「東国の中世都市の形成過程―鎌倉の空間構造とその変遷」『中世都市の空間構造』吉川弘文館

<sup>3</sup> 9 秋山哲雄 二〇〇六『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館

<sup>4</sup> 0 岡陽一郎 一九九八「中世鎌倉の海・浜・港―港を望む神社―」『列島の文化史』11 日本エディタースクール出版部

<sup>4</sup> 1 藤原良章 二〇〇三「権現山」『中世の六浦を歩く―朝比奈切通から称名寺へ―』横浜市教育局委員会

<sup>4</sup> 2 柘植信行 一九九四「開かれた東国の海上交通と品川湊」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む 2』新人物往来社

<sup>4</sup> 3 川勝政太郎 一九五七『日本石材工芸史』綜芸舎

<sup>4</sup> 4 日本石造物辞典編纂委員会編 二〇一三『日本石造物辞典』吉川弘文館

<sup>4</sup> 5 前掲註44より抽出。

<sup>4</sup> 6 大三輪龍哉「中世東国における石製塔婆の研究」『考古学論究』第十一号

<sup>4</sup> 7 安養院一九八〇『重要文化財安養院宝篋印塔保存修理工事報告書』

- 48 上本進二 二〇〇四 「鎌倉の地形発達史」『国立歴史民俗博物館研究報告 第一一八集』国立歴史民俗博物館
- 49 藤沢市前掲註12文献。
- 50 鈴木氏前掲註37文献。
- 51 松尾宣方氏のご教示によると、畠山重保塔の耐性検査の際、塔下から遺構は検出されなかったという。移動している可能性が高いと言えよう。また上本進二氏のご教示によれば、砂丘のトップは数年で位置を変えろという。
- 52 候補の一つに浜の地藏堂がある。現在覚園寺に安置される黒地藏（地藏菩薩立像）は、鎌倉時代中期の作と見られ、もとは浜の地藏堂に置かれていたとの伝承がある（『沙石集』）。
- 53 馬場紀寿 二〇一三「仏塔・仏像を礼拝すると、なぜ功德があるのか—スリランカから慶派に伝わる陀羅尼経の存在—」『B1』
- No.6 東京大学東洋文化研究所
- 54 前掲註51参照。ほか、岡本智子 二〇〇七「中国の宝篋印塔と日本の宝篋印塔」『中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究—宝篋印塔を中心に—』シルクロード学研究Vol.2(財)なら・シルクロード博記念国際交流財団・シルクロード学研究センター、山川均 二〇〇八『中世石造物の研究—石工・民衆・聖』日本史料研究会
- 55 吉河功 二〇〇〇『石造宝篋印塔の成立』第一書房、佐藤重聖 二〇〇七「中国宝篋印塔の調査 小結」『中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究—宝篋印塔を中心に—』シルクロード学研究Vol.2(財)なら・シルクロード博記念国際交流財団・シルクロード学研究センター
- 56 『新編相模風土記』巻一二五 村里部 三浦郡 九「泊船庵跡」
- 57 前掲註42より抽出。
- 58 鎌倉市教育委員会編 一九八六『鎌倉市文化財総合目録』建築

- 物編、古田土俊一 二〇〇四「鎌倉成就院の宝塔」『鶴見考古第四号』
- 59 石田茂作 一九八四「経塚」『新版仏教考古学講座』六 雄山閣出版
- 60 上島享 二〇一〇「仏塔に埋葬された上皇」高木博志・山田邦和編『歴史の中の天皇陵』思文閣出版
- 61 山川均 二〇一五『石塔造立』法蔵館
- 62 西山美香 二〇〇六「鎌倉將軍の八万四千塔供養と育王山信仰」『金沢文庫研究316号』県立金沢文庫
- 63 金沢区制五十周年記念事業委員会「図説 かなざわの歴史」
- 64 斉藤潮 二〇〇八「港の景観の原型」『景観用語事典 改訂増補版』彰国社
- 65 横浜市教育委員会 二〇〇三『中世の六浦を歩く—朝比奈切通から称名寺へ—』
- 66 山川氏前掲註61文献
- 67 山上伊豆母一九七三『七瀬の祓』の源流』『古代祭祀伝承の研究』雄山閣、金子裕之 一九八五「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第七集、原田敦子 一九九五「水辺の鎮魂・蜻蛉日記の唐崎祓」『国文学攷』no.145 広島大学国語国文学会
- 68 天野光一「街路の線形と横断面構成」『山アテ』篠原修編 二〇〇八『景観用語事典 増補改訂版』彰国社
- 69 斉藤潮「港の景観の原型」篠原修編 二〇〇八『景観用語事典 増補改訂版』彰国社
- 70 野口実 一九九三「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』四五・九、馬淵和雄 一九九四「武士の都 鎌倉」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む』新人物往来社、山村亜希 二〇〇九「東国の中世都市の形成過程」『中世都市の空間構造』吉川弘文館、秋山註2文献。
- 71 『吾妻鏡』文治四年（一一八八）正月一日
- 72 五来重 一九九二「塔婆」『葬と供養』

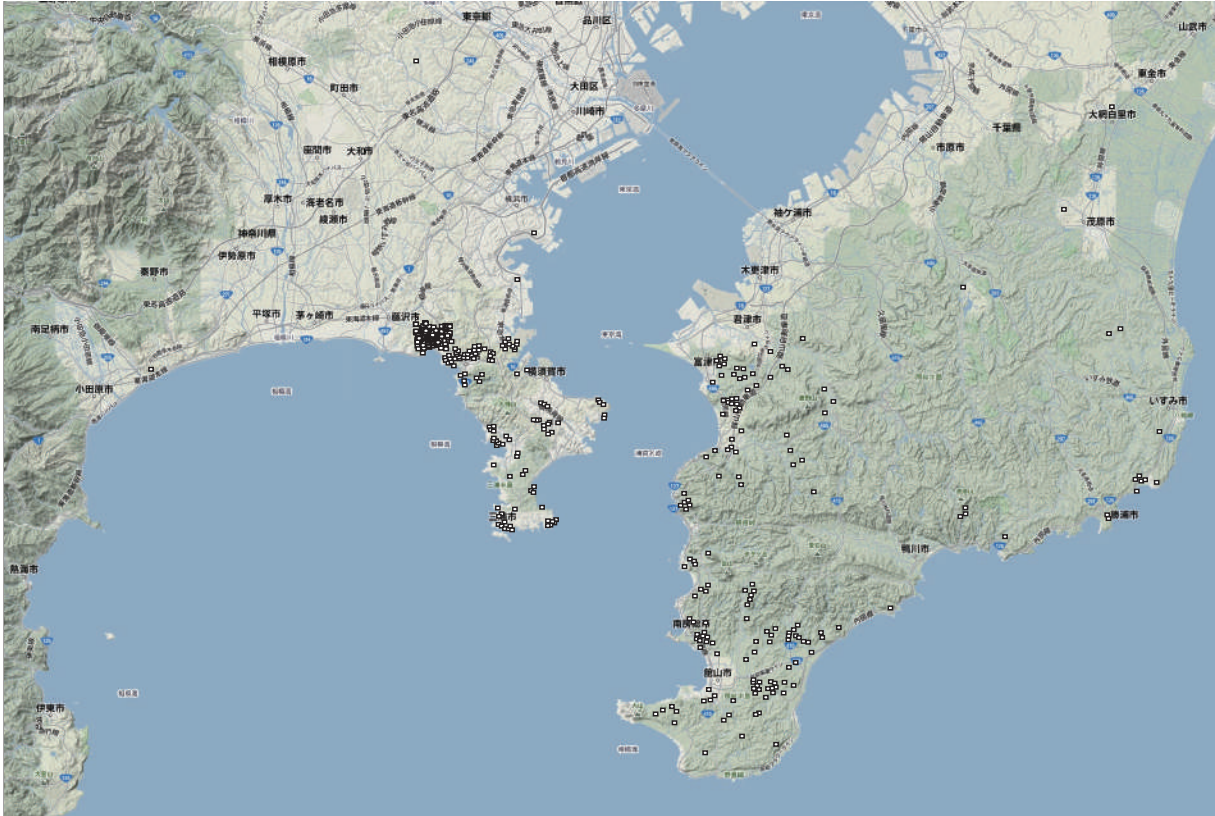


図 1-1 南関東やぐら分布図 (Google マップ地形図を使用)



- ・千葉県史料研究財団 1996 『千葉県やぐら分布調査報告書』・横須賀考古学会 2010 『三浦半島考古学事典』
- ・かながわ考古学財団中世研究プロジェクトチーム 2003 「神奈川県内の「やぐら」集成」『かながわの考古学 8』
- ・安生素明 2003 「中世鎌倉地域の葬送—やぐらを中心として—」『駒沢考古 29』駒澤大学考古学研究室

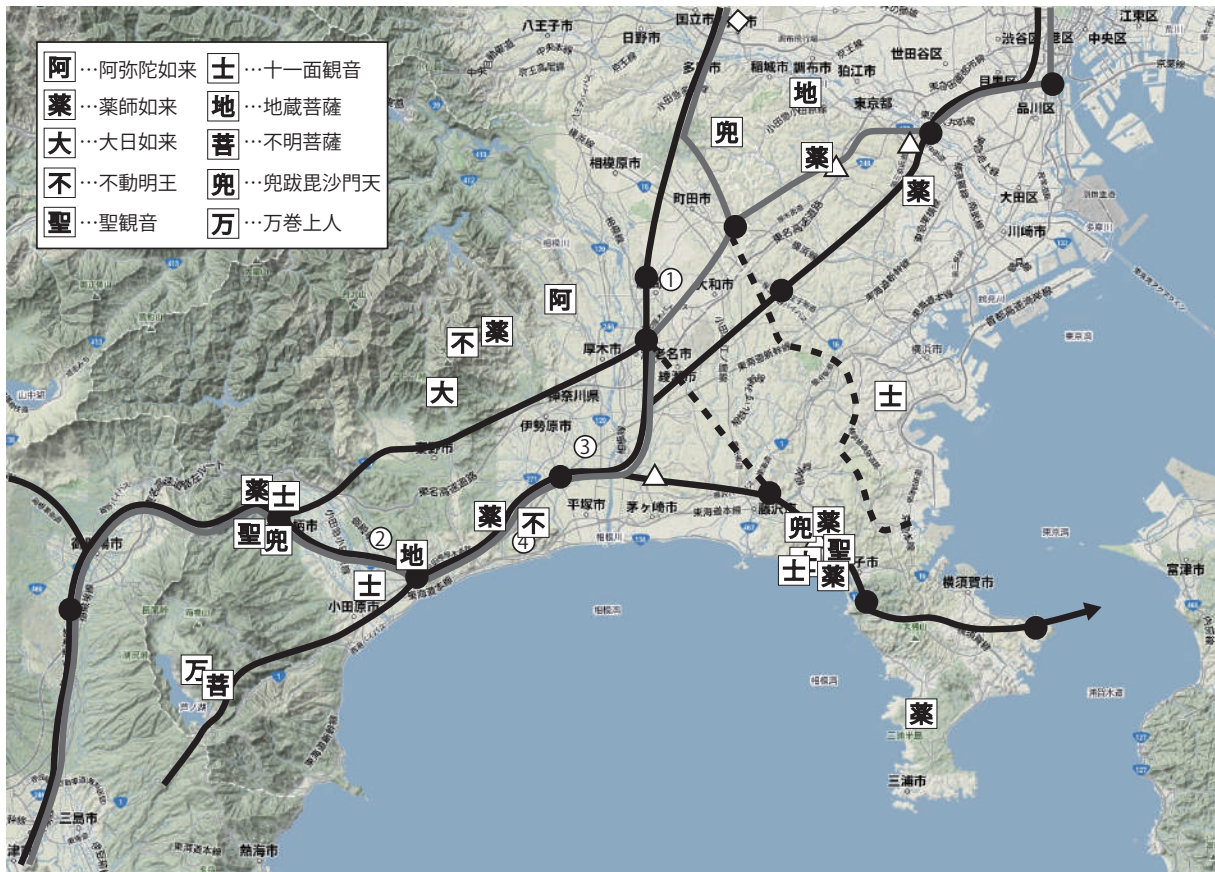


図 2-1 相模国想定古代交通網および平安期仏像配置図

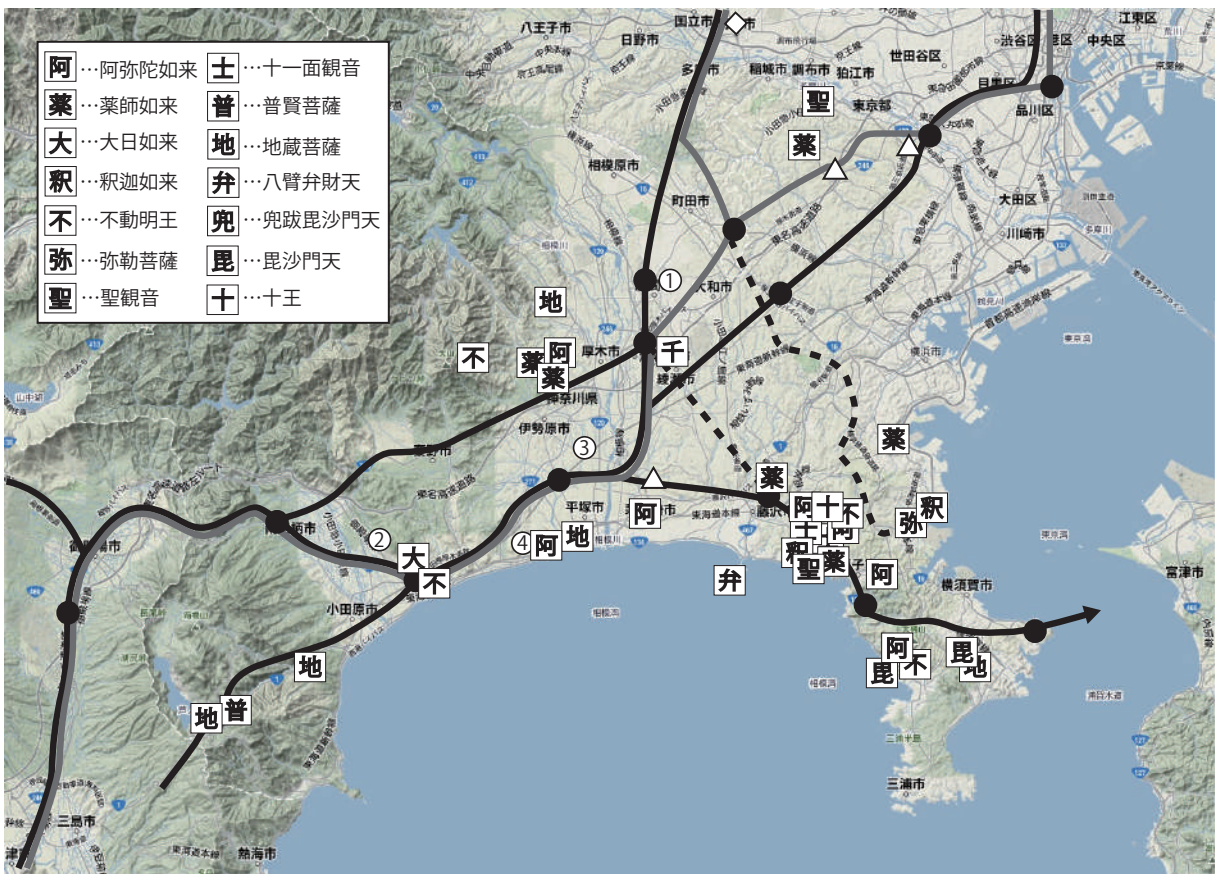


図 2-2 相模国想定古代交通網および鎌倉期仏像配置図

(● 駅家 ◇ 武蔵国府 △ 郡衙 ① 高座国府 ② 足柄国府 ③ 大住国府 ④ 余綾国府) 地図は Google を使用



図3 鎌倉所在平安仏および初期社寺配置図

図4 鎌倉の宝篋印塔

鎌倉所在の宝篋印塔の内、銘文や発掘調査により墓塔であることが確認されていない大型で単立の塔を抽出。  
番号は図6・7に符合する。

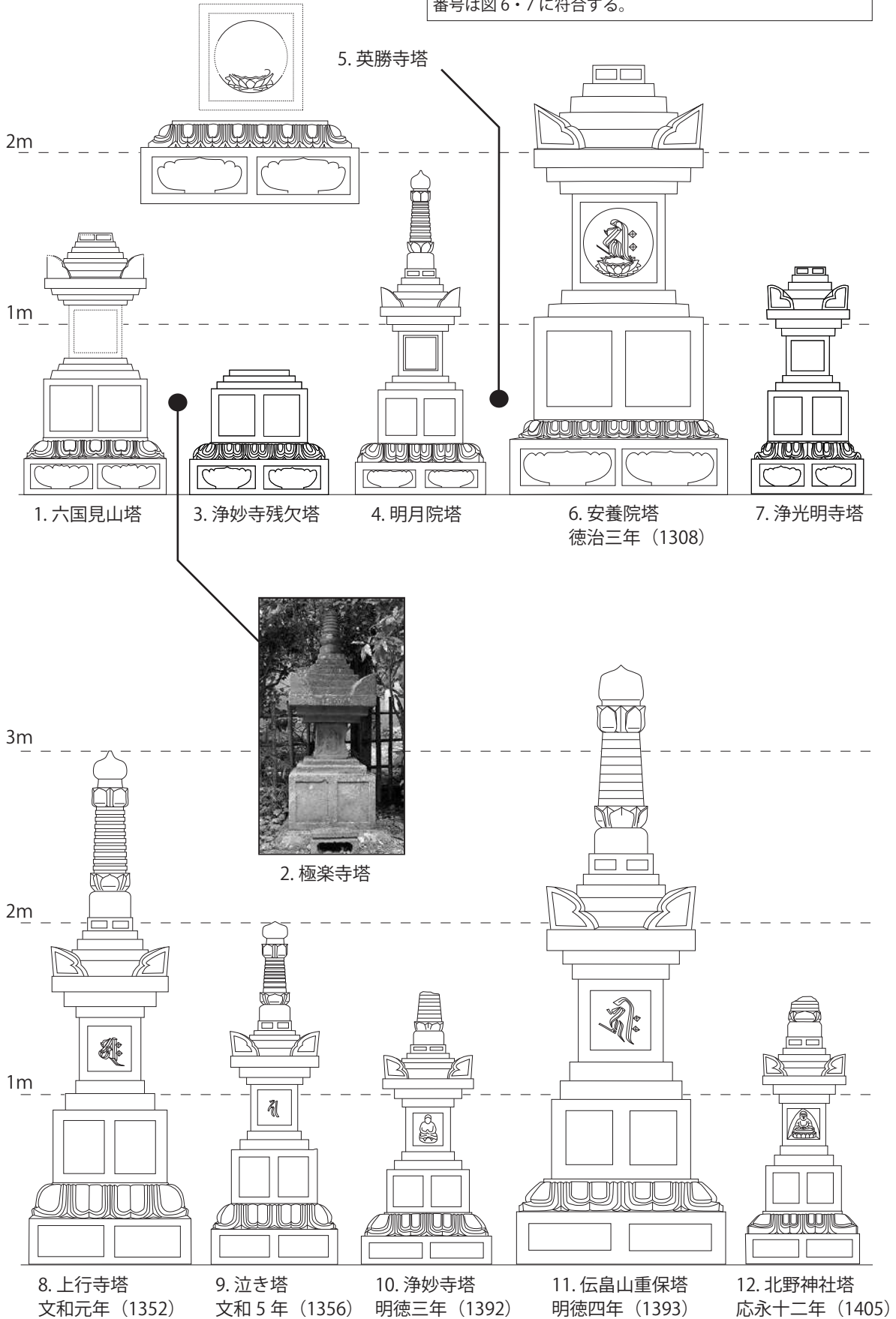
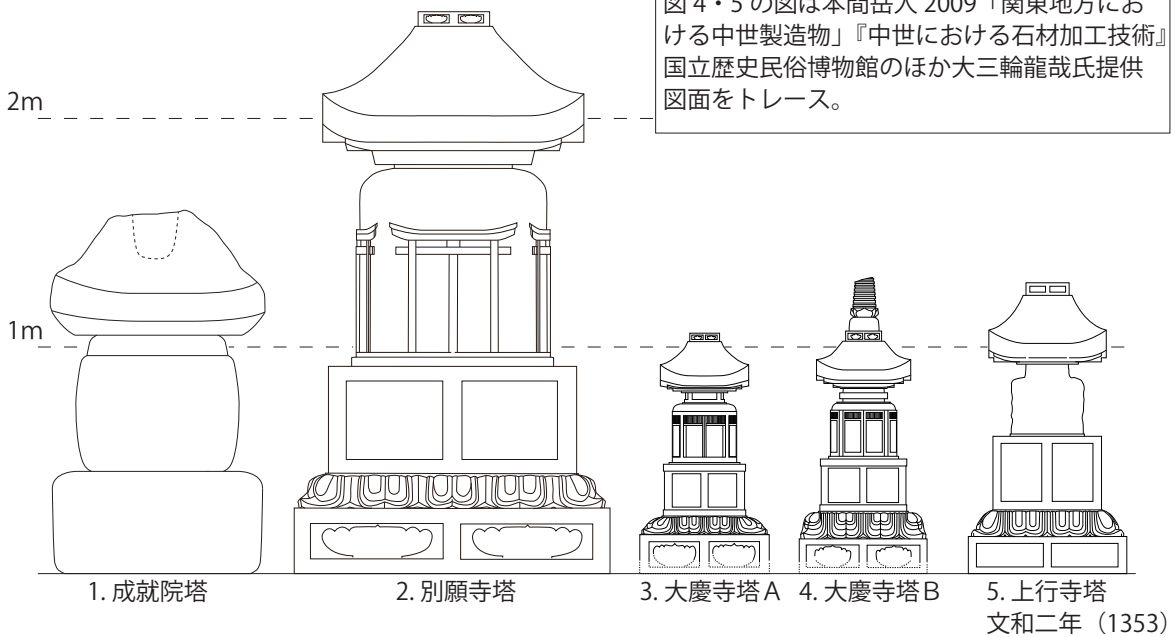




図5 鎌倉の宝塔・層塔

図4・5の図は本間岳人 2009「関東地方における中世製造物」『中世における石材加工技術』国立歴史民俗博物館のほか大三輪龍哉氏提供図面をトレース。



12. 天台山出土層塔未成品



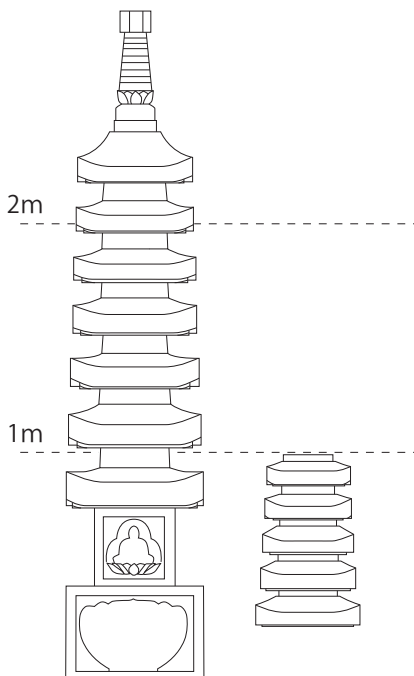
3. 常盤塔



6. 建長寺塔



9. 浄妙寺塔



4. 明王院塔



7. 円覚寺塔



10. 海蔵寺塔



5.1 隣接塔



8. 寿福寺塔



11. 鉄井近隣塔

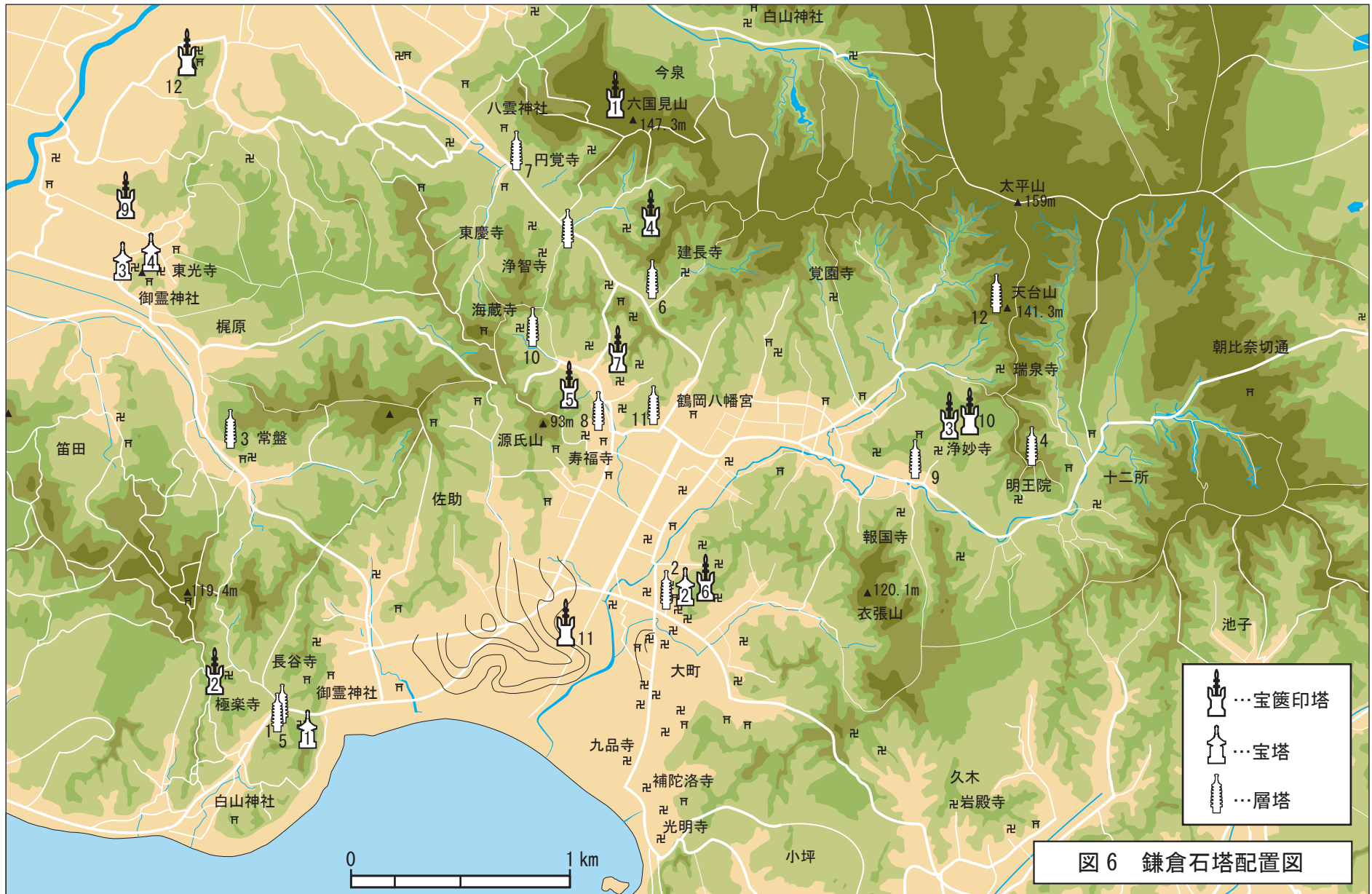
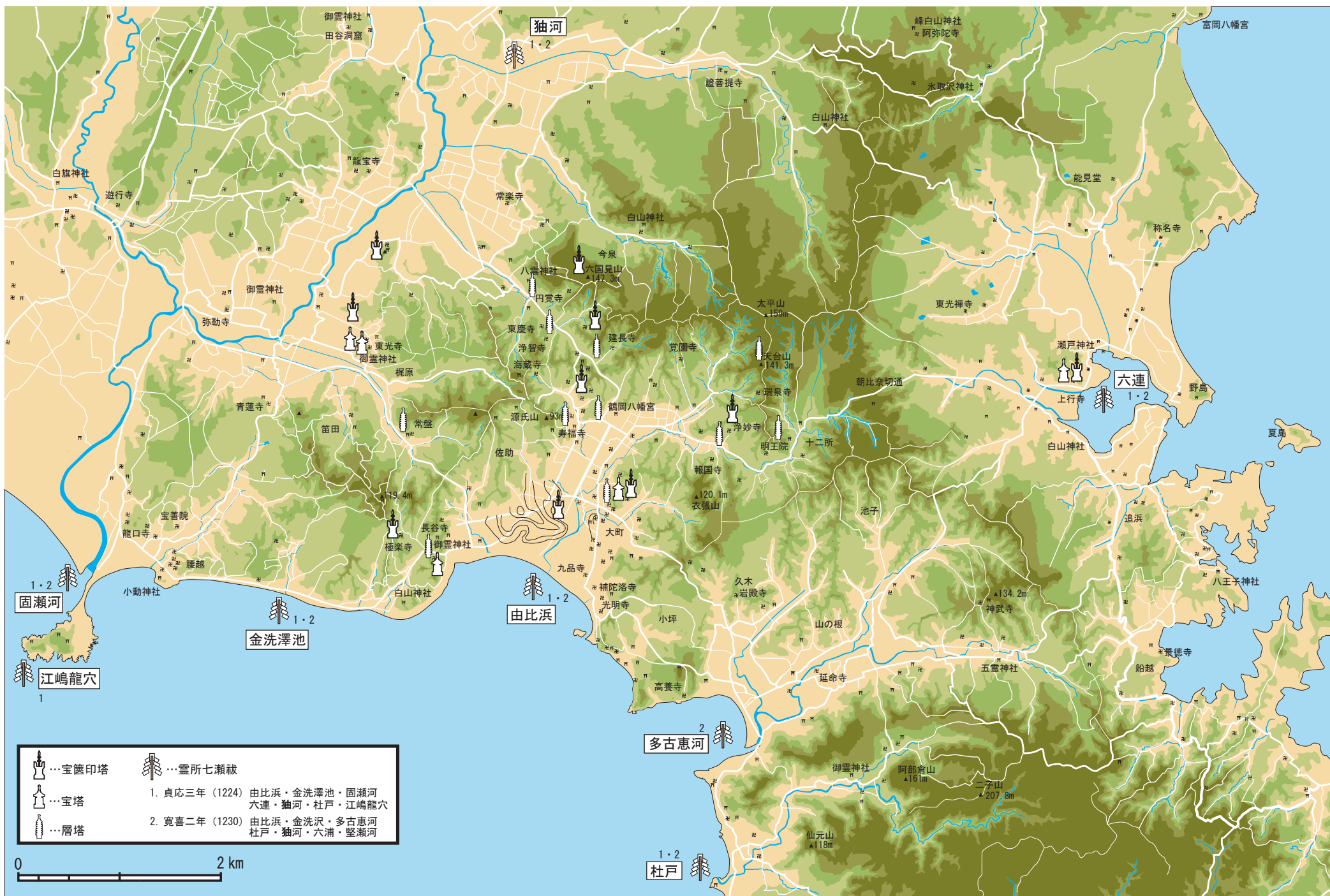


図7 鎌倉周辺域石塔および霊所七瀬配置図



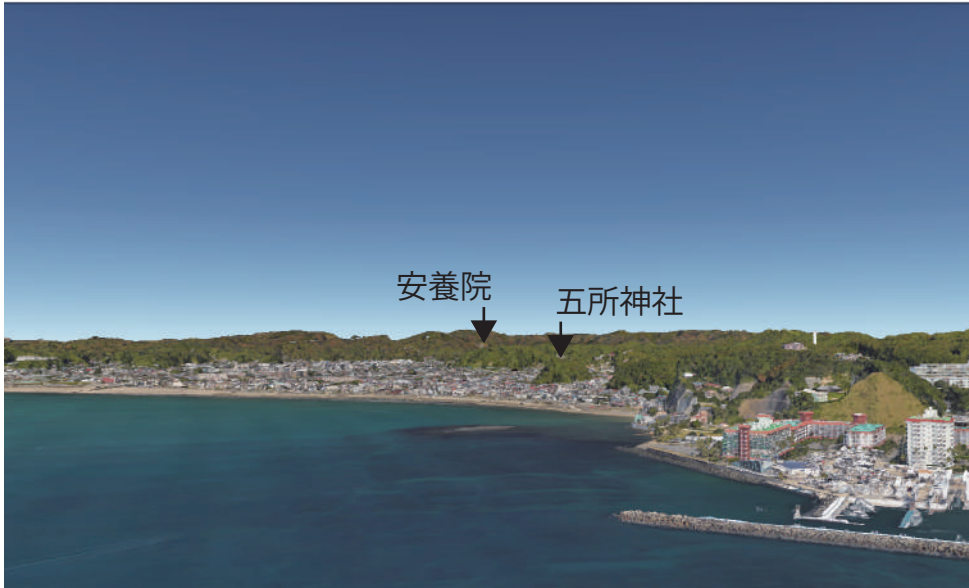


図8 和賀江島方面から鎌倉湾と丘陵を望む (Google earth を使用)

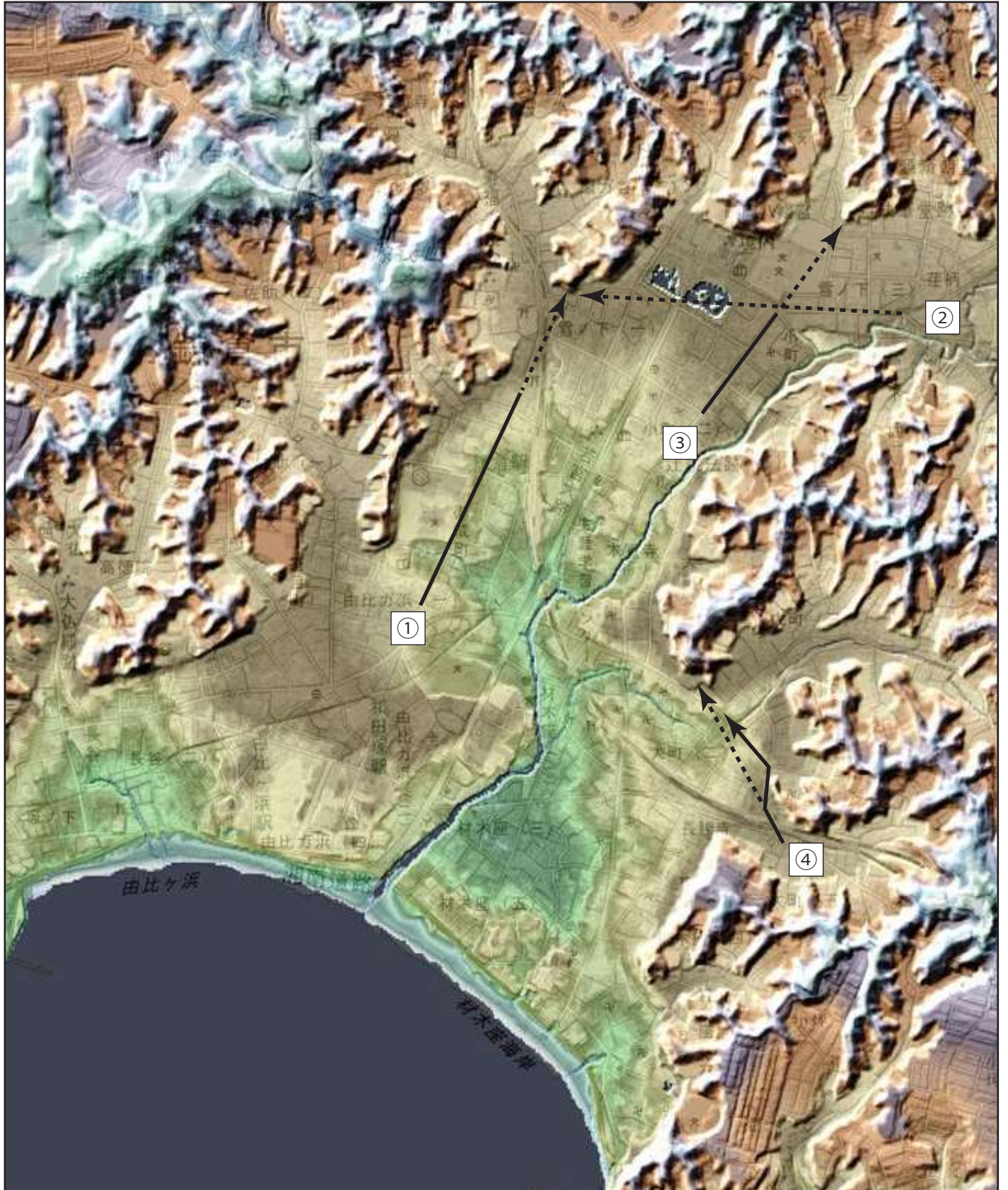


図9  
名越切通方面の道から  
安養院丘陵を望む









図10  
今小路を北に望む  
正面に見える山が窟堂

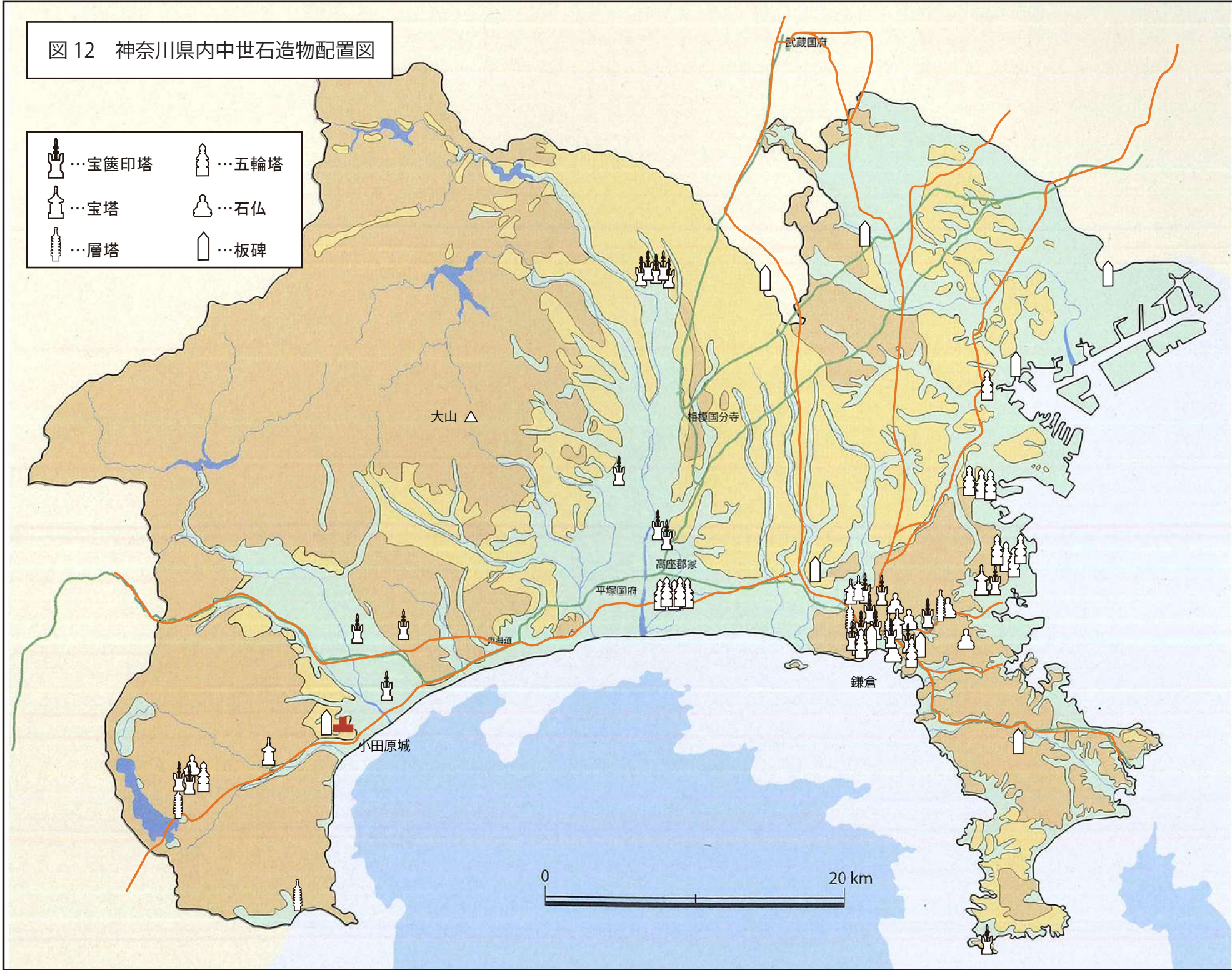
図 11 源頼朝入部以前から存在する道とアテ山の関係



(3D カシミール地図を使用)

図 12 神奈川県内中世石造物配置図

- |                                                                                   |       |                                                                                   |      |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-------|-----------------------------------------------------------------------------------|------|
|  | …宝篋印塔 |  | …五輪塔 |
|  | …宝塔   |  | …石仏  |
|  | …層塔   |  | …板碑  |



## 第二章 景勝地「江の島」の中世石碑

### はじめに

第一章では、鎌倉の山稜や丘陵が交通路の目印として利用され、鎌倉時代の末期に導入された石造物が山稜の頂部に立てられる様相を指摘した。また鎌倉の境界に注目し、最大範囲の境界内に大型塔の造立が限られることから、この行為が鎌倉の都市の特性である可能性を説いた。

この鎌倉を取り巻く最大範囲の境界の中で、目に留まる山稜は多々あるが、その最たる例が景勝地として名高い江の島であろう。日本でも数少ない陸繋島である江の島は、周知のように古来聖地として信仰されてきた土地である。現在では江島神社が鎮座し宗像三女神が祀られるが、江戸時代以前には弁才天の霊場として知られており、さらに古くは天女が舞い降りた島と伝えられ、人に悪さを働いていた深沢の五頭龍は、天女に恋い焦がれることで改心し、江の島を見守りつつ眠りについたという。ほか、空海、円仁など高僧の渡島伝説など、伝承の多さが信仰の古さを物語っている。

しかし、それだけの伝承を持ち景勝地としても聖地としても名高い江の島に、中世にまで遡る石造物があるとの報告はない<sup>1)</sup>。中世においても江の島が信仰対象地であったことは、『吾妻鏡』などにも記されるように明らかであり、その初見は、養和二年(一一八二)に文覚が、鳥居を立て、源頼朝らが赴いた記事が知られる<sup>2)</sup>。また建仁元

年(一一二〇)に將軍源実朝、建保四年(一一二六)に北条政子、安貞二年(一一二八)に將軍藤原頼経が江島明神に参詣するほか<sup>3)</sup>、天福元年(一一三三)には、江島明神へと向かう途中、前浜で死人を発見したため神拝を中止しているが、執権北条泰時の名も挙がっており<sup>4)</sup>、幕府有力者の参詣が後を絶たない。さらに建保四年正月には託宣があり、海に道ができるという「神変」が起こった。船なしでも江島明神に参詣できるようになったため、鎌倉などから人々が押し寄せたとの記事が見える<sup>5)</sup>。江の島は当時から庶民にも信仰される島であった。

第一章の事象に照らし合わせれば、この信仰地に中世石造物が存在しないことは不自然である。この点ををいぶかしく思っていたところ、仏教史の大塚紀弘氏に「宋国伝来の碑」の存在を知らされた。「宋国伝来の碑」は辺津宮の一角に覆屋(雨よけ)が掛けられた状態で立つ。鎌倉時代に宋国から持ち帰ったとの伝承からその名があるが、その詳しい来歴は江島神社の別当を務めた岩本坊に伝来する室町時代作の「江島神社縁起絵巻」に描かれている。したがって、絵巻に登場する石碑が現存のものであれば、石碑は少なくとも室町時代には存在したことになる。

これらの興味に駆られ、仏教史学の大塚紀弘氏とこの石碑を調査する機会を得た。肉眼では確認しづらかったが、拓本を採取すると「大日本国江島靈迹建寺之記」の文字が記された額と、額を挟んで向かい合う二匹の龍の図が浮かび上がった。残念ながら石碑の下半分は風化が激しく採拓できた文字はわずかだったが、おそらくは石

碑の由来が記されていたものと推測される。そこでまずは、この龍がどういった存在であるのか、また、この石碑がもつ意味はなにかといった疑問を明らかにすべく検討した結果、その歴史的重要性を垣間見ることとなった。以下、詳細を見ていきたい

なお、本稿は大塚紀弘氏との共著論文を再構成したものであることをお断りしておく<sup>6</sup>。

## 一・石碑の形態と構造 (図1・図2)

本石碑は高さ一三八・〇cm、幅七四・三cm、厚さ一〇・五cmを測り、長方形の板状を呈する。およそ中央で二つに折れた痕跡があり、これをモルタル等で接合し、上下左右を覆屋(雨よけ)で固定している。現状、石碑だけで自立することは不可能である。

碑文や装飾の彫刻された面は一面のみで、これを正面とする(以下、碑面と呼ぶ)。背面は、風化はあまり見られないが素面で、上下左右の側面は覆屋があるため観察できない。情報が得られるのは碑面のみとなる。

碑面の上部中央には「大日本国江島霊迹建寺之記」の文字が三行に渡って篆刻され、周囲には二重の枠線で囲う「額」のような表現が施される。その「額」上部には宝珠と額を守護するように左右に二体の龍が向かい合い、周囲を雲が漂う装飾が施される(以下、雲龍文と呼ぶ)。龍の爪は三本で、口はそれぞれ阿吽の形をとる。それらの文様はさらに周囲に巡らされた二重線によって枠取りされる。石碑本

体の角は直角に成形されているのに対し、二重の枠線は左右上部の角を隅切りにしている。

雲龍文の下部は二重線で仕切られ、その下に唐草風の文様が周囲にめぐる。この下に碑文が刻まれる。碑文はおそらく碑面の下半分全体に記されていたのであろうが、折れた下半分の磨耗は特にひどく、文字に限らず装飾も読み取ることができなかった。折れた石碑の上下で残存状況に大きな差が見られる点には注意したい。

また、石碑上半分の碑文にも磨耗は少なからずあり、判読不能な文字が多かった。わずかに数文字を確認できるのみで、内容を理解するには至っていない(図4)。

石碑の来歴を考察した大塚氏によると、この石碑は江戸時代に江島の名物の一つとなっていたようで、紀行文や地誌などおよそ十一の史料に紹介されている<sup>7</sup>。このうち最も古い史料である中川喜雲の地誌『鎌倉物語』(万治二年(一六五九))には、石碑がすでに二つに折れていたことが記される<sup>8</sup>。また貞享二年(一六八五)の『新編鎌倉志』に図示された「碑石図」にも、折れた部分を接合し上部と左右を別石で固定している様相が揭示され、江戸期には現状とあまり変わらない様相だったことがわかる(図3)。また同文献は、碑文は剥落して不分明としながらも、「十界」「性」「人」「成」の文字を読み取っている。

そもそも、この石碑の由来は『江島縁起絵巻』(以下『絵巻』とする)に詳細に記される。室町時代の作とされており、代々江島神社の別当を務めた岩本坊に伝来した史料である<sup>9</sup>。多少の違いはあるが、



江戸時代の紀行文や地誌に記された石碑の来歴は、ほぼこの史料が基となったようだ。第五卷第三段には、二人の僧侶が石碑を背に向かい合う場面、僧侶が石碑を背負って海を渡る場面、石碑が江の島の下宮境内に立てられた場面が描かれている(図9・図10・11)。大塚氏はこれを、本石碑のかつての姿と考えた。

場面に対応する詞書には、慈悲上人良真が、正治元年(一一九九)から千日余り、江の島で修行を続けていると、建仁二年(一一〇二)七月十五日の寅の刻、岩窟の上に紫雲がたなびき、天女(弁才天)が左右に童子を侍らせて出現した。天女は良真に一偈を授け、山頂にあった社壇を再建するよう求めた。そこで、良真は天女のお告げに従って、「旧跡」に社壇を建てたとある<sup>10)</sup>。

これを受けた元久元年(一一〇四)二月上旬、良真は中国に渡り、慶仁禅師に参じて受法した。良真が江の島の絵図を見せると、慶仁は次のように告げた。江の島は補陀落浄土の霊地だから、観音の垂迹として宇賀弁才天女が現れたのである。「旧跡」の北の谷に龍女が住む無熱池があり、その東南の山にガマに似た形の「荒石」がある。この池の北西に、「荒石」に相對するように社を建立するように、と。そして、良真に長さ五尺、幅三尺の「弘誓明石」と「地鎮」「師子石像」を伝授した。良真は帰国後、將軍に請い、慶仁の教えの通り「旧跡」に社壇を復興したという<sup>11)</sup>。

『絵巻』の伝える通り、鎌倉前期に中国(南宋)から江の島にもたらされたかは検討が必要だが、遅くともこの史料が制作された室町時代には、社殿の近くに石碑が立っており、良真が中国からもたら

したと考えられていた可能性は高い。

なお、参考までに石碑を守る覆屋の構造も記しておく。覆屋は、高さ二二・〇cm、幅一〇一・〇cm、奥行六二・〇cmを測る切妻造の石造建築物で、浮彫の蓮華を配した基礎の上に、柱などを彫り出した一石成形の横壁が立ち、両側から石碑を支える構造となる。横壁は頭貫を模した横材で頭を支えられ、その上に屋根が乗る。

屋根は切妻式だが、大棟を擁し、多少前方に伸びて反る形は神社社殿などに用いられる流造を思わせる。覆屋奥に安置された石碑を拝するための向拝の意味があると考えられる。全体的に神社建築の様式ながら、横壁には宝珠、輪宝を彫り出すなど仏教的な要素も含まれる。神仏混交の建築物と言えるだろう。

この覆屋は、元禄十四年(一七〇二)杉山検校の門弟、嶋岡検校が寄進したと伝わる。それを示す銘文が、覆屋左右の内壁にあり、左記のように刻まれる<sup>12)</sup>。

正面向かって右側に

「元禄十四辛巳歲十二月吉日」「別当法印恭順也」

正面向かって左側に

「当碑文之雨覆并」「臺盤石造立寄進」「施主 嶋岡検校代一」

江戸時代初期からおよそ二七〇年にわたる検校の所属流派、師弟関係を記した史料『三代関』によれば、「嶋岡よ一(代一)」は元禄十三年(一七〇〇)に検校となった師堂派(安田かつ一門弟)の人物として記録されている(系図1)<sup>13)</sup>。

江の島は視覚障碍者の信仰が篤い島でもある。その理由が関東総検校であり、現在の鍼治療に用いられる管鍼法の発案者であった杉山和一（一六一〇～一六九四）所縁の地であるためで、杉山和一が江の島を参詣中、石に躓いて倒れた際に、体に刺さった松葉が竹の筒に入っていたことに発想を得たことで、管鍼法が生まれたと伝わる。躓いたとされる石が辺津宮の参道に所在する「福石」であり、現在でも関連する業種の参詣が絶えない。検校・鍼師の礎を築いた人物の旧跡に、嶋岡代一が検校となった翌年、元禄十四年（一七〇一）に覆屋を寄進したという経緯を読み取ることができる。

## 二．石材の産地

調査では石材の判定を行った。地質学・岩石学を専門とする神奈川県立生命の星・地球博物館の山下浩之氏にも実見していただいたところ、石碑の石材は赤みを帯びた色調の凝灰岩と判定された<sup>14</sup>。ただ、この石材を形成する微細な粒子は、県内の石材とは類例も見あたらない。江の島近在の凝灰岩と言えば、三浦半島を形成する第三紀三浦層群の凝灰岩が著名であるが、石碑のような色調や細やかな粒子で構成される石材ではない。また神奈川県内でもっとも流通し、神奈川の中世石造物に多用された伊豆・箱根系安山岩とも石質が異なる。

大塚氏によれば、この石材に関してすでに江戸時代に指摘があるという。佐藤成裕（中陵）（一七六二～一八四八）の随筆『中陵漫録』

（文政九年（一八二六））には、伯耆国米子の寺院に同種の岩石があり、長崎の近くが産地であると記される。また、筑前国の「阿弥陀経の石」も同種であるから、江ノ島の石碑も筑前国や薩摩国辺りの石材で作られたのではないかともある。

この「阿弥陀経の石」は、福岡県宗像市の宗像大社に伝わる重要文化財「阿弥陀経石」のことである。片面に阿弥陀如来坐像と阿弥陀如来の願文、もう片面に『阿弥陀経』の本文などが刻まれた石造物で、造像銘から、紹熙六年（一一九五）に南宋で制作されたと考えられている<sup>15</sup>。この石碑に使用された薄紫色の凝灰岩は、近年では長崎をはじめ九州一帯に分布する「薩摩塔」とともに寧波付近産出の中国石材であるとの指摘がある<sup>16</sup>。浙江省寧波市郊外で産出される凝灰岩で、産地から梅園石と呼称される。おもに赤みを帯びた淡褐色、赤紫色、淡赤褐色などの色調で表現されることが多い石材である<sup>17</sup>。中世またはそれ以前から日本にも流入していたことが指摘されており、本石碑の特徴などを見ると、この石材と非常によく似ているように見受けられる。日本国内でも同様の特徴をもつ石材は採れるよなので注意は必要だが<sup>18</sup>、もしも江の島の石碑が中国産石材であるならば、伝承通りとなり、これまでの研究で判明している中世の中国石材使用例で最も東に位置する例、関東では唯一の例となる。

## 三．本石碑における文様の検討

本石碑の文字から検討を行うことは難しい。一方、雲龍文は非常

に特徴的な文様で、少ないながらも類例を見出すことができる。それらを参考に、文様から石碑の種類や造立目的を考えていきたい。なお、以下に紹介する例のほか、管見に入った双龍の碑文拓本が四例ほどあったが、似ているとまでは言えず、本論では割愛することとした<sup>19)</sup>。

(1) 「武蔵國金澤碑」安永七年(一七七八)

横浜市金沢区能見堂跡に所在する石碑である。儒者である岡部四溟が能見堂から見た金沢の眺望に感動し、建立したことを碑文から読み取ることができる<sup>20)</sup>。明治期に能見堂から同区富岡に移設、平成二十一年に戻された経緯を持つが、鎌倉地方に残る類例の中で一番古く、双龍、雲、宝珠、額から外郭線に至るまで、非常に近似した作例で、おそらくは本石碑を採拓し、それを忠実に模写したのでらうと解釈できる(図5)。しかし、顔や爪などの細部に模写しきれていない部位を確認でき、全体的に表現が柔らかくなるなど、本石碑に対する年代差を見ることができるといえる。

(2) 「江島弁才天女上宮之碑」文化元年(一八〇四)

江島神社の辺津宮から中津宮へ向かう参道に所在する石碑である(図6)。おもに『江島縁起絵巻』に由来した内容が記されており、碑文の上部に向かい合う龍が刻まれている<sup>21)</sup>。双龍の間にある額、上部中央の宝珠、左右の龍の阿吽を示す口など類似点が多く、左右上方角を隅切りするなど、立地から見ても本石碑を参考に作成され

たとみられる作例である。

(3) 「故正四位下陸奥守大江公碑」文政六年(一八二三)

鎌倉市大倉に所在する源頼朝墓の近隣、大江広元墓に立つ石碑である(図7)。この石碑は、文政六年(一八二三)に長州藩第十一代藩主毛利斉熙が造立した大江広元の墓前に立つ顕彰碑であり<sup>22)</sup>、石碑の先端である碑首部分に、向かい合った龍を配する文様が描かれている。江戸時代後期の作例であるものの、中央の額、上部中央の宝珠、左右の龍の阿吽を示す口、爪の数や位置など様式的によく似た作例と言える。あるいは(1)(2)を参考としたのかも知れない。

(4) 「孝宗御書 太白名山四大字碑銘」(東福寺所蔵)

端平二年(一二三五)〜淳祐元年(一二四一)

この資料は石碑の拓本で、東福寺開山の聖一国師円爾(一二〇二〜八〇)が、端平二年から淳祐元年の入宋時に手に入れ、帰国時に持ち帰った可能性も指摘される資料である。

太白名山は、浙江省寧波市東方に所在する天童寺のことで、同寺の了朴が淳熙五年(一一七八)に皇帝より賜った御書を基に、後に石刻された石碑を採拓した資料と伝わる<sup>23)</sup>。石碑上端である碑首の部分に雲龍文が描かれている(図8)。中央の額、またその下の唐草文様風の部分外枠を二重線で囲う点、上部に宝珠を配する点、龍の爪の数や位置、流雲、石碑の角を隅切りする表現に至るまで非常に近似している。ただし、龍は阿吽の口になっておらず、その点には注意

する必要があろう。

以上が本石碑の類例である。ではこれらの「龍」には如何なる意味があるのだろうか。類例の造立目的を探ってみよう。

(1)の「武蔵國金澤碑」は本石碑の模作と言っても過言ではないような作例だが、移設されているため台座などが失われた可能性は否定できない。額の銘、碑文の内容から判断するに、能見堂という景勝地およびその眺望を顕彰した「顕彰碑」と言える。

(2)。「江島弁才天女上宮之碑」もおそらく本石碑を参考にした例であり、碑文の内容から神社の由来を記した「顕彰碑」であることがわかる。

(4)。「孝宗御書 太白名山四大字碑銘」は、取り上げた類例中唯一本石碑より古い資料だが、中国から持ち帰った「拓本」であるため、採択された部分以外の様相を知ることができない。ただ、皇帝の御書を奉る「顕彰碑」であり、皇帝を重んじた造碑であることは確かだろう。

これらに対し(3)。「故正四位下陸奥守大江公碑」は同じ「顕彰碑」であるが、全体像が特徴的である(図4)。台座が亀の形で表現されるこの石碑は「亀趺碑」と呼ばれる種類の石碑に分類される。

亀趺碑とはその名の通り、亀の形をした趺石(台石)を有する碑のことで(図12)、中国南北朝時代(四三九〜五八九)ごろに定着した碑形である。日本における亀趺碑の研究を行った平勢隆郎氏によれば、その起源は後漢時代(二五〜二二〇)頃にまで遡り、中国、朝

鮮半島にて多用され、のちに日本へ伝来したという<sup>24</sup>。なお、日本における「石碑」としての作例すべてが江戸時代以降に作られたものと理解されている。

以下、平勢氏の研究を参考に見ていきたいが、亀趺碑建碑の目的は故人を顕彰する「顕彰碑」であり、墓前における「墓碑」、神道(参道)における「神道碑」など、建てる場所によって分類がなされる。また、唐代では官位が五品(五位)以上だけが建立を許されるなど、建碑には階位による厳しい規制が伴う石造物だという。

日本における亀趺碑の代表例、近世大名墓の顕彰碑も、五位以上の人物だけが建てることを許されている。(3)の被顕彰者である大江広元も正四位であることから、この例に漏れない。ただし、のちに文人や偉人、果ては土地などを神格化させることにより建てることを可能にした亀趺碑も存在するようであり、日本においてもこれを継承する形で文人、偉人、僧侶、忠烈、またはそのゆかりの地という理由で「亀趺碑」が造立されている。

その亀趺碑には亀や龍といった霊獣が用いられる。亀趺碑における亀は実在する亀ではなく、「霊亀」または「鬣負」を表現する。また、石碑の頂部である碑首には、石碑の題を記す額を守る形で「負負」や「螭龍」という龍が刻まれる。

「霊亀(れいき)」とは、古代中国の神話などに見られる瑞獣で、『礼記』には麒麟、鳳凰、応龍を含めた四霊の一つとして記される<sup>25</sup>。不老不死の仙人が住むという蓬莱山を背負う巨大な亀がこれに当たる。これが宋時代になると、亀趺碑の亀が「鬣負(ひいき)」だ

という解釈が出現する。これは龍が生んだ九匹の子、いわゆる「龍生九子」として総称される伝説が基になっており、その内の一子が亀に似た姿で表される<sup>26</sup>。特徴として「重いものを好んで背負う」といい、石碑の台石として使用される意味に合致する。

「螭龍(ちりゅう)」は亀趺碑首部に表現される龍の一種で、諸説あるが「龍生九子」の一子であると言われる。雨龍であり、腹に水を溜め込むことができるという。亀趺碑では螭龍を備えた碑首という意味で、頂部を「螭首」と称する。ほか、石碑に絡みつく形で表現された龍は、負負(ふき)であるとの解釈もされる。負負は『懷麓堂集』によれば「龍生九子」の第八子で、「読み書きを好む」という<sup>27</sup>。このあたりの話はいまだ統一見解がないため、本稿では螭龍で統一するが、この碑首に彫られた螭龍こそが、本石碑に描かれた龍なのではないだろうか。

## 1. 螭龍の系譜

日本における考古学的な亀趺碑研究はまだ少なく、集成や型式変遷は提示されていない。また、それらの研究を進めるためには、亀趺碑発祥の地となる中国の作例集成も必要になってこよう。本論では、古代中国石碑研究の蓄積がある書道史文献を参考に、中国の石碑における螭龍について検討したい。

中国に現存するおよそ古い形式の螭龍は、一様に恐ろしさを感じさせるほどの写實的な浮彫りで表現される<sup>28</sup>(**図13**)。これが負負であるとの解釈もあるが、お互い外側を向いた龍は頭部を下に向け、

中央上部で尾を絡ませる。宝珠は尾の下に位置し、これを支えるように双龍の手が伸びる型式である。首部の形態には三角形の「圭首」、四角形の「方首」、笠石を載せる「蓋首」があるが、龍の刻まれる首部は半円形の「円首」であることが多い。もともと石碑は墓壇の前に立てられ、棺桶を下す際に滑車の支点として使われた歴史があり、滑車の役割を担う溝が彫られていた。この溝が装飾性を増し、幾重にも彫られるようになると、徐々に絡みつく龍の造形へと変化していく。その端に竜頭が出現し、螭龍へと至るといった変遷が推定されている<sup>29</sup>。

こうした螭龍と併存するように、のちの時代(唐代以後か)に浮彫の表現が落ち着いた、向かい合う螭龍が現れる。これがさらに後(宋代頃か)、表現が線刻となる例も多くなり、**図8**のような雲龍文が出現すると考えられる。

上記のような流れを把握した上で石碑の雲龍文を見てみると、**図8**は畏怖の念を抱かせるような写実性が色濃く残る古手の造形であるのに対し、本石碑(**図4**)は親しみやすささえ覚えるような柔らかな印象を受ける。美術史の岩橋春樹氏には、実見したわけではないことを踏まえながらも、**図8**は中国的であるのに対し、本石碑の雲龍文については日本的な印象を受けるとのご教示をいただいている。早計するわけにはいかないが、本石碑の文様は宋代以降の様式を踏襲して、日本で彫り込まれたのかもしれない。

他方、日本において鎌倉時代以前から龍の文様を持つ石碑が存在した可能性を示す史料がある。鎌倉時代後期の『元亨釈書』に登場す

る「日本国首伝禅宗記」と題された碑である<sup>30</sup>。この石碑は日本に禅宗を伝えた釈義空を顕彰するために、惠萼が中国で造らせたものといひ、石碑の造形が細かく記され、その一部に龍の存在を確認できる。すなわち、

題曰「日本国首伝禅宗記」。附「船寄来。故老伝曰。碑峙于羅城門側」。門楹之倒也碑又碎。見今在「東寺講堂東南之隅」。

贊曰。予求「碑刻」而無矣。乃如「東寺親摸「印之」。其碑破而存者四片。大者径二尺余。小者或不「楹」尺。額之左右蟠龍偉如也。

雖「頭角不」完鱗甲燐然也。其文殘欠、句讀不「成」。而其字画之存者亦甚鮮明。雖「非」妙筆「頗為」楷正」。予便印「四片者」而歸。

(後略)

とあり、石碑は船によって運ばれ、羅城門の側に建てられたが、『元亨釈書』の著者である虎関師錬がこの地を訪れた時には石碑は既に無く、破片が東寺の講堂の東南隅にあるのみであったという。そしてその大きなもので二尺余りになる破片には、「額之左右蟠龍」が刻まれていたとある。「蟠龍」はわだかまっている龍、まだ天に昇らない龍と解釈できるので<sup>31</sup>、「雲龍文」の龍ではなく、**図13**のような古い型式の龍であったと解釈される<sup>32</sup>。これが日本における最古の龍の文様を有する石碑の記録となり、亀趺碑かは断定できないが、日本においても龍の文様を有する石碑が、中世以前すでに存在したことを証明する。

## 小結

以上、類似した文様を有する石碑、「亀趺碑」を見てきたが、龍を擁する石碑の中には、台石が亀趺と確認できない、亀趺ではない石碑も見受けられる点には注意が必要である。中国の石碑における趺石は、亀趺を有する「螭首亀趺」の形式を基本としながらも、瑞獸や唐草文様を施した立方体の「方趺」を用いることも少なくない<sup>33</sup>。

こういった碑の種類が存在することを考慮すると、本石碑が亀趺碑として造立されたとは断定することはできない。しかしながら本石碑は、系譜を辿ればその源流を中国古代に求めることができ、文様の様式を緻密に踏襲した、中国的な石碑と見ることはできる。その反面、造形は日本風であり、鎌倉時代以前に龍の文様を持つ石碑が日本に存在していたことをふまえれば、中国より請来した石碑を参考に、あるいは中国の石材を用いて、日本において造形・装飾を施した「顕彰碑」と見ることができよう。

## 四．本石碑の原建立地

ではこの石碑は何を記し、どこに立っていたのか。大塚氏の検証を参考にみると、手がかりは篆額の文字にある。篆刻された「大日本国」「江島靈迹」「建寺之記」三行の文字は、「江の島の奇跡が起きた場所に寺院を建立した経緯の記録」を意味する。つまり石碑には江の島で起きた奇跡が記されていた可能性が高い。また本石碑が「顕彰碑」であるなら、石碑の性格上、その奇跡が起きた場所に立っていたはずである。つまり江の島の島で奇跡が起きた場所を探せばよい。

前述した石碑の由来を記す史料、室町時代成立の『絵巻』には、基となった史料が存在する。それが漢文の『江島縁起』（以下『縁起』と呼ぶ）で、永承二年（一〇四七）に皇慶が撰述したと伝えられ、最古の写本は元亨三年（一二三三）の書写奥書を持つ<sup>34</sup>。大塚氏によれば、石碑の由来部分はこの漢文『縁起』には含まれておらず、室町期成立の『絵巻』の末尾に新たに追加されたものと見られる。この『縁起』『絵巻』両史料をもとに奇跡の事例を探した結果、大塚氏は三つの記事を挙げる。

①空海による金窟社壇の創建（『縁起』『絵巻』に記載）

円仁による社壇の創建以前、弘仁五年（八一四）に空海が金窟（龍穴）の中で天女よりお告げを得る。そこで弁才天像を金窟に安置し社壇を建立した。

②円仁による東山社壇の創建（『縁起』『絵巻』に記載）

江の島を訪れた円仁のもとに弁才天女が出現。国土安穩のため、安養世界からこの地に垂迹したことなどを告げる。円仁は弁才の五寸像を彫り、東山の頂上に社壇を開き、江島大明神と称した。

③良真による東山社壇の再建（『絵巻』に記載）

良真の前に聖天島に弁才天が現れ、円仁が開いた山頂の社壇の荒廃を嘆く。のちに良真が再建した。

石碑にはこのいずれか、あるいは複数が石碑に記されていた可能性が高いという。また、それらをふまえれば、石碑の立地の候補は二ヶ所に絞られる。ひとつは円仁・良真ゆかりの旧跡である東山の頂上、もうひとつは空海ゆかりの金窟（龍穴）である。

江の島は浸食による谷上の地形「山二ツ」を境に、西部を「西山」東部を「東山」と称する。東山の山頂は現在植物園や展望台が建つ場所であるが、一段下がった眺望の開けた場所に建つ中津宮の付近も候補地となるだろう<sup>35</sup>。

実はこの場所は「亀の背」になる場所でもある。江ノ島が亀に例えられることは多くの地誌類が記しており、山二ツを境に標高の低い西山を頭、高い東山を甲羅と見立てたことに由来する。甲羅の頂部となる東山山頂に石碑が立てば、構造的に亀趺碑に似た形態になるというのは考えすぎだろうか。

一方で、江ノ島には龍穴という神聖な空間が存在する。この洞窟が聖地江の島の信仰の中心として機能していたことは、『吾妻鏡』等多くの記事が証明するところであり、特に祈雨の願いを伝える場として仏教の祈禱や陰陽道の祭祀が行われた<sup>36</sup>。第三章一章でも触れた霊所七瀬祓の指定地も江の島の龍穴と限定されている。

現在もこの場所は、信仰対象であるが江の島第一・第二岩屋と呼ばれ、観光名所として著名である。実は、この岩屋の眼前の岩礁帯に「亀石」と呼ばれる石が存在する（図14）。

この石は岩屋を背にし、海に頭を向けるかたちで所在するが、存在を記した史料は見当たらない。伝承では片瀬の石材店「中村石材」の先代、中村亀太郎氏が作成したものと言うが、真偽は不明である<sup>37</sup>。

貞応二年（一二二三）の紀行文『海道記』には

固瀬川ヲ渡テ江尻ノ海汀ヲ過レバ、江ノ中ニ一峰ノ孤山アリ。山

ニ靈社アリ。江尻ノ大明神ト申。威験コトニ新ニシテ、御前ヲ過ル下船ハ上分ヲ奉ル。

とあり、江の島の御前を通過する船は、供物を捧げることになっていた<sup>30</sup>。つまり、船の通過する方向が「御前」であり、ここに存在した施設は海に向かって門戸を開けていたと考えられる。そのような地に靈迹であることを顕彰する碑を建てるのであれば、同様に海の方角を向いていたと見るべきであろう。螭龍を持つ石碑に対し、台石として亀が存在するのであれば、これ以上の場所は無い。この「亀石」、もしくはこの石のモデルとなった亀の石が本石碑の台座であった可能性はないだろうか。

この考えに従えば、本石碑が折れている要因も説明がつく。原因は「波」である。この場所に石碑が建てられた場合、厚みのある板石であっても荒波に長期間耐えられるとは考えにくい。造立後あまり時間を置かず、波を受け続けた石碑は中央部より折れ、上半部は保護、回収される。下半部はその後も波に耐えるが、やはり折れ、同様に保護される。この時間の差が碑面の上半部と下半部の摩耗の差なのではないだろうか。碑面の下半部は特に劣化が激しく、文字を読み取ることもできない状態である。さらに、石碑の碑面が激しく劣化しているのに対し、背面は傷が少ないという点も、正面から波を受けていたのであれば納得できる。

一方で、この亀石が本来亀趺であるならば、本石碑と同質の石材が用いられていたはずである。しかし亀石もおよそ数百年の波に耐えられるとは思えない。やはり摩耗し、原型を留めなくなったと考

えられる。したがって現存する亀石は何代目かであり、原型を留めなくなつては造り替えられた歴史があつたとは考えられないだろうか。以上の疑問を解消するため、「亀石」の調査を行なつた。

なお参考までに記しておくが、江の島にはもう一点「亀石」が存在する。現在、奥津宮社殿前の樹木の根元に奉られているこの石は、形こそ亀には見えないが、平面円形に亀甲状の模様を有することからこの名がある(図15)。安政二年(一八五五)の紀行文『江の島紀行』には、岩屋の本社(奥津宮)へ参つた後、「左の方に亀石とて、自然に亀甲のあらはれたる石あり。」と述べている<sup>31</sup>。その後、作者は児ヶ淵を通過していることから、安政期には、現在とさほど変わらない位置に安置されていたようだ。

山下氏のご教示によれば、この石は安山岩の柱状節理の断面を亀の甲羅に見立てていると解釈でき、模様も人為的な造形によるものではないという。石の模様が亀の甲羅に似たので、奥津宮に奉納したと考えてよいだろう。この石が先代の岩屋前亀石ではとの仮説も考えたが、右記の理由から却下した。

### 1. 亀石の調査

亀石は江の島第一岩屋と第二岩屋の中間に位置する(図15)。満潮時には海中に沈む場所であり、干潮時であっても波を被る場所であるため、普段は立ち入り禁止区域となっている。調査には神社当局の許可を得た上で、日中に最も潮が引く四月の大潮の日に行った。調査では細部観察、実測図、写真撮影を試みたが、大潮であっても



波の影響を受け、また潮の満ち引きによって時間も制限されていたため、細部の実測は不可能であった。よって本章では計測と写真を基にした概念図を使用する(図16)。

亀石は岩屋を背に海の方向を向く。三浦層群葉山層の岩礁にそのまま彫り込まれた一石造で、全長二八〇cm、横幅一七〇cm、高さ六〇cmを測る。頭部は縦六〇cm、横三六cm、高さ四〇cmを測り、尾部にかけて低くなっていく造形である。頭や甲羅、ヒレ状の前肢、尻尾の形こそ残るものの顔や亀甲の表現は波により削られてしまっている。また左前肢の裏あたりから尾部の右側にかけて堆積岩層の地層境界が見え、亀の上半身と下半身で石質が違う。上半身は黒色のやや粗粒なスコリア層であり、下半身白色部分は泥岩層である。顔など造形の多い部分が、硬質の黒色層に当たるのは偶然ではない可能性がある。すると、山下氏のご教示をいただいた。

また、前肢はヒレの形をしていることが判明した。亀は生物学上、足を有するリクガメ、ヒレ状の四肢を有するウミガメに分類されるため、亀石はウミガメを表現していることになる。亀跡碑における亀は霊獣であるため、亀の四肢はリクガメよりも鋭い爪を持つ獣足でなければならぬ。

さらに、現場に立つことで、この場所が想像以上に波の影響を受けることを実感した。硬質の石材ならばまだしも、三浦層群の凝灰岩では長期間の残存は難しいだろう。

江の島は大正十二年(一九二二)に発生した関東大震災の折、2mほど隆起したという<sup>4</sup>。特に東半分に影響が強く表れ、岩礁が出現

し、岩屋の一部に海水が入り込まなくなるなどの変化をもたらした。亀石の所在地もこの影響を受けた部分であり、現在の海拔から考えれば、震災以前、亀石の岩礁は海面下に存在していたことになる。近世・近代の地誌や浮世絵、岩屋付近の景観が事細かに描写された紀行文、小説にも「亀石」の文字は見られないことをふまれば<sup>41</sup>、現存する亀石は、製作者は不明であるものの、近年(おそらくは関東大震災以降か)に造作された亀の石造物であり、系譜を踏襲した亀跡ではないと結論付けられる。

しかしながら、図面上で辺津宮の石碑と亀石を同一縮尺で対比させてみたところ、石碑に対して亀が多少大きいものの、それほど不自然な結果とはならなかった(図16)。ウミガメでは亀跡とは言えないが、このような場所に海を望む亀の石造物があるのが、どうにも無関係ではないような気がしてならない。伝承が途切れた時代に、削られて原型を留めない雛形を頼りに、亀の像が作成された可能性もあるいはあると考えたい。

先述した島自体を亀と表現することにはじまり、江の島に亀の伝承は多い。その中でも、酒井抱一が天井に奉納した「正面向亀図(八方睨みの亀)」、安政期にすでに奉納されていた「亀石」など、江の島の中でも特に奥津宮に、亀に関わる文物が多く残るように見受けられる。この奥津宮は、岩屋の本社として奉られた宮であることから見ても、岩屋には亀に関する何らかの伝承があったと見たいところである。今後のさらなる検証を念頭に、石碑が存在した場所は龍穴前であったとしておく。

## おわりに

以上のように、鎌倉の最大範囲の境界地である江の島には、中世石造物が存在した。これは鎌倉の境界内にある目印になり得る山、いわゆる「アテ山」に中世石造物が建てられる様相が、景勝地として名高い江の島にも見られることを証明するものであった。

本石碑以外に中国の系譜を持つ中世石碑として、宮城松島の雄島にある「頼賢行状」碑（一三〇七年）がある<sup>42</sup>。この石碑は頼賢（一二二六〜一三〇七）の行実を記したもので、渡来禅僧の一山一寧（一二四七〜一三一七）が建長寺で碑文を撰述している点も注目される。

石碑を運んだ慈悲上人良真は、中国の慶仁禅師から授法した禅僧である。鎌倉時代には、渡来僧の大休正念と蘭溪道隆が、一緒に江の島に赴いたことが確認できるのみであるが<sup>43</sup>、大塚氏によれば、室町時代には建長寺の禅僧の中で江島弁才天への信仰が高まったと言い、様々な関与が検証されている。あるいは松島の石碑もこうした禅僧の影響があるのかもしれない。松島の石碑は文様に雷文や種子を用いるなど、緻密な踏襲とは言い難いが、碑額や碑文の枠取り、そして異形ながら双龍が確認できる。

また、京都二尊院には鎌倉中期の造立とみられる石碑「空公行状」碑が存在する<sup>44</sup>。宋人石工梁正覚が造作したことが読み取れ、文様等は無いものの碑額、碑文を枠取りし、首部を円首とする。

これまで中世の石碑は、この二例が知られるのみであったが、本

石碑は、中国的な石碑をめぐる議論に一石を投じると考えている。さらに研究を深化させ、議論が活発化することを期待したい。

## 第二部第二章 補注

- 1 藤沢市の文化財調査によって江の島の石造物は網羅されているが、銘文以外の年代判定は行っていない。(藤沢市教育委員会編 一九七〇 『藤沢市文化財調査報告書 第六集』同委員会 七六〜七七頁)
- 2 「吾妻鏡」養和二年四月五日、二十六日条(新訂増補国史大系、以下同じ)。
- 3 「吾妻鏡」建仁元年六月一日、建保四年三月十六日、安貞二年四月二十二日条。
- 4 「吾妻鏡」天福元年八月十八日条。
- 5 「吾妻鏡」建保四年正月十五日、ほか寛喜元年十一月十七日条では福田が授けるといふ宣託があった。
- 6 古田土俊一・大塚紀弘 二〇一四「江の島の中世石碑―大日本国江島霊迹建寺之記」碑の紹介と分析―『鎌倉』一一六号 鎌倉文化研究会
- 7 成立順に列挙すると、①万治二年(一六五九)の中川喜雲『鎌倉物語』②延宝二年(一六七四)の徳川光圀『鎌倉日記』③貞享二年(一六八五)の『新編鎌倉志』④享保二年(一七一七)の太宰純『湘中紀行』⑤享和元年(一八〇一)の白英『三浦紀行』⑥文化六年(二八〇九)の十方庵大浄『遊歴雜記』⑦文政九年(一八二六)の佐藤成祐『中陵漫録』⑧文政十二年の『鎌倉攬勝考』⑨天保四年(一八三三)の平亭銀鷄『江の島まうで浜のさざ波』⑩天保六年の独芳亭松風『四親草』⑪天保十二年の『新編相模国風土記稿』。
- 8 「上の弁才天の御前に、唐より渡りしとて屏風石と云あり。高さ五尺、横三尺程、あつき九寸あまり、上に日月光を切付、下のわきから獅子を切たり。石の面に文あり。様子図の如し。額の内、末二字見えず。石の色は紫也。(図)此石は正殿山ちぶ上人帰朝のとき、もろこしよりせおひて渡されし時、本朝にておろさるとき、中よりおれしとて、おれめあり。『鎌倉物語』(一六五九年)
- 9 生涯学習課編 二〇〇〇『江の島縁起絵巻』藤沢市教育委員会、『江島縁起絵巻』(鎌倉国宝館編 一九八四『鎌倉の絵巻Ⅱ(室町時代)』同館)、真保亨 一九八二『江島縁起絵巻』『三浦古文化』三二) 参照。
- 10 抑新宮宇賀弁才天女は、文徳天皇仁寿第三、慈覚大師草創よりこのかた、正治元年にいたるまで、三百七十三年の暦なり。爰に慈悲上人良真、往昔の法式をとふらはむかために、勇猛精神の志を専にして、修行する事一千余日の間畢。其時土御門院御宇、建仁二年七月十五日夜寅剋はかりに、巖窟のうゑに紫雲わき出て、室中のあひたに靈香みり。光明赫奕として天をてらし、金色皓然として地をかゝやかす。天女壇上に現し、童子左右にはむへり。天女妙音声をいたして、上人につけてのたまはく、此壇所今代には聖天岩屋白狐石とかうす。又は一本松となつく。説二偈、
- 昔在靈山名法華 今在西方名弥陀  
□□□□「濁世末代」觀世音 垂跡宇賀弁才天

我むかし末世の一切衆生を濟度せむかために、此山の頂に住せり。行者なきによりて、其後一字の社壇□□〔破壊〕し□〔畢〕ぬ。雨露の難にたへず。汝われにかなへり、と云々。上人雖レ為ニ大悲誓約<sup>1</sup>、感涙難<sup>レ</sup>押、竭仰の首を地につく。而後高嶺にのほりて天女□〔の〕つけのこく、かの旧跡をたつねて社壇をたつ□□〔と云云〕。

<sup>1</sup> あ元久元年二月上旬の頃、千里の波濤をわたりて、大唐にいたり、慶仁禪師に参して、受法了。其後、彼島の画図を披見せしむ。仁禪師曰く、汝不<sup>レ</sup>言知ぬ。我不<sup>レ</sup>聞に悟ぬ。日本国に補陀落の楼閣、彼島たるによりて、大慈大悲の觀世音垂跡、宇賀弁才天女あらはれ給。まことにこれ言語道断の靈地なり。社壇の北の谷にあたりて一池あり。池より巽の山の尾にあたりて一の荒石あり。その姿、蝦蟇の形たり。一切障碍神也。池の乾に社を荒石に向て建立せしむへし。將軍を守護せむかためなり。この池はすなはち龍女常住の無熱地也。仍天女の瑞靈を此所に垂給ふ。往昔の誓約如<sup>レ</sup>是。弘誓明石〔其長五尺、其広三尺。〕地鎮并伝<sup>2</sup>渡師子石像<sup>1</sup>。此師子異形なり。戸をまほる相あり。荒石の乱篋を降伏せむかためなり。上人帰朝の後、仁和尚の教にまかせて、すなはち將軍に命じて旧跡にかさねて社壇をひらく。

<sup>1</sup> 藤沢市教育委員会編 一九九二『藤沢市文化財総合調査報告書第七集』同委員会。二四三頁の銘文は誤謬。『藤沢市史 第一巻』三三四頁が正しい。

<sup>3</sup> 「三代関」（高木市之助他編 一九七七『国語国文学研究史大成 9 平家物語』三省堂）。

<sup>4</sup> 凝灰岩と判断された理由は軽石を含むことによる。

<sup>5</sup> 原田大六 一九八四『阿弥陀仏経碑の謎』六興出版、川添昭二 二

〇〇三「福岡県宗像大社所蔵「阿弥陀経石」について」『日蓮教学研究所紀要』三〇

<sup>16</sup> 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘 二〇一〇「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」『鹿児島大学理学部紀要』四二二

<sup>17</sup> 中日石造物研究会他編 二〇一〇『石造物を通じて見た寧波と日本』同研究会他

<sup>18</sup> 山口県下関市海岸産出の硯石統の赤色頁石、岡山県北西部の油野層凝灰岩、兵庫県篠山盆地の篠山層群凝灰岩などがあるという（前掲註17文献）。

<sup>19</sup> 明州阿育王山広利寺宸奎閣碑（元祐六年（一〇九一年）、宮内庁書陵部蔵）、明州阿育王山仏頂光明塔碑（紹興三年（一一三三年）、宮内庁書陵部蔵）、賜仏照禪師頌（東福寺蔵）、和靈隱長老偈（淳熙八年（一一八一年）、東福寺蔵）。

以上の類例は、下記文献を参考にした。米沢嘉圃他 一九七一『原色日本の美術29 請来美術 絵画・書』小学館、下中直也他編 一九七四『書道全集15 中国10 宋1』平凡社、下中直也他編 一九七八『書道全集16 中国11 宋2』平凡社、小学館 一九八三『名宝日本の美術 第15巻 五山と禅院』

<sup>20</sup> 横浜市教育委員会 一九七〇『横浜市文化財調査報告書 第七輯 金沢区金石誌』同委員会、前田元重 一九七五〔武州金沢〕能見堂とその出版物について（上）『金沢文庫研究』二二七。なお前田氏は、天保五年（一八三四）の『江戸名所図会』第二巻、能見堂の

項に描かれた石碑の一つが、この石碑の形態に似ていることを指摘している。

<sup>21</sup> 服部清道 出版年不明『江の島金石誌』湘南考古学同好会

<sup>22</sup> 鎌倉市教育委員会 二〇〇七『史跡法華堂跡(源頼朝墓・北条義時墓) 保存管理計画書』同委員会に詳しい。

<sup>23</sup> 塚本磨充 二〇〇七『宋代皇帝御書の機能と社会』『美術史論集』博物館編『聖地寧波』同館

<sup>24</sup> 平勢隆郎 二〇〇四『亀の碑と正統』白帝社、同 二〇一二『「八紘」とは何か』汲古書院

<sup>25</sup> 御手洗勝 一九八七『四霊について』『広島大学文学部紀要』四六

<sup>26</sup> 楊慎撰 一九七一『升庵外集』台湾学生書局

<sup>27</sup> 李東陽撰 一九九一『懷麓堂集』上海古籍出版社

<sup>28</sup> 芸術新聞社 一九九三『中国碑刻紀行』

<sup>29</sup> 水野清一 一九八〇『碑碣の形式』下中直也他編『書道全集』二 中国二 漢』平凡社

<sup>30</sup> 「元亨釈書」卷六(『新訂増補国史大系』)。

<sup>31</sup> 諸橋轍次 一九五八『大漢和辞典』大修館書店

<sup>32</sup> 東野治之・平川南 一九九九『よみがえる古代の碑』国立歴史民俗博物館

<sup>33</sup> 永廣敏雄 一九八〇『隋唐の碑碣』下中直也他編『書道全集七 中国七 隋・唐』平凡社

<sup>34</sup> 「江島縁起(真名本)」『神道大系 神社編 駿河・伊豆・甲斐・相模』、納富常天 一九七二「江の島に関する二・三の資料」『金沢文庫研究』一八一―四

<sup>35</sup> 明治初期の『皇国地誌』には、石碑は「辺津宮ノ後ニアリ本ハ宮ノ南傍ニアリシヲ近時今ノ所ニ移スト云フ」とある。辺津宮のすぐ南に位置する高地は中津宮である(神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編 一九九一『相模国鎌倉郡村誌 神奈川県皇国地誌』同協会)

<sup>36</sup> 大塚氏の検討による。「吾妻鏡」承元二年六月十六日、貞応三年六月六日、嘉禎元年十二月二十七日、延応二年六月十八日、仁治二年六月九日条。また、極楽寺忍性も二度祈雨を行なっている。(文永六年(一一二九)「性公大徳譜」(田中敏子 一九七三「忍性菩薩略行記(性公大徳譜)について」『鎌倉』二二。文保二年(一一三二)八)、「溪嵐拾葉集」卷三十七(『大正新脩大蔵経』七六)。

<sup>37</sup> 現地案内板による。中村石材に直接このことを確認してみたが、すでに亀太郎氏は故人となっていた。ご家族も亀石の存在は知っていたものの、本人に確認したことはなかったという。真偽は不明である。

<sup>38</sup> 「海道記」(新日本古典文学大系『中世日記紀行集』)。

<sup>39</sup> 「江の島紀行」(『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』)。

<sup>40</sup> 穴倉正展 二〇〇五「海岸段丘が語る過去の巨大地震」『地質ニュース』六〇五

<sup>41</sup> 震災までと考えれば、大正初頭に刊行された田山花袋の『日本一

『周』などがおよそ最新となろう（博文館、一九一四）。  
<sup>4</sup>/<sub>2</sub> 日本石造物辞典編集員会編 二〇一二『日本石造物辞典』吉川  
弘文館、

<sup>4</sup>/<sub>3</sub> 「念大休禪師語録」偈頌雜題（『大日本仏教全書』九六）。  
<sup>4</sup>/<sub>4</sub> 前掲註43文献。



図1 本石碑および覆屋

系図1 『三代関』系図 (師堂派 八 安田かつ一系)  
 安田かつ一—加島けん二—湯浅やう一—山沢せん一  
 「滝永勾当 —住山こん一—小泉勾当—嶋岡よ一」  
 (元禄十三年)

系図1

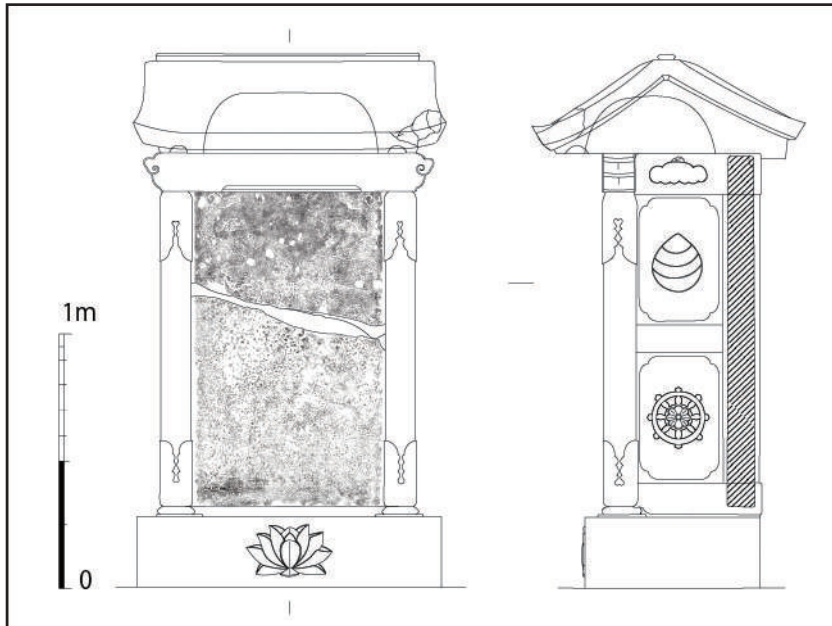


図2 本石碑および覆屋  
実測図

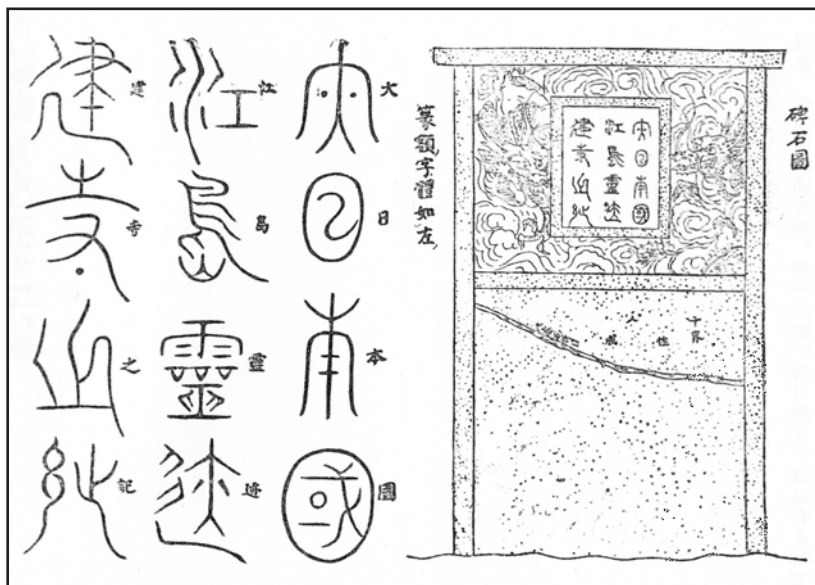
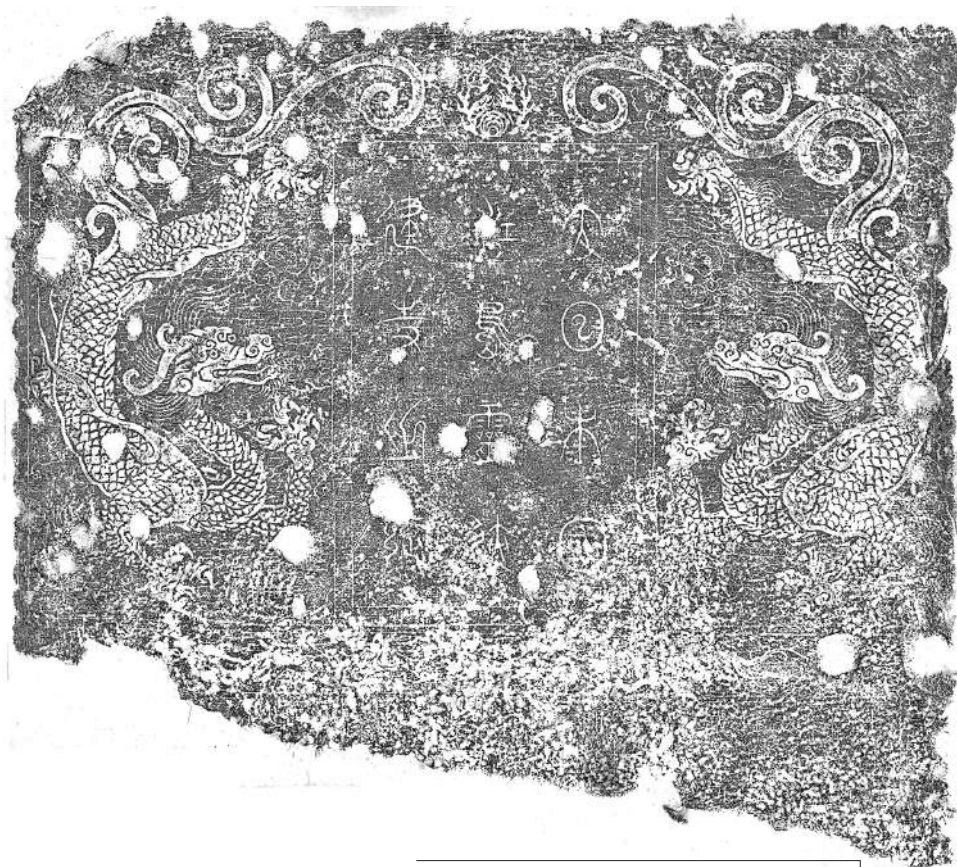


図3 『新編鎌倉志』  
碑石図



□	而	門	□	□	□	大	性	人	長	十
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
□	□	卅	□	□	□	□	若	□	□	□

图4 本石碑「大日本國江島靈跡建寺之記」(縮尺 1/6)



图5 (1) 能見堂「武蔵國金澤碑」(縮尺 1/6)





図6 (2) 中津宮参道「江島辯財天女上宮之碑」(縮尺 1/6)



図7 (3) 大倉「故正四位下陸奥守大江公碑」(縮尺 1/6)



図8 (4) 東福寺「孝宗御書 太白名山四大字碑銘」(縮尺不明)



図9 『江島縁起絵巻』  
石碑伝授の場面



図10 『江島縁起絵巻』  
渡海の場面

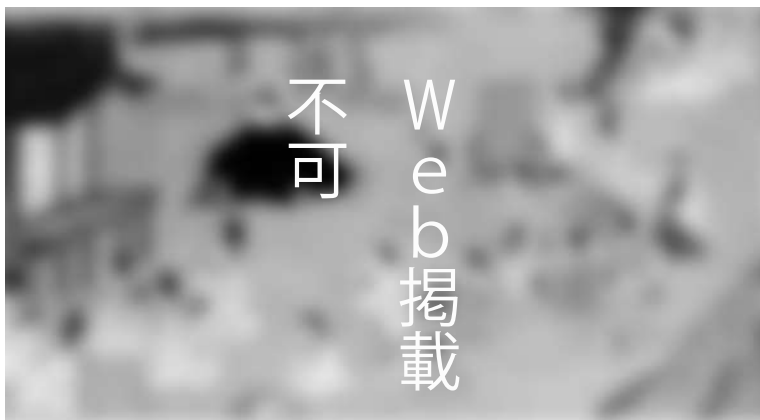


図11 「江島縁起絵巻」  
石碑安置の場面



図12 大江広元墓碑

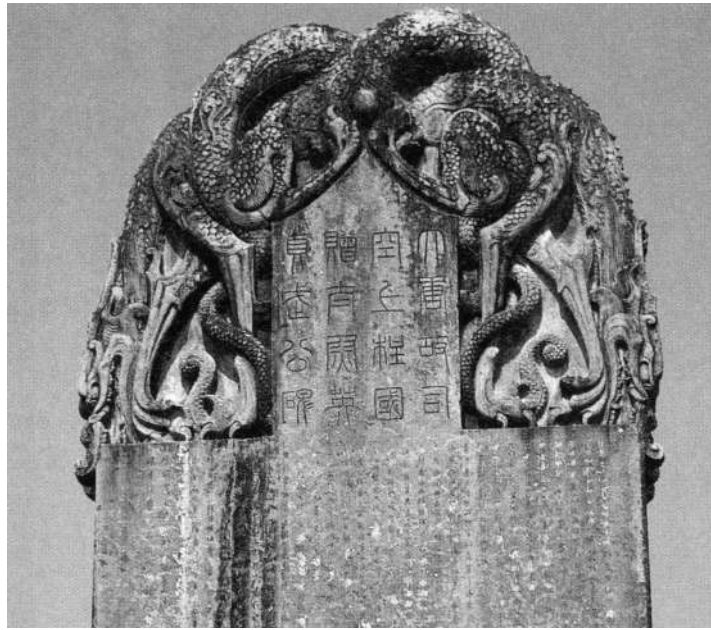


図13 中国昭陵所在石碑の螭龍（唐代）

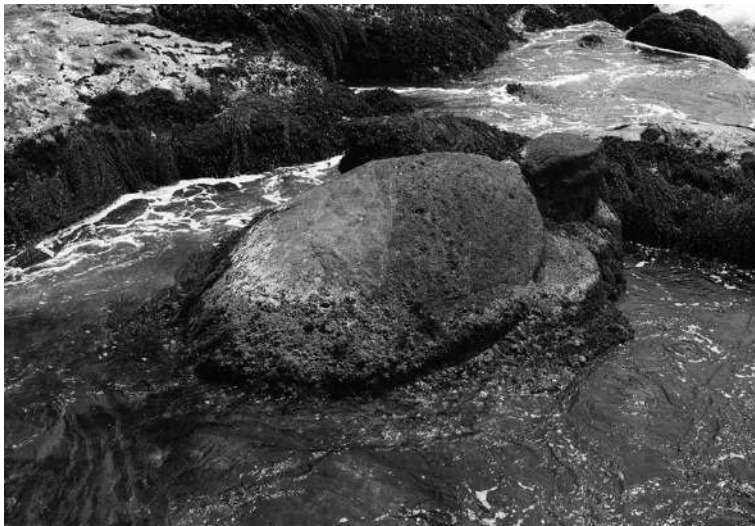


図14  
岩屋前亀石（干潮時）



図15 奥津宮前亀石

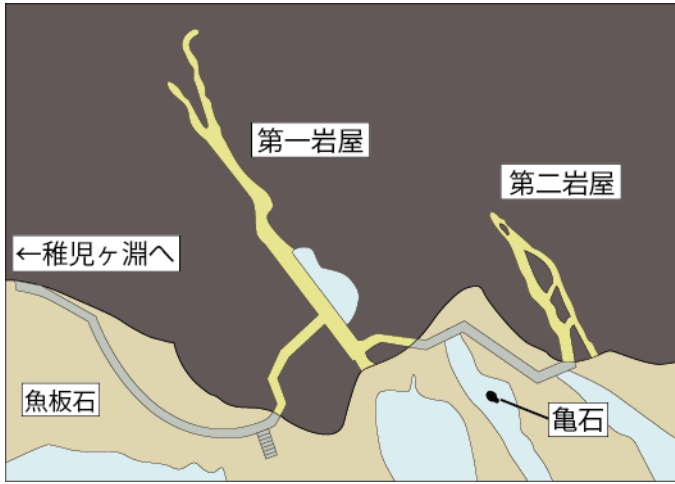


図16 亀石位置図（岩屋略記2012を一部改変）

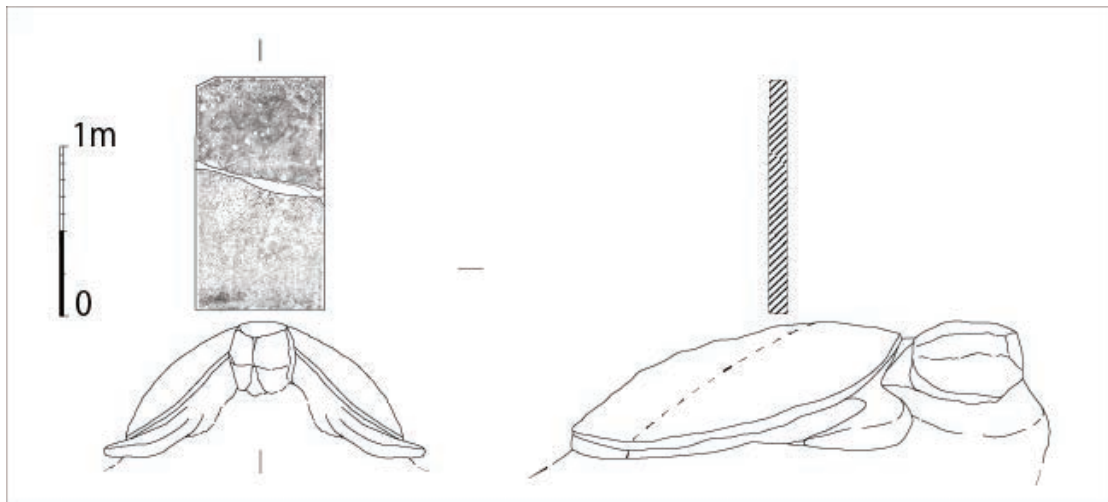


図17 亀石概念図および本石碑配置図

# 結論

## 結論

本論は、石造物という視点から中世鎌倉という都市の構造を明らかにすることを目的としたものである。以下、本研究の成果を五点到にまとめ、その上で新たな課題を述べる。

### 一・墓塔の導入と鎌倉での技術者の展開

鎌倉の石造物は、十三世紀後半に導入され、十四世紀初頭に定着した。この背景には十二世紀後半の東大寺復興（治承五年一一八一）に際して招聘された、渡来系石工集団を組織する西大寺と中心とした南都律の活動があり、東国への教線拡大の一環としての導入であったと理解されている<sup>1)</sup>。

墓塔として最も使用された五輪塔の文化は、源頼朝入部以前より鎌倉に存在したことが合葬墓に伴う五輪塔型木製塔婆の出土より知られるが<sup>2)</sup>、その後の発見例はない。形状の似る十三世紀後半ごろの五輪塔型木製塔婆は、出土地点の様相から、罪を洗い流す意味で流水へと投げ込まれた遺物である可能性が高く、異なる性格であることが判明した。

頼朝は、五輪塔を八万四千塔供養の泥塔や持仏堂瓦に使用し、為政者による慰霊鎮魂の供養を行なったが、十三世紀後半の遺物として泥塔が出土しており、記録はないものの、儀礼は王権の象徴として為政者が継続して執り行ったと考えられる。

そうした五輪塔文化が定着する鎌倉に石造物は導入された。追善供養の造寺・造塔という意味では八万四千塔供養と同様の意味を有するのだろうが、技術や造形の全く異なる石造五輪塔は、墓塔として新たに鎌倉へと導入された文化だと判断される。

新たに導入された安山岩製石造物に先行して、鎌倉には在地産石材である凝灰岩製石造物を作成する技術が存在した。両者は中世前期の都市鎌倉において併存し、それぞれ独自の変遷を辿る石造物を造立する。ただし、凝灰岩石造物には安山岩の様式を真似た作例も見られ、両者に交流や影響が少なからず存在したことは、造形と型式変遷の差異から明らかである。

また安山岩製塔五輪塔の型式は、極楽寺忍性塔を端緒とすることが読み取れるが、のちに十四世紀を通して爆発的に造立数を伸ばす小型塔の型式は、多宝寺跡覚賢塔を端緒とする関東独自の型式であることが見出せる。なお、これら五輪塔に先立って造立された建長寺開山塔は、安山岩加工技術が十三世紀後半にすでに鎌倉に存在したことを明確に示す作例として再評価される。

さらに、やぐらに施された浮彫塔の多くは、線刻などを除き石塔の変遷下においてよいことが判明した。多くの作例は凝灰岩製塔の型式であるが、安山岩製塔の初期型式で作成される浮彫塔も存在し、やぐらの造作には凝灰岩と安山岩の石工が初期から関わっていたと判断できる。

ひとつのやぐら群で連綿と受け継がれた浮彫塔の型式からは、都市鎌倉の衰退と同時期に継承が途絶える様相を読み取ることができ、

都市とともにやぐらや石造物の文化も衰退することが示される。やぐら衰退年代を推定する実例として資料を新たに提示したことにもなる。

なお、中世の西日本には中国からの輸入石材を用いた石造物が造立されていた。東大寺石獅子や宗像大社阿弥陀経石、九州に点在する薩摩塔に代表されるこの石材は、寧波付近を産地とすることが知られるが<sup>3</sup>、これと同質の可能性のある石材を使用した石碑を江の島で発見した。東国では初の事例であり、石碑の文様も中世では発見例のない亀趺碑であり、儒教の影響を受ける石造物が中世の鎌倉に存在したことが明らかとなった。

## 二・石造塔下遺構の起源と継承

鎌倉の中世禅僧墓の墓塔下には埋葬遺構として地下空間を有することが近世史料によって知られる<sup>4</sup>。構造の類似から、その起源は中国仏塔の地下に設置された舍利埋納施設と解釈でき、十三世紀中ごろより増加する禅律僧の日中間交流によって鎌倉へと導入された様相を明らかにした。また覚園寺に所蔵される石櫃の形状は、中国隋代から使用される形状に酷似し、中国の墓制が鎌倉へと伝来していることを証明する。

これら中国を発祥とする地下遺構には、塔直下に石函のみを埋納する空間のみを構築する槨構造と、中国王侯墓を模倣した地下に部屋を構築し、地上と繋がる通路を有した室構造とがあり、室構造は中国伝統墓制の儒教思想から形成された。

この室構造を用いた日本の禅僧墓が、鎌倉を発祥とする地下式坑とやぐらといった遺構へと派生する。この指摘は以前から存在したが、その論拠となる義堂周信の掩土之法はどちらかと言えば儒葬そのものと言ってよく、波及の度合いで言えば他の僧侶が多用した、火葬を行なう仏葬形式の方に起源を求める。

またやぐらの発生原因として、僧墓地下遺構が鎌倉の湧水という土地柄から普及しなかったとし、墓所を高地へ求めた結果だと結論付けた。発生が同じ遺構にもかかわらず、地下式坑が鎌倉で普及しなかった要因としても説明でき、山頂部に塔を有するやぐらの構造が中国の仏塔構造に酷似する点もこれを補強する。

さらに参考として、中国四川省を中心に分布する崖墓・崖葬墓をやぐらの構造に類似する遺構として紹介した。存続年代は違えど、中世における四川僧と日本の交流からは無視できない遺構である。

以上のように、地下式坑ややぐらといった遺構が発生する要因を具体的な遺構を用いて指摘した。

## 三・都市の中での機能

中世鎌倉における石造物の中でも、特に石塔に分類されるものの機能は、墓塔および供養塔と理解されてきたが、山上や辻に配置される大型石塔には目印としてランドマーク機能が存在することを明らかにし、これが都市のインフラ整備に関わるものと結論付けた。

鎌倉が都市として発展する以前、海上や陸地の街道から目立つ山稜や丘陵などの景勝地は、アテ山として交通路の標識となっていた

ことは、今小路など古い道にヴィスタ景観が見いだせることから明らかである。鎌倉最古の寺院杉本寺の立地が六浦道より眺望の良い丘陵上に設置されているように、そうした土地は信仰の対象となり、社寺が建立されるようになる。

鎌倉の土地利用は地形に優先され、標高一〇mを基準とする街道に近い高地が一等地として選ばれた。現在の宝戒寺付近に構えられた北条氏の邸宅は、十三世紀中ごろより幕府の公的機関としての役割を吸収するようになり、これを契機として別邸が郊外の谷戸に建てられ、その主が亡くなると別邸は寺院化する。寺院建立地は鎌倉郊外の谷戸内に移り、谷戸内の開発が活発化するのである。

都市の発達する十三世紀後半には、人口過密化による葬送遺構の増加が見られるが、北条氏によって誘致された純粋禅・北京律・南都律などの新規宗派は、谷戸の開発とともに新しい葬送形態を導入する。葬地は崖面を掘削するやぐらとして谷戸内にも広がり、そこには墓塔が造立される。これは頼朝以来の鶴岡八幡宮の形成する都市の清浄化システムの範囲を穢さない新たな墓葬として、鎌倉に受け入れられたものと考えられる。

一方、ランドマークとなる景勝地は信仰地としてあり続け、新たな造寺・造塔行為を欲した為政者の目は、十三世紀後半に導入された石塔へと向けられることとなった。

石塔の種類でも特に宝篋印塔や宝塔は、由来や納経經典の意味から、山上に置くことを目的とする。造立者は経済的な面から幕府有力者が想定できるが、山上や丘陵上への設置は、都市に暮らす一般

大衆への功德をもたらす装置として機能するのである。こうした鎌倉の大型塔の銘文には墓塔の記載は無く、供養や繁栄を願う願文が見られるのみであることから、広く万人へ向けられた塔と解釈される。室町期の銘をもつ大型塔の山上設置もみられることから、室町政権下の鎌倉においてもこの機能が維持されていたことがわかる。また塔の設置される範囲は、幕府の最大範囲儀礼である霊所七瀬祓の中に収まり、最西部に位置する景勝地江の島にも、石碑という特別な石造物が設置されていることも判明した。

中世の鎌倉では政庁の認識する範囲のなかで、大型塔、石碑の設置による景勝地の供養や顕彰が実施され、信仰の上でも交通の管理が行われていたのである。これが石造物から見出せる中世鎌倉の都市構造である。

#### 四．都市鎌倉における文化発展の背景

これまで鎌倉における石造物の導入は、西大寺を中心とした南都律の単独での功績と評価されてきたが、その評価は近年では揺らぎつつあり、北京律の活躍と作例が指摘される。建長寺開山墓と覚園寺歴代墓一〇号塔の近似した作風からは、さらに禅宗の関与を浮き彫りにすることとなった。建長寺開山塔の造作からは、南都律の擁する職能集団の技術関与が読み取れ、ここに南都律・北京律・禅宗という宗派間交流を見出すことができる。

中世の鎌倉は都市として発展してゆくなかで、宗教都市としての一面を強く見せていく。石造物関連史料は、鎌倉の石造物文化導入を



南都律の独占的活躍のように見せてしまいが、仏教史学では鎌倉時代の仏教は宗派間の垣根を超えた諸宗兼学思想が浸透していたことが認識されている。大塚紀弘氏によれば、南都六宗に真言・天台を加えた仏教秩序とも言える「顕密」八宗観が平安後期までに成立していたといい、これに新たに加わりとうとする禅宗と浄土宗が排斥された歴史がある。これに対し、鎌倉・南北朝期の中国仏教では、八宗観とは異なる宗派を超えた分類「禅教律」観という仏教観が共有されており、「禅」禅宗・「律」律宗・「教」天台宗・華嚴宗・慈恩宗（法相宗）といった枠組みの中で宗派を超えた分類がなされていた。この「禅教律」観は栄西・俊芻ら入宋僧によって日本に導入され、栄西の「真言・天台・禅」三宗兼学や俊芻の「天台・南山律」二宗兼学などによって浸透する。それらはやがて円爾や無住らに引き継がれ、「禅教律」観を日本仏教の現状に適合させ、「八宗」に浄土宗・仏心宗（禅宗）を加えた、あるいは禅教律の「教」に八宗と浄土を加えた、禅教律「十宗」観が形成される。いずれかに専門を置きつつ諸宗を兼学する新たな仏教観は、鎌倉時代以降次第に共有されて行き、南北朝には「顕密」に対して「禅律」といった枠組みがされるまでに至る。

これが導入される鎌倉後期の鎌倉では、それぞれを律院・禅院と呼称しながら、兼学として寺院間の交流を行っていたことは、多くの史料が示すところである。なかでも鎌倉に最初に勢力を持ったのが浄土宗であった。高橋慎一朗氏によれば、六波羅には西山派東山流の阿弥陀院が所在したことで、探題の任にあった北条氏と交流が

生まれたといい、共に持つ善光寺信仰を媒介として名越弁ヶ谷に西山派の本拠・新善光寺が設置された<sup>7</sup>。南都律の忍性が入寺する以前の極楽寺には名越一族から出た西山派僧侶が入り、北条長時の浄光明寺には西山派東山流と教義が近いとされる諸行本願義が入った。これら浄土諸派の治めた寺院は、宗派の衰退とともに教義的交流のあった南都・北京律へと移っていく。その一方で、北条時頼は禅の導入を行い、泉涌寺僧によって中国直輸入の禅宗寺院が鎌倉で開創される。

以上のような諸宗兼学寺院間の交流が、鎌倉の石造物文化の背景に存在するのである。石造物文化の導入・展開には、これまで南都律のみが際立った活動をしたように見なされていたが、それだけではなく、北京律や禅宗、浄土宗（西山派・諸行本願義）といった宗派の交流によって発展するのである。

そしてそれらの活動を支えたのが北条氏である。都市鎌倉の宗教の中心はあくまで鶴岡八幡宮の「顕密」であり、幕府創建以来のオフィシャルな宗派として勢力を保っていたが、京都で文化を吸収する北条氏は当時の最先端を行く宗教を鎌倉に引き入れた。これら「南都律・北京律・禅・西山浄土」は、言ってみれば北条氏のプライベートな宗教であり、結果としてこれらの宗派の交流によって持ち込まれた文化が、西国の石造物の導入へと繋がりが、なおかつ渡来僧や入宋僧を介した中国直輸入の文化によって、鎌倉独自の文化としてやぐらなどが出現するのだと考える。これが都市鎌倉の文化発展と都市構造形成の背景である。

## 五・今後の課題

以上の成果によって、石造物から中世鎌倉という都市の構造を明らかにできたと考える。

しかし、課題は山積する。現在の鎌倉には、いまだ未調査の石造物ややぐらが多数存在する。まずは、この調査と実態把握が第一の課題である。ほか、伝世資料の図面化や、出土資料の収集など、地道な作業が求められる。特に五輪塔の研究には、実朝首塚塔を中心とした全国の木造塔と祖形の関係に目を向ける必要がある。鎌倉に石造物が導入される以前の墓塔を探る上で、必要な課題である。

また、鎌倉の石造物の研究には、中国の遺構・石造物の実態把握が必要であることが明らかとなった。現在も日本視点での無縫塔や宝篋印塔の調査は行われているが、特に宋代以降の中国仏塔の地下遺構と遺物、石窟寺院の僧侶埋葬遺構「瘞窟」、四川省の崖墓、崖葬墓、亀趺碑の実態と変遷を現地の実見をふまえ、さらなる研究を行いたい。またこれに合わせて、中国古代の儒葬の方式と変遷および、中世禅僧における儒教の影響をさらに探っていく必要がある。

背景宗派の問題では、浄土宗西山派だけが関連する石造物を見出すことができなかった。鎌倉への参入が他の三派より一段階早いことも考えれば、あるいは凝灰岩製石造物との関わりが見出せるのかもしれないと期待する。

都市とみちの問題では、「アテ山」を利用する道の検討も広げたいと考えている。確実な資料とはならないだろうが、「見通せる」こと

が、交通路の問題を補強することになると考えている。ひいては鎌倉をモデルケースとして全国中世都市の石造物へと目を向けたい。

なお、日本の横穴式遺構は古代から確認できるが、国内での縦のつながりは無い。あるいはこれが、中国で連綿と続く墓葬系譜が、各時代に行われた交流によって、その都度日本に導入されたと考えるのならば、上記の結果になるのではないだろうか。今後の課題のひとつとしておきたい。

以上、見出すべき課題はまだあるが、今後も継続して他分野との複合的な検討を行い、鎌倉の石造物と都市の構造を明らかにしていきたいと考える。本研究はその基礎として位置付けるものである。

## 結論 補注

- 1 山川均 二〇〇六 『石造物が語る中世職能集団』山川出版社
  - 2 吉田章一郎 一九八五 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書（鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査）』鶴岡八幡宮境内発掘調査団・鎌倉市教委
  - 3 原田大六 一九八四 『阿弥陀仏経碑の謎』六興出版、川添昭二 二〇〇三 『福岡県宗像大社所蔵「阿弥陀経石」について』『日蓮教学研究所紀要』三〇、大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘 二〇一〇
  - 4 館隆志 二〇一一 『蘭溪道隆の霊骨器と遺偈』『駒澤大學禪研究所年報』第二十三號
  - 5 秋山哲雄 二〇〇六 『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館
  - 6 大塚紀弘 二〇〇九 『中世禅律仏教論』山川出版社
  - 7 高橋慎一朗 一九九六 『中世の都市と武士』吉川弘文館
- 「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」『鹿児島大学理学部紀要』四二一